



安承甲が直接スケッチした捕虜収容所

29 日帝強制動員被害者支援財団翻訳叢書

南方紀行

— 強制動員軍属手記集 —

国務総理室所属 日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会 編
日本語翻訳協力委員会 訳



南方紀行

－ 強制動員軍属手記集 －

国務総理室所属 日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会 編
日本語翻訳協力委員会 訳



日帝強制動員被害者支援財団翻訳叢書 29

南方紀行 一強制動員軍属手記集一

初版印刷 2025年12月31日

初版発行 2025年12月31日

韓国語版編著 国務総理室所属 日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会

韓国語版発行 2008年4月3日

日本語版発行人 李元範

日本語版発行所 日帝強制動員被害者支援財団
ソウル特別市鐘路区鐘路ギル42利馬ビル6階
<http://www.fomo.or.kr>

翻訳 日本語翻訳協力委員会
信長たか子、堀内稔

校訂 竹内康人
訳注は〔 〕で示した。註で略したものがある。
意訳した箇所、句読点を加えた箇所、改行した箇所がある。
固有名詞など、訂正した箇所がある。

発行登録番号 11-1741332-100002-01

本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、
著作権法上での例外を除き、禁じられています。

刊行の挨拶

財団法人日帝強制動員被害者支援財団（以下、財団）は、今年も強制動員関連書籍4冊を日本語及び韓国語に翻訳して出版します。2019年から7年目にあたるこの翻訳事業は、日本の「強制動員真相究明ネットワーク-日本語翻訳協力委員会」と国内関連分野の研究者たちの積極的な努力と支援により、進められています。それぞれ300部ずつ合計1200部を発刊する日本語版及び韓国語版は真相糾明ネットワークの助けを借りて、日本国内の研究者や活動家、公共機関などに配布しています。

この本は、国務総理室所属の日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会（以下、糾明委員会）が2008年4月に発刊した『南方紀行-強制動員軍属手記集-』を翻訳したものです。この手記集は、南方に動員された2名の捕虜監視員と2名の海軍工員の手記で構成されております。軍属手記集の発刊目的は、彼らの自伝的記述を通して強制動員被害の様々な様子を明らかにしようとするものです。この本を通して人々が日帝末期の強制動員被害を知り、歴史の真実に接することを期待しています。

この他、財団が今年日本語に翻訳出版した本は次のとおりです。

『1948年韓国送還遺骨の真相調査』は、1948年、日帝による韓国人強制動員犠牲者の遺骨が、日本から韓国国内へ送還されましたが、実際該当する遺族は犠牲者の遺骨を受け取ることができませんでした。その件について、糾明委員会が2005年4月15日付で真相調査の開始を議決しました。その後、新聞資料の収集と分析、国家記録院と外交部外交史料館の資料や訴訟資料の分析、関連機関及び

関係者に関する調査、遺族調査等を行い、その真相を糾明委員会が2007年に公開したものです。

『戦後日本の浮島丸事件真相調査の問題点』は、終戦直後の1945年8月22日、日本の東北地方にある青森県大湊港から朝鮮人を乗せて釜山へ向かった浮島丸が、予定の航路ではない京都府舞鶴港に入港しようとした際、爆発により沈没した「浮島丸事件」について取り扱っています。糾明委員会は、2005年3月に、この事件に関する真相調査の開始を決定し、真相糾明のために努力してきましたが、2010年には最終報告書を発刊できず、調査を終了した経緯があります。本報告書は、財団が2023年12月に発表したもので、この事件がなぜ迷宮入りになってしまったのかを明らかにするため、初期の真相調査における問題点を検証し、それが今日までどのような悪影響を及ぼしているのかを、さまざまな資料を通して精密に分析しています。

さらに、今年初めて推進する事業として日本で発刊された強制動員に関する本を韓国語に翻訳して出版することになりました。日本語書籍名は『(改訂版)朝鮮人強制連行・強制労働ガイドブック [奈良編]』であります。奈良県において朝鮮人強制動員・強制労働が行われた柳本飛行場やその他場所、遺跡、証言などについて日本の読者向けの本として制作されました。負の歴史の真相を粘り強く糾明してきた「奈良県での朝鮮人強制連行等に関わる資料を発掘する会」により、1997年8月に初版され、2004年に改訂版が発行されました。財団では、韓国語に訳して韓国内の大学図書館及び関係機関などに配布する予定であります。

糾明委員会と対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会が解体された以来、中断されていた日本語翻訳事業を、財団が引き受けました。さらに他の研究結果を付き加えることにより、強制動員分野の国内外研究に役立てることができ嬉しく思います。

財団は今後も強制動員分野の多様な研究報告書や学術・教育資料の編纂などに一層努力してまいります。強制動員関連の研究成果が韓国と日本を越え国際的に拡散できるよう、持続的な関心と支援をお願いいたします。

ありがとうございます。

2025年12月31日

財団法人日帝強制動員被害者支援財団
副理事長（理事長職務代行）李元範

発刊の辞

去る 2004 年 11 月に発足し、今年の 2008 年ですでに 4 年目を迎える日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会は強制動員被害の真相を糾明し、歴史的真相を明らかにするために多様な活動を続けてきました。

こうしたなか、われわれ委員会は労務及び軍務動員分野の強制動員口述記録集 8 の刊行をはじめ関連資料集の出版など、強制動員の真相究明の発刊事業でも目に見える結果を出してきました。

これまでの成果に続き、軍属の分野でも生存者の証言を基にした口述記録集と一緒に軍属として強制動員された被害者たちが直接書かれた軍属手記集を発刊することになりました。『強制動員手記集 1 - 南方紀行』は去る 2 年余にわたって全国各地の被害者たちと、申告した人に会い、収集した手記資料を編纂したものです。

手記集の発刊は何より個人的な記録として埋もれていたものを調査官らが被害調査のなかで発掘したことにその価値があります。さらに強制動員という我々の過去の陰の部分の部分を明らかにするなかで個人の記録を歴史の場に引き出したということに委員会活動の意義があります。

この本に載せられている 4 編の手記は短いものは 5、6 年前から、長いものは 10 年前に書かれた文です。この本は 2 人の捕虜監視員とマーシャル諸島のウォッジェとミリに動員された 2 名の海軍工員など、南方に強制動員された 4 名の手記で構成されています。南方に動員された 4 編の手記の特性を生かす意味で、書名は故石相琬さんの手記である「南方紀行」をそのまま付けました。4 名の方に

南方への動員は生きるための移住ではなく、いつかはわからないが帰ってくる、しかし、死に繋がることもありえる苦難の紀行でした。その苦難の時期と違う名前を付けるのは申し訳ないという思いでそのまま残すことにしました。

より多くの方たちの多様な経験を載せようと思いましたが、すでに書かれた手記という資料の特性上、その収集に限界がありました。それにもかかわらず、現在の大きな被害調査以前に作成された手記が、個人的な経験と記憶として強制動員の姿を見せてくれるものと期待しています。

軍属手記集の発刊目的は、彼らの自伝的記述を通して強制動員被害の様々な姿を明らかにするためです。この本を通して一般大衆が日帝末期の強制動員被害を知り、歴史の真実に近づくことを期待します。また、これからの調査のなかで一層多くの手記の記録が発掘され、手記集発刊の2刊、3刊に繋がることを願います。

手記集が発刊されるまでは、資料を収集し、編集作業を一緒にした調査2課職員の皆さんの陰の苦勞がありました。併せて委員会の調査作業を支援して下さった地方実務委員会担当者及び支援部署職員の皆さんにも感謝いたします。何よりも本手記集発刊のために大切に保管されてきた先人の自筆記録を喜んで出してくださった申告者、また自身の血と汗にまみれた記録を出版できるように協力して下さった生存者の方々に心から深く感謝いたします。

最後にわれわれ委員会の被害調査及び真相糾明の作業に変わらない協力と支援をお願いし、併わせて各種の発刊作業にも愛情のこもった批判と励ましをお願いいたします。

2008年 3月

日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会 委員長 全基浩

目次

刊行の挨拶 1

発刊の辞 3

1. 歴史の裏側から —マーシャル群島ウオツゼ島での九死に一生—

李共石 9

はじめに / 海軍軍属として行くことになった動機 / 南洋群島に向かい釜山港出発 / 最終目的地マーシャル群島 ウオツゼ島上陸 / 突撃精神で速度戦である施設工事に投入 / 悪質日本人現場監督中村小隊長との衝突 / 3ヶ月後、医務隊転属 / 滑走路舗装工事の完成と飛来した日本の戦闘機隊 / 突然、米軍偵察機が出現 / 米軍の第1次奇襲攻撃 / 米軍の第2次奇襲攻撃 / 生き地獄脱出のための自傷行為続出 / 米軍の第3次奇襲と年寄りの日本人軍属 / うらやましい先住民の自由な生活 / 中村小隊長との再衝突 / 追撃された日本の戦闘機の全焼 / 病院船牟婁丸と米軍の空襲 / 食糧倉庫爆破による食糧問題の悪化 / 上陸を試みた米機動艦隊の大爆撃 / 日本軍の高射砲弾に当たり米軍機墜落 / 米機動艦隊の爆撃練習場となったウオツゼ島 / 重傷者に対する軍司令官の指示 / 身を隠した弾薬庫からの脱出騒動 / 宋在吉同志の戦死悲報と死を免れた梁元鐘同志 / 食糧生産のための軍属たちの離島分散 / 丹精込めた食糧作物、集中攻撃で飛散 / 高光俊同志の不意の戦死 / 人肉説の実相 / 米軍の投降懐柔工作 / あれほど恋した故郷へ / おわりに / 参考 当時の済州島出身同志名簿

2. 南方紀行 —タイ捕虜収容所—

石相玠…………… 69

この手記について / 軍属志願の背景 / 釜山訓練所入隊 / 南方行き航路 / タイ捕虜収容所 / 収容所勤務開始 / 第4分所への転属 / 第4分所第1分遣所での生活 / 第3分遣所転属：分駐所責任者として捕虜との関係づくり / 収容所勤務中の逸話 / ジングル生活後の収容所生活 / カンチャナブリの慰安所 / 連合軍空襲以後の沈滞した雰囲気 / 8・15終戦 / 在タイ高麗人会組織 / 解放後、帰国できずにタイで生活 / 帰郷の旅

3. 日帝強制連行 太平洋戦争参戦体験受難記

—南洋マーシャル諸島ミレ島にて—

李仁申…………… 121

はじめに / 祖国を離れて… / ミレ島への道 / 受難のはじまり、ミレ島に到着 / 患者送還と医務助手への配置 / 熾烈になった米軍空襲とさらに酷くなった作業 / 米軍の大空襲 / 不利な戦局での日本軍の残酷と米軍の懐柔 / ますます悪化する食糧問題 / ルクノール島への配置と生活 / チルボン島惨事事件発生 / チルボン島事件の動機と事後処理 / ルクノール島脱出の決心と実行 / マジュロ島捕虜収容所そして同胞救出作戦 / ハワイ捕虜収容所の生活 / 夢に描いた祖国の懐で… / 4年ぶりの家族再会 / 解決されない労賃問題 / 1995年6月、マーシャル諸島のミレ島と離島の踏査記

4. 倭奴たちの手にかかって死ぬより、国のために闘って死のう

安承甲…………… 207

はじめに / 戦場の青年たち / 同志、金周錫 / 高麗独立青年党の結成 / 挙行計画 / アンバラワ義拳と3人の義士 / 第2計画の失敗 / 第3の計画 / 党員逮捕後 / 後記

5. 解題…………… 231

1. 植民地動員の強制性 / 2. 陸軍軍属の捕虜監視員 / 3. 手記を記録した捕虜監視員 / 4. 朝鮮人の海軍軍属 / 5. 手記を記録した朝鮮人海軍軍属



1

歴史の裏側から

—マーシャル群島ウオツゼ島での 九死に一生—

李共石

はじめに / 海軍軍属として行くことになった動機 / 南洋群島に向かい釜山港出発 / 最終目的地マーシャル群島 ウオツゼ島上陸 / 突撃精神で速度戦である施設工事に投入 / 悪質日本人現場監督中村小隊長との衝突 / 3ヶ月後、医務隊転属 / 滑走路舗装工事の完成と飛来した日本の戦闘機隊 / 突然、米軍偵察機が出現 / 米軍の第1次奇襲攻撃 / 米軍の第2次奇襲攻撃 / 生き地獄脱出のための自傷行為続出 / 米軍の第3次奇襲と年寄りの日本人軍属 / うらやましい先住民の自由な生活 / 中村小隊長との再衝突 / 追撃された日本の戦闘機の全焼 / 病院船牟婁丸と米軍の空襲 / 食糧倉庫爆破による食糧問題の悪化 / 上陸を試みた米機動艦隊の大爆撃 / 日本軍の高射砲弾に当たり米軍機墜落 / 米機動艦隊の爆撃練習場となったウオツゼ島 / 重傷者に対する軍司令官の指示 / 身を隠した弾薬庫からの脱出騒動 / 宋在吉同志の戦死悲報と死を免れた梁元鐘同志 / 食糧生産のための軍属たちの離島分散 / 丹精込めた食糧作物、集中攻撃で飛散 / 高光俊同志の不意の戦死 / 人肉説の実相 / 米軍の投降懐柔工作 / あれほど恋した故郷へ / おわりに / 参考 当時の済州島出身同志名簿

李共石（イ・ゴンソク）創氏名：香山共石

- 1922.1.19. 濟州島北濟州郡旧左邑出生
- 1942.8.27. 芝浦海軍施設補給部所属の工員としてトラック（チューク）島を経て、ウオッセ島（ウォッジェ環礁）に動員
- 1945.12.21. 解放後、釜山港経由で帰還

はじめに

すでに私は80歳の高齢であり、そのうえ文才もなく文を書く要領や方法もよく知らない。さらに美辞麗句のようなものも全く書けないが、多くの恥ずかしさを忍びながら、敢えてペンをとり、過ぎた半世紀前の実情について、遠のいた記憶をたどりながらこの文を書いた。

内容が粗末だということで、過去に我々同志たちが経験した実情をそのままほうっておけば、永遠に一言の文の痕跡もなく埋もれてしまう。だからある程度、要点だけでも後世に知らせるとともに、特に遠くて近い日本を警戒しなければならぬということを実感させること、それが当時一緒に死線で苦勞し死んでいった多くの同志に対して生きている我々の責任であり、道理である。そう思い、恥ずかしさを恐れることなく大胆にペンをとることにしたのである。

私は1942年にいわゆる日本海軍軍属として徴用され、3年6ヶ月間を南洋マーシャル群島ウオッセ島で日本人の現場監督から人間以下の苦痛と蔑視と侮辱を受け、一方では熾烈な米海空軍の集中攻撃により何度も死に目にあいながら、なんとか生き残り、1945年の日本の降伏により故国に帰れることができた。

3年6ヶ月の間、現地での凄絶な状況などを便宜上、その時その時の状況を区分して事実通り詳しく記録しようと試みたが、浅学非才の私には当時、現地で我が同志たちが経験した凄絶で悲惨な状況を十分に筋道立てて記述できないなど、いろいろ不十分な点が多いだろうと思う。

当時、現地で死線をとともにさまよった多くの同志たちが、この記録で漏れている

部分を指摘してくれれば喜んで受け止め、追録して我々の後輩に残したいと思う。

おわりに、我々同志のご冥福を心からお祈りします。

2001年8月15日

海軍軍属として行くことになった動機

1942年初夏は日本が中日戦争を起こして満5年目の年だ。今の中国の広大な全地域を制しようと日本軍は内陸深く攻め入った。その後、いわゆるインパール¹で人的、物的な長距離輸送に苦しめられ、ほとんど力が尽きており、苦戦を重ねていた。

しかしながら、日本は相変わらず戦勝を叫び、国民の士気を高揚させていたが、情勢はうべとは異なり、緊迫感が次第に増してきているようだった。実際、戦線は拡がり続け、戦争は終わりがみえなかった。その時、我が朝鮮には志願兵制度はあったが徴兵制度はなく、軍属や炭鉱労務者として幾度も選抜がなされていた。だが広大な中国や満州、南洋に至るまで戦線は拡がり、日本軍だけでは到底成し遂げることができなかった。朝鮮に徴兵制度が実施されるようになるのは、必然的で時間の問題だった。

このような状況だが、当時の朝鮮では朝鮮弁護士試験制度²があり、独学者らの唯一の目標になっていた。小学校しか出られなかった者として、天の星を取るほど難しいことと知りながらも、長距離通信講義録を使い、周りのさまざまな難しい環境の中でも、一生懸命勉強していた。

しかし5年計画でようやく3年目となった時、これ以上続けられなくなった。すなわち軍人、軍属、炭鉱労務者のうち、どれか一つの選択に直面したからである。それはその年の3月春に、集落の青年奉仕隊として選抜され、済州飛行場建設の現場まで徒歩で到着し、7日間の大変な勤労奉仕の任務を完遂して帰ってきてからである。同年5月20日ごろになると、海軍軍属の募集広告が街に貼りだされた。

1 Imphal、インドのマニプル州の州都。第2次世界大戦末期の1944年に日本軍はインパールを侵攻（「インパール作戦」）、イギリス・インド連合軍と戦った。

2 朝鮮で朝鮮弁護士試験制度が始まったのは1922年だった。

海軍軍属といえば当時、南洋方面に行くことがすでに常識となっていた。広告には身体検査と口述試験の後に合格者を発表するとあった。期間は一年、そして報酬は少なかった。

しかし、どうせ行かなければならないのなら、座って悩んでいるよりはましだと思って、家族たちが強く引き留めるにもかかわらず、応募することにした。我が済州島では合格者が58名にもなった。この合格者58名は6月3日に済州港を出発、大田を経て釜山で降りた。そこで全羅南北道と慶尚南北道から選ばれた同志たちが〔船に〕乗ることになった。すでに決められていた総引率者が紹介され、人員総数は2,000名といった。

南洋群島に向かい釜山港出発

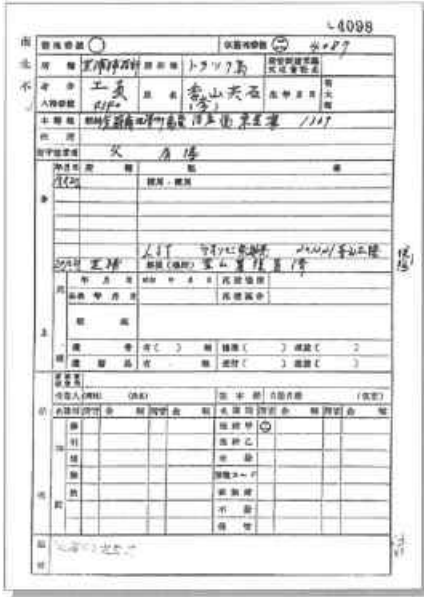
釜山に降りた後、埠頭に設置された海軍医療所で身体検査と防疫処置が実施された。それが終わるとすぐに輸送船諏訪丸³の船倉の中に入れられた。

隊員たちを船に閉じ込めた後、代表者を中心に班編成をし、外出はいっさい禁じられた。そのまま3日間停泊し、南洋群島に向かって釜山港を出港したのは1942年6月27日だった。我々の所属は、日本の横須賀の第4海軍施設部⁴であり、通信番号は〔海軍〕横須賀局ウ86、ウ60、ウ83といった。

南洋群島は日本が誇るいわゆる不沈の航空母艦として戦略的な価値が高く、米軍を誘引し殲滅するのに一番有利なところであった。それだけでなく、ここで必ず勝利することを確認し、近くのハワイを攻撃占領し、これを足がかりにしてアメリカ本土まで進撃して入っていく、そのために必要なすべての準備をあらかじめ計画、推進してきたのである。そして満洲にある陸軍兵力1万名も南洋へ異動中とのことだった。それで我々施設部隊は到着するとすぐに現地で訓練を受けさせ施設工事に投入させるようであり、故郷に帰れる見込みが本当にあるのか、わからなかった。

3 著者は「チバン(利母)丸」(10,620トン)と記しているが、諏訪丸とみられる。諏訪丸は日本郵船の貨客船で、三菱重工業長崎造船所で1914年3月9日に進水後、ヨーロッパ航路を就航。1942年8月10日海軍が徴用。

4 海軍軍属履歴票の記録によると執筆者である李共石は芝浦海軍施設補給部所属の工具である。〔履歴票では帰還者は芝浦補給部所属と分類されているが、派遣された南洋では第4施設部に配属された〕



李共石の海軍軍属者名簿

太平洋の茫々たる大海を過ぎ、南洋圏に入ったのは釜山を出港してから10日余りであった。南洋圏内に近づくほど、太陽の暑さは次第にひどくなった。我が故郷では経験できないほどのすごい熱気だった。そこからは船の速力がとても遅くなった。時には松林をそのまま海の上に浮かべたのかのような椰子の林が見えた。島々は一様に、海拔1mか2mほどにししか見えない。浅く白い砂の帯を巻いたような美しい島であった。

南洋圏内に入ったことを実感した。ついに着いたと思い、退屈な航海を終え、あのような美しい島に早く上陸

したかった。しかし、船員に聞くと、トラック島⁵まではまだまだ、5、6時間はかかるといった。

島がひとつ、またひとつと5、600m間隔で飛び飛びに続いているところを通った。この時の時間は午後1時ごろであった。そこでは午後3時ごろには陽が沈むという。ちょうどその時、遠い水平線にアメリカの潜水艦が現れたという無線連絡が入ったと言った。ほぼ同時に日本の戦闘機2機と一緒に飛んできて船の上空からアメリカの潜水艦めがけて急降下しながら攻撃した。その瞬間、わずか2、3秒の間にドカンという爆発する轟音と一緒に真っ黒な煙が空に立ちのぼった。その前、アメリカの潜水艦から発射した水中魚雷が一直線を描いてくるのを即時に発見し、うまく避けたという話もあった。甲板の上に出ていた人たちを、このアメリカの潜水艦から見ると最後まで追撃するので、甲板の上には誰も出ないようにあらかじめ禁止令が降りていた。しかし島がみえるという声で皆が甲板の上に出ていた。この光景を見て日本人の船員が拍手をすると、皆が危険から逃れて生きたという気持ちで一緒に拍手した。

5 トラック島の現在名はチューク (Chuuk)

終わると皆が安心して船倉の中に入り、私一人が残ったようだった。この時遠い水平線に島を発見した。前にみた島とは正反対の方向だ。しかし、よく見ると、島が間違いなく動いているようだった。よく見ると一列縦隊の多くの船だった。船は航空母艦に違いなかった。しかし、日本には航空母艦が3、4隻しかないと聞いていたが、約500m間隔で8隻もあり、いくら航空母艦が総集結したといわれても全く信じられなかった。たぶん艦隊の機動訓練中にアメリカの潜水艦を発見し、戦闘機が飛んで来て、アメリカの潜水艦を攻撃したのだろうと思った。島の近くからは2、3隻の掃海艇が代わる代わるに行き来し、我々の船を護衛し、陽が沈むまで偵察機も飛んだ。午後5時になると、船は第一の帰着地であるトラック島の広い港内に進入した。

港内には電灯の火が海に光り、まばゆいほどであった。何の船がそんなに多いのか、数百隻も碇泊しているように見えた。船は5時50分ごろに錨を降ろした。

夜を過ごした後に港内を見渡すと、港内には数隻の戦艦をはじめ巡洋艦、駆逐艦、掃海艇、その他、輸送船団など実に数百隻を超えた。その中で日南丸⁶〔図南丸?〕という捕鯨船が甲板上に偵察用軽飛行機1台を乗せて停泊しているのが目についた。

このすべてがアメリカとの決戦のための万端の準備であり、強者同士が闘う間に無辜な我が朝鮮人だけが無残に犠牲になると思うと、本当に気がふさがった。トラック島に約1週間留まっている間、我が朝鮮人慰安婦たちも多く来ているという話も聞いた。哀れでかわいそうな女性たちと思わずにここではいわゆる「パンパンガール」⁷という卑しい呼び名で人間以下の扱いを受け、一日に数十名の軍人たちを相手に、死ぬほどの重労働に耐えながら悲惨に生きている同胞たちの実情を聞くと、本当に主権のない民族の悲しみに

6 太平洋戦争当時、日南丸は日産汽船、大洋興業と飯野海運の所属の日南丸、飯野海運所属の第2日南丸があるが、これらの記録には捕鯨船として使用された記録が見あたらない。船舶の記録からすると、日南丸ではなく図南丸を指すようだ。特に第3図南丸は日本水産の捕鯨母船で太平洋戦争前は主に南水洋（南極海）で捕鯨に使用された。1941年11月に日本海軍により徴用され、太平洋戦争で石油などの物資を輸送。戦争中に何度も雷撃を受け、1943年7月24日米軍潜水艦ティノサ（USS Tinosa, SS-283）の攻撃を受けてトラック島に曳引され、重油タンクとしてトラック島に停泊した履歴を持つ。

7 パンパン・ガール、英語 pompom girl（性売買女性）を日本式に発音した単語という説と、女性を意味するインドネシア語 perempuan から始まった単語という説がある。一般的に街娼をさす言葉で、日本軍「慰安婦」を示す言葉としても使われた。

嘆きを禁じざるをえない。トラック島では何日か泊まったが、人員と資材をどれほど降ろしたかについては関心がなかったので、わからなかった。

最終目的地マーシャル群島 ウオツゼ島上陸

トラック島を出発してマロエラップ⁸など3、4か所をまた回って多くの人員と所要資材を降ろして、最後に最終帰着地であるウオツゼ島⁹に到着したのは釜山を出てから21日目の6月28日ごろであった。

最終的にこの島に降りた人員は600名であった。我々は船から降り始めたが、これからこの島で丸1年間に過ごさなければならないと思うと、まずは退屈という思いがした。それも早くて1年であり、万一情勢が悪ければ2年かかるか、3年かかるかもわからないのだ。

だが、船に乗っているときに絶えず考えたのは、水の上に浮かんでいるような椰子の島々があまりにもきれいで美しいということだった。一時でも早く降りてこの自然の美しさを満喫したかったのだが、このウオツゼ島という島は特に美しい島に見えた。

それで、初めは戦争というのも忘れてロマンチックな思いさえした。もちろん、一時的な感情だが、ここまでよく来たと思った。そしてその昔、小学校時代に南洋消息と題して南洋にいった父から受け取った手紙を思い出した。

それにはパンノキの実¹⁰と椰子の実の味は、十分に南洋の暑さを冷ましてくれ、このように暑い太陽熱の下では椰子の木の影の中があまりにも涼しくてたまらないと書いてあった。この晴れた空の下で一幅の絵の中で生きるという幻想の島が、すなわちこのウオツゼ島ではないかという思いさえした。

船から島全体を見下ろすと、椰子の林が約70%、飛行場の滑走路予定地のように見える空間地帯と椰子の林の間から見える軍の幕舎と長い仮設の建物

8 Mabelap、マーシャル (Marshall) 諸島にある環礁

9 Wotje、現在はウォツジェ環礁というが、当時はウオツゼと呼んだ。マジュロ (Majuro)、イバイ (Ebeye)、ジャルート (Jaluit) と共にマーシャル (Marshall) 共和国の主要な島の一つ。1944年1月初めから米軍航空隊 (TF57) がマーシャル諸島のミリ、クエゼリン、ジャルート、マロエラフ、ウォツジェなどを爆撃、周辺の海域に機雷投下。

10 パンノキの実：学名は *Artocarpus altilis* であり、属名 *Artocarpus* はギリシャ語のパン (artos) と果実 (karpos) からなる。

などが約30%を占めているようだった。そして、海辺側は、今まで見てきた他の島のようにそれこそ日光にきらきらと輝く、きれいな砂浜で囲まれ、はだして歩いても足が少しも汚れなさそうだった。船を降りるなり長いハコバン（箱房）¹¹のような宿舎に班別に案内された。旅装をとくと、すぐに作業服と靴などが配給されて次の日からはこの作業服に着替えて現場に出るのであった。作業服は生地が厚い国防色の防暑服¹²というものであった。これが苦労の道に入る罫になるとは。こうしてその日の夕方は一言で幻想の夜であった。

突撃精神で速度戦である施設工事に投入

夢から覚めるまえに明け方になった。目覚める前に鉄をたたく騒がしい音が響いてきた。みんな起床せよという信号だった。そして3分以内に集合しろという命令が下った。日本人の班長が落伍者は許さないといい一回りして行った。

みんな宿舎の前庭で番号を言いながら整列をした。全員が緊張をしていたためか落伍者は出なかった。最初に工事総責任者という日本人の加藤技師が登壇して演説をした。

「お前たちは今日から軍人と同じ精神で作業と戦う戦士だ。水槽タンクから始めて飛行場の滑走路と陣地及び防空壕に至るまで多くの施設工事を短時日以内に完遂しなければならない。だから本工事は名誉ある軍人の突撃精神が求められる突貫工事である。ここではただ一人の怠慢も落伍もありえない。皆が小隊長と班長の指示を受けて工事を期間内に完遂してくれることを願う」。

次に直接工事現場の監督を担当する小隊長の中村という者が出てきて演説した。この人が作業現場に現れるときにはいつも上着を着ていなかった。上半身全体に飛竜、すなわち竜の刺青があり、やくざの貫禄を見せつけ、やくざの頭目としての威圧を感じさせた。目が丸く、気は短く、軽快さが過ぎて少しそっかしい感じだった。

11 仮設の建物

12 暑さを防ぐ服

「わしがお前たちの現場監督を任された中村だ」とリンカーン大統領のような格好の良い狼ひげをくせのように触りながら、威圧して発言した。

「お前たちは今話された工事総責任者であられる加藤技師のお言葉をよく聞いたか？」とにかく作業中になまけたものが一人でもいるのを発見した時には、容赦なくこの棍棒でその腐った精神を新しい精神に変えてやるからよく覚えとけ。この棍棒は神聖な精神の入れ替え棒、即ちきれいな新しい精神に入れ替えてくれる名棍棒だ。また、工事の責任量は平等に分担する。万一自分の班内でその責任量を完遂できなかった場合は、班全体の連帯責任とし、体罰を加えても必ず完遂させる。わかったか？」と何回も念を押した。

こうして私の幻想は、初日からの日本人の至上命令に痕跡もなく消されてしまった。しかし、我々濟州島出身の同志たちは、ほぼ地域別に近い距離にある人同士で班を編成し、分散されなかったのはよかった。

我々の班長は、今は故人になられたが、終達里の梁元鐘同志だった。我々はその日からシャベルとツルハシを受けとって、水槽タンクの基礎工事となるコンクリートのための土堀り作業から始めた。椰子の木を切ったばかりなので、その木の根っこ頑丈なリーフ¹³の砂利を、シャベルで切り取り、ツルハシで掘り起こす。決められた時間にその責任量を完遂するのはちょっとやそっとで終われない大変な仕事であった。

監督者は何度か見回り、今までこれだけしかできなかったのかと「責任量を完遂しなかったら、体罰を受けるというのを聞いてないのか？」と脅かした。さらに、故郷では麦ごはんに粟が混じったご飯を腹いっぱい食べて仕事をしていたが、ここでくれるご飯は白い米に押し麦の入った麦飯で見た目も食べるにもいい。しかし重労働の者には半量にも満たなくて、何時間も持たず、すぐお腹が減ってへとへとになった。

ここでもっとつらかったのは赤道直下の猛暑だった。蒸すような太陽の下の高熱での重労働は重懲役であり、時が経てば経つほど耐えられなくなった。時には現場監督がいない間にちょっとでも休もうとすると、どこかで見ていたのか、矢のように走ってきて足で蹴り、往復ビンタをくわせた。ひどい時は精神注入棒で倒れるまでお構いなく力一杯殴った。

こうしたことが限りなく繰り返され、残酷な魔の1ヶ月だった。本当に言

13 リーフ (reef) : 岩礁。

葉では到底表現できない苦痛の日々であったが、つらい峠は越え、すべての環境に少しずつ耐性ができてきたようだった。とても足りなかった食糧も今は普通になり耐えることができるし、熱い猛暑も慣れてきた。

しかし、私はその間、南洋特有のマラリアにかかり40度を上下する高熱で約1週間、うめいていたが、無事に乗り越えた。日本人はこの病にかかって2人が死んだが、幸いにも我が朝鮮人の同志の中ではこの病にかかっても命まで無くす者はなかった。また、その間、私は重労働に耐えなくなり、故郷に手紙を書いた。はったい粉を送ってくれと要請したら、往復15日ほどで小包にニンニクも一緒に送ってきて、1ヶ月ほど間食として食べることができ、ひどく腹が減ることはなかった。

悪質日本人現場監督中村小隊長との衝突

実際、我が済州島出身者たちは集まった人の中では教育水準が一番高かった。ほとんどが小学校以上の出身者たちであり、中学校はもちろん大学出身者も一人混じっていた。教育水準が高くて言葉や知識では日本人を超えていたから絶対に引けを取らなかった。また中には、ボクシングや柔道の実力者もいて実際に腕力でも負けないぐらいだった。特に彼らの何人かは日本人にバカにされ蔑視されるのを死ぬよりも嫌いだということを隠さなかった。我が同志に何か事が起こったらどんな困難も恐れないという義侠心の強い正義の人たちだった。

彼らは我が同志たちに「絶対に日本人に怖気づくな」という言葉を口癖にたびたび励ましてくれた。また同志たちに何か起こった時は彼らが盾になって収めて解決してくれた。それでも彼らが仕事をさぼったり怠けたりすることは微塵もなかった。することは間違いなくやりながら、また言うことはためらわなかったから、日本人に弱点を掴まれることはなかった。

しかし、小隊長や班長らは何かにつけて「このヤロー、ばかやろー、朝鮮人のヤローめ」など、我々朝鮮人を露骨にバカにした言葉を浴びせた。その者たちはほとんどが日本人でやくざ出身である。やくざの世界では口癖のように使う言葉ではあるが、朝鮮人という言葉が出てくるときは、初めから我々朝鮮人を無視していたので、見過ごすことはできなかった。

我々の盾になってくれたこの先頭集団にはいつも徐相炯、朴潤瑞、高光俊、姜公三など5～6人がいた。その当時、我々には本当に心強く、尊敬してやまない同志であった。

工事を始めて何ヶ月か経ち、あんなに難しかった難工事もほとんど終わりにかける頃になっても、日本人の朝鮮人に対する蔑視はひどくなり、少なくなることはなかった。そのまま耐えてやり過ごしているが、感情の限界がきていつかはきっと爆発するという予感があった。

そんなある日、ついに来るべきものが来てしまった。仕事がちょっと暇な間を利用して気の短い姜公三同志が中村小隊長に、ざっくばらんに一言しゃべった。我々同志たちの本心をわかってもらおうとしたのである。即ち、我々同志たちはご飯が欲しくて来たのでもなければ、服が欲しくて来たのでももちろんない。ひとえに日本軍の戦争遂行に協力するために来たのであって、この島を出るときまではお互いに兄弟のように親しく過ごさなければならぬと思う。今まではどんなことを言われても我慢してきたが、どうかこれからは、我々朝鮮人をこれ以上蔑視するような言葉は控えていただきたいと言ったのである。

すると中村小隊長はこれを悪口と理解したのか、何の生意気なことをいうのかといきなり姜同志の頬を殴りつけ、「朝鮮人だから朝鮮人と言ったのに、何が悪いと言って手向かうのか？」と逆に反発した。これこそ盗人猛々しいと姜同志が拳で射返したら、それをきっかけにお互い大喧嘩になってしまった。日本人は日本人なりに走ってきて加勢をしたが、手に負えなくて、日本人の班長が憲兵守衛所に走って行き、憲兵を連れてきた。走ってきた憲兵は阿修羅のごとくになってお互いに殴ったり、打ったりする光景を見ていたが、すぐ喧嘩をやめなければ撃つぞと叫びながら、空に向かって空砲を撃った。

それで喧嘩は中止になり、お互いの主導者と目星を付けた者だけを選んで引っ張って行った。主導者と烙印を押された者はいつも我々の盾になり先頭に立ってくれた人たちで、徐相炯、朴潤瑞、高光俊、姜公三、梁元鐘同志達だった。中村小隊長も振るったこぶしに少なからず殴られた。憲兵隊ではこれらの状況を聞き、立場を変えて考えれば、日本人でもそのような侮辱、蔑視を受ければ問い返すものであるから、これ以上何も言わず、お互い和解する方がよいと言って、その席で和解させて帰すことになった。

相互の問題は作業とは直接何の関係もないということで、和解で一段落して帰ってきた。我々は同志を拍手で歓迎した。この事件の後、日本人たちの言葉は肌で感じられるほどに変わった。しかし、それが真の姿勢なのか否か、もう少し様子を見るべきことではあるが、気分はすっきりした。

3ヶ月後、医務隊転属

その後、各班から医務室の助手が推薦され、私は選ばれて作業現場3ヶ月を最後に珍島出身の2名とともに医務室へと転属になった。残った同志たちは飛行場滑走路の舗装工事に投入され、私は我が済州島出身の同志と別れた。

いくら同じ島の中といっても作業現場がちがいで、毎日のように近くで会うことができないのはとても寂しかった。けれども一方で、考えを変えて、我が同志たちの為に患者や負傷者に限られるが小さな誠意でも尽くせる機会にもなるだろうと、気持ちを新たにすっきりした。

上陸して4ヶ月に差し掛かるころ、第1次工事の水槽タンク工事は終わり、一層期日を多く要する飛行場滑走路の舗装工事に投入された。粉碎機で砂利を砕いてスコップで車に乗せる作業がどれほど大変かは実際に経験しないとわからない。もちろん作業するのは人それぞれだが、3人が一組になって1時間以内に乗せて走って工事現場に入れる仕事は、本当に重労働中の重労働であった。

海辺で砂利を作る石を掘り出して砂利製造現場まで運び、この石を砕石機で割り砂利にして滑走路に敷き、ロータリー¹⁴で固めてセメントで舗装をする組織的な工事である。いくら耐えようとしても、1日に10時間以上を酷使されるとそれこそへとへとになった。

しかし、現地に来る空軍部隊が4、5ヶ月内に入ってくるというのでどうしようもなく、死力を尽くすしかなかった。「走り馬にも鞭」のように、たとえ倒れても必ず果たさなければならないような負担を抱えていた。このようにつらい仕事なだけに体を負傷する者も多く出た。

14 ロータリーマシンを装着した建設用機械

さらに日本人の現場監督が我々の同志を殴ることも多かった。私も我々同志たちに奉仕する機会はこの時以外にはないと思い、医師が診断する際、我が同志たちがもう少し休めるように、あるいは軽い仕事で疲れた体を少しでも休めるようにしてあげることに心血を注いだ。医師の診断をカードに記録し、それに相応する診断表では、軽い仕事ができるようにする軽業表や休業表をできるだけ多く発給して、続くつらい疲れを多少でも和らげるようにした。

医務室では朝鮮人同士でこのような便宜を計っているということに気付いた。普段は気難しい日本人医務助手の一人が不審に思い、私にそれは絶対にいけないと言ったが、平素私も彼が大変なときに助けてやったことも何回かあったからか、医師には何も言わなかった。

飛行場の滑走路工事は実際に私が経験した水槽タンク工事よりもとても過酷な工事だったため、私は同志たちの友情に背いているような良心の呵責を感じた。とにかく工事中はみんなが無事であるように必死に祈った。ともあれ生き地獄のような難工事でも6ヶ月を経てようやく完成しつつあった。

滑走路舗装工事の完成と飛来した日本の戦闘機隊

工事が終わった数日後に戦闘機20機が飛んできて、続いて数日後にまた追加で増強され、合計30機になった。すでに来ていた4発の大型水上爆撃機が夜間にハワイ方面の長距離爆撃を担当していたが、爆撃後帰ってくる時、戦闘機が追撃してくるのを阻止するため、この戦闘機は味方の爆撃機を護衛するために朝早く、夜明け前に出撃するのだそうだ。

4発の大型水上爆撃機は島の内海面、左側の中間地点である空軍司令部〔海軍航空隊本部〕の沖合に停泊し、夜間だけハワイ方面に出撃するという。この飛行機の航続力は8時間、燃料消費量は時間あたり10ドラム。一度に入れる油はオクタン価¹⁵の高い良質の揮発油80ドラムないし120ドラムで、40mの翼全体が油のタンクだという。そうすると小型戦闘機はどうかと聞いたら、3時間飛行に6ドラムで航続力は3時間だといった。

15 Octane 価〔飽和炭化水素〕

これは大型爆撃機に比べても少ない量ではある。しかし、戦争をしようとする、どれほど多くの量の油を消耗することになるのかを考えざるをえなかった。これは実に驚くべきことではないか。

逆にこれを戦争ではなく平和や繁栄のために使えば、人類にどれほど有益なことかと思った。しかし、不幸にも人間の過度な野心により殺傷や恐るべき破壊のために使われるなんて、本当に天罰をうけて当然である。

飛行機が入ってから何ヶ月か経つと、はじめは水上爆撃機が2機でハワイ方面の夜間爆撃を担当したが、今は1機に減った。小型戦闘機も海上浸透する米潜水艦の攻撃と大型水上爆撃機の護衛を担当していたが、10機余に大きく減らした。戦勢は日本の勝戦の報とは違って、だんだん守勢に立たされるような感じだった。

ここに来て11ヶ月になるある日のことだ。過去10ヶ月間はすべての施設工事に全力を注いでいたために、時局の状況がどうなっているのかは関心の外であった。どうすれば肉体的な苦痛を和らげられるかにだけ、神経を使っているのが実態だった。しかし、故郷に帰る期限が近くなって来ると、帰国は何よりも時局の好転によることなので、急に時局に対する関心が強くなってきた。

その時まで時々補給船が入ってきて、通信のやり取りも可能だった。たとえ日本軍が守勢に回ったとしてもそれほどたやすく崩れないだろうと思っていた。しかし、飛行機の台数が急に減って行くのを見て、どこかの戦線が崩れれば大きく崩れることは事実と推測した。

突然、米軍偵察機が出現

ある日、急に米軍の偵察機2機が島の上空に現れた。地上から見ると、小さなハエのような黒い点の2機が30センチ程度のちいさな円をゆっくり描きながら空を悠々と飛びながら偵察した。この時、急に地上からバンと対空砲を発射する音が響き渡った。地上から発射された2発の砲弾は正確に200mにならない近距離で爆発したようだった。黒い煙になった爆風は高空の無風地帯で、徐々にゆっくりと広がった。しかし、偵察機は何もなかったように、地上の砲火をあざ笑うように、そのまま徐々に東北方面に消えていった。

この光景を見守っていた人は、少なくとも1万2000m以上の高空に飛んできたので、地上のレーダーでもとらえられなくて、事前に警報を鳴らせなかったのだろうと言った。超高空あるいは超低空に飛んでくるときには普通レーダーでもとらえられないので、いくらレーダーといっても無力というほかない。

米軍の第1次奇襲攻撃

このように偵察機が初めて現れてから2ヶ月が経ったある日の事である。実はその間、米偵察機が偵察をして行ったあと、いくら遅くとも1ヶ月内には必ず何かの攻撃があるだろうと予測して緊張をしていた。だが1ヶ月過ぎても全く何の気配もなく、気にしていた。しかしずっと何もなかったので、無駄に緊張していたことが愚かに見え、むしろ気持ちが緩んだ時だった。

例の通り、その日、埠頭には久しぶりに食糧補給船が入ってきて荷役作業をしているところだった。多くを総動員して一生懸命仕事をしている時、突然米軍爆撃機25、6機が島の中海の正面から一目散に飛んできて、空襲警報を鳴らす間もなく、機関銃を乱射してきた。あまりにも緊迫した奇襲だったので、作業現場は大騒ぎとなり、あちこちでは負傷者の悲鳴が響き渡った。そして空襲警報が1次攻撃がすんだ後に鳴った。

最初は、夜明けに出た日本機が帰ってきたのだと思っていた。初めて受けた奇襲であり、とても驚き、逃げ惑った。

この時、貨物輸送車が食糧をいっぱい積んで出発しようとしていたが、その車の米俵の上に乗っていて驚いて車から降りようとした瞬間、銃に撃たれて戦死した濟州島出身の夫藤という同志がいた。多分この人が同志の中では初めての犠牲者だっただろう。この時、本島の滑走路にちょうど飛行機が全てどこかに出撃して居なかったので、飛行機の被害はなかった。だが滑走路には多くの爆弾が落とされる被害を受けたので、米軍の爆撃機が帰った後、すぐに総動員して補修を始めた。その日の夜に穴を完全に埋めておき、その他、各所に落とした爆弾の穴なども続けて復旧させた。しかし、この日の奇襲は初めて受けた奇襲だったし、日本軍だと錯覚して、迅速に退避できなかったため、死傷者が以外に多かった。

この日、日本軍の陣地での抵抗も激しかった。米軍が爆撃している間、地上でもある砲すべてを使って猛烈に対抗した。それこそ空中と地上での一大激戦が繰り広げられた。地上では機関銃や高射砲弾の発射など、多くの砲火をあびせ、米軍のグラマン戦闘機1機を落とした。

この戦闘で、私は米軍パイロットの勇猛さを初めて見て認識を新たにせざるをえなかった。地上でこのように頑強に抵抗する中で、米軍は少しも屈せず、雨や雪が無数に降ってくるような弾丸にもかかわらず、低空で縦横無尽に飛び回り、機銃掃射と偵察を敢行した。その勇敢さに私は本当に感嘆せざるをえなかった。

地面に落ちた米軍機の残骸を見ると、その胴体をなしている機体が薄い紙のようなアルミニウムで造られていた。これは機関銃一発で機体を突き抜けてパイロットに致命傷を与えるのに十分だが、このような機体を操縦してそんなに勇敢に戦うことができるとは！これこそが愛国精神なのか、冒険精神なのかかわからないが、日本人たちがよく口癖のようにいう神風精神や突撃精神に劣らない勇猛性だった。

実に感嘆せざるをえなかった。日本人たちがいう1対10ではなく、1対1の戦力が米軍は精神にもすでに備わっている。そのような強い国民だということを感じさせるには十分だった。

米軍の第2次奇襲攻撃

それから数日が過ぎた。私は一日の日課を終えて帰り、風呂に入るためにドラム缶に半分ほど水を入れて火を焚いていた。適当な温度になるのを見計らって服を脱いで入ろうとした瞬間、火花のような光が目に入った。振り返って外海の椰子の木の方を見ると、それこそ夜空に流れ星のような光を出しながら多くの機関銃弾が飛んでいる。椰子の木に打ち込まれる音とごっちゃになって、銃弾がパチパチと音を立て無数に飛んでいた。

一瞬私はびっくりして「奇襲だ！」と大声で叫びながら一番近い防空壕の中に逃げ込んだ。同時に私を追いかけてきた人がもう一人がいて、振り返っ

てみるとチャンさん（高原¹⁶）という済州島大静出身の同志であった。

この人も自分の近くに防空壕があったにもかかわらず、うっかりしてここまで走ってきたのだった。緊急時に友達と一緒にいるということはお互い慰めになってよいことではあるが、実際には狭くて無理があった。お互いの膝を合わせて座らなければならなかった。この周囲は奇襲の正コースになっていて奇襲弾が一番多く落ちてくるにもかかわらず、2人とも無事だったということは本当に奇跡だった。すぐ頭の上を、轟音を立てながらものすごい速さで飛んでいく胴体を見た時、私は実に肝を潰した。何よりも恐ろしい恐怖の対象として戦慄を覚えた。

椰子の木に触れるほど低空で飛んで行った飛行機は、わずか数秒の間に内海面側からすぐに機首をまわして再攻撃して来るのだ。私はこの時を逃がさないように全速力で近くの防空壕に入った。この時ついてくると思った高原同志は他の防空壕を選んだようだった。その瞬間また猛烈な一陣の射撃風が過ぎ去った。しかし、第3次攻撃からは全飛行機が高空に上昇し、1機ずつ急下降しながら順番に爆弾を投下し始めた。最初に司令部の本部付近を集中的に爆撃し、その他の地域は散発的に多くの爆弾を落とした。

この奇襲攻撃によって地上の建物は破壊されて燃えてしまった。軍の兵舎、労務者寮、病院と食堂に至るまで、すべての建物は火炎に包まれ、島全体が火の海になってしまった。火が大きいうえに消防器具さえない実情であり、それこそお手上げだった。

死傷者や重軽傷者も多く発生したものと思われる。四方からは泣き声も激しく、忙しく走り回る軍人や軍属が、真昼のように明るい火でよく見えた。悲鳴を聞きながら当然飛んで行って助けなければならぬという気はあるのだが、生まれて初めて受けた奇襲攻撃であり、だれもが恐怖に震え、空襲に怯えて勇気が出ず、防空壕のそばで手をこまねいているしかなかった。そのように戦々恐々としている間に夜が明けた。見ると、近くの椰子の木はほとんどが火に焼けて幹だけが残り、地上の建物は一つも残っていない、灰の山と化していた。

死傷者は軍人及び日本人軍属が何名かいたが、幸いな事には我が同志たちは軽症者が何人かいるだけで、皆が無事であった。重傷者については防空壕

16 創氏名

に行って治療をし、軽症者は防空壕の外に設置された治療所で治療した。医薬品は臨時に使うものだけを残して全て事前に地下室の貯蔵庫に保管してあったので何の支障もなかった。

米軍の偵察機が去ったあと本格的な爆撃が始まり、地上の建物はすべて焼失した。そのためにこれからは防空壕生活をするしかなかった。

生き地獄脱出のための自傷行為続出

この日の爆撃は2回目であるが、通常空襲ではなく、すべてが奇襲である。この間、白昼に出撃して帰ってくる日本機と勘違いして受けた奇襲と共に、時間的に言えば到底避けることのできない奇襲であった。通常空襲なら5、60マイル前方までもレーダーで捉えることで少なくとも何秒間の余裕はある。しかし、奇襲の場合はせいぜい1、2秒しか余裕がなく、本当に当惑する。みんな生まれて初めてのことで衝撃が大きかった。日常生活では緊張がただよい凄惨だった。

改めて戦争に対する恐怖と戦慄で精神に異常をきたす焦りさえ出てきた。どうすればこの生き地獄から脱することができるのかと思案する者も多かった。しかし、袋の中のネズミのように四方が海のために逃げる所がなく、身動きもできず、殺されるしかないのだ。

実際にその日以後、恐怖症に罹った人も多かった。奇襲に成功した米軍がこれからも時々この空襲方法を選ぶようで、皆が各自これに対する対策を練って、神経をとがらせている。とうとう、この生き地獄から抜け出せるのなら、体の一部を切るなど何でもするという言葉まで行きかった。しかし、そんな危険を敢行することは、口では言うものの簡単にはできない。

度を越せば、むしろ命を失うことになり、だからといって不十分なら目的は達成できず、苦労だけを招くことになる。当時のすべての同志たちの心理状態を代弁することではあるが、実は私の神経も例外ではなかった。万一これからもこんなことがまた起こって不幸にも犬死をするならば、ただ私一人だけを信じて生きている故郷の家族はどうなるのか？思うだけでも気が変になるような心情だった。

そんな中、その日もセメントを乗せた船が入ってきて荷役班員が動員され

た。クレーンを利用してセメントを持ち上げ、貨物車に乗せて運ぶようになっていた。棧橋から3、4人がクレーンから降りたワイヤーロープを広げ、その上にセメントを積んでロープを巻き、一度に2、30袋ずつの重量を持ち上げるため、大きく揺れた。その時これを予測して避ければ問題はなかったのだが、この生き地獄から抜けることだけが上策だという一念から、故意に体をよけずに2人がぶつかった。怪我は避けられない。

2人ともその場に倒れたが、同僚たちによりすぐに病院に護送されて、診察をした結果、一人は右の肋骨が、もう一人は左の肋骨が2、3本ずつ折れていた。今は故人になった旧左面上道里出身の高デシクと呉ムニョン同志であった。この人たちは幸いにも送還者になって病院船が入り次第、帰郷できるようになった。誰よりもまず生き地獄から脱出できたといえる。

このことがあった後、何日か経って今度は同じ故郷出身のチョン斗玉同志が魚を捕りに行ったが、事故にあった。彼は私製爆薬を使って魚をうまくとることで有名であった。彼は要領が悪くてうまくいかなかったわけではないはずだが、近くで見ている人が早く投げろと焦って叫んでいるにもかかわらず、火薬をもった左腕をぐっと持ち上げ、振り向いてにやりと笑って見せた。その瞬間、そのまま爆発してしまった。爆発するや否や、その場に倒れたのを同僚がすぐ病院に護送した。見ると、左腕が切断され、顔面をはじめ上半身全体が傷だらけで本当に残酷であった。

この時のチョン斗玉同志も生きるための最後の手段として、そんな残酷な自傷行為を敢行したのではないだろうか。

きれいに体を洗い、熱心に治療をした結果、切断された左腕以外はすべて完全に回復した。そして、肋骨を折った同僚たちと一緒に病院船牟婁丸¹⁷が入ってきたときに帰郷することになった。生き地獄から脱出した2回目の成功者ということができる。

17 牟婁丸：大阪商船の貨客船だったが、1938年8月1日海軍に徴用され、呉鎮守府所管特設運送船（雑用船）として1938年8月18日呉出港後、華中方面で活躍。1942年12月25日呉鎮守府所管特設病院船となり、1942年12月31日佐世保工廠で改造工事に着手。1943年1月8日に工事完了、20日佐世保出航、28日呉に寄港。1944年6月10日呉出港、1944年11月13日フィリピンマニラ港付近で患者40人乗せて待機中に米軍第38任務部隊〔空母部隊〕搭載機による空襲を受けて沈没。

米軍の第3次奇襲と年寄りの日本人軍属

防空壕生活が始まり、これから米軍急襲がだんだんひどくなることに備え、防空壕の補強修理をするために多くの人員が動員された。

仕事をしている間、しばらくは空襲警報がなかったのに、この前に奇襲してきたコースと同じコースで急に猛烈な攻撃をしてきた。むやみに乱射する機銃射撃に隊員たちは一度に皆死ぬと思ったが、その場でそのままうつぶせになったり、椰子の根元にうずくまったり、またその中でも近くの防空壕まで走っていったりなど、各自が緊急避難してびっくり仰天であった。

空襲警報は1次の攻撃が去った後、ようやく鳴った。1次攻撃が終わって飛行機が機首を回して再攻撃をしてくるときは、誰が命令しなくても時を逃がさずに、いち早く近くの防空壕に皆が走って入った。しかし、この時まで自分が負傷していることも知らなかった日本人軍属が1人、一緒に防空壕に走って入ってきた。同僚から、自分の肩から多くの血が流れていると聞くと、銃で撃たれたのもう死ぬんだあと大声で叫んだ。

そうでなくてもこの年取った日本人軍属は、これまで1、2次奇襲攻撃が続くなかで、精神異常の症状を見せたが、銃で撃たれたので怖くなり、どうしていいのかわからなくなったのだった。同僚が彼のフンドシを脱がせて、早くその傷口をしっかりと巻けば、止血できそうだったので、急いで応急処置をして、空襲が終わるのを待ち、盲管銃創や刺さった弾丸を抜くように処置した。しかし、その日の奇跡は、仕事をしていた所が奇襲攻撃の正コースになり、とても多くの弾丸が落とされたにもかかわらず、年取った日本人軍属1人が負傷しただけで、他の多くの者たちはすべて無事だったことだ。どう考えても異常ではないか。そうしてみると、人間の命には若さから生まれる神秘の防御力が何か別にあるのではないかという思いさえした。

そのためその後、この人も病院船牟婁丸が入ってくると帰郷する機会を得た。凶が福になったということだ。しかし、3回も米軍の奇襲攻撃にあったので、皆は精神的に安定せず、またこれ以上、空襲警報が信じられなくなって、精神状態が異常になるほどだった。

うらやましい先住民の自由な生活

この島には、先住民数十名が住んでいるのだが、時々作業現場で会うことがあった。中には夫婦と子どもがいる者もいた。

彼らは作業現場に出て仕事をしていながらも自由であった。それはしたいときはするし、したくなかったらやめる。作業への報酬ではなく、ご飯を食べることがすべてであった。彼らの主な食料は椰子の実、パンノキの実、タコ¹⁸、マコモ¹⁹などで、これらは島ごとに豊富であった。これを主食に生きてきたが、作業現場で食べるものを珍味と思っていた。現場に出てきて仕事をすれば、ご飯は食べさせてくれるので、時々そうやって出てきて仕事をしたが、仕事が嫌ならいつでも勝手に行ってしまった。

椰子は実を採って食べるのが普通だが、その若葉が5、60センチまで伸びると、皮の中で花が開く前に若葉の皮の上に紐をくくり、木の根元から芽の端までぐるぐると巻いてしばる。よく切れる刀で芽の端をそっと切って傷をつけ、その端にびんを垂らす。2、3日するとピリッと甘い椰子の水がびんを一杯にする。そのまま2、3日置くと甘い椰子の酒になる。ここに発酵剤を2、3錠入れてさらに2、3日置くと、強くて甘い高級酒になる。そのまま1ヶ月以上吊り下げておくと高級の酢になる。この他にも椰子の蜜をいくつかのびんに集めて長く釜で煮詰めると、水あめや羊羹などいろいろなものを作って食べることができる。これが彼らの主食になる。

時にはカヌーに乗って海に出て、銚で大きな魚をとってきたりするし、釣りに行くこともある。そうやってこの島、あの島を思い通りに行き来し、本当に自由でたくさんの自然の恵みを受けている人たちであり、うらやましい限りであった。

またマゴモックといってジャガイモのような成分だが、これを石で挽いて水に浸けて澱粉を作り、これを乾燥させて保存しておき、少しずつ取り分けておかゆをつくったり、すいとんを作って食べたりもする。これ以外にもパ

18 木の名前。タコは学名 *Pandanus boninensis* で熱帯植物。果実はパイナップルと似たような形で食用に利用でき、最初は緑色だが熟すと明るいオレンジ色から赤色を帯びる。

19 マコモ（真菰 *Manchurian Wild Rice*、学名 *Zizania latifolia*）を指すようだ。稲科マコモ属の多年草。東アジア、東南アジアに分布し、日本では全国に分布。現存する日本最古の歌集である万葉集にも登場する植物。水辺で群集し、食用としても利用される。

イヤなどの果物もある。この人たちはこの島に子どもの学校と教会まで持っていたが、情勢が緊迫するに従ってどこかに移動したという。その当時聞いた話ではウオツゼ島の次に大きな島であるオリメジ島²⁰に移ったが、米軍機が爆撃を始めた後からは再びどこかへ移動してしまったという噂があった。

このように彼らが天地で自由に暮らしていることは正反対に、我々の同志たちの生活は日本人の強制労働に苦しめられ、ひどい苦痛を受けていた。あまりにも対照的であり、彼らの自由をうらやましく思わざるをえなかった。

中村小隊長との再衝突

当時の施設工事は初めから、突貫工事であり膨大なため、通常の方法では「千年河清を俟つ」といえるぐらい難工事だった。工事現場の責任者は責任者なりに競争意識があり、各班長たちは班長なりにその成績を争う中で、骨が折れそうになるのは我々朝鮮の同志のほかになかった。

前述したように、日本人で労務者〔の監督〕として徴用または志願して現地に行った人たちは、日本のやくざ出身であり、その性格が荒いだけでなく、言語は下品な言葉だけを駆使した。朝鮮人に対する態度はいつも、日本人が主人であることを誇示して、完全に奴隷扱ひした。それで、我々朝鮮人が少しでも目に障ると、叱られると同時に必ず往復ビンタが行き来した。つまり手のひらで顔の左右を殴りつけるのだ。

これが彼らの日常茶飯事だったので、どんなことでも、我々朝鮮人を一度悪いとみなせば、絶対にその弁明をさせなかった。良くも悪くも日本人は「正」で朝鮮人は「邪」というように決めつけていた。だから、彼らの目に障ることさえあれば、殴られるのが常だった。だから、いくら悔しくて憎くてもこれを避けるために、ただぺこぺここと、はい、はい、と言って無事に通りぬけた。それでも少しでも怠けたように見えると、精神を変えてやると言って気をつけの姿勢をさせ、精神注入棒で20～30発殴りつけた。

我が同志の中には、故郷では両親の元で大切にされて、他人の事はおろか家の仕事も手をつけたことのない閑良〔閑職の両班を示すが、ここでは遊び

20 Ormed Island、ウォドメジ島

暮らす人の意) もいるのだから、この日本人の仕打ちには耐えられなかったことだろう。その中の一人に朴潤瑞同志がいた。彼は日本人現場監督の中村小隊長にごろつきと言われるほど扱いが難しい人物で、知らない人はいないほど有名だった。その理由は他人と比べて仕事はできなかったが、言葉ではだれにも負けずすらすら、てきぱきとやり返した。日本人には、いわゆる理屈っぽい、歯に衣着せない話ばかり言うので、中村にはあきれたヤツと思われていたが、我が同僚の歓心を買うのには十分だった。

前に記したように、彼らは我々同僚たちの事なら、たとえ自分が殴られることがあってもいつも先頭に立ち、どんな難関に遭遇しても同僚を保護し、解決してきた。もともと彼らの性格は正義感に燃え、欲がなく、義侠心が強かった。自分のことなら弁明で終わるが、同志がひどい目に合うことに対しては、頼んだり弁明したりして両方を要領よく駆使し解決する才能があった。

本土上陸4ヶ月に起きた衝突以来、些細な事件はあったが比較的無事に過ごしてきた。しかし、1年が過ぎた今、情勢が差し迫っているだけ作業量も多くなったが、日本人に比べて朝鮮人にだけ大変な作業をさせた。飛行機格納庫の施設工事が緊急突貫工事として命令され、我が朝鮮人同志は昼夜を問わず、死に物狂いで仕事してきた。もちろん工事の初めから不平は多かったが、我々は現地での期限が満了になっていた。解除されればいつでも故郷に帰れるので、これを最後の奉仕だと思ってすべての不平を我慢して仕事してきた。ところがその困難な工事を20日あまりも続けてきたにもかかわらず、日本人たちは軽い整理作業をしながらも一度も交代すると言わなかったため、我々同志たちは憤慨せざるをえなかった。

この時、我慢できない我が同志の中で朴潤瑞、徐相炯など何人かの同志たちが反発した。「我々朝鮮人を人質にして、名誉を受けるのに血眼になってきた中村小隊長はどこに行った？私がかいつをそのままにしておけば、哀れな我が同志たちだけが苦しめられる。だから私はこいつをそのまま放っておくことはできない」といい、日本人が仕事をしている方に走って行った。これを見た我々も「そうだ、そいつを捕まえろ」と言いながら後に続いた。この時、先頭で走っていた姜公三同志は、日本人だけが軽い整理作業をしている現場に飛び込んだ。そこで中村小隊長の胸倉をつかんでゆすりながら、すぐに交代してくれないかといいながら、拳一つ殴った。続いて一緒に走って

きた同志たちが加勢すると、日本人たちも走ってきてお互い殴る蹴るの喧嘩は大きくなり、作業現場はあっという間に修羅場になった。結局、日本のヤツらは人数不足で手に負えなくなると、一人が憲兵守衛所に走って行って憲兵を連れてきた。走ってきた憲兵はすぐに喧嘩の中止命令を出すと同時に、我々の主導者として名指しされた朴潤瑞、徐相炯、姜公三、高光俊、梁元鐘同志たちを引っ張っていった。他の多くの我が同志は引っ張って行かれた同志たちについていった。そして、彼らが我々の声を代弁したのだ、絶対にその人たちに罪があるのではない、その人たちを処罰してはいけないと大声で叫んだ。しかし、憲兵守衛所に行くと、引っ張ってきた同志たちだけを事務室の中に入れ、ドアを閉めてしまった。残りは入れなくて、外で大きな声で叫んだが、中では取り調べが続いた。

憲兵隊は、軍司令部の緊急命令で実施する工事なので、中村小隊長個人がするものではない、中村に何の罪があるのかと反問した。我が同志たちは「そのことを知らないわけではない。初めから我々朝鮮人だけを工事に投入した時も、何も言わないで、その大変な工事を20日以上も続けてきた。小隊長が工事現場の総責任者であれば、そして朝鮮人を差別しなかったら、こんなことは起こらなかつたらう。これからわずか何日で工事が終わるのなら、相互慰労の意味でも、その間一度くらいは交代をしてくれるのが道理ではないのか?」と言った。憲兵隊は、それはある程度納得できるが、その時は事前に建議しなければならない。暴力を使うというのは間違っていると指摘した。暴力を先に使った姜公三同志とこれを扇動した朴潤瑞同志をそのまま帰すことはできないと言って、それぞれをムチで20～30回打った後、釈放した。本当に悔しかったが、残りの工事は日本人のヤツらが仕方なく引き受けた。悔しいことはあったが、その程度で終わったので幸いだったと思うことにした。その後、姜公三同志と朴潤瑞同志はムチ打ちの後遺症で何日か非常に苦労したし、同志たちはその切ない思いを口に出せなかった。

追撃された日本の戦闘機の全焼

米軍機の奇襲が始まると、最初に飛行機が入ってくる瞬間から猛烈な機銃射撃をする。1、2回と縦横無人に乱射したのち、全飛行機が高空に上昇し、

島の上空を一回り旋回した後、降下線を定め、その線で1機ずつ急降下しながら爆弾を投下していくのが通例となっていた。奇襲の時には最も低空で海上を飛んでくる。椰子の木に当たるほどの低空であり、地上のレーダーにはいつも写らないので、奇襲が来ればひどく当惑するしかない。

このような奇襲を続けるだけだと、受ける側もそれだけ備えることになるので、奇襲はこの程度で次からは通常な攻撃に転換するだろうと推測していた。これ以上、米軍機の奇襲はないはずだが、これまで突然の奇襲を3回も受けたあとでは、皆が恐怖を覚え、言葉を聞いただけでも慌てふためいた。

地下格納庫が完成される頃から米軍機の奇襲が始まった。本島を守る日本の戦闘機は激しく飛び回っていた。実際に飛行場滑走路に長時間留まっていることはほとんどなかった。それだけでなく止まっても給油程度の時間で、長く滞在しないでその度ごとにどこかに飛んで行った。夕方ごろに帰ってきてはまた夜明け前にどこかへ出撃するのが普通だった。

第3次の奇襲攻撃を受けたときも、残っていた戦闘機10機余と水上爆撃機1機は、ちょうど奇襲が来るたびにどこかに出撃していた。いない時だけ空襲を受けたのでうまい具合に飛行機の爆弾には当たらず、その都度、無事だった。

まだ帰ってこない飛行機のために、米軍の爆撃で被害を受けた多くの爆弾の穴を夜が明ける前に完全に埋めておかなければならなかった。夜間にサーチライトをつけて作業をしたが、遠距離から目標になって米軍の奇襲を受け、意外に多くの死傷者を出した。その後は奇襲を避けて、通常1日に1、2回ずつ50機以上が飛んできた。当時アメリカの誇るグラマン戦闘機の襲来が続いた。さらに爆撃は一度来たとなると、その時間がだんだん長くなり滑走路はもちろん、各砲台と陣地に向かっても猛爆撃を加えた。

そんなある日、出撃していた日本機が夕方ごろに帰ってきて滑走路に止まるやいなや、追いかけてきた米軍機が猛烈な奇襲攻撃を加え、飛行機全体が火にのまれ、全焼してしまった。今や米潜水艦の侵入も防げず、すべての補給路は完全に遮断され、孤立を免れなくなった。とても大きな打撃だというほかない。

以後、すべてのニュースが途絶え、このまま死んでしまうのではないかと、いう絶望感さえ生じた。航空隊司令部の沖合にいつも停泊していたハワイ

〔方面〕担当の大型爆撃機も最初は2機あったが、1機に減った。それが今はその1機までも撃墜されてしまったのか、あるいは安全地帯に避難したのかわからないが消えてしまった。そしてこの島を守る戦闘機はすぐ補充されると何度も噂されたが、結局、ウソとなった。

病院船牟婁丸と米軍の空襲

ある日、病院船牟婁丸が入ってきた。本島に来てから満1年4ヶ月ぶりだと思われる。病院船はすでに半年前にも入ってきたことがあったが、その間多くの患者が長い間焦りながら待っていた。病院船が入ってきたというと、患者たちはもちろん、患者ではない人たちも一緒に喜んだ。まるで子どもがお母さんの胸に走っていくようなものだ。

すでに患者たちには事前に連絡されていたのか、すべての準備ができていた。それで患者たちは病院船まで乗せていく上陸用の大発動艇²¹に乗せた。病院船は船体が白い純白の地に赤い赤十字のマークが描かれたきれいな船であった。少なくとも3千トンにはなるようだった。我々も何か手を使っていたら、あのように美しい病院船で帰郷することができたのにと勇気のない自分を後悔するのだった。

ところが、送還者たちを乗せた船が埠頭を離れて少しのときだった。お互いさようなら、さようならと手を振っていて、時間はすでに10時が過ぎていた。患者たちが乗った船がゆっくりと〔病院船まで〕半分あたりのところに行くと、急に空襲警報が聞こえて、皆は当惑し、ものすごく怖くなった。陸地でもそうだが、海で船に乗っている患者はどれほど驚いているかを思うと、これから繰り広げられる状況を手に汗を握りながら見守るしかなかった。とにかく患者が無事なのを祈った。

もう2、3秒で米軍機²²は飛んできた。あっという間に米軍機はいつの間にか病院船の上空まで到達し、島の正面から猛烈な機銃射撃をした。しかし、気になっていた患者たちと病院船に対しては銃一発も撃たなかったため、皆

21 上陸用舟艇

22 「原文では「米軍戦爆機」とあるが、空襲状況に応じて、米軍機、爆撃機、戦闘機などと訳出、また当時空軍は存在していないため、「米空軍」の記述は米軍と訳した。「日本空軍」とする記述は航空隊と訳した。」

が無事に病院船に上がった。見守って心配していたすべての人たちには意外だった。

もちろん国際法によって病院船に対しては絶対に射撃を加えてはならないことになっている。だが撃とうと決心したら、武器を運搬しているとか、その他兵力を乗せているとかどんな言い訳を付けてでも沈没させることができる。国際法を守った米軍の遵法精神に感嘆せざるをえなかった。そのなか、郷愁の思いが一層胸に迫った。病院船は空襲のさなかに出発した。

空襲にきた米軍機は30機ほどだったが、島全体に猛烈な機銃射撃を加えた後、高空に上昇して1機ずつ急降下しながら爆弾を落とし始めた。しかし、この日は地上から粘り強く対抗をしたので激しい攻防戦となった。そのため、地上の日本軍の各陣地とトーチカ²³などが甚大な打撃をうけ、飛行場滑走路にも多くの爆弾を落とされた。これを復旧させるにはどの時よりも多くの力が必要だった。この日の戦闘で米軍機1機も地上砲火に当たって墜落した。

食糧倉庫爆破による食糧問題の悪化

その後、昼間は昼間なりに、夜間は夜間なりにという昼夜間の攻撃で、爆撃はだんだんひどくなり、その数も増えていった。一回で4、50機ずつ、それも一日に2、3回爆撃する時もあり、また夜間には夜間でいわゆるコンソリデーテッド²⁴長距離大型爆撃機〔B24〕が飛んできて、夜が明けるまで爆撃をした。我が同志たちは夜昼を問わず危険にさらされた。

はじめは、昼に隔日で来たのが、一日に2、3回ずつ来るようになり、それが生活に大きな支障をもたらした。また夜間は夜明けまでに長距離大型爆撃機が爆撃するので夜間の活動さえ不可能になって、食べることも寝ることも十分にできなくなった。弱り目にたたり目で、高空から地上に向かって数限りなく落とされる爆弾が、地上に到達するまでシュー、シューと怪音をたてたので、すぐ頭の上に落ちてきそうな恐怖感により、すべての神経が極度に麻痺してしまった。爆撃はだんだん激しくなり、破壊されたところの復旧

23 トーチカ (tochka) : 点という意味のロシア語トツカ (ТОЧКА) に由来。第二次大戦前にソ連が満洲と国境地帯に構築した永久陣地を指す語だったが、その後一般名詞として使用。陣地にある小さくて丈夫な要塞。

24 Consolidated、大型爆撃機

作業も一層多くなって、精神的にはもちろん肉体的にもやり遂げることが本当に難しい壮絶な状況だった。爆撃時間はおよそ 20 分ないし 30 分に満たなかったが、その時間がどれほど長かったか。一日にも死にそうな峠を数限りなく越えなければならなかった。作業途中に米軍機の奇襲を受けて、多くの死傷者を出した時も 1、2 度ではなかった。しかし、このようななかで一番致命的な知らせは大型爆撃機からの大量の爆弾投下で皆の命である食糧倉庫が爆破されてしまったことである。

そうでなくても米軍によって制海権と制空権のすべてを失った状態であり、食糧補給を大きく心配しているところだった。ところが弱り目にたたり目で命の食糧倉庫まで爆破されてしまったので、多くの人がこれから何を食べて延命していけばいいのかを考えたら、本当に目の前が真っ暗になった。最初にこの話を聞いたときは、まさかと半信半疑だったが、実際、少し後でたくさんさんの砂が混じった米の配給をうけてあきれた。

しかし、それが現実であり、どうしようもなかった。このように米の大切さを感じたのも生まれて初めてだった。これから草粥だけで延命するのか、すぐに草粥さえも食べることができない時もあるのではと備蓄用に残すこともした。

その時、残しておいた米は長い間、命のように大切に保管して、1 年後、祭りの日や誕生日に草粥に混ぜて炊いて食べたりした。そうしながら、私は死んでも飢え死はしないぞと決心して、最後まで何合かの米だけは残すことにした。そして一番大変な時にだけ少しずつ使い、草粥に混ぜて炊いて食べた。砂が混じった米といえども、しばらくしたら無くなってしまう。その次からは椰子のコブラ²⁵が一日に 2 個ずつ配給された。しかし、それさえも一週間も経たずに中断されたので、それからはどうすることもできず、自給自足で草粥だけで延命するほかなかった。それからはだれにも頼ることができなくなり、各自無言の生存競争が始まったといっても過言ではない。

椰子は本島を離れた離島にはいくらでもあるが、軍当局で掌握し、許可なくむやみに採ることができないようになった。それで、海へ出て、魚やカニのほか、貝や海藻類の中から食べられるものを自分で捕って食べるほか方法

25 Copra、椰子の実の緑の硬い胚乳や椰子の硬くなった果肉を削って乾燥したものをコブラという。コブラの粉は牛乳の代用品として使う。

がなかった。草粥ばかり食べると何日も経たないうちに、体ががりがりとして力が出なくて、足が震えてめまいまで起こるからだ。ここで、座り込んでいては生き残ることができないので、いくら疲れて目がぐるぐるまわっても、仕方なく自給自足をしなければいけなかった。まず、私は絶対に生きねばならないという固い意志と粘り強い努力と大胆な勇気がないといけないと思った。そして誰彼なしに飢え死にかけている立場だから同情で生きようとすればすぐに餓死するだけと悟り、勇敢に活動した。

魚を捕る方法は、第1に爆薬を使って捕る方法と、網を投げて捕る方法、その他に釣りの準備をして捕る方法など、色々あった。その中で爆薬を使って捕る方法は、不発弾を解体してその内部にある黄色い火薬を取り出し、缶詰の缶に入れて雷管を入れ、導火線をつけてコールタールで固定させる。これを「投げ釣り」といった。

魚が集団で集まっているところを発見する、あるいは他人と協力して魚を一方に追いやってその時に合わせて投げれば、たった1回でも多くの魚が捕れる。だから、協力してこの機会を狙い、魚を捕って食べる人が一番多かった。釣りをする人もいたが、いつ来るかわからない空襲のため、時間がかかる釣りをする人はあまりいなかった。網を利用する人は、網を作る材料を探して編むのに時間がかかるため、何人かしかいなかった。しかし、一番多く利用する投げ釣りは、雷管が軍から出るものなので、手に入れるのが難しい。特に不発弾を解体する技術者があってこそできるのだが、これがまた難しい。それでも窮すれば通ずというもので闇取引する者もいたので手に入った。

このように、魚を捕るよい方法もあったが、激しくなる空襲のために安心して行くことができなかったし、自給自足のために動くことはまさに難しかった。しかし、魚を食べてこそ栄養補給になり次の活動が可能になるので、勇気を出して動くほかなかった。草粥には栄養分はないが、それを食べなければ、飢えをしのぐことができないし、延命が難しくなるので、「ウサギの耳草」²⁶という植物も我々には命の草であった。

ここに自生する草はほとんどが外見的には食べられそうだったが、多くが毒草だった。その中でも一番毒のない草がウサギの耳草で、水を2、3回換え

26 Kalanchoe tomentosa (カランコエ・トメントーサ)、月兎耳〔つきとじ〕、ウサギの耳のサボテンなどと呼ばれる。多肉植物。

ながら少し長く煮れば、毒気がとれた。しかし、食べるのにはがさついていた。無味ではあるが、空腹を満たすにはこの草以外にはなく、他に安心して食べられる草もなかった。最初はスベリヒユ（滑莧・馬齒莧）も主食としてしばらくたくさん食べた。熱帯地方でもあってスベリヒユは熱さえあれば驚くほどよく育つ草で、爆弾の穴の周辺や、防空壕の周りに多く植えてひとときは多く収穫し、長い間食べ続けた。

しかし、空襲がだんだんひどくなり、地表が限りなくひっくり返されたために、根を張ることができない。仕方なく、ここ内海面一帯でよく育つウサギの耳草が主食になった。

このウサギの耳草は、枝にウサギの耳のように見える葉が5、6枚以上あり、普通5、60センチ程度に育つ。生育が旺盛なので、一度に多くの量を収穫することもできたが、これからも続けて主食として延命していかなければならないので、節約し、各自が食べる量だけを採って食べるのが習慣になった。いくら豊かに育つといっても何しろ人が多いため、それさえも早くは育ってくれず、大変な時が多かった。

育たない時は、春菊のような草を食用とした。その葉は中央に十字架状の黄色や赤の模様があり、遠くから見るとちょうど花が咲いているように美しく見える草だ。この草はほうれん草のようで味も見かけもよかった。しかし、その毒気はウサギの耳草に比べると10倍ほどあり、5、6回水を換えながら長い間煮ても若干の毒気は残っていた。だから続けて食べることができなく、ウサギの耳草が採れない時だけこれで代用した。

この草を食べるとまず、めまいがしたが、1回程度ならあまり苦痛ではなかった。実際にスベリヒユも続けて食べると、めまいと下痢が普通だった。どの草を食べても、養分は同じではないようだった。せいぜい空腹を満たすことができる程度だった。10日余続けて草粥を煮て食べると、いくら体力があっても健康な人でもだんだんやせて、例外なく栄養失調になり力が抜けて、重患者のように四肢が震える。それで椰子コプラや肉などが必ず必要だった。そのため夜に干潮になった機会を利用して警備兵の知らない間にうまく離島に渡り、椰子のコプラを採ってくる勇者がたまにいた。これは本当に大胆で勇気のある人のみでできることだった。

その他にも、強い風が吹いた後には海からクラゲが海辺の砂の上に浮かぶ。その時を期してたくさん拾って食べた。これを淡水ですすいで食べてみると、まるでいかを食べているようにおいしかったが、あまりにも塩辛いので一度食べてからは食べなくなった。それだけでなく、食べた後には必ず下痢をしてしまい、体は一層だるくなった。

このように食べていくのに一生懸命であったが、日本から食糧補給船が来るという朗報を聞いた。しかし、すでに米軍によって制空権と制海権をすべて喪失して完全に孤立した状態だったので、それが実現可能なのかと思った。いくら考えても信憑性がなかった。それでも食糧に深い末練が残っていた。半信半疑だったとき、もう少し確実な情報が入ってきた。それは食糧補給船ではなく、潜水艦で食糧を補給するというのであった。しかし、潜水艦といっても船が入ってくる入口は一つしかなく、そこにはすでにアメリカの潜水艦が徹底的に守っているはずだから、これもまた可能なのかと思った。いくら考えても信憑性がないのは同じだった。

しかし、食糧の引き取りのため軍では特攻隊を組織し、夜間を利用して事前に交信までするという。だからダメで元々であり、また危険性は相変わらず残っていると見るしかないが、食糧を補給してくれるのだから、どんな困難があっても放棄することはできなかった。こうして当時、5砲隊長でニックネームがカイゼル髭という大胆さと勇気があることで知られている人が引率隊長となり、部下の特攻隊員何人かを連れて、軍上陸用の大発動艇に乗って出発した。漆黒の暗い夜に火一つ付けずに港内から遠いところに位置する港内入口、水道口²⁷に向かって走って行った。

船はついにその入口まで到着して発火信号をした。すると向こうからも返事の合図がきたというのだ。事前に交信までしていたので、友軍の潜水艦だと思って接近し、ほぼ10m前方まで近づいたとき、急に機関銃射撃を乱射してきたというのだ。もちろん事前にその攻撃に備えて十分な準備をして出発したのだが、急な奇襲にあって驚かざるをえなかった。猛烈な射撃で追撃してくるのをこちらも決死で対応射撃をして、必死にその危機をのがれた。幸いなことに、こちらの負傷者はただ一人ですんだというのだ。本当に大変なことであった。

27 潮が出入りするところ

その日の光景は、こちらが直接対応する潜水艦以外にも事前に構内に入ってきて監視していた米潜水艦の支援射撃もあなどれない展開だった。だが味方の被害はその程度で収まったのかという疑念を振り払うことはできなかった。結局、予想した通り、皆が大きく期待していた食糧補給は失敗に終わったので、どちらにせよ米軍の計略にまき込まれたということではないかと思った。

上陸を試みた米機動艦隊の大爆撃

その日以後、情勢はさらに悪化の一途をたどった。これまで昼夜間を問わず、大型爆撃機は最大5、6機、小型爆撃機は6、70機まで飛んできて、一日に2、3回も爆撃をすることがあった。我が済州島の牛島ほどにも満たない小さな島に、このように多くの爆弾と機銃射撃を繰り返るので、島のあらゆるところが爆弾の穴だらけになった。そのため我々がこれまで、どれほど多くの爆弾の穴を埋めてきたか。本当に驚くような数に違いない。

草粥で延命して5、6ヶ月経った頃、自分の防空壕の修理と食糧自給の活動がせいぜいで、それ以外に爆弾の穴を埋める気力さえなかった。それにもかかわらず、空襲が来るたびに日本軍が地上で猛烈に対抗したが、ますます増える米軍機には耐えられない。たまにこちらの必死の対抗に米軍機が墜落すると、これに勇気を得て一層強力に対抗した。けれども結局は砲と陣地などが大きく損傷されて、その後、今までのような戦闘は実に難しくなった。

こんな中、米機動艦隊がマーシャル群島に向かって来ているという情報が入ってきた。その情報が入って間もなく本島ウオツゼ島上陸作戦の前哨となる大空襲が始まった。空襲は艦載機²⁸に代わって、黒いセイバー機²⁹の大型編隊が遠い水平線からこの島に向かって飛び始めた。その時は、この島に来てから満1年6ヶ月になる1943年12月頃だと記憶している。すなわち米軍がこの島に上陸するための事前爆撃であり、未曾有の歴史的な大爆撃、大空

28 艦載機 (carrier-based aircraft)、空母に積載される軍用機。艦載機は比較的短い距離を高い出力で飛行する戦闘機。離陸と着陸の際、滑走路が短くても使用可能。

29 [セイバーはF 86、戦後に開発されたもの。機種名の誤記とみられる]

襲であった。この時、偵察機は、ロッキード³⁰ 双発長距離偵察機に変わった。爆撃機より先に島の上空に飛んできて地上の動きを探り爆撃機を誘導するようだ。この偵察機は2機が昼夜、島の上空を飛んできて、目標との距離を測定して随時レーダー情報を交信した。艦隊が来る時には艦砲射撃のテコになってその命中率を上げる役割をするようだった。

大爆撃は朝早くから始まった。およそ100機にもなる大編隊が遠い水平線の方からゆっくり空を旋回しながら、一度に20機ずつの爆撃機が飛んできた。初めに飛んできた20機は島の上空を一回り旋回したのち、飛行方向を確認して、飛行機ごとにその方向から急降下しながら1機ずつ爆弾を投下して飛んで行った。このように島の端から端まで爆撃機100余機が絨毯式に着々と完璧に爆撃した。島全体が完全にほこりになって吹き飛ばされてしまうのではないかと思うほどの大爆撃であった。それも一日に2、3回ずつ連続して3日間猛烈に攻撃した。爆撃が続いている間の空はまぶしく晴れているが、地上は大暴風の土埃が島全体を完全に覆い、太陽の光をさえぎって黒雲に包まれたように一寸先も見えない暗黒の世界に変わってしまった。火薬の匂いと土埃が防空壕の中までいっぱいに入りこみ、ひどくて息が詰まるようだった。今までも生き地獄のような爆撃を経験したが、このように一度に多くの爆弾を落としたことはかつてなかった。

人間は行き詰るような限界に達すると、いわゆる運命というのを考えるようだ。私自身も例外ではなかった。万一これが私の運命ならば、私は生前どのような間違いがあって、一日にも数えきれないほどに黄泉路を行き来する極刑に処されているのだろうか？たとえそうだとしても、一番大きな原因は人類の平和を無視し、過度な野心で平地に波風を起こした日本のヤツらにあるのではないか？今日のこの苦痛に対する代価をどう補償してくれるのか？当然、被害者が要求する通りに、これに相応する最大限の補償があるべきではないか？

もし、これに対して異議があるのなら、我々の立場になって考えてみるべきだろう。日本が今の我々のような立場に置かれ大変な苦痛を受けたら、今の日本人は、我々にしているように、適当に見過ごすことができるか？命の尊厳において日本人と他民族とで差別があっていいのかと問いたい。日本人

30 ロッキード (Lockheed Corporation)、1912年に設立された米国の航空機製造会社。

は無辜の我が朝鮮人を戦争の生き地獄に追い込み、人間以下の扱いをしてこき使った後、危急となれば先に殺す。それは我が朝鮮人をこき使いはするが、信じていないからだ。

あんなに熾烈な空襲、爆撃が丸3日ぶりに終わった。防空壕の小さな壕の中で3日間、配給された乾パンだけで、水もきちんと飲めずに、またまともに寝れずに堪えた後、久しぶりに壕の外に出てみると、目玉が回り、めまいがして体を支えることができなかった。しかし、少しの間、気を取り直して外海の方を見てみると、驚くべき光景が広がっていた。

一晩中押しかけて来たのかもしれないが、大型戦艦、巡洋艦、駆逐艦、その他補助船など、およそ50隻余が島の外海側の全海面を完全包囲し、射撃態勢をとっているではないか？私はやっと大爆撃の生地獄から脱したと思ったが、本当に一目見ただけでもぞっとする光景だった。もういくらもがいても生き残ることはできない、最後だと思った。

驚き、眺めた瞬間、艦隊の旗艦とみられる戦艦から十文字の火が閃光のようにあちこちで光った。ついに砲門を開いたようだった。私は砲弾が飛んてくることを直感し、すぐに壕の中に入った。そこに入るやいなや、地軸を大きく揺らし、鼓膜が破れるような怪音を出しながら、数限りない多くの砲弾が連続して炸裂した。いわゆる40センチの主砲で砲弾の中では一番大きな威力を持った主砲弾が炸裂したから、皆びっくり仰天するほかなかった。そして、これを皮切りに島全体を、豆を煎るように砲撃した。防空壕の中にいた同志たちは外の事情を知らないまま、急にまた何の砲声かと驚いた。そう言いながら、これから敵軍は上陸を試すんだなあと皆が嘆いた。どうせ死ぬ命なんだから、死ぬ前に一度思い切り食べて死のうという考えしかなかった。

飛んてくる砲弾は少しも休むことなく飛んてきて終わりがなかった。我々はこの戦争で日本のヤツらと協力したとされ米軍に惨殺されるだろう。思う存分こき使い、自分たちが危急になれば我々朝鮮人を先に殺すのが日本のヤツらの特性だから、どうせ生き残ることはできないだろう。このような苦痛の中で苦しめられるよりは、むしろ飛んてくる砲弾に直撃を受けて散ってしまったほうがいいと思った。そう考えるとある程度、気持ちが落ち着いた。

空から爆撃を受けるときは、その爆撃ほど脅威なものはないと思った。だが初めて受ける艦砲射撃の威力はそれ以上に強かった。実際に砲弾が飛んて

くる音は空中から爆弾が落ちてくる音より一層不気味で、その炸裂する威力は一層血を凍らせた。ロッキード双発長距離偵察機は、いつも上空に浮かんでいるが、艦隊と地上目標との距離を捉えて交信し、その命中率を高める役割をする。だからたとえ目標に命中しなくても、目標物の2、3m以内に落ちるのが普通で、実際、脅威であり肝を冷やすものであった。

空の爆撃と艦砲射撃で露出した地上の火器は、米軍の攻撃目標になって集中的に打撃され、すでにほとんどが破壊され使い物にならなかった。このころになると米軍の上陸は必然的とされ、その時間は夜中から夜明けの間という。その時間がどの程度正確なのかは知らなかったが、だんだん近づいていることだけは事実であった。

最後の食糧配給だといって乾パンを2袋ずつつけてくれた。実は先週一週間、水も思うようには飲めず、日々を乾パン2袋で我慢してきた。この生き地獄で死なずに生きようと辛抱するのは家族のためだった。必ず生きて帰ってくるのを待っている家族のことを思い、どんな困難にあっても絶対に自暴自棄になってはいけなかった。天は自ら助けるものを助け、それを放棄したものは助けようとしな。い。なので最後まで生きようと決心して勇気を出した。

そして、艦砲射撃が始まってから、3日目になる日の夕方、何らかの情報が必ずあるだろうと全神経をとがらせていた。そして、米軍が上陸すれば白旗を挙げる朝鮮人が必ずいるはずなのでまず彼らを撃ち殺し、これに付き従うものもすべて殺せという密令がすでに出たと聞いた。

爆撃は夜になってから一層ひどくなった。実に超緊張状態の連続で、息を殺し、彼らが上陸してくる喊声に全神経を集中した。しかし時間がどれほど経ったのか、なぜか砲声が急に止まった。止まった理由が何を意味するのか気になった。あれほど猛烈に攻撃をしてきたが、今になって上陸を諦めるはずはない、外海の方では波が高いので穏やかな中海側から上陸するため、そちらに移動するのか、またはしばらく止めてこの島のなかの状態を探ろうとするのか、全くわけがわからなかった。黎明は近づいていたが、たぶん内海面の穏やかな所に上陸するのは明らかだと判断した。砲声が止んだ時間からみて、いくら早くても島々がつながる中でただ一つしかない港内への進入路まで回って来ようとするれば、少なくとも30分以上はかかる。だからこの30分が運命の時間だと思った。

本当にその時間は明暗が別れる運命の時間に違いなかった。予測通りなら、米軍の歴史上陸作戦が敢行される最後の時間だったからだ。我々は皆一緒に悲壮な覚悟をし、時間が経つほどに命の脅威に対する重圧感を感じながら、1秒、1秒を送るのがひどく苦しかった。その短くも長くもある時間が過ぎていった。

すでに日は完全に明けたのに何の気配もない。壕の外に出て外海側の海面を眺めた。遠い水平線の近くに駆逐艦2隻が見えるだけで、あの多かった艦隊はどこに消えたのかわからなかった。内海に到達する時間もすでに過ぎている。砲声が止まった時間が、上陸を放棄し離れた時間だとわかった。それを知ると私たちすべてが歓声を上げた。あれほど余地なく攻撃したのに跡形もなく引くのだから、天の助けでなくて何なのだろう？ 考えれば、本当に不思議で天に感謝するしかない。そして、ひたすら無事に帰ってくることだけを祈ってくれる故郷の家族にも深く感謝した。この間、熾烈さが極度に達していた空爆と艦砲射撃などで多くの死傷者を出した。生き残った人たちは大きな苦痛を受けただけにその感激も大きかった。

後になって聞いたことでは、本島に艦砲射撃を猛烈に広げている間、本島から遠くはなれた小さな島に米軍が上陸し、そこにいた日本の警備兵を捕まえて本島の兵力などを詳しく聞いたという。この島に10万人近い兵力があると聞いて上陸を放棄したという噂が聞こえた。他方、元々兵力が大きいので対抗しようとするれば、相互の攻防戦で無辜の人命の殺傷者だけを残すことになる。そうではなく、補給路だけ遮断すれば食糧がなくなるから、必ずしも上陸を敢行する必要を感じないので放棄したのだという説もあった。すべて一理ある内容だ。ここから移動した米機動艦隊は、当時米軍の上陸作戦により風前の灯であったマキン³¹、タラワ³²の方へ支援しに行ったという噂もあった。

こうして7日間の大爆撃、艦砲射撃から九死に一生で生き残ることができた。その時、その瞬間が今もはっきりと浮かび上がる。

31 Makin、マキン島：ギルバート諸島に属する島。第二次大戦当時、第3特別根拠地隊分遣隊243人を中心とした693人が守備。1943年11月19日から空襲が始まり、11月21日朝、米陸軍27師団の1つの分隊が上陸。11月23日朝、1人を除いて全滅。朝鮮人労務者104人生還。

32 Tarawa、タラワ：キリバス共和国の首都。中部太平洋ギルバート諸島にある島。戦略上の要地として第二次世界大戦初期に日本軍が占領、1943年11月に米軍が反撃して奪還。〔ウォッジェ島の日本軍は1944年初め、約3000人だった。〕

日本軍の高射砲弾に当たり米軍機墜落

それから何日かたったある日のことだった。急に6、70機の米軍の爆撃機が飛んできた。この時の爆撃機は、このウオツゼ島が少し前に米軍の上陸作戦のための攻撃で火器が完全に破壊されて使えなくなったので、安心して爆撃できると認識をしていたのかもしれない。飛行編隊が押し寄せて飛んでいると突然、地上火器が火を噴いた。ドーンと怪音を出して空に飛んでいった高射砲弾は飛行編隊の中央を突き抜けて炸裂した。米軍飛行機は直撃を受けなかったが、破片によって爆撃機3機に火が付いた。機体に火が付いた飛行機は高空で燃えながら遠い海の方に落ちていった。

この時、操縦士は飛行機に火がつくやいなや、高空で機敏に脱出して落下傘を開き、遠い海の方に降りていった。ちょうど遠くの水平線側で長距離偵察機1機がこちらに飛んできて、海上に降りた操縦士を助けるようだった。しかし、この飛行機は飛びながら操縦士を助けることができないようで、海上に浮くような態勢であった。だが、波が高く、浮いた状態を何回も試したがうまくいかない。3、4回試みたが、そのまま頭の方の重いエンジン部分が水の中に浸かってしまった。最初からこの光景を手に汗を握って見守っていた多くの日本の軍人たちは、飛行機が水の中に浸水した瞬間、ワーと大きな歓声を上げて拍手喝采し、「ざまーみろ」と揶揄し、大喜びした。

これがまさに戦争の残酷な現状であることを改めて感じた。根本的な原因は何であれ、戦争では勝利した者だけが正義を論じられるという日本人たちの属性を如実にみせられた一つの場面だった。振り返ってみると、この前、病院船牟婁丸が入ってきたとき、米軍機が病院船と患者に対しては空襲の際に銃を1発も撃たないでそのまま無事に帰したのと全く対照的だと思った。日本軍は命を救助する現場までも戦闘とみなして拍手喝采をするのだから、あの時同じ状況であっても、あれこれの口実で病院船を沈没させていただろう。絶対にそのまま無事に帰してやるということはなかっただろうと思った。

この時、遠い水平線側からこの光景を望遠鏡でみていたのか、あるいは救助要請をうけたのか、駆逐艦2隻が矢のように進んできた。飛行機では失敗したので今度は駆逐艦で救助するようだった。しかし、駆逐艦を留めた位置が東西になって救助現場をさえぎったため、救助する状況がよく見えなかった。この時、この光景をみていた日本軍側は、その妨害工作で駆逐艦に向

かって急に3連発の平射砲を発射した。これに対抗し駆逐艦は全速力で射程距離の外に矢のように進んで行き、慌てて砲撃で対応した。救助に来ていた飛行機はすでに水の中に完全に沈んで見えなくなり、操縦士も救助されたかどうかともわからなかった。だが、2隻の駆逐艦は射程距離の外に出てから侵入して反撃し、ほぼ一時間にわたる猛砲撃と機関銃射撃で唯一残っていた高射砲と平射砲までも破壊してしまった。

この日、私はぼうぼうと燃えながら遠い海に落ちていく飛行機から脱出し、落下傘を広げ海に落ちて行った米軍操縦士の妙技を初めて見て、その神技に近い妙技に感嘆せざるをえなかった。そして操縦士には高度の訓練がどれほど必要かを切実に感じた。それもそのはず、操縦士一人を育てることは一夜にしてできるのではなく、少なくとも何年もかけなければならないからである。ところが米爆撃機が今回のように一度に3機までも落ちたことは本当にかつてなかった。その失敗の原因は、地上火器が全て破壊され、ひとつも使い物にならないと安逸に考えたことによるものとみられる。

米機動艦隊の爆撃練習場となったウオツゼ島

その後から米軍機の空襲は何日かに1回になって、回数が減った。だが、一度来たと思ったら5、60機以上で依然としてその数は減らなかった。しかし、この前の大々的な爆撃などで、極度に命の危険を感じながら、精神的な苦痛との闘いに耐えてきたからか、命に別条なければ何も怖がることはないという自信が生まれた。すなわち、死ななければどんなことも可能だという度胸が生まれ、気持ちが一層軽くなった。今後、努力さえすればどんな事でも可能だ、少なくとも飢えて死ぬ心配はないだろうと思った。

この後に飛んできた米軍機はすべて艦載機であり、航空母艦から飛んでくる黒い爆撃機および銀色の最新型戦闘機である。この2つは米国が誇る新鋭機で、その性能が優秀ということで有名であった。当時、航空母艦がフィリピンのレイテ島³³に上陸作戦を試みるために、ここマーシャル群島を通りながらあらかじめ爆撃練習をしてから行くのが常だった。これはウオツゼ島だ

33 Leyte、レイテ島：フィリピン中東部ビサヤ諸島に属する島

けでなく、周辺の島々が米軍の爆撃練習場の一つようになってしまったのだ。偵察機は一日も逃さず、毎日のように2機が並んで、朝夕、偵察して行った。航空母艦が通過しつつ爆撃練習をしていくのだが、投下爆弾の中に時々不発弾がある。この不発弾を詳しく見ると、弾頭側に赤い線が引かれているものがある。それは、きっと練習弾という表示ではないかと思う。とにかく航空母艦が数隻通るときには飛行機が6、70機から100機近く飛んでくるときもあった。

重傷者に対する軍司令官の指示

1944年のある日のことだった。朝に煮て食べる草を取りに防空壕を出た。内海の方にはウサギの耳草が多く自生している。外海の方には外見からは灌木と雑木が茂っているが、ただ一つウサギの耳草は自生していない。同僚たちの話を聞いているだけでは物足りなかったので、外海の方のジャングル地帯をくまなく探し、ウサギの耳草を必ずとって来ると固い覚悟をして出かけた。それほど食糧事情が厳しくなっていたのだ。

外海側のジャングル地帯は20mないし30mの間隔で海岸に降りられる狭い道があった。海に降りていくにはこの道を選ばなければならないのだが、外海はいつも波の音が大きく、自然が作ったジャングルがなければ頼るところがなく荒々しい。幸いにもこれがあるから島の周囲をすべて要塞化するのに向いていた。ここに平射砲、高射砲、機関銃、陣地その他多くのトーチカなどを設置したので、自然の偽装だった。自然条件により空襲や艦砲射撃をするときもこの地帯だけはうまく命中できなかった。こんな地帯に行くのは、普通は敬遠される。だが、食糧代用品を採るという特別な理由のため、ジャングル地帯に行ったのだ。

こうして海岸に降りるいくつかの道を行ったり来たりして徹底的に探してみたが、本当に他の各種の草は多いが、異様なほどただ一つもウサギの耳草はなかった。

この時、ちょうど空襲警報がなった。空を見ると、銀色にまばゆく光を放ちながら島に向かって入ってくる飛行機が少なくとも7、80機はあった。ここにはウサギの耳草がまったくなく帰ろうとしたとき、空襲サイレンが

鳴り響いたのだ。

私はその時にしまったと思った。偵察機が朝早く島をただ通り過ぎて遠いところに行ったのは、必ず空襲するから詳しく探る必要がない意味と解釈すればよかった。それを正反対に解釈したことを強く後悔した。ここジャングル地帯は、何ヶ月か前に米軍上陸のために空爆機と艦砲射撃で完全に廃墟になるほどに荒廃したが、最近、何ヶ月の間に前に茂っていた姿に戻り、最初に空襲をする操縦士の目には十分によい目標になっただろう。

私は近くに体を隠す防空壕を探したが、防空壕はなかった。陣地の近くは陣地を守る兵士たちの退避所はあったが、その他に外部の者のための防空壕は遠く離れていた。その理由は米軍機に対抗する陣地は目標になるために、防空壕はむしろ遠く離れている方が安全だと判断したからだ。空襲の途中で遠くまで走っていくこともできず、飛行機がすでに爆撃を始めたので、破片くらいは十分に避けることはできそうな近くの兵隊の壕にまずは隠れることにした。

爆弾が落ちる距離がだんだん近づいてきて、爆弾が爆発するごとにその爆風のために土砂と火の塊りが激しく飛んできた。爆弾が落ちる距離が近ければ近いほど、落ちる音がシューと短くなった。また音が短いほど近くに落ちているのは長い経験からよくわかっていた。ところがこの時、爆弾の落ちる音がとても短かった。落ちてくる爆弾がだんだん近づいていることを感じて、それを感じる間、私は生きているなあと思った。

激しく押し寄せる土砂と火の塊りが濃い火薬の匂いとともには護岸を大きく襲った。本当に息が詰まって窒息するかと思った。全身が麻痺し、体が動いてくれなかった。

そう焦るなか、外では爆撃による中・軽症者たちの叫び声が生々しく聞こえてきた。飛行機は激しく最後の攻撃を行い、爆撃の目標を変えたのか、だんだん遠ざかって行った。何分か経って外から新しい空気が入ってきて四方がだんだん明るくなり、私の体も徐々に動くようになった。

体を動かしてみるとうまく動けた。壕の外に出てみるとあんなに叫んでいた軍人たちも見当たらず、まわりは静かだった。帰りながらみると以前、私が入るのをためらった軍の防空壕が直撃を受けて爆破されていた。人の予感というのは本当に不思議なものだと思った。

我々の医務隊の岡村こうじという日本軍医とその一行である医務助手3人は現地期間満了により、病院船牟婁丸が入ってきたときに本国に帰った。そのあとは完全に孤立したため、交代の軍医官は送ってくれなかった。我々朝鮮人3人だけでは医療陣として残ることもできず、保存してきた医薬品と医療器具いっさいを軍に引き継いだ。そして重傷者が出ると司令部の近くにある軍の防空壕を臨時応急治療室として使用してきた。私は医務室に勤務していた関係で重症患者がどこにいくのかを知っていた。なので帰る道に立ち寄ってみた。

応急室の防空壕に入ると応急治療を受けている重症患者が7、8人いて、壕の中はうめき声でいっぱいだった。ちょうど軍の司令官が副官をつれて壕の中にはいつてきた。司令官が入ってくると、中はすこし緊張感が漂った。実は私自身も緊張した。

司令官は重症患者をいちいち見てまわり、厳粛に言った。「お前たち、今までよく闘ってくれた。故郷に残す言葉はないか？あったら言ってみろ」。

しかし、その言葉にはだれも返事がなく、うめく声とにじむ涙だけだった。「お前たちもよくわかっているように、もうこの島には食べ物も治療薬も全部底をついてしまった。我々はいつ死んでもおかしくない。しかし、まだ戦闘は終わっていない。これから我々は死ぬまで闘わなければならない。重傷を受けた今、この状況で生きている人達の為にも、早く死ぬことも愛国であるし、陛下に忠誠する道でもある。早く死ぬこともな」。そう言って「この者たちを長く苦しめてはいけない」と言いながら目くばせした。

この時の私の感情は、いくら上下関係があり、こんな事情であっても最後まで見てあげるのが道理だ。そんな冷酷なことをしていいのか、若い青春の者たちが時代を間違えて現われ、無残にも消えて行くのにと思い、哀悼の気持ちを抑えられなかった。

身を隠した弾薬庫からの脱出騒動

その日から私は草を探すのをやめて釣りの準備をして、海岸に行くことにした。海岸といっても水深2m前後の所を探して釣りをした。時には自家製爆薬で魚を取る人の後についていき、火薬を投げると、死にかけた魚や水中

に入り逃げようとする魚を素早く捕り、分けてもらって食べた。一生懸命動きさえすれば、飢え死にするとか、栄養失調で死ぬ心配はなかった。

時は1944年8月のある日だった。内海の海岸線近くの陸地から5、60m離れたところに4、50トンほどの大発動艇1隻が壊れたまま放置されていた。引潮のときには水深が海底4、50センチほどで、満潮の時は2mの高さまで潮が満ちる。そのため、多くの雑魚が入ってくる。それで毎日のように満潮の間はそこへ泳いで行き、魚を獲ってくる人が多いと聞いた。今まで私は遠くからそれを眺めて、話だけ聞いていたので、今日は一度行ってみたいという衝動にかられた。好奇心半分、釣り半分で船があるところまで一人で行った。満潮になって船の中は水が一杯で魚もたくさん入ってきて泳いでいた。人を見ると四方に散らばったが、また徐々に入ってきた。釣りをするとちょっと大きいのは周辺を泳ぎ続け、すぐに食いついてくるのは我々濟州島の言葉でコセンイ³⁴の子どもだけだった。集まってくるものを何でも釣ったら10匹くらいにはなりそうだった。少し面白くなってきたが、残念ながらちょうど空襲警報が鳴った。船にいようとしたが、船から水が抜けているときには隠れて避けられるが、満潮だったのでそうすることもできず、また時間の余裕もあった。それでそのまま陸に上がった方がいいと思って泳いだり走ったりして、空襲が始まるのとほぼ同時に陸に上がることができた。陸地に上がることは上がったが、そのまま走ることはできず、深さ1mほどの通路壕にそって、とにかく防空壕があるところまで走った。米軍機は縦横無尽に機関銃を乱射しながら、猛烈に攻撃してきた。

私が走っているところにも機関銃の玉が無数に落ちてきた。土がバクバクとはじける音を聞きながら、死に物狂いで走った。通路壕にそって30mほど行くと右側の道端に直径80センチほどの水道工事に使う、上下が開けている土管があった。その中には栄養失調でひどく衰弱し、目がくぼんだ日本人兵士一人が銃を膝の上に寄せたまま、眠っているのか、そのままたれ掛かっているのか、座っていた。その中にもう一人くらいは入っても支障はないようだったが、機銃射撃程度は防げるが爆撃は手に負えないと思い、むしろそこから10mほど行ったところにある弾薬庫に行くことにした。そこは防火壁も完璧だったからである。そこに入っている方がいいと思ったが、考え

34 濟州島地域に生息する小さな魚

てみると弾薬庫ではないか、弾薬庫だとむしろ攻撃目標になり、身を隠すには適しいと思った。そこでもう一度戻り、通ってきた通路壕に沿ってどこかに防空壕があるだろうと思ってとにかく走った。そうしたら、行き詰まりの路地にひとつの日本人防空壕があった。

私は日本人に空襲の間だけでもしばらく隠れられるようにしてくれと言った。すると空襲の途中に入ってきたら絶対にいけないという一言で拒否された。空襲途中で防空壕に人が出入りするのが発見されたら、最後まで追撃して攻撃するので、直撃をうけて全滅するというのだった。それで、近づくこともできずに追い出され、来た道をひき返すしかなかった。

ひどい爆撃の中で、再び弾薬庫へ走って入った。倉庫の中の広さは約10坪ほどでその中央の部分に約5～600発の平射砲と高射砲の弾丸が積んであり、ムシロで覆ってあるのが目に入り、不安になった。しかし、広い倉庫の中で、一人で震えていると、誰か一人飛び込んできた。よく見ると全羅道出身の金ヨンゴルという同志だった。

その時、爆撃機がちょうど我々の上空を旋回するのが見えた。この弾薬庫に命中させるようだった。弾薬庫の付近だけに、すでに何発も落として移動しないので、我々はまたもう一度どこかへ至急に避難せざるをえなかった。緊急避難しようとしていた途端にちょうど付近におちた爆弾が炸裂し、土砂と火の塊りがごちゃごちゃになって窓の隙間から激しく吹き付けて入ってきた。倉庫の中はひどい爆風で黒雲に囲まれたようになって窒息しそうであった。

その最中に一層驚いたのは、押し寄せてきた火の塊りによって、砲弾を覆っているムシロに火がついて燃えているではないか。これを見て、すぐさまムシロを引っ張って2人で一生懸命に火をもみ消した。しかし爆撃の様子ではまだここに注目しているようだった。それでまたここを出ようとした。ところが、入口の前に出たら簡単に見つかるだろうと思い、爆風が入ってきた反対側の窓の隙間から出ようとして、素早く窓にぶら下がった。足を踏み込んで登り、窓の外に向かって頭を突き出し、力を入れて上った。もう少し足を踏ん張って登れば、無難に外に出られそうだった。この光景を見ていた金ヨンゴル同志が自分もあとにつこうと走ってきて、私をつかまえて一緒に出ようと躍起になったので出られなかった。そのために時間がかかり、事情は

一層差し迫った。

すでにどうすることもできなく、見つかった時は見つかった時だ、正門から出てしまおうと2人で一緒に正門から出た。出てみると、びっくりしたことに、空にいた爆撃機は目標を移動して遠くに行った。時間をみると、あまり経っていないが、命への強くて執拗な愛着の瞬間だった。

爆撃が終わってわかったことだが、この日、防空壕で直撃を受けて戦死した人が、何ヶ月か前の米軍の上陸作戦の攻撃以来一番多かった。その中には済州島下道里出身の金武吉と金智用同志も混じっている。あんなに多くの死の峠を越えてきたのに、望郷の恨のままの魂を、見知らぬ他郷である南洋の天に昇らせるのは残念きわまりない。人間的にも本当によい人たちだった。この世でできなかったことをあの世で成し遂げられるようにと冥福を祈った。

その日の爆撃は意外にもこの島では一番幅の狭い後斜面を狙った。空爆時には爆弾が海に流れやすく、艦砲射撃時には砲弾が中海の方に行ってしまう、命中が大変難しい地域とみられている。以前の米軍の上陸作戦時には絨毯爆撃により被害がでたが、その後は相変わらず安全地帯として爆撃がほとんど除かれてきた地区だった。そのため防空壕が最も多い所でもあった。ところが、この日はよりによってここにだけ注目し、集中攻撃を強行したのかと訝しかった。

ここは安全地帯と信じてきたが、今回の集中攻撃で多くの犠牲者を出したということは、もう島の中はどこにも安全地帯がないということを証明した。一方では第3砲台高射砲陣地の付近に落ちた爆弾が爆発した衝撃で砲身が90度の角度になって、故障したまま固定していた。空中から見るとちょうど空にある飛行機をねらっている場所に見えるので砲と砲周辺、そして弾薬庫を集中攻撃したのではないだろうかと思った。

宋在吉同志の戦死悲報と死を免れた梁元鐘同志

この島で自給自足状態が丸1年になり食糧問題は最も深刻な状態になった。特に1944年6月ころからだった。このころから内海の海岸側に多く自生していたウサギの耳草を半年ほど主食として多く採ったため、それ以上育つ余裕がなく、だんだん採るのが難しくなった。また椰子コブラも本島に近い

島は左右東西どの島にも夜間の警備網を避けて行き取って食べたのか、東西に1、2の島までは椰子の見物もできないほど完全に無くなったという噂だった。

去る1944年8月、空襲後に再び通った航空母艦により大規模な攻撃があったが、今度は島全体が等しく激しい空襲を受けた。だが、多くの爆弾の穴を作り地表をひっくり返しただけで人命の被害はほとんどなかった。しかしこの日、ニブン島³⁵の近くに200トンほどの故障した監視船があった。その船の中で機関修理をしていた我が終達里出身の宋在吉（ソン・ジェギル）同志がウオツェ島の本島空襲から帰って行く飛行機の突然の攻撃を避けられず、残念ながら戦死をしたという悲報を聞くことになった。もともと宋在吉同志は技術者で有名だった。惜しい人材が不意の奇襲で消えてしまったので同志たちの悲痛は言葉では言い表せなかった。

同じ村の出身である梁元鐘（ヤン・ウォンジョン）同志はもとより網を投げて魚を捕まえるので有名だった。火薬を投げて魚を捕るのも上手だった。魚の群れと時間をうまく合わせて投げることによって一回で多くの魚を捕ることができた。これが認められて航空隊の佐藤中尉から抜擢され、航空隊全隊員の栄養補充のための漁業班長に任命された。陸上では佐藤中尉が司令官だが、海上では梁元鐘同志が司令官というニックネームで呼ばれるほど人気があった。海に出ると班員たちはてきぱきと話をよく聞いてくれた。気持ちを良くした梁元鐘同志が魚捕りだといえ、どの島でも思い通りに行き来できたので、皆がうらやましがった。

そんなある日のことだった。今日も例外なく朝早くから大発動艇に乗って魚が多くいるというニブン島に向かって走っていた。しかし、行く途中で不意に飛行機の爆音が聞こえてきた。予定どおりならいくら早くても30分は余裕があるのに、現れた偵察機がどうしたわけか、今日に限って以外に早く現れたので船に乗っていた皆は驚いた。

とにかく、島に上陸して防空壕に避難しなければならないのに、島までまだ100mほどは残っていた。さらに全速で島に向かって進んでいた船が当惑したあまり、コースを間違え、そのまま座礁して行きも戻りもできなくなってしまった。偵察機が遠くでこれを発見し、すぐ飛んできて機銃射撃をして

35 Nibun、ニブン島はウオツェ島の西北方向にある。

きた。一行は仕方がなく、急だったので海の中に急いで入り、水の中からしばらく出てこなかった。そして偵察機が機銃射撃を乱射し飛んで行ったあと、水の上に首を出して息をし、また水の中に入った。飛行機の機関銃射撃が一度通過し、また戻って来るまでは4、5秒の余裕があった。水の中に隠れていた人たちは、この時間を最大限に活用しなければならなかった。偵察機には飛行機の操縦士が操縦だけして射撃手が射撃だけを担当する2人用と操縦士ひとりで2つの役割をする1人用と2つの種類がある。前者の2人用の場合には前後もなく矢継ぎ早に打ちまくるのでとても隠れる余裕がないが、1人が2人の役割をする偵察機においては隠れるのが可能だった。幸いにもこの時の偵察機は1人用だったので、撃てば水の中に入り、いっとき過ぎれば再び水の上に出て息をした。偵察機はこのように何度も繰り返しながら攻撃をしたが、機銃射撃の威力を発揮することができずに諦め、来た道へと消えていった。

これこそ、九死に一生と言えざるをえなかった。帰ってきた皆はやれ生き返ったと歓呼の声をあげ、大喜びした。万一この時の偵察機が爆弾を積載し、高空から1回落とされたらそれまでだった。幸運にも爆弾はひとつも積載しない1人用の偵察機であり、一行は皆生き残ることができた。

食糧生産のための軍属たちの離島分散

食糧不足による困難はますますひどくなった。1944年10月から12月にかけては草も何もすべて無くなり、皆の智恵と努力を動員しても足りない状態になった。

しかし、生きていくには食べなければならない。どんな危険をおかしても他の島に行って椰子コブラを採ってきて延命するしかなかった。それで夜、引き潮で人が渡れるぐらいになったら、何人ずつか組をくんで漆黒の暗い夜を利用して行き来した。漆黒のような暗い夜でも、荒波がリーフという固い岩にぶつかって砕けると、白い水の泡ができ、こちらの島とあちらの島の間を明るくする白い線となってわかりやすい道案内となった。それで暗い夜にも行き来する人たちが多かったようだ。多くの人たちが行き来して椰子を採って食べたので延命することができた。そのため、近い島の椰子コブラは

完全に無くなってしまい、日々食べ損ねている。そのため食糧を求めるのは決死的、命を賭けるしかないという状況だった。事情がこうだから事実、軍当局も困っていた。離島に行って椰子を採ってくるのが暗黙のうちに行われていることを知らないわけがなかった。本島から3次の島まで椰子を見ることができない状態という言葉は聞いただけで、その実態を把握するのに十分だった。だから、この状態をそのまま放置することはできなくなり、軍当局は軍属たちの離島分散を計画した。

1945年1月から、本島では食べていくことが難しくなり、離島に分散した。農業班という名称で、日本人軍属と朝鮮人軍属とで班を編成し、いくつかの島に分散させた。熱心に仕事ができる者が選抜対象となった。

しかし、ここで除外された人も半分いた。選抜された人は離島に行くと椰子でも十分に食べることができるので空腹の心配がなく幸いだった。選拔されなかった人は選拔された人たちのように毎日のように開墾という重労働に苦しめられることはなくてよかった。そして、近い島に行って椰子を採って食べる人数も減ったので、その分苦労も減った。1週間か10日に1回ずつ夜にコブラを採ってきて、その時だけは満ち足りた気分で食べればいいので、そういう人たちは選拔されることを望まなかった。

中には離島分散を熱望しながらも、極度に体が衰弱して重労働に耐えられず、選抜隊に入れなかった同志たちもいて、気の毒だった。どちらにしても、農業班として選拔されていく人たちは熱心に仕事をし、生産された農産物を本島に送らなければならないという負担があった。私はいくら仕事がつらくても選拔された方がずっといいと思った。それで私はオリメジという本島の次に大きい島に行くことになった。

この島に行って2、3ヶ月たった時、細花里の趙弘瑞（チョ・ホンソ）同志をはじめとして高泰豪（コ・テホ）、夫南俊（ブ・ナムジュン）、呉斗金（オ・ドウグム）、そして坪垚里の高萬平（コ・マンピョン）、漢東里の高泰翊（コ・テイク）同志たちが椰子を採るためにオリメジ島に訪ねてきた。オリメジ島には私がいるので便宜を図ってくれると信じて訪ねてきた。そう言って協力を求めた。

私も久しぶりに会う同志たちなので、嬉しくもあり、当然協力しなければと思った。だが椰子を一度にどっさり採らせるのは、私一人の独断ではでき

ないので、日本人の班長に事情を言って許可をもらった。それで一人平均2枚ずつ持ってきた麻袋全部をいっばいにして採ってあげた。その時に本島に残っている同志たちの消息を尋ねると、その後、本島では飢え死にした人たちが何人かいるといった。その中には我が下道里のチョン奉洙同志と終達里の金奉奎同志がいるという悲しい話であった。

飢え死にするというのは何と悲惨なことか。考えただけでもすさまじい事だった。そして本島からオリメジに出発する直前に変な噂を聞いていて、まさかと半信半疑だった。それは食べるものがなくて人肉まで食べているという悪い噂だった。だからその後、本島の食糧事情は極限に達していたといっても過言ではなかった。実際、軍人、軍属関係なく毎日のように餓死者が1、2人は出ているという話だった。

丹精込めた食糧作物、集中攻撃で飛散

空襲は何日かに1回ずつ来るが、これはウオツゼ島本島に限ってであり、本島から離れた他の島は、行き来する道に、時々機銃射撃程度はあったが、爆撃はほとんどなかった。

昼はスコップとクワを持って出て、トウモロコシとかぼちゃなどを植える土地を開墾するために熱心に仕事をしたため、何日も休む暇がなかった。そのように全班員たちが努力した結果、播種してから3ヶ月以上になるころには、いつの間にかトウモロコシとかぼちゃが実ってもう収穫期に近づいていた。この頃になると、それを見ただけで豊かな気持ちになり、仕事をした甲斐があった。しかし、広い土地をあまりにも少ない人員で開墾するので、続けて播種するために土地の開墾のピッチをあげた。

ところが、オリメジへ来てから4ヶ月になるある日のことだった。平常時には偵察機が入ってきても遠いところから見てそのまま去っていくのだが、よりによって今日は偵察機がオリメジ島に入ってきて、それもとて低空を一番遅い速度で島の周囲を2回、回りながら詳しく偵察して行った。我々はみんな爆撃の事前偵察だと直感した。

しかし、今撮影したとしても爆撃するのに、1日、2日は余裕があるだろうと思った。ところが、その偵察機が行った後、何時間もたたないうちにいつ

もはウオツゼ島本島にきていた空襲が始まった。この時まで、班員たち皆は偵察機が去っていった後、この島にまた空襲が来る前に早く収穫して貯蔵してしまえばいいと思って、急いで収穫している時だった。

島の上空に入ってきた爆撃機は島の上空を一回りした後、島の南側の端から攻撃の方向を決め、まずその中の2機だけが島に向かって急降下しながら飛んできた。これは明らかに機関銃を乱射しながら攻撃してくるので、私も体を隠すことが先だった。距離の関係で、遠距離にある防空壕まで走っていく時間的余裕は到底なかったので、一番近くにある農業用水の水槽まで力の限り走った。私より遠いところにいた日本人2人も私の後について水槽の中に無事に入ってきた。水槽の中に入ってみると日本人2人と朝鮮人同志2人がいた。

この水槽の深さは1 m 50 cm、幅もまたそのくらいなので、直撃されれば問題だが、機銃射撃や破片などは心配ないようだった。しかし、機銃射撃を乱射しながら降りてくる飛行機もこの水槽の中に人が何人かいることを知っているだろうし、上空に浮かんでいる爆撃機は一層確実に確認しているだろう。だからこの水槽を中心に集中攻撃をしてくるのは明らかであり、皆は不安で震えずにはいらなかった。

さらに水槽の上には覆いがなかったので爆弾が落ちる大きな音は全く防げなかった。覆いがある防空壕に比べて爆音があまりにも大きくてびっくり仰天した。爆撃機50機余が必ず2機ずつ降下しながら爆弾を投下したために、その時間がどれほど長かったことか。その上、蓋がなく完全に露出された水槽の中なので、爆弾が炸裂する怪音に備えて両方の親指で鼓膜を力一杯さえぎって、口を大きく開けていた。

時間がどれだけ流れたのか、本当に長く感じた空襲は激しく降り注いだ機銃射撃を最後に完全に終わったようだった。飛行機が行った後、外に出てみると、地上は完全に荒地になっていた。すなわち今回使用した爆弾は地上に届くや否や爆発するいわゆる瞬発弾だったので地上の食糧作物は、すっかりなくなって、椰子の木もほとんど半分は胴体だけが残っていて、実に殺伐としていた。しかし、我々はこの日の爆撃で瞬発弾の威力を初めて知って驚いた。だが他の爆弾のようにある程度、土の中に入って爆発する爆弾であったら、水槽が崩れて生き残ることはなかっただろう。瞬発弾であったことを天に感

謝した。そしてものすごい土砂と火薬のごみが混じり、島全体がひどい暗雲につつまれた。そのため攻撃目標がつかめずに盲目的に投下したので、幸い直撃を免れたのではないかと思った。

これまで、頑張ってきた農業が完全に失敗となり、農業班という名目で残っている名分がなくなったので、ウオッセ島本島への引き上げ命令を待つしかなかった。

高光俊同志の不意の戦死

ある日、オリメジ海岸に魚を取るために遠征してきた我が済州島出身の高光俊（コ・グアンジュン）同志に会った。もともと性格は気さくではなかったが、さっぱりした性格で好感が持てた。そして久しぶりに彼に会えて本当に嬉しかった。彼は唯一に網を投げて魚を上手に捕まえることで有名であった。

「ここまで来る間に何回か網を投げてみたが、全く運が悪かった。けれどもこのオリメジだけはいくつかの島の中で一番魚が多いところなので、十分に捕って帰れるよ」と言いながら、自信満々に網を巻いたまま先頭に立って海に向かって速足で歩いて行った。そして一緒についてきた2人の同志たちに太陽がもうすぐ沈むので早くついて来いと催促した。

しかし、後をついてきた同志たちは特に急ぐこともなくそのままゆっくり歩いて行った。

ところが高光俊同志が砂浜を越えてちょうど海の中に入ろうとしたとき、平常時には来ない遅い時間に偵察機の爆音が聞こえてきた。ついてきていた漁獵班の2人は爆音を聞くや否やすぐに陸上に走って上がり、偵察機が来ているので早く来いと大声で叫んだ。しかし、すでに海の中に入った高同志は距離上、陸地に上がるのには遅いと思ったのか、あるいはわからなかったのか、そのまま海の深い方に行った。

この時、島の近く入ってきた偵察機はまず海に入った高同志を狙い、何回か回りながら集中攻撃を加え、ついには高空に上昇して爆弾まで落として、来た道に消えていった。偵察機が行った後に同志たちが走って行って、その付近一帯を徹底して探したが、ついに発見されず、そのまま帰ることになっ

た。はじめは偵察機の機銃射撃に対して水の中に入って隠れ、偵察機が行った後に再び水の上に首を出して息をし、また水の中に入るのを何回か繰り返した。その光景を手に汗を握って見守っていたが、後に投下された爆弾のせいで体も命もなくなったのではないかと思った。高同志こそ我が濟州全同志の柱だったのに、急に目の前から消えてしまって、本当に夢のようであり、悲痛きわまりないことであった。

人肉説の実相

我々に本島のウオッセ島から帰れという引き上げ命令が下され、オリメジに来てから5ヶ月して本島に帰った。ウオッセ島に帰ってみると、オリメジに行く前に出回っていた人肉説が一層拡大していた。25ミリ機関銃陣地という言葉が出回り、一方ではそれと隣接している第7砲隊員という言葉も流布されていた。そして我々濟州島出身の中では、これまで1人だけその対象として消えてしまったという。

ところが、その同志は他でもなく私がオリメジ島にいるとき、私を信じて椰子コブラを採りに来た細花里出身の同志だった。彼はオリメジ島から帰ってきた後、椰子コブラが1、2ヶ月は食べられるほど十分に確保されたので、魚を捕まえるための投げ用の雷管と交換してくると言って出たきり、二度と帰ってこなかったという。その当時そんな噂が回っていたから、そう想像せざるをえなかった。またそんな言葉が流布された後なので、一人では探しに出かけられないから確認することもできなかったという。いずれにせよ、我々同志こそ、その当時出回った流言の対象にならないことを切に願った。

一方、日本の軍人たちが人肉を食べたという説に対して徐相炯同志は、当時日本の軍人たちの話を聞き、第7砲隊員たちに間違いないと証言していた。

第7砲隊は平常時11人の隊員が配置されているが、これまで、戦死と食糧難による餓死者を除いた6名の隊員が残っているということだった。しかし、その事実を知った動機は他でもない。軍司令部の書類整理をしてみたら、作戦上最も重要な機密書類のひとつがなくなっているのがわかって、配下の砲隊長に直ちに調査せよとの命令が下された。しかし、数日がすぎてもその報告が入ってこないのので、やむを得ず捜査班を編成して現地確認調査をする

こととなった。その責任者を実務担当者である中村中尉に下命したという。中村中尉は命令通り班員たちを同行させて、第1砲隊から砲台別に確認調査を終え、第7砲隊まで来た。第7砲隊に入って全砲隊員に会ってみると、まず目に入ったのが隊員たちの健康状態であった。今まで調査してきたが、他の砲隊員は皆同様に目がくぼみ、やせてひどい栄養失調で、健康状態は話にならないぐらいだったが、この第7砲隊員だけは栄養失調はおろか、むしろ平常時よりも一層健康であったので内心驚いた。そういえば、隊員たちの中には何か感づかれないようにポケットから出しては、ガムでも噛むようにくちやくちやと食べているように見えた。

「隊員たちがこんなに元気なのは、本当に嬉しいことだ。ところが、隊員たちが健康になるのは何か特別な秘訣でもあるのか？その秘訣は何だ？それにさっきから隊員たちが口に入れておいしそうに噛んでいるのは何だ？そんなにおいしいものなら、どれ、わしもちよっと食べてみよう」。中村中尉がその者に手を突き出すとぐずぐずして困惑したようだった。その光景を見て、中村中尉はその者の手では時間がかかりそうなので、直接近くに行ってその者のポケットに手を入れ、つかんだものを出してみると切れ端の干し肉だった。「これは何の肉だ？」彼らに聞いても、みんなが当惑するような目つきで、お互いの顔を見合わせるだけで何の返事もなかった。

今、草粥を炊いて食べるのも難しい状況の中、豚肉、牛肉、もちろんクジラ肉もすべてが夢にも見られない実情なのに、それなら、人の肉、人肉の他にあるのか、と、中村中尉は直感した。「お前たち、これは人肉だろう？そうだろう？」中村中尉は小隊員たちを追及しながら大きな声でどなった。「どれ、これが、人肉でなかったらなんだ。言ってみろ」といったが、隊員たちは黙りこくったまま、だれひとり反論しなかった。「そうか、わかった。本当にお前たちは天罰を受けるヤツらだ。いくら食べるものがなくて飢え死にするほどだからと言って同僚を食べたというのか？」

中村中尉はその場で電話をかけて司令部に報告をし、返事を待った。すぐに司令部から命令が下った。同僚を食べたというので死刑執行、銃殺の他に何かあるかと。二度とこんなことが再発しないように死刑執行するほかないと言った。これを知った隊員たちは、すでに自分たちは死ぬ覚悟ができていたので関係がないが、砲隊長だけは全く知らないことなので、この人は助け

てくださいと頼んだ。砲隊長1人だけは除いた全員が本島から一番近い小さな島で銃殺され、この事件は終わったということだ。

私は本島に帰った後、当分の間は食べられるようにオリメジから持ってきた、麻袋2袋の椰子コブラで延命した。そのうちいくらかは本島に残って苦勞をしてきた同志たちに贈り物としてわけてやった。だが、それだけではいくら節約して食べたとしても1ヶ月を保つのが難しかった。それで仕方なくコブラを採るために、遠いオリメジ島を再び往復することにした。もちろん、本島の外に出ていくのは軍の監視が厳しいので、深夜を利用するほかなかった。オリメジ島までは小さい島、大きい島を7、8個越えなければならない。夜中に出て6、7時間ほどは歩き、帰るときは太陽が登る直前までに本島と一番近い島に近づき、潮時を合わせて渡って来なければならなかった。

私が初めてオリメジ島から帰ってくる2、3ヶ月前から偵察機は3、4日に一度ずつ現れ、爆撃機は1ヶ月に1度程度現れ、その回数が顕著に減ったということだった³⁶。

それでなのか、私が帰ってきた5月ごろからは、いつの間に植えて育ったのか、かぼちゃが収穫期になって、熟したものがたくさん目に入った。それを見て、もう本島でかぼちゃやトウモロコシだけ植えれば、飢え死にの心配はないようだった。さらに、5月末頃からは偵察機も1ヶ月に1回ぐらいで顕著に減ったので、大いに平和を取り戻したというわけだ。

米軍の投降懐柔工作

ところが、急にロッキード双発長距離偵察機が島の上空に現れた。偵察機は島の上空を旋回しながら、拡声器で大きく放送しはじめた。爆音の音だけでも、ものすごく騒々しいのに、その爆音の音より倍も大きい声が響き渡った。けたたましい爆音の音を押しえて天地が振動するほど、飛行機から演説する声のはっきりと聞こえてきた。当時にしては本当に驚いたし、また不思議なことであった。

「親愛なる朝鮮半島青年の皆さん、人類の平和を無視して甚だしい野心を

36 1945年3月頃から

もって侵略戦争を強行してきた日本は、すでにその天罰を受け、滅亡の一步直前であり、すべての物を失い、地獄の門前で、最後の審判だけを待っている実情です。日本が戦争を起し、平和を愛する人類をどれほど多く殺し、苦しめ、そして死なせていますか？しかし、戦争はすでに決着がつき、今や、残ったのは日本本土への上陸で、これは時間の問題です。今こそ、日本が降伏をしてこれ以上の犠牲者を出すのを止めるべき、重要な時です。皆さんも早く降伏して、これ以上の犠牲にならないように我々のもとに来てください。我々は十分な準備をして待っていますから、皆さんを大歓迎します。そして、朝鮮半島の青年の皆さんは、今や他国の支配から解放されて主権をもって自主独立国家を建設しなければならない極めて重大な責任を持っている方たちです。早くこちらに来て、まず救助を受けてください。我が米軍は皆さんの身边を最後まで守るだけでなく、戦争が終わるに当たって皆さんを故国に安全に送ることを固く約束します」と言った。

この放送がほとんど終わる頃、さらに他の島の外海側の海岸に救助船が入ってきて、同じ放送を繰り返した。今度はもっと大きく、島がカンカンと響くほどの放送をするのであった。そして皆さんの同志もすでに何人かここに来たといって、一人ひとり紹介をした。

そして、脱出に成功した人たちが出て、「脱出に成功した我々は安全なところで本当にいい待遇を受けながら、一日一日を無事に過ごしています。皆さんはいつまで草粥で辛うじて延命しながら犬死にをされるのですか？さあ、一日も早く悲劇を逃れて我々のもとに駆けつけてきてください。我々はいつでも皆さんを安全に迎える準備ができていますから、安心して駆けつけてきてください。必ずお待ちしています」と、時間と場所を教えてくれた。そして演説が終わった次には、郷愁を誘うアリラン、ノドゥルカンビョン〔川辺〕、ヤンサンド〔陽山道〕など、多くの民謡を流して拡声器で聞かせてくれた。このように長時間繰り返して脱出を待ち、何の成果もないと重装備した一隻の救助船から砲撃と機銃射撃で長時間にわたって猛攻撃をした後、姿を消した。そのように襲った時間は1時間以上で、実にイライラするぐらいだった。

このような攻撃の理由は、朝鮮人が脱出するのを日本人が嚴重に防いでいるからで、これを防がないように警告するためだと放送をした。これは約

2ヶ月続いた。その間に脱出を試みたが、日本軍の警備兵による殺害や阻止に合った者は1、2人ではなかった。そのため懐柔工作を始めて約2ヶ月後からは救助船も現れなかった。

その当時、朴潤瑞同志は救助船が往来し始めた時から2ヶ月の間、集団脱出の計画を立て、その日程を8月15日、夕方5時としたという。日本人を殺害して集団脱出しようとしたのだが、つい8月15日の停戦の知らせによって白紙になったということだ。

我が同志たちといえば、終始一貫して脱出を計画したが、脱出する途中に日本の警備兵によって殺害された人が何人もいたために、命を懸ける覚悟がないと断行は難しかった。もちろん、偶然に運よく脱出に成功した人もいた。彼らはそれこそ英雄称号を受けるほどその待遇がよかったという。もちろん運もよかったかもしれないが、勇敢な人だから可能だったのだろう。

あれほど恋した故郷へ

ある日、急に日本が降伏したというニュースが伝わってきた。そしてその次のニュースは、一度に10万人以上を殺傷できる原子爆弾が日本の広島と長崎に落とされ、ものすごい殺傷をもたらしたため、これ以上は持ちこたえられなくて降伏したということだった。

このように停戦ニュースが伝わると、我々は一日も早く故郷へ帰ろうと期待を膨らませた。しかし、待ち焦がれた船は来なくて、変な流言飛語だけが回っていた。日本軍に賦役した朝鮮人は故郷に送られずに直接ニューギニアに乗せていかれ、自分が入る穴を自分が掘ってその中に入った後で、大型ローラーで轢かれてしまうというのであった。実にとんでもない話であった。

なぜ、戦争を実行した張本人である日本人はそのまま放され、罪のない我々朝鮮人だけを殺そうとするのか、全く理解できないばかりか、激憤を禁じざるをえない。それはとんでもないことだと一蹴してしまった。しかし、船が来ないまま3ヶ月が経ち、その流言飛語が本当ではないかという恐怖と悔しい思いがした。しかし、その後、何もなく過ぎ、待っていた船は4ヶ月ぶりに入ってきた。

後でわかったことだが、戦線が広がっただけに船舶の配船の関係で遅く

なったということだった。そんなに長い間待っていた船が入ってきたので喜びも大きかった。帰還船は日昌丸³⁷という大きな船だった。我々は帰還船に乗り、帰る途中にポナペ³⁸によって帰還の同志を乗せた。この時、同志が持ってきた我が国の旗を初めてみて万感が迫る思いだった。

次にグアム島に立ち寄ったが、その広い港内には帰還船が一杯で入ることができず、仕方なく港の外に停泊した。ところで、ここに停泊している間、軍服だといって、我々に一人当たり数着ずつ配給してくれた。これこそ思いもしなかった大きな贈り物で、どの神さまのおかげかと大きな喜びで感謝を禁じえなかった。当時のお金で換算しても相当な額になるので、いっぺんに金持ちになったような気分だった。故郷に帰っても一生着ても残るだろうと思った。

しかし、それは単なる夢にすぎなかった。結局は釜山港に到着して船から降りるとき、これは軍服だからお前たちが着る服にはならないといって、出口を担当する米軍たちが取ってしまった。その代わりに日本軍の夏服一着、軍靴一足と最低級の毛布一枚が交換された。結局、グアム島から釜山まで運ぶ役割をただけだった。

グアム島を出発して釜山港に入ったのは1945年12月20日だった。はじめて釜山港を出発してから満3年6ヶ月ぶりであった。

おわりに

この記録は私の九死に一生に関する記録であるが、実際、私だけの記録なので、他の我が済州島出身の同志に関する記録が詳しく出てこないのは残念だ。しかし、済州島出身の同志58人は初めから終わりまで一つの島の中で一緒に生活し、最後まで生存した者は最後まで一緒に帰ってきたので、その環境においては差がない。

もう一度言えば、我が済州島出身者は南洋群島、マーシャル諸島のウオツゼ島という済州島の隣の牛島の3分の2ほどしかない小さな島で、日本軍

37 日昌丸：1939年三菱神戸造船所で作られた6,257トン級の船舶。戦争後、引き揚げ船として使用。

38 Ponape、ポナペ島：太平洋西部のキャロライン諸島東側にある火山島。ミクロネシア領で環礁に囲まれている。

1万人余りが守っている島の中で、はじめの1年間は徹底した強制労働に苦しめられ、残りの2年3ヶ月はそれこそ生き地獄のような空襲・爆撃と艦砲射撃の下でみな一緒に苦労をした。その苦労は誰が厳しくて誰が厳しくないということはなかった。ただ、差があったといえば、生と死の別があっただけだ。一緒に行ったときは58人だったが、帰りは犠牲になった同志を除いて26名と一緒に帰ってくる事ができた。生きて帰ってきた人たちは家族の再会の喜びと将来の希望があった。しかし、異国の見知らぬ土地で無残にも犠牲になった数多くの我が同志たちの魂については、戦争が終わって50年も過ぎた今まで、政府が慰霊祭を一度も執り行わなかったのは、本当に胸の痛いことだというほかない。

しかし、そんな中でもひとえに我が濟州島だけは、道政を担当する知事と市長、郡守の方々の格別な配慮で、去る1997年8月15日の光復節に全国で唯一、簡素ではあるが慰霊祭を行った。たとえ時期を逸したとしても、我が濟州島出身の犠牲者である同志たちはその恨の何分の1だけでも晴らせたと思う。ひどく難しい財政状況にもかかわらず、英霊を追慕する慰霊祭を挙行して下さった道知事と市長、郡守そして多くの機関の皆さまに再び心から感謝を捧げたい。なお、全道民の方々が積極的に協力して下さったことに対して感謝の気持ちを禁じざるをえない。

過去の歴史は未来に対する鏡だという。我が同志たちが経験した民族的な悲劇をとて少ない補償で適当に量そうとしている。大衆迎合とか、あるいは未来志向とかいう見かけのよい文句で終わらせ、恨の傷を覆ってしまい、正当な補償金請求さえも黙殺してしまった。本当に戦争犠牲の当事者はどうしろというのか…、あんなにも甚だしい犠牲を払っても無条件で耐えろというのか…。これこそ傷を負った人たちに鞭を打つものであり、却って一層、痛い胸に傷をつけることになる。

言葉にはその責任が必ず伴わなければならない。政府はどの程度の責任をもってこれを善処してくれるのか、それについてこれまで我が生存者たちは見極めてきた。しかし、多くの歳月が流れたが、政府は我が戦争犠牲者を利用し、その対策も取らずに韓日会談により受けとってきたお金を京釜高速道路や大企業の生産資機材などに使った。そうしたならば、それによる利益は我々に返さなければならないのに、それももちろんなく、日本に対しては心

から謝りさえしたら補償は望まないという高尚な言葉で、補償の道を自ら遮断する愚かなことをした。

日本人たちはどうか？彼らは謝罪して、いくらも経たないうちにいい加減なことを言い、必ずひっくり返してしまう状況だ。戦争被害の当事国の批判がいくら降り注いでも動こうともしないのが最も問題だ。日本は過度な野心の敢行で生じた戦死者を靖国神社に丁重に祀って慰霊し参拝するが、我が政府はそれとは正反対に終戦後、半世紀が過ぎても政府次元での慰霊祭さえ行なおうとしない。今も、異国の各地で黄泉を彷徨っている太平洋戦争の犠牲者は放置されたままだ。いつまで日本人の形式的な謝罪だけを信じて彼らを放っておくのか…。本当に残念な気持ちでいっぱいだ。

太平洋戦争が終わって、現地から生きて帰ってきた同僚により、遺骸となっても帰ってきた霊もあるが、まだ多くの犠牲者たちが〔遺骸もなく〕戦死確認者や未確認者として残っている。このような人たちの魂を慰労するのは、国家次元で行うことである。他のどのことよりも急ぐことだ。だから政府次元の合同慰霊祭を一日も早く催し、慰霊塔を建てて国民にも追悼の機会を与え、全国民の和合団結に昇華させなければならない。こうして再びこの地でこのような悲劇が繰り返されないように、国家愛と民族団結の教育の現場になるようにしなければならない。そして、これは過去に主権のない民族の悲しみの中で、日本が野心のため起こした太平洋戦争に巻き込まれ、無残にも犠牲になった多くの靈魂に対する、ひとえに最小限の鎮魂の道であると信じる。このことを何度も強調して、政府が実行することを心から要望し、この拙筆を終わろうと思う。

1999年8月

参考 当時の濟州島出身同志名簿

- 終達里：宋在吉、梁元鐘、権恒培、金鳳秋（奉秋）、尹ギバン、漢錫鐘、金奉奎
- 下道里：高スンゴム、イム・ドギン、チョン奉洙、金武吉、金智用、李共石
- 細花里：趙弘瑞、チョ・ガビユン、呉斗金、高泰豪、夫南俊
- 上道里：チョン斗玉（創氏：豊村）、高デシク、呉ムニョン、
- 坪岱里：朴潤瑞、高萬平
- 漢東里：高泰翊
- 松堂里：金贊祐
- 杏源里：朴泳根、金春培
- 月汀里：金熙奎
- 北村里：李ドウファン、黄本（創氏）
- 咸德里：金性信、星本（創氏）
- 新村里：愼公範
- 禾北洞：夫在奎（創氏：夫藤）
- 濟州市：徐相炯、高光俊、申庠訓（創氏：平山）、金成宝（創氏：金城）
- 涯月里：金容植、高齊禧、姜定一
- 翰林邑：蔡厚秉、金洙鳳、高泰化、張（創氏：玉山）、李昌福
- 造水里：李日和
- 楮旨里：金成宝、ジャ・スンギユ
- 大静邑：姜信国、黄河善、金昌洙、李大珍、黄德三、高原（創氏）
- 安德面：梁昇弼
- 加波里：姜尚興、姜公三（創氏：重山）
- 大静　：南



2

南方紀行

—タイ捕虜収容所—

石相琬

この手記について / 軍属志願の背景 / 釜山訓練所入隊 / 南方行き航路 / タイ捕虜収容所 / 収容所勤務開始 / 第4分所への転属 / 第4分所第1分遣所での生活 / 第3分遣所転属：分駐所責任者として捕虜との関係づくり / 収容所勤務中の逸話 / ジングル生活後の収容所生活 / カンチャナブリの慰安所 / 連合軍空襲以後の沈滞した雰囲気 / 8・15終戦 / 在タイ高麗人会組織 / 解放後、帰国できずにタイで生活 / 帰郷の旅

石相琬（ソク・サンユン） 創氏名：石原相琬

- 1920.11.16. 慶南山清郡山清邑生まれ
- 1942.6. 陸軍軍属捕虜監視員として動員され、釜山西面の野口部隊で訓練
- 1942.8. タイ捕虜収容所、陸軍傭人捕虜監視員
- 1945.8.15. 日本敗戦後、戦犯裁判などに巻き込まれてタイ残留
- 1946.6.15. 解放され、故郷に帰国

この手記について

石相琬翁は1942年22歳で日帝の捕虜監視員（陸軍軍属）として強制動員され、タイで捕虜監視員生活を送る際に経験したことをメモした。その後、帰国し、韓国で1991年頃に随筆形式の文として作成した。多くの時間が経過してからの作成であったため、苦労した内容よりも当時の体験の中で記憶に残るエピソードを中心に記述している。

この内容は、当時の時代状況を理解するための十分な助けとなり、軍属の捕虜監視員として強制動員された3,000人余の動員全般に関する重要な資料として活用できる。登場する人物は日帝により強制動員され、タイ捕虜収容所で捕虜監視員生活をした同僚たちである。（国家記録院所蔵資料）

著者は自身をはじめ、同じ年代の朝鮮人青年たちが植民地支配下で強制動員されて経験したことを一般大衆と子孫に知らせることで、再び国を強奪されるという愚かなことのないようにしたいという切ない願いで文を残したのであろう。

軍属志願の背景

1942年に2月、私は満洲で母の危篤の急報を受けて急遽帰郷した。母の持病である胸の病状は、私が帰郷した時には危険な状態から次第に好転し、生活の状況も少しずつよくなっていた。しかし、私をととても愛しておられたおじいさんが前の年に亡くなられ、両親は喪中であった。

私は特にすることもなく、友達に会って本を読むなど、退屈な日々を送っていた。5月初めに友人の呉承煥（オ・スンファン）君の誘いと父の勧めに勝てず、山清郡の施行する面吏員の選考試験に応募した。選考試験では合格者発表もなく、いつ採用されるのかもわからない。私は内心、採用されるのを望んでいなかった。遠くどこかへ逃げたくて、その機会だけを狙っていた。

時は戦時だ。日本軍がハワイの真珠湾を攻撃してからすでに1年6ヶ月の月日が流れていた。これまで戦勢は日本軍が全アジアを席卷する勢いで、遠くベトナム、インドシナ半島を経てマレー半島を破竹の勢いで進撃し、シンガポールを陥落、占領して、英国軍5万の大軍を捕虜にして、いつの間にかインドネシア戦線からニューギニア戦線まで進撃中という勝利の戦報が飛んできた。このように戦勢が急進展して戦線が拡大されたら、一番先に大量に求められるのが人力だ。兵力と労働力が足りない。

日帝があれほど虐待して見下した我が民族も、今や内鮮一体だ、皇国臣民だと騒ぎ立てて、使い道があるようになったのだ。朝鮮総督の南次郎は内鮮一体を叫びながら志願兵を選び、報国隊という名の労務者を捕まえるのに血眼だった。我が故郷でも炭鉱だ、製鉄所だ、軍需施設工事だ、等々、毎日のように報国隊として引っ張られて行った。志願兵制度は数年前、支那事変〔日中戦争〕初期から始まった。全羅北道出身の李仁錫（イ・インソク）上等兵を前に立たせて「李仁錫上等兵は中支那戦線で輝かしい功績をたて、軍人としての最高の栄誉である武功金鷲勲章を受けた」など、募集宣伝に熱を上げ、ほぼ強圧的な方法で適齢期の青年たちを引っ張って行った。

私はこんな状況でどのように身を処すべきか？両親は郡で面吏員になるのを望んだが、私の気持ちは違った。満洲で軍属生活を経験したこともあり、志願兵や報国隊ではなく、軍属になるのが現実的に可能だろうと思った。それで、満洲か日本に行くことを考えている頃に…「これだ！この時だ！」。

1942年5月中旬、「南方派遣俘虜³⁹監視員として半島青年3,000人を募集する」という要旨の新聞報道をみて、私は内心、快哉を連発した。私はいつも

39 俘虜は捕虜の意。南方派遣捕虜監視員の動員は1941年12月8日、真珠湾攻撃とマレー上陸を筆頭にマニラ（1942年1月）とシンガポール（2月）、ジャワ（3月）、フィリピン（5月）の占領がその背景。この時期、日本軍の捕虜となった連合国兵士は26万1,000人余りと推定。日本軍部は捕虜管理の必要から、1941年12月、陸軍省に捕虜情報局を設置。捕虜監視員は台湾人と朝鮮人を対象に充当。朝鮮での捕虜監視員募集は1942年5月から開始。

交流している友達に会って一緒に行こうと誘った。ほとんどが賛成した。そして数日が過ぎた。山清郡でも25人の選抜割当があった。郡庁の掲示板では、6月3日、10時に山清公立尋常小学校で選抜試験があるのでその前までに志願者は願書を持って出頭、応試するという要旨だった。

6月3日、ついに試験の日だ。普段、思いを同じにしていた近所に住んでいる友達、黄潤基（ファン・ユンギ）⁴⁰、呉聖淑（オ・ソンスク）⁴¹、金玉天（キム・オクチョン）⁴²と一緒に試験場である母校の校門をくぐった。校庭にはすでに数十人の志願者と思える青年たちがひしめいていた。同窓の友達も何人が見えた。時間が近づくとほぼ100人の志願者が集まった。この時、郡から試験官が到着した。他でもない前日の面吏員の試験官だった日本人の郡の内務課長と面行政係主任、面行政係役員である同級生申澹均（シン・ジュンギョン）など3人であった。

課長はすぐに試験場である教室に入って、主任と申君は我々志願者を見回して何か互いに耳打ちをしあった。

申君が大声で「みんな筆記具だけもって試験場に入ってください」と叫んだ。そうして私に近づいて握手をして「おい、石君、主任がちょっと会いたいわって」。私は「何の用だろう」と思いながら、主任の前に行き挨拶をした。主任は風采のよい穏やかそうな紳士であった。「あ、石君、お前は私が助手として雇うことにした。すぐ、郡守の発令が出るから、家に帰って待ってなさい」。

私はその言葉を聞いて頭を打たれたような衝撃を感じた。「主任、私は郡に入る気はありません。南方へ行けるようにお助けください」。私は泣き出しそうな声で言った。申君は隣でにっこり笑って立っていた。主任も笑いながら、「石君、もう一度よく考えてみなさい、郡に入る方が、将来が保証される、その方がいいから」といい、教室に入った。主任の後ろについていく申君を捕まえて私は「澹均よ、助けてくれ、お願いだ」。「そうだな、お前の気持ちは僕が言ってやるから」。そして、私も申君について試験場に入って行った。

40 黄潤基：吉原潤基、1921年2月29日生まれ、慶南山清郡山清面池里58

41 呉聖淑：光原宗宏、1921年4月18日生まれ、慶南山清郡山清面塞洞2

42 金玉天：金本得性（金本〇〇）、1921年5月20日生まれ、慶南山清郡矢川面院里271

試験では九ツ切更紙を1枚ずつ配り、試験官である内務課長が黒板に、「大東亜戦争と半島青年の責務」と書いて、この題で作文して出せといった。私は、学科試験は特に難しいことはなく自信があったが、午後を実施する身体検査が心配であった。みんな壮健な体格だ。学科試験は作文だけで1時間ほど終わった。家に帰って昼食を食べて、午後1時に身体検査を受けるのだが、私は昼食を食べる気分も出ず、嫌な気分で運動場の桜の木の陰にしゃがみこんで瞑想にふけていた。時間になって身体検査場である郡庁前の公医、李駟宰（イ・イルジェ）医院に行った。裸になった受験者たちを見ると、皆が私よりよい体格に見えた。

「僕はなぜ矮小な体格で生まれたのか。うらやましい」。身体検査は午後3時頃に終わった。約1時間後に合格者発表がされた。私は急いで申君に近づいて聞いた。「僕は合格したか?」。申君はまたニコリと笑った。私の名前は10人余りの呼名後に呼ばれた。邑の出身はみんな合格し、各面から来た人たちは大部分が落ちた。神農⁴³郡守の一場の演説があり、通知があるまで家で待機しているという内務課長の指示を受けて、午後6時頃に家に帰った。

石相玠の留守名簿

私は両親にいつも親不孝ばかりしている子どもだ。合格したとどうしとも言えなかった。そのうえ、郡雇員として発令されそうになった話は私だけの秘密だ。それで「ただいま」と挨拶だけした。母にどうなったかと聞かれた時、私が返事をしないでじもじしていると、一緒についてきた黄君が我々はみんな合格したと答えてくれた。夕食時になったが、私は黄君の家に行かねばならなかった。〔黄君の〕ご両親を説得して安心してもらう必要があったので、徳村の黄君の家まで行った。

43 神農、姜の創氏名

黄君は昨年冬、日本から帰ってきて、釜山の娘と結婚した新婚で、私と一緒にいこうと頼んだので、ご両親や新婦に申し訳なかった。ご両親が数万里離れた他国の戦争に行かせたいだろうか。こんな事情で私の説得が必要で、黄君もそうしてくれることをそれとなく願っていた。黄君のご両親といろいろと国内外の情勢について、我々の身の振り方など多くの話をした。そして、帰ってきた私は連日、南方と一緒にいく友達と一緒に遊び、1人でいるときは実った麦を刈って脱穀し、両親の手伝いもした。

いつの間にか6月6日だ。「6月8日、午前10時出発」という通知が来た。出発当日、私は簡単な普段着に洗面用具と筆記用具だけを洗面バッグにいれ、両親に丁寧に別れの挨拶をして、集合場所の郡庁の前に行った。我々を引率する人は社会課に勤務する同窓の崔大鉉（チェ・デヒョン）君であった。郡庁の職員と見送りに来た数十名の家族と涙の別れをし、我々は貨物トラックに乗せられて午前10時に晋州に向かって出発した。

晋州駅前前の旅館に到着した我々は昼食を食べて、釜山行きの汽車の時間を待ちながら、雑談をしたり、歌を歌ったり物騒がしい雰囲気の中にいたが、引率者の崔君が現れ、「出発延期！」と叫んだ。入隊日が6月15日に延期されたので、各自家に帰って6月14日にまた会おうという。我々は「軍で帰る車を出してくれるべきだ」と不平を言いながら、三々五々バスやトラックで帰ってきた。その後、待ち続ける退屈な数日を過ごして…。

釜山訓練所入隊

6月14日午後、前のように郡庁の前でトラックに乗って出発した我々25人は同窓の崔大鉉君の引率下に晋州まで来た。駅前のある食堂で夕食をすませ、夜間列車で夜9時頃に駅を出発した。途中、各郡の駅からは我々と一緒に行くと思われる人たちが我らの汽車に乗るところをみた。

釜山鎮駅に到着すると、時間は6月15日の早朝6時ごろだった。駅前の広場は全国の各郡から集まってきた我々のような志願者で一杯になった。7時頃に、部隊からきたおにぎりをひとつもらって食べた。部隊から来た引率する軍人について、数百人が二列縦隊で行進して西面にある部隊に向かって出

発した。野口部隊⁴⁴の正門に入ったのは午前10時だった。広い訓練所、練兵場には我々より先に入所したと思われる訓練生の訓練を受ける号令の声があちこちで騒々しく聞こえてきた。今日入所する人も千名近い数だ。我々は、本部前広場で人員点呼や名簿対照など一連の手続きを終えた。私が配属されたのは、ろ隊第2小隊2分隊だった。

ここでしばらく野口部隊の編成状況を調べた。この訓練所の開設目的は半島青年を募集して捕虜収容所で連合軍捕虜を監視する軍属要員を教育、訓練する目的である。所長の野口陸軍大佐隷下で大きく「い、ろ、は」の3つの隊に分け、大隊長や大隊本部はなく中隊もない。小隊だけが組織され、訓練所本部直轄だ。1個小隊は90名ずつで、3個の分隊があり、1個の分隊は30名である。小隊長は尉官級の将校で、分隊長は下士官⁴⁵であり、分隊助手には兵長や上等兵2名が付く。我がろ隊は9個小隊で訓練生が800名余りいた。

我が2小隊の小隊長は服部浩少尉で東京帝大法学部出身、故郷大阪で父親の事業を助けながら、警防団長⁴⁶をしている中、召集されてきた。とても従順な紳士で軍人らしくなかった。2分隊長の渡邊政男伍長は威厳を示しているが、人情の厚い面もある頭の切れる人で、助手の工藤上等兵、山岡上等兵もみんな好人物であった。他の助手は軍隊の気合だといって殴打し、虐めるのを見ると、私はよい上官に会い、幸いだと思った。

兵舎は木造建築で木の板で床を敷いた縁甲板に、アシで編んだ粗末なゴザが敷かれ、1棟に3個小隊、300名ずつ収容するようになっていた。食事は部隊の共同炊事場で各小隊別にもらって食べるのだが、私のような小食者に不満はなかった。我々は特殊部隊だ。彼らのように我々はこれから世界一流国家の捕虜を相手にする、特殊任務にあたる担い手だ。したがって我々を国内の労務者程度には扱わないという政略的な待遇とみることもできる。

1942年6月15日午後1時ごろから私は現役新兵と同じ軍事訓練を受けた。固い木の板の床に毛布2枚、古びた軍服と足にあわない古い軍靴、戦闘略帽などを身につけて軍内務班生活で各個動作、密集部隊、歩兵戦闘訓練、哨兵勤務と諸規則の暗唱、その他精神訓話など、すべての軍事教育訓練を短期

44 訓練所

45 下士官、伍長軍曹

46 警防団：戦時体制下、民間の消防や防災、防空のために組織された団体。1939（昭和14）年結成・1947年廃止。

2ヶ月で履修しなければならなかった。

その年の夏は今までにない大干ばつが続いていた。5月から雨一粒も降らない干ばつが8月下旬まで続いているのだ。釜山郊外の田畑のすべての農作物が枯れている。苗床の苗は取水もできないまま黄色く枯れて火をつければすぐにでも燃えてしまいそうだ。我々はこの猛暑の中で汗と土埃にまみれた体と軍服を水道水不足で思い通りに洗って着ることもできない中で、2ヶ月余の厳しい訓練をがまんしながら受けた。訓練中の報酬は初任給が30円⁴⁷、2ヶ月目には2円上がった。分隊員30名のうち、訓練成績の良い2名には4円を、次の8名には2円を上げてくれた。毎日、本人には小遣いを使えとって5円を支給してくれ、残りは留守宅送金とって実家に送金してくれた。

我々の村出身25名はそれぞれ分散配置され、私の小隊には閔泳三（ミン・ヨンサム）、閔廷植（ミン・ジョンシク）、呉聖淑（オ・ソンスク）だけだった。その時私と一緒に親交があった戦友は忠南公州の尹大重（ユン・テジュン）⁴⁸、釜山の白相天（ペク・サンチョン）⁴⁹、大邱の金禹淳（キム・ウスン）⁵⁰、忠北の柳雄烈（リュ・ウニョル、柳井）、大邱の芳山勉（パン・サンミョン）などが記憶に新しい。

たまに訓練が休みの日は午前洗濯を急いで終わらせて、午後には懐かしかった郷友に会うのに忙しい。黄潤基と一緒に酒保（部隊の売店）に走って行って日用品も買い、20銭でぜんざい一杯をやっと買って食べながら、疲れをとる。

南方行き航路

ついに出発だ。8月20日、午後我々は2ヶ月間住んでいた兵舎の内外をきれいに掃除し、新しい軍服が支給された。浮かれた気持ちで一晩を送り、新しい軍服と新しい軍靴に換えて、出発命令を待った。昼食は豚肉の特別食だった。午後4時頃、我々、ろ隊9個小隊800名余は本部前広場に集まり、

47 当時の面書記の給料よりは少し良い額

48 尹大重：靖郷憲井、1922年2月25日生まれ、忠南公州郡利仁面舟尾里

49 白相天：白石嘉男、1922年9月9日生まれ、慶南釜山府

50 金禹淳：金本禹淳、1920年11月29日生まれ、慶北大邱府鳳山町

最後に部隊長である野口大佐の送別訓示を受け、徒歩行軍で正門を出た。釜山港中央埠頭に着くと午後7時が過ぎていた。埠頭の広場でおにぎりの夕食を食べて輸送船宏山丸⁵¹に乗ると、いつの間にか太陽は大新洞の裏山に沈んで暗くなってきた。我々は故郷の山河との別れが心残りで、甲板の上から釜山市を眺めながらざわついていたら、輸送指揮官の大橋大尉が現れて、大声でみんな船倉に入れといった。

すでに時間は夜9時だ。やがて出帆船が鳴らす3回の汽笛と共に、宏山丸は徐々に船頭を東に回した。いったい私たちはどこへ行くのか…、分隊長に聞いても「わしも知らん、聞いてくるな」という。「ジャワ、フィリピン、タイの3つの内のどこかだろう」。同僚たちは雑談したり戯れあったりして騒いでいたが、今日に限って幹部たちは何もいわず、寛大だった。

2時間ほど経っただろうか。船が揺れ始めた。玄界灘のようだ。騒がしく甲板を上り下りしていた戦友たちは、今は静かになった。みんな船倉の自分の席で横になった。私は船酔いが嫌で皆より前に席で寝ていた。眠りたいと思ったが、船の揺れが段々ひどくなり、寝ていられなかった。大部分の人は眠りに入ったようだ。何人かの人には船酔いに勝てず、嘔吐する人もいた。それを見て私も吐きそうだった。一生懸命我慢して死んだように横になっていたら、波はだんだん静かになっていくようだった。波が静まると船の揺れもなくなるだろう…、私は知らない間に眠っていた。

22日朝4時頃、眠りから覚めた人たちが甲板に上がろうとしたが、出るなという厳命だ。船は九州門司港に寄港したのだ。我々はここで2泊3日宿泊したのだが、昼は甲板に出られず、夜間にだけ出て門司港の電気の光を見るだけだった。防謀上の注意命令には私たちも従うしかない…。22日夜間には我々の部屋の向かいの空いたところに日本人高級文官（軍政官や技術官とみられる）たち数十人が乗った。みんな40歳を越えているように見えた。彼らと我々は同じ寝室で同じ食事だ。お互いに知りたいこともあるはずだが、一切話をしようとしなかった。我々はいつも騒がしいので、彼らは我々をうるさい存在として思うようで、いつも大様で、自分たちだけでひそひそと談笑していた。

51 宏山丸（4,500トン）：山本汽船貨物船、三菱神戸船所で1935年3月16日竣工、大阪商船、山下汽船が運用するなかで陸軍が徴用。

8月24日未明に我々を乗せた宏山丸は門司港を出港した。これから我々は九州西岸をすぎて沖縄列島を越え、台湾を横にみて遠く南シナ海を渡って、未知の南方の国、新天地へ行き自分の夢を広げることになるだろう。

24日の朝が開けた。これより甲板に出て、空気もたくさん吸って軽い運動をして体をほぐせという指示だ。我々は甲板に出た。茫々たる大海だ。あ！我々の船だけではない。周りを見ると、大きな船が全部で10隻になる。門司港で停泊していた3日のあいだに大船団が組織されていたのだ。そこに駆逐艦1隻が船団の周囲をぐるぐるまわりながら援護しており、空には偵察機が警戒飛行をしている。私は食事の時間を除き、いつも甲板に出て船団の航海する景観を眺めていた。ところが不思議なことに船は南進をしないで西進しているようだった。いや、やっぱり船は西進に間違いなかった。北側に大きな島が現れた。この島が済州島だという。

船はどんどん西進して中国の上海の前海から大陸沿岸に沿って南進し、27日深夜に台湾の馬公軍港に寄港、停泊した。ここでまた2泊3日間止まり、8月29日深夜に出港、南進を続けた。この時、私は連日の航海で船の食事⁵²が口に合わず、嘔吐を起し、体の具合がよくなかった。

9月1日、今まで夜間の不寝番以外の勤務はなかったが、急に衛兵勤務をすることになった。私は初日に当番になって、第1歩哨として上甲板操舵室横にいることになった。3時間立哨、3時間休みという勤務方式だ。始め1時間は波が荒くなく、茫々大海の上に行く我々の船団の航進の姿をみながら、大気を吸って歩哨勤務もできるものと思った。だが突然大きな波が押し寄せてくるのだ。ああ、ここが荒波で有名な南シナ海だ。もはや、不動の姿勢で威厳を保つことはできない。体を支えるのが難しいが、無理に支えていると頭が痛くなり、吐き気さえしてくるようだ。船員たちは私の態度をみて苦笑し、座って勤務しろといった。

この時、日直の将校である3小隊長白杵少尉が巡察してきた。私は勇気を出して、「歩哨勤務中、異常なし」と報告した。白杵少尉は私の顔が蒼白なのを見て「続いて立てるか？」と聞いた。この時、私はすぐにも吐きそうで、手で口を押さえながら振り返った。彼は「いけないね。降りて休め」と言って行った。私は少し吐いて、ふらふらと降り、横たわってしまった。大きな

52 黄色いカボチャ汁あるいは千切り大根、大根汁に半分混ぜた麦飯、そしてたくわんなど。

波は3日間続いた。船倉に寝ていると、ちょうどブランコに乗っている気分だ。私は何も食べられず寝てばかりいた。私だけではない。船酔いにかかった人は我が部屋だけでも10人だ。

しかし、9月4日になると波は徐々に静まって船団はベトナムの北部海域に侵入した。その時から食事をし、戦友たちと雑談もでき、将棋、囲碁などをして数日を過ごした。9月8日、サイゴン入口の大河口の両岸には鮮緑の樹木が茂っていて、その中のあちこちにある白い洋館が印象的であった。おそらくフランス人が住んでいた別荘だろう。

ああ、早く上陸したくてうずうずするという気持ち。ここから数時間を大河に従って西進すると東洋の小パリで名高い美港サイゴンに着いた。やっと我々は18日間の退屈な船中生活から解放され、再び懐かしい大地を踏むことになった。

宏山丸から下船した我々は埠頭広場で各隊別に整列、人員点検を終えて休息をとった後、徒歩行軍で宿営地に行った。我々はこの時初めてこれからタイの捕虜収容所に行くのだとわかった。

サイゴン市街を通り抜けて北に行く途中、市街の建物に見とれている間に午後6時頃になっただろうか。急にわか雨が水を撒くように降ってきた。この雨が熱帯地方のいわゆるスコールなのだ。皆は濡れねずみのようになってしまった。雨は30分ほどでやんだ。

我々は1時間ほどの行軍で市郊外のある兵站宿営地に到着した。やっと雨露を避けることのできる畜舎のような粗末な施設だった。すなわち路地に藁を敷いた仕切りもない施設だった。

我々は濡れた軍服を脱いで絞ってから干し、皆フンドシの裸になった。それでも我々は異国の動静が楽しかった。皆が騒いでいるところに果物の補給があった。各人にバナナ1房、パイナップル1個ずつだ。皆子どものように喜んだ。そしてすぐに食事が来た。夕食が終わると、服部小隊長が我々を集合させて訓示をした。

その要旨は「我々はタイに行く。そこでタイの捕虜収容所勤務に当たる。我々の軍が特に注意する事項は生水を飲まないこと、蚊に刺されないように注意して、現地の住民に対するときは、男は盗賊、女は売春婦と思って常に警戒すること。大国民の矜持をもって行動すること」などだった。



朝鮮出身捕虜監視員の配置経路 (出所：ハンギョレ 21)

次の日、乾いた軍服を着た我々は引率将校についてサイゴン市内を観光し、プールで沐浴した。我々はサイゴンで3泊して休憩をとり、9月11日、埠頭に出て300トン級の木の船3隻に分乗してカンボジアの首都プノンペンに向かってメコン川を上った。船員たちは現地人に見え、宰領兵⁵³(監督兵)として日本軍人兵士10名余がいた。この時について、特に記憶に残っているのはメコン川の豊満な黄黒色の水が悠々と流れる景色であり、夜間であれば兩岸の樹木に多くの蛍火が群がったような夜光樹が光る景色だ。

9月14日に我々はプノンペンに到着し、埠頭の近くの大きな洋館の建物に投宿した。我々は大家族なのでいつも床で寝食をするのだが、学校の建物のように見えるこの家は部屋ごとの天井に大型の扇風機が設置されており、水道水もよく出る良い施設だった。ここで我々はまた3泊4日を過ごし、首都らしい美しい市街を観光することができた。特にカンボジアの王宮と王宮内にある宝物殿に所蔵された歴代王と王妃のものだという数多くの宝飾品を見て感嘆するほかなかった。

9月17日、我々はプノンペン駅から貨物列車に乗って村落、田野、樹木、山野などを眺めながら、国境を越えてタイに入った。夜間だったので何も見るができなかった。我々がタイのバンコクに到着したのは9月19日の午前だった。駅で下車、徒歩で臨時宿所である埠頭倉庫で旅装を解いた。ここで我々はまた4日休み、タイ捕虜収容所長陸軍少佐佐々誠⁵⁴の兵を受けて、9月22日夜間列車で初任地であるノンブラドック⁵⁵に到着して我が服部小隊の全隊員は収容所第1分所に配置された。

タイ捕虜収容所

捕虜は国際法と協約のために戦争の危険がない安全地帯に収容し、彼らの身に迫害を受けることがなく、人道的に処遇し管理して、戦争が終わったら、本国に返さなければならない。しかし、日本は国際法と国際信議を捨てて、

53 宰領とは、多くの人を取り締まり監督すること、宰領兵はそのような役割を引き受けた兵士。

54 1942～1943年の間、タイ捕虜収容所の所長を務める。戦争が終わった後、戦犯で絞首刑に処される。執筆者は「閣下として尊称する」と説明。

55 Nonpladuk、タイのバンコク近く、泰緬鉄道のタイ側の出発地。

初めからこれに違反し、戦争遂行の道具として捕虜を危険な重労働の現場に投入して酷使させた。それにより継戦をたくらみ、いわゆる大東亜共栄圏を標榜しながら、全アジアの支配を血眼になって画策した。

したがってタイ⁵⁶にその収容所を設置した理由は泰緬連接鉄道⁵⁷を建設することである。その輸送路の目的はビルマ、東パキスタン、インドまで往復して当地域を支配することだ。そうみると重要で至急を要する工事である。それをあらかじめ計画していたとは見難く、戦争の拡大により好戦的な軍閥が求めた産物のようだ。ことわざの「餅を見たついでに祭りを行う」というように、好機を逃さずに活用できる上質の労働力が生まれたのだ。すなわちシンガポールでの捕虜英国軍5万の兵力がそれだ。このすべての計画を急進させたからタイ捕虜収容所が設置されたのだろう。

収容所の編成を見ると、本所、5つの分所⁵⁸、分遣所⁵⁹になっていて、鉄道建設部隊には第3野戦鉄道隊⁶⁰、第4特設鉄道隊⁶¹や若干の支援部隊などがあり、その労務要求に従って捕虜を出役させるのだ。

収容所勤務開始

我が第1分所、(所長知田少尉〔少佐〕)の当面の主な任務は、シンガポールから鉄道で護送されてきた捕虜⁶²を臨時に収容して最後の兵站基地であるカンチャナブリ⁶³まで護送することだった⁶⁴。我が監視要員が行く前には日本

56 当時、日泰攻守同盟国

57 タイのバンゴク市のバーンポン (Bampong, Banpong) 交差路からビルマ国のラングーンを結ぶ鉄道。日本軍の公式名称は泰緬連接鉄道。英語名は Thai-Burma Railway。英語圏では死の鉄道 (Death Railway) として知られている。

58 大隊級、第1、2、3、4、5分所

59 小隊または中隊級

60 師団または旅団級。〔南方の鉄道司令部として第3野戦鉄道司令部があり、仏印、タイ、マラヤなどの鉄道部隊を指揮。〕

61 第4特設鉄道隊〔第2鉄道監部所属部隊、第2鉄道監部は泰緬鉄道建設のための組織であり、鉄道第5連隊、鉄道第9連隊、第2鉄道材料廠、第4特設鉄道隊などを編成して工事〕

62 以下 PW

63 Kanchanabuh、バンゴクの西の都市。泰緬鉄道建設のキャンプがあったところの一つ。

64 当初、収容所の本所は約3km離れたバンゴクに位置、すぐにカンチャナブリに移動した。

の現役軍人が臨時に収容所の監視をしていた。先発で来たPW⁶⁵ 収容者は約500名だった。

9月23日に我々は熱帯地方で必要な被服類と英国軍から分捕った10連発の英式小銃（長銃）、大剣と実弾10発ずつが支給された。我が宿舎から約10m離れた所にPW宿舎が2棟あった。当時我ら捕虜監視軍属は100名余と記憶している。

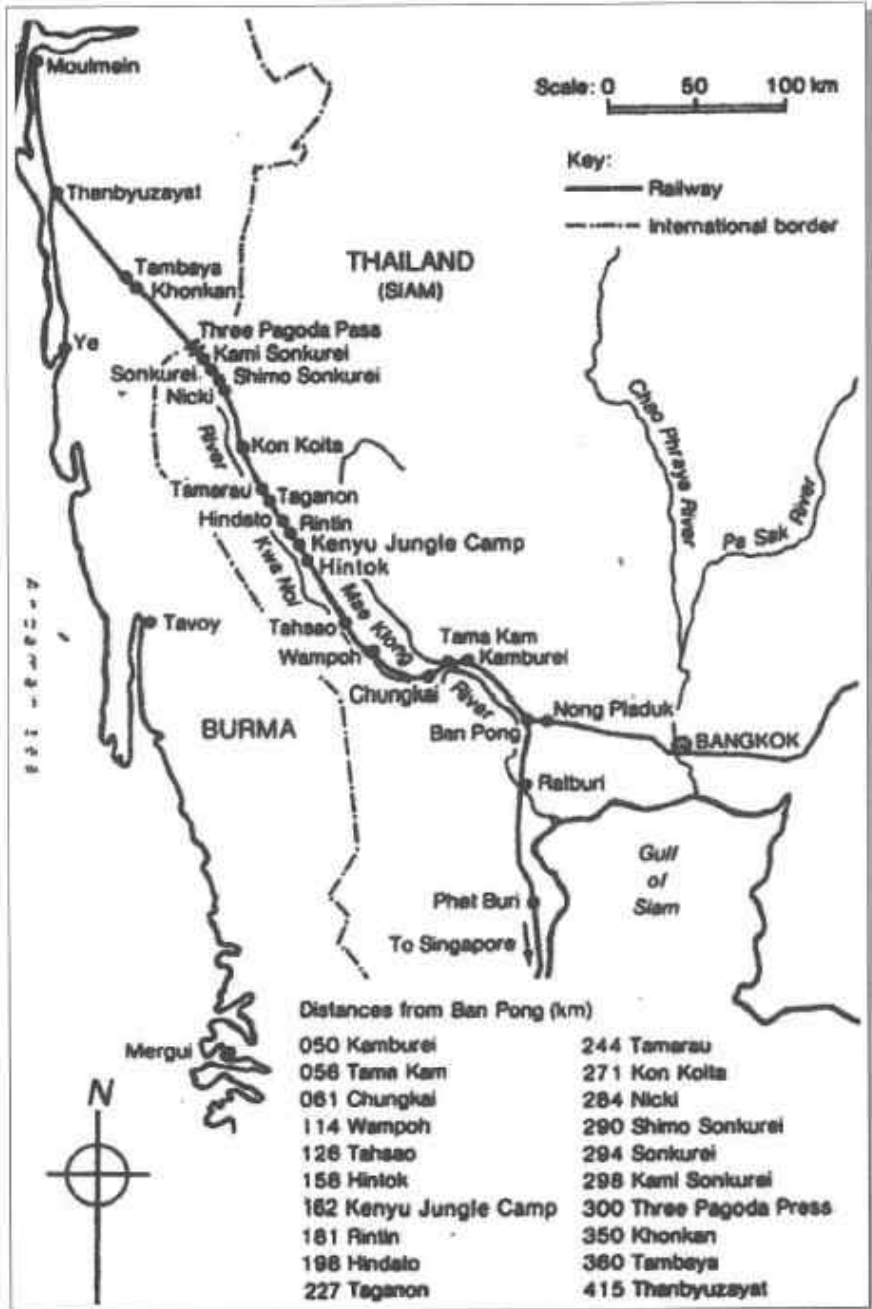
9月24日、この日から我々は警備任務を日本軍人から引き受けた。私は初日、衛兵当番になって、一番しんどい正月歩哨〔ママ、正門歩哨だと思われる〕に立つことになった。任務引継関係で日本軍下士官が衛兵指示を任せられ我々を指揮した。その日の記憶に残っているのは、夜間に正門を閉め、歩哨の勤務中、にわか雨にあって服がびしょり濡れたまま勤務したことだ。異邦の犬の吠える声が狼の吠える声のように四方から間断なく夜が明けるまで聞こえてきた。初日の衛兵勤務は無事に終わって濡れた服を洗濯した後、昼寝をして休んだ。

9月26日には本所からきた水谷大尉の指揮で〔我ら捕虜監視軍属の内〕20名余りがバンコク駅まで行ってPW500名を受取り、分所まで徒歩で護送してきた。

9月28日には1,000名のPWを徒歩強行でカンチャナブリまで護送する日だ。40kmの長距離強行軍だ。早朝に食事を済ませて昼食を持って朝8時、渡辺伍長指揮のもと、我々24名がPW1000名の大部隊を2列縦隊にしての行軍が始まった。将校たちは乗用車で رفتり来たりし、ご苦労さんを連発しては我々の士気を高めた。私は一番親しくしている尹大重と一緒に最先頭に立って歩行速度を調節し、先鋒隊を巡視しながら行軍した。タイ人のトラック1台が10名余の人を乗せて我々の行列をかすめるように過ぎていった。この時、PW一人が「ニッポン」、「マイ、キャップ」と叫んだ。振り返るとトラックを指さしていた。タイのヤツが帽子をひったくって行ったのだ。この時、尹君がいち早く銃で狙った。それでタイ人は帽子をさっと投げ、トラックは速力を増して行ってしまった。私は服部小隊長の訓話を思い出した。男は盗賊、女は売春婦とみろという…。

行軍の中、PWから病気により10名余りの落伍者が出た。PWの不平不満

65 捕虜の英文表記 Prisoner of War の略である POW の誤記。〔以下PWのまま訳出〕



泰緬連接鐵道路線図（出所：豪州国立文書館サイト）

の気配も見えていたが、どうすることができようか。午後6時頃に強行軍は終わって、カンチャナブリの宿営地に到着したが、我々の足に水ぶくれができ、とても疲れ切ってしまった。本所から来た石井中佐は何回もご苦労さんといって我々を慰労した。

我々は豚肉「ハーム⁶⁶」に加えて特別食を受け、トラックで分所に帰った。この後、我々は1、2回、駅から分所までPWの護送をした。

第4分所への転属

10月1日に第1分所の大部分が転属命令を受け、訓練所の1、2、3小隊員の大部分が第4分所に転属となった。我が分隊長の渡辺伍長は1分所に残った。朝早くノンブラクドック1分所からトラックでカンチャナブリまで来て、木船数隻に分乗して機関船〔曳引船〕に引かれてケオノイ川⁶⁷を上った。この地帯が泰緬国境地帯で世界第2のジャングル（森林）地帯だ。時が雨季⁶⁸の末で黄黒い川の水は漲って滔々と流れる。その川を曳引船は木船2、3隻ずつを引いて上手に登る。壮観であり、異国風情だ。船員たちはみんなが現地人でそこに日本軍の監督兵が1、2名乗っている。

私は兩岸の絶景に陶醉した。所々の砂原には1mにも見える大きなトカゲがぶらぶらと遊んでいて船が近くに行く草むらの間に隠れてしまう。戦友たちは嘆声を上げる。「あっち、あっちをみよ。猿が栗の房のように鈴なりになってぶらさがっているよ」。子犬ほどの小さい猿は大きな木にぶら下がって我々の船が近づくとこっちに飛び、あっちに飛び才能を誇示する。ある戦友が銃を向けた。目が早い猿たちはチイチイと言いながら、あつという間に林の奥に隠れてしまった。

林の中をゆっくり見ると、竹の間に野鶏が餌を探しているし、水中には大きな名前も知らない魚がいて曲芸を自慢しているようだった。遠く眺めると、雑木林と竹藪が樹山樹海を成している。千古未踏のあの林の中にはどんな動

66 タイ式の井料理のカムを指すようだ。カウカム（豚足井）。

67 クワイ川の支流。クワイ川は日本語で、ケオノイ、クウェー、クワイ川などいくつかの名前で呼ばれている。

68 4～9月の雨季。12～3月の乾期。

物がいるのだろうか。猛獣、大蛇、毒蛇、毒虫など、多くの鳥類、動植物が生きているのだろう。

あ～、今日の日もおわった。遠く、砂原に夕日が光る。「あ、孔雀だ」。誰かが叫んだ。本当に孔雀だった。きれいな雄の孔雀一匹がきれいな羽を虹のように丸く開いた。その横を黒い雌が砂畑を追いかけている。あ～、ここは仙境だ。皆が感嘆した。我々が乗った船は10月1日午後遅くにターサオ⁶⁹に着いた。第4分所本部はワンヤイ⁷⁰にあり、知田少尉〔少佐〕が我々と一緒に専属された。第1分所長には本所の水谷大尉が補されたという。

第4分所第1分遣所での生活

分所本部で一晩過ごした我々は第1分遣所要員として分遣所長服部浩⁷¹少尉、武田太治美伍長、衛生兵深川兵長と我々軍属など45人が一緒に当日約12km離れたワンポー⁷²に戻ってきた。

ここで我々は分遣所を新設するのだが、すでに鉄道隊の井深大尉が指揮する1個小隊が来て駐屯していた。まだ、竹と樹木、雑草が生い茂る未開地そのままだった。我々是一緒に乗せてきた食糧と野営資材をおろして、すでに運送されて船着き場に積んである建築材（竹など）を持ってきた。鉄道隊の軍人の助けを受けながら、臨時幕舎を急いで作り、一息入れて一晩を過ごした。その次の日から連日、資材、食料などの品物とPWが護送されてきた。

我々は人力が多いので1ヶ月もたたないうちに、見劣りのしない数千坪の宿営地と宿舎、運動場も作った。天気は乾季に入った。雨は降らず、連日猛暑の暑さが続いていた。これから本格的な鉄道の路盤作業が始まるのだが、我々が収容したPWは約2000名だ。PW将校にはリリー中尉以外に佐官が数名、尉官が数十名、残りは士兵だ。将校には指揮と事務処理だけ担当させ、作業はさせなかった。

我々の業務分担をみれば、分遣所長服部大尉、補佐官武田伍長、庶務杉山

69 Tarsau、泰緬鉄道のタイ側出発点であるバーンポーン（Bampong、Banpong）交差点から126km離れた所。

70 Wang-yai、クワイ川橋の北70kmに位置。

71 〔韓国語原文では、服部浩の階級について、少尉・中尉・大尉を混用している。原文のまま訳する。〕

72 Wampo、Wampoh と表記し、バーンポーンの交差点から114km離れたところに位置。

源太郎⁷³、捕虜花村義雄⁷⁴、警備兵器係兼衛兵司令石原⁷⁵、補給青山⁷⁶、被服物品清原⁷⁷、衛兵司令白石⁷⁸、衛生兵深川兵長、その他はPW作業場引率、監視、歩哨雑役などだ。あるいは輸送船の監督兵として選ばれることもある。

そして、捕虜たちを取り扱う実態をみれば、その当時捕虜に支給されるものはとても貧弱な悪食だった。主食は白米なのだが、くず米でとても低質で、おかずはタピオカ、スカンコン⁷⁹や黄色いカボチャ等を塩だけ入れて煮た汁物だけだった。これを食べさせて重労働に酷使して体力が維持されるものか。下痢に疫痢、栄養失調など患者が続出した。被服の配給は一切ない。パンツ1枚で陰部だけ覆えばいい、常夏の国だから。

我々の食事也是如此ほどよい方ではない。PWに比べれば、米がタイの2等米程度なので確かによい方で、味噌と醤油、椰子油があって塩干魚も時々補給されたので、よりよい方ではあった。その時、我々は自費でアヒルの卵1個（3銭）をしばしば買って食べた。

食事の時になると、我々の宿舎の周辺に数十名のPWが集まってきた。我々が食べ残した残飯を食べるためだ。衣食足りて礼節を知ることわざもあるが、紳士の国、天下を支配してきた大英帝国の鼻っ柱の強い国民も、空腹はどうすることもできないようだ。彼らの立場を代弁すれば、「捕虜の境遇で何が体面だ。何としても生き延びて戦争が終わったら故郷へ帰って愛する父母兄弟、妻子に会うんだよ」。こんな人間の本能的な利己心にとらわれているのかもしれない。彼らの中でも分別やメンツを保とうとする人は眉をひそめる。将校たちは彼らを教育して叱責もするようで、2～3週内にそういう行為はなくなった。

どうにかこうにかワンポ어의収容所生活も2ヶ月が過ぎ、1943年の新年を迎えた。我々は日本式の雑煮を煮て、餅を作り、屠蘇を飲んで新年を祝った。

73 執筆者は杉山源太郎を大邱の金俊植と表記しているが、国家記録院の名簿では大邱の杉山源太郎は検索されない。〔タイ捕虜収容所の留守名簿では杉山源太郎は全南出身、大邱在住〕

74 花村義雄：花村義男の誤記と見られる。鄭相權、1923年3月20日生まれ、慶南昌寧郡

75 石原相玠：石相玠（執筆者）。国家記録院の名簿では石原相玩。1920年11月16日生まれ、慶南山清郡山清面慕古里

76 青山勝：1921年7月5日生まれ、慶北迎日郡達田面里仁洞の出身

77 清原：清原正重、1913年10月22日生まれ、忠北忠州郡可金面樓岩里。〔韓元哲〕

78 白石嘉男：白相天、釜山出身。

79 水中で育つ草で、さつまいもの葉っぱのようなもの

服部分遣所長や武田伍長はとても好人物で、与えられたご飯を食べてじっとして、遊んでいる始末だ。そのようにできるのは、我々が規則に従って業務や指示に間違ふことなく、よくやっていたから…。

私の任務は兵器係兼衛兵司令だ。兵器といっても個人に支給されたのは連発式小銃と大剣、実弾 10 発ずつだ。それと私が保管している 2,000 発と手榴弾 100 個がすべてだ。ところが、戦友たちの中にはジャングルや川を歩き回り、動物を捕まえるといって実弾を使うので、私に実弾をくれとうるさく言ってきた。分遣所長の命令の分だけの支給だが、私は 5～10 発程度はいつも分けてやり、不正な消耗分は射撃訓練時のものだとうその報告をするのだ。服部所長はいちいちただすこともなく決済してくれた。

そして衛兵勤務は司令と衛舎係、歩哨係で 3 人ずつ 2 組が 24 時間ずつ交替して勤務する。歩哨は 12 名ずつ 3 交替勤務で、24 時間歩哨、24 時間休息、24 時間 PW 引率作業・監視の勤務だ。

当時、我々には支給される月給は国内の俸給の 3 倍で、年 2 回の序列に従って 3～5 円ほど差をつけた昇給、ボーナスが年に 270～280 円程度であった。そして、小遣いを使えと我々に月 30 円だけ支給してくれ、残りは実家へ送金し、一部、義務積金といって少しずつ横取りされた。

戦友たちはこの小遣いで捕虜たちが持っている所持品、すなわち時計、指輪、万年筆、ライター、皮製品等ちょっと価値のある物品を捕虜の弱点を利用したり、口説いて安い値段で買ったりする人が多かった。だが私は一切そんなことには目を向けなかった。反面、タバコやアヒルの卵を買って食べることは多かった。だから、30 円のお金はタバコとアヒルの卵などで使ってしまった。私は財布にお金を入れると我慢できない性格なので月給をもらうと半月ももたなくて皆使ってしまい、空の財布で暮らすのがほとんどだ。

衛兵非番の日は十分な睡眠と休息を取って夕方になると川に出て泳いだり、あるいは銃を担いで林の中を徘徊したりした。幸運にも野鷄や孔雀や動物を見つけると撃とうとするのだが、一匹も捕まえられない。

黒い山蟻の巣が王陵の墓ほど大きく、いたるところがあるのでびっくりした。また赤い蟻の群れが灌木と草の蔓に鈴なりに引っ付き、赤い花が満開しているかのようだった。この蟻に噛まれると皮膚が腫れて我慢できないほどかゆい。ジャングルには数多くの昆虫などがいるが、その中でも一番恐ろし

いのが、「さそり」だ。頭はザリガニのようで、体はムカデのようであり、しっぽに鋭利な針がある。これが毒の針で、体が7節のサソリにさされたら、命の危険もあるほどの猛毒だという。そのため、我々は軍靴に長いズボンをはかないと林の中へは入れない。先住民は裸足で陰部だけ覆い、一尺以上の長刀をもって裸体でよくも歩き回るのに！

また、私は衛兵1組の司令官として軍務外時間の大部分をフンドンで宿舎内で昼寝をしたり、戦友たちと碁をしたりした。午後夕日に暑さがちょっとなくなると、運動場に出て戦友や捕虜たちと一緒に混成チームを組んで蹴球をするのだが、捕虜の中にはとても上手な選手が何人かいる。

もうワンポーでの生活もすでに3ヶ月が過ぎた。鉄道作業の状況を見ると難しい伐採作業も終わって、すでに路盤をつくる盛土、掘開、岩壁の爆破などの作業が進んでいる。正午と午後5時になるとTNTの爆音が山河を揺るがし、天下が振動する。我が第4分所の担当区域はワンポー、ワンヤイ、トンチャン⁸⁰、カンニュー⁸¹、ヒントク⁸²、キンサイヨーク⁸³、ヒンダート⁸⁴まで約40km区間だ。第2〔1〕分所担当区間はカンチャナブリ、ターマカム⁸⁵から我がワンポーまでで、第5〔2〕分所がヒンダートから泰緬国境までで、ビルマ地区は第3分所〔と第5分所〕の担当だ。鉄道隊は鉄道第9連隊今井大佐がタイ区間担当建設部隊で、全区間運営及び技術部隊に第4特設隊である安達部隊があった。

1943年1月下旬頃、我々は肉類補給がないので肉類が食べたくなる状態だった。肉がとても食べたい。ある日、庶務の杉山（金俊植）が本所本部に事務連絡の出張に行ってきた道で雌の孔雀1羽を捕まえてきた。孔雀は5～6kg位でふっくらと太ったヤツだ。これを次の日、皆が仕事に出かけて数十名しかいないときに煮て食べた。所長と武田伍長に一杯ずつあげて、我々は久し

80 トンチャンのキャンプはトンチャンセントラル (Tonchan central) とトンチャンスプリング (Tonchan Spring) の2つがあり、それぞれバーンポーンの交差路から139km、143kmの地点。

81 カンニューのキャンプはカンニューロードと (Kenyu Road) とカンニュージャングルのキャンプ (Kenyu Jungle Camp) の2つがあり、それぞれバーンポーンの交差路から153km、162kmに位置。

82 ヒントク (Hintok) のキャンプはヒントクリバー (Hintok River) とヒントクロード (Hintok Road) にあり、それぞれバーンポーンの交差路から156km、158km地点に位置。

83 Kinsaiyoke または Kinsaiyok と表記、バーンポーンの交差路から172km地点に位置。

84 Hindato と表記、バーンポーンの交差路から198kmの地点。

85 Tamarkan と表記、バーンポーンの交差路から56kmの地点。執筆者は、クワイ川の橋であると説明。

ぶりに肉の汁を、生まれて初めて食べる珍味なのでとてもおいしく分けて食べた。「僧侶が肉味を知れば寺に蠅が残らない」ということわざもあるが、我々が孔雀を捕まえて食べたという噂が広がると、食べれなかった戦友は残念がり、一層肉を食べたがっていた。

ある戦友の提案でタイ人の集落に行き、水牛1頭を買って食べようということになった。みんな賛成だ。「所長の承認を取るか?」「あ、所長に隠れて買い、肉を焼いて持って行って承認を取ったらいい。」「ところで水牛1頭でどれくらいするかな。一般の牛1頭で18円～20円程度だから、25円～30円ほどやれば買えるだろう?」。その時、補給係の青山が「25円⁸⁶だけわしにくれ。わしが買ってくるから」。青山はタイの言葉も少しできて、近隣のタイ人の生活事情を誰よりもよく知る人間だ。我々は1人当たり60銭⁸⁷ずつを出して25円(25パーツ)を集めて川を越えて林の中にあるというタイ人集落へ送り出した。成功した。

しばらくして青山はタイ人と一緒に水牛1頭を引っ張ってきた。ところが我々の中には牛を屠れる人がいなかった。まず、銃で撃って倒す要領で、3人の小銃手が罪のない水牛の死刑執行をする作戦であった。まず牛を大きな木に縛って撃つのだ。この時、深川衛生兵がスリッパをはいてぶらぶらと歩いてきて、にやにや笑いながら「銃をこっちにくれ」と、済州出身の金澤テヒュウ⁸⁸の銃を奪うと水牛の横まで近づいて、額に1発撃った。水牛はそのまま前足を折ると横たわってしまった。我々は「や～、深川、あれ、白丁のようだ」とひそひそと話し、青山にPWを連れて来て料理しろと頼んで別れた。こうして我々は、数日間は酒と肉をふんだんに食べ、捕虜たちにも気前よくやった。

1943年3月、雨一粒も降らない乾季になった。ケオノイ川に船が行き来するのも難しいほどに川の水は減り、水銀計は41～42度の猛暑が続いた。この時、伝染病のコレラが発生した。全地域にコレラ非常防疫令が出されたので、日本軍は戦々恐々だ。我々収容所は初めから飲料水は濾過して沸かして飲んでいたが、今は風呂も思い通りにできないほどだ。我が服部部隊長は急に辛い

86 円はパーツと推定。

87 執筆者は60銭(サタン)と書いており、サタン(Satang)はパーツ(Baht)と共にタイの通貨単位の一つ。朝鮮の通貨のウォンに対する銭に相当する。

88 金澤太休：生年月日不詳、全南済州。

唐辛子を食べ始めた。汗と涙を流しながら辛い汁を飲むのだ。当時とても辛い唐辛子の木が草地に少しあった。

我々朝鮮人は平気であった。コレラのようなものは飲食物だけ注意していれば何でもないので。ところが全地域で多くの人命が亡くなったという。その中でも現地で募集した労働者⁸⁹の犠牲が一番多かったし、衛生観念が高い文化国民であるPWたちもこのような環境の中ではどうすることもできなかった。ついに我々の分遣所のPWも数十名の犠牲者を出した。

作業現場で一つ見落としていたのは、盛土路盤工事が不可能な地点が多いということだ⁹⁰。今であれば、重装備と車両で容易に作業をするが、当時は全て手道具、すなわちスコップとツルハシだけで、多くの土石を移動運搬することができなかった、そのため木造橋梁に変わったのだ。木材はジャングル内に無尽蔵にある。そしてこの巨木を運搬する手段は象が最適であり、タイ国内の象が徴集されて登場した。

その作業の光景をすこし見てみる。平常時には巨木を伐採して6～7m、または必要な長さに切ってロープに巻き付け、象に荷鞍をつけて、主人が我が国で牛を追うように声を出すと、その大きな木を曳いて来るのだ。ところが山上の高いところからあらかじめ邪魔になる木を取り除き、下山する材木を象が主人の声どおりに動かす。頭で巨木の中央を押し、両端のあちこちを頭で突いて押し、足で蹴ったり、または人力のテコの助けを受けながら下山させる。それを見ると、その重々しい大きな動物がとても利口に見える。

そして象は水泳もうまい。主人を首にのせて大きな川を上手に泳いで渡る。草食動物なのでどんな草でも木の葉でもよく食べるようだ。作業中に雑穀（豆、サトウキビ、トウモロコシなど）を30kgほど食べさせるのを見た。

我々は象の力がどれほど強いかわかるために、針金の手綱に長いロープをつないで、象の主人に思い切り引っ張ってみろといった後、手綱を持って引っ張ってみた。初めに我々とPW合同の50人がやってみたが、我々のほうが引っ張られた。今度は55人が引っ張った。象は引っ張りも引っ張られもしなかった。だから象は55人力だ。

1943年4月下旬、これから雨季が始まる。雨がずっと降り始めた。6月

89 クーリー（goo-lee）は労働者という意味。

90 土の質が悪く、路盤工事がやりにくかった。

下旬、コレラ大流行で緊張していたひとときも過ぎて、我々がなじんていたワンポーキャンプももう撤収だ。鉄道路盤工事がほぼ終わったのだ。

第3分遣所転属：分駐所責任者として捕虜との関係づくり

7月1日に我々は第1分遣所を撤収し、服部分遣所長は分所付官として一部軍属もワンヤイ分所本部とトンチャン第2分遣所に別れて行き、大部分の軍属はカンニュー第3分遣所に専属になった。第4分遣所長は池田少佐の後任にきた、本所の高級所員（副所長格）である石井民恵中佐が在任中で、第3分遣所長は他の部隊からきた野村茂雄中尉で拓殖大学出身の勇将だった。謹厳な姿勢でいつも笑顔がなく、攻撃的な印象を漂わす人で我々によく気合を入れて、〔捕虜の〕口口将校まで殴ったりする怖い将校で、皆が緊張した生活をしなければならなかった。私は杉山（金俊植）と一緒に庶務に任命されたが、皆気合を入れられるかと咳払い一つできず過ごしていた。この人は自分の机を我々の事務室中央に置いて監視しながら座っているのだった。ところが、我らの心配は杞憂だった。我々を日本軍兵士以下の水準とみなし、初めから厳格に強く指揮し、自分の命令にオドオドさせ、おとなしく従わせる作戦だったようだ。

しかし、実情は違った。事務室に常勤する武田軍曹⁹¹は関西大学出身の経済学士で、杉山は慶北道の庶務課に勤務してきた文をうまく書く優秀な事務者であった。捕虜係の花村は釜山二商出身の銀行員の経歴でいつも捕虜を相手にして英語をかなり話し、補給係の島崎⁹²なども能力があり、優秀な部下たちだった。それで、こんな部下たちを煩わしく思っではいけないと改心したようだった。そして、外勤する軍属を試すつもりで、10人ずつ野外に引率し射撃訓練をさせた。ほとんどが名射手だ。我々がタイに来て各自勤務に忙して軍事訓練をする機会がなかったが、射撃だけは皆が猟師だった。野鶏、猿、孔雀、鱷、トカゲなどを捕獲しようと暇さえあればジャングルを駆けずり回る狩人ではないか。多分、野村中尉は心の中で感嘆しただろう。捕虜監

91 伍長から軍曹へ進級

92 島崎信隆、金鳳根、1918年2月20日生まれ。慶北大邱府。

視の勤務もすでに手慣れたものだった。私は庶務で、陣中日誌、統計表、略図など野村がやれというとおりにすべての壁に書いて張った。

ヒントク⁹³というところに分駐所を開設し、その責任者として同僚5人とPW 800名を統率しながら約1ヶ月半を過ごした。

この時に起こったことだ。ある日、捕虜たちが大胆にもタイ人たちと物々交換をしていて、主に薬品を引き抜いてタバコや食品と交換するという情報だった。これを聞いて私は責任指揮将校である英国軍大尉を呼び、薬品責任者と薬品をすべて持って来いと命令した。少し後に薬品責任者の英国軍軍曹が来た。薬は外傷薬と包帯、腹痛薬などだったが、一番重要なのはマラリア予防薬である「キニーネ」⁹⁴だった。ところがキニーネがないのだ。問いただすと、皆に全て支給したという。各人にいちいち調査をしてみても、薬はなかった。

私はかっ腹を立てて大尉と軍曹を叱った。「お前は800名の命をタバコとアヒルの卵などに換えて食べた泥棒だ。行こう、分遣所に渡す」。そういって小銃に実弾10発を装填して着剣し、暗い夜道を懐中電灯で照らし2人のPWを前面に立てて行った。林の中を数百メートル行って、立ち止まらせて、真実を明らかにしろと叫んだ。そうでなければ、分遣所に行くこともなく、ここで撃ち殺してしまうと威嚇した。そうすると、各個人に分けたのは事実だが、それを皆は飲まないでタイの商人たちと物々交換したようだ、それは私の不注意で、これからは絶対にそんなことがないようにするから、許してくれと泣いた。

大尉は日本語がかなりよくできる人だった。私は初めから上部に報告する考えはなかった。報告したら私の指揮管理能力を評価されず、分駐所責任者もできずに交代させられるかもしれない。ただ管理者の権威を確立しなければならぬという心積もりだったのだ。それで、私は後退するしかなかった。私は大尉に握手を求めて、これからは問題なくやってくれと言いかせて戻ってきた。

その次の日だ。私は10日分の主食副食とその他補給品をもらうために、同

93 Hintok、タイの地名。

94 quinine、kinine。南アメリカ原産でインドネシアのジャワ島などで栽培されるキナの樹皮（キナ皮）に含まれるキナアルカロイド。解熱・鎮痛・強壮・マラリアなどに効果があり、特にマラリアの特効薬として知られている。

僚1名とPW 50人を引率して分遣所に行った。補給係は親友の大邱出身島崎だ。分遣所長に業務報告をして、島崎君に会い、倉庫に行って主食である白米⁹⁵10日分と副食品をもらったが、片隅に塩干魚2カマスがあった。私は島崎君に聞いた。「その魚、誰の?」「さあ、量が少ないので、PWにやることもできず、僕たちが食べるには量が多いし、よく食べるようでもない…」。「わかった。それなら僕にくれ。僕が行って皆にやる」。

友達はニヤッと笑って「いけないのに」といった。私は急いでPW 4人を呼んで、その魚から持って行けといった。そして我々6人の食品とPWの食品などの倉庫の仕事を終え、同僚の柳川に先に運んでいけといった。そして私は日本人の衛生兵にけんか腰で「キニーネ」数瓶と外傷薬などをもらって急いで帰ってきた。ところが、先に帰った柳川とPWたちは遠く行けず、途中で休んでいた。とても暑く、連れてきたPWたちは作業場にも行けない軽病人たちなので、私はかわいそうだとは思った。だが「もうすぐ、昼食の時間だ。早く行こう」とせきたて、後ろに取り残されている人を助けながら分遣所に帰ると12時が過ぎていた。

その後、大尉は私の誠意がわかったのか、私の言う通りに指揮して事務も処理してくれ、人間的にうまくやっていた間柄になった。

第3分遣所勤務の約4ヶ月は退屈な梅雨の雨で、太陽を見る日がめったになく、洗濯物を乾かして着ることもできないほどだった。もう第3分遣所も撤収だ。野村中尉はどこか他の部隊に転出してしまった。多分上部では我が収容所に適した将校ではないと考えているようだ。

収容所勤務中の逸話

1943年11月初め、我々は第4分遣所キンサイヨークに転属して移動した。タイの国境側に奥深く入ったのだ。分遣所長は三宮美代治中尉で東京弁護士出身の法曹人である。陸軍中尉の身なりで八字の髭をはやし、いつも高姿勢をとる収容所の名物将校の一人である。やる事ごとが大胆かつ大様であった。釜山訓練所の時代にろ隊第7小隊長で、その後、本所を経て我が4分所に来

95 この時は雑米ではなくタイ米。

た将校だ。すべてを部下たちに任せて自分は超然と座って観望する男だった。

ある日、自分の部屋から20～30cm離れた川辺の砂場で我が軍属木村明成と隧道隊⁹⁶ 伍長のあいだで格闘がくりひろげられた。理由は、軍属の傭人⁹⁷が軍人の下士官を見ても敬礼をしないのは不遜だと言って、伍長が気合を入れてやると頬を叩いたが、逆に木村に叩かれたのだった。厳密に言うと上官暴行罪だ。それでも分遣所長は見るだけでにやにや笑いながら座っていた。後で言うには「私の部下が殴られれば隧道隊の者を捕まえて叱るが、我が軍属はしっかりしているなあ！」。

もうひとつ面白い話がある。我々がワンポー第4分遣所を開設して何日も経っていないころだ。第2分遣所はトンチャンというところ、すなわちワンヤイ分所本部のカンニュー第3分遣所の中間地点に位置する。第2分遣所所長には将校ではない下士官、虎軍曹で名高い平松愛太郎軍曹が任じられた。鉄道隊と我が軍属の間にはよく些細ないざござが起きた。第2分遣所の状況をみると、こちらの指揮官は下士官だが相手は将校で、またこちらは軍属傭人の身分で、彼らは現役軍人だからこちらを見下していた。鉄道隊が全ての仕事を主導しようとする傾向があった。しかしよくみれば、こちらが捕虜を虐待するという理由で第2分遣所から鉄道隊に出役させなければ、鉄道隊には大きな問題となり、とても難しい状態におちいるのだ。あくまでもお互いに和合・協力することとなっているが、鉄道隊の兵士たちはこの点を十分に認識できずに、我が半島青年たちを見くびって初年兵以下に扱うのだ。それでこちら側の反発にぶつかったのである。

ある日、平松軍曹も気分が悪い日だったのか、大酒を飲み、いきなり軍刀を抜いて拳銃を付け、全員完全武装で集合しろと非常召集を命じて拳銃をパンパン撃った。我が軍属すべては厳命なので、一瞬のうちに集合した。平松は「今から鉄道隊を攻撃する。みんな匍匐前進して鉄道隊を包囲しろ」。事態は一触即発の危機だ。この光景を鉄道隊員の誰かが耳にして隊長に急報したようだ。拳銃を撃って大声を張り上げているので、知らないはずがなく、慥慥に知らせる戦略というべきか。鉄道隊小隊長が急いで走ってきた。

「平松さん、どうされたのですか。私に過ちがあったり、私の部下が過ちを

96 隧道はトンネルを意味。隧道隊はトンネル工事を引き受けた部隊。

97 軍属の傭人、兵卒相当。

犯したのなら、私が謝って、これからこんなことが絶対に起こらないようにしますので、どうか兵力を解散させて、私と二人でお話ししましょう」とそれこそ訴えるように言った。ずる賢い狐のような平松はその謝罪と屈服をひそかに望んでいたことようだ。彼は仕方ないふりをして皆を解散させ、二人の隊長は夜が明けるまで和解の酒を飲んだそうだ。

後日、私はこの真相を知るためにその当時、第2分遣所の所属であった郷友、呉聖淑に会って尋ねてみたら、本当だといった。「そうか、その時お前は どうしてたんだ?」、「万一、本当に戦闘が起こると、鉄道隊には軽機関銃もあるんだから、運がなければ死んでしまうと思って、食糧倉庫に入って米俵の間に隠れていた」。「ハハ、この臆病者」。

1943年春、我が第1分遣所に10頭余の象が来て木材運搬作業をする頃、ワンヤイ分所本部からも象がきて仕事をした。その時、PW1人が草を食べている象に近づいて撫でるまではよかったが、竹を無理にたべさせようとしたのが、象を怒らせてPWを鼻でくるくると巻いて2~3m投げてしまった。PWは不幸にも鋭い竹の端に腰を刺されて重症を負い、数日苦しんだ後、死んでしまった。

もう一つの話。分所の食糧用の糧秣倉庫は大きい。数ヶ月の間、主食にくず米をだしていたが、今はよい米に換えて食べるようになった。この時、倉庫掃除をして新しい米をもらって計るために、床に残っている数十俵のくず米俵の整理作業をしていた。PW1人が「蛇だ、大蛇だ」と叫んだ。皆は竹の棒をもって集まった。大蛇は腰の一部分だけが米俵の間に見えた。動かない。この時、我が軍属が大蛇の腰に銃一発を打った。大蛇は、によるよると全身をよじったが、這っていくことができなかった。この時、PWたちが竹の棒で殴って捕まえた。大蛇の長さが6m50cm、こいつを捕虜たちが貰い、ぶつ切りにして、大きな釜3つに分けてじっくり煮て補身湯として補食したそうだ。

ところで、今度は私自身の逸話をいうと、第4分遣所に来た私は、杉山と一緒に庶務の業務を担っていた。私は陣中日誌と旬報、月報を担当する比較的閑職であった。ある日、私の日直当番の日にPW1人がジャングル内に逃亡するのを見たとき鉄道隊からの情報が入った。よりによって私の日直の日に運が悪いとおもいながら、分遣所長である内山喜支雄（三宮美代治中尉は転

出)に報告し、PWを非常召集した。数名の同僚の助けを受けて、重患者を除いた全員を広場に整列させ、点呼して日報と対照すると1人足りなかった。その当時、派遣人員を除外して作業場からすべて帰隊すると2,000名が収容人員だ。各所に連絡して、私は銃に帯剣して宿舍内外、営内をまんべんなく探し回った。この時、竹柵の一方の端で竹を薪にして焚火をし、1人のPWが本を開いて読書に熱中していた。私はその横まで行ってもわからなかった。私は靴で彼の足を蹴りながら、大きな声で「このばかやろう」と叫んだ。PWはパッと立ち上がった。みると2mもある長身の英国軍少佐だ。私は思いっきり頬を一発殴った。そしてその少佐を広場まで連れていき、指揮官の中佐に謝れと行って全員解散させた。

私はPWに手を出したことが気になった。空前絶後のことだ。二度とPWに手を出さないと決心した。鉄道隊の者は毎度虚偽の報告をして、人に迷惑をかけていると文句を言いながら、所長に人員に異常はないと報告した。

すでに、タイでまた一年の新年を迎える。1944年1月初め、故国におられる両親が恋しい。お元気でられるだろうか…。私はここにきて数回お手紙を書いたが、お父さんからの返事はただ一回だけだ。おそらくすべての輸送がままならないようだ。全般的に戦勢は日本軍が不利なようだ。「アッツ島⁹⁸、サイパンも玉砕、連合艦隊司令長官軍神山本元帥も天に散華」など、ビルマ・インパール戦線も悪戦苦闘、敗戦だけを繰り返しているとの噂だ。

ビルマ戦線が崩れたら、我々はどうなるのだろうか。鉄道工事はほとんど完成段階にはいっているが、我々は今、進撃路を整備しているのではなく、連合軍の進入路を整備しているのではないか。私の心境は少し複雑だった。

1944年1月中旬、私は同僚の軍属4名とPW400名を引率してキンサイヨーク〔第4〕分遣所から約2km離れたヒントク⁹⁹に分駐所を開設して分駐勤務をすることになった。そこで、ひと月余りを勤務した時のことだ。

毎日朝7時30分になると、鉄道隊兵士たちがPW作業員人員の受領に来る。そうすると、PW将校数名と事務要員、炊事要員、その他雑役人員30名余りだけを残して、その他の者は昼食を携帯して午後5時まで作業に出る。そう

98 アッツ (Attu) 島：アメリカアラスカ州の南西部の島。第二次世界大戦中の1942年日本軍が占領し、熱田島に改称。1943年5月、米軍の反撃から半月で日本軍が全滅。「玉砕」公認1号。

99 2箇所のヒントクのキャンプの中で Hintok Road のキャンプを指すと推定

すると我々はすることがあまりない。同僚の4人は2人ずつ2組になって、午前1回、午後1回作業場の巡察をして帰って来るだけだ。この山の中でどこにPWが逃げるのか、彼らは文化国民だから秩序もあって規則も守っていた。私は10日に1回ずつPWを連れて、業務連絡と補給受領をしに出かけた。その当時はその前に比べてPWへの給食補給がとてもよくなっていた。日本軍はどこでそんなに多くの黄牛を買ってくるのか、私は一度牛10頭ずつをもらってきた。PW3人に牛の飼育当番をさせて牛を飼育しながら、3日に1頭ずつ屠って食べた。PWたちは牛の頭を煮て食べると我々に持ってきてくれたりもした。

あるときは、牛の飼育当番のPWが私に言った。「タイガー、タイガー」。私はタイガーが虎だというのは知っているが、PWと英語の対話はよくできないので、日本語ができるPWを呼んだ。昨日とおとといの夜、続いて2日、豹¹⁰⁰が小さい子ども2匹をつれてきて牛を襲おうとして、近くで牛舎を睨みつけていたという。牛たちはみんな自分の幕舎の方へ集まってくるが、我々が焚火を明るく燃やすと消えてしまったそうだ。

私は、わかった、戻って牛をちゃんと見張り、今晚は我々が豹を捕まえに行くから焚火を起こさないようにと言って帰らせた。夜になった。同僚たちは先を争って行こうといった。しかし、大勢が行ってはいけない。私は一番年を取っている孫田¹⁰¹を見て「お前と私が二人だけで行こう」といって長いズボンとゲートルを付けて、小銃とフラッシュを持って牛舎に行った。夜の11時頃だった。PWに虎が何時頃現れるのかと聞くとまだだという。1時から2時の間のようだった。私はPWに早く寝ろと言って、よく茂った竹を背中にして座った。月夜ではないが、漆黒のように暗くもなかった。1時が過ぎた。虎は来ない。2時が過ぎた。まだ虎は来ない。あ～、もう3時だ。虎は来ないようだ。駄目だ、駄目。「おい、孫田、帰ろう」。

最初の夜、豹は我々を怖がって、鉄道隊の牛や豚に目標を変えたいらしい。私は、飼育担当のPWに明日から焚火をあちこちで焚いて牛をよく見張っているといい、豹を捕まえることは止めにした。

それから2～3ヶ月後に、キンサイヨークで鉄道隊が豹を捕まえた話だ。

100 [韓国語原文では、豹と虎を混用している。原文のまま訳す。]

101 孫田昊植：1915年4月30日生まれ。黄海道碧城郡。[タイ捕虜収容所の留守名簿では、昊は冕]

ある日の夜、鉄道隊に豹が現れて黄牛1頭をくわえて行ったそうだ。鉄道隊の人たちは、せっかく貴重な黄牛をもらって体を元気にしようとしていたのに、招かざる客である虎公が現れて食べてしまった。この虎公をそのままほっておくこともできず、決心して軽機関銃まで動員して、毎日1週間も虎公出頭を待っていたところ、1週間をすぎてOK！ついに虎公が現れた。虎公は竹柵を乗り越えるなり、機関銃の洗礼を受けてしまった。虎の靈魂は黄泉路を行き、鉄道隊は快哉をあげながら捕まえてみると、大きな豹だ。鉄道隊の人たちはいいぞと言いながら、豹の皮をはぎ、価値のあるものを作り、副隊長にプレゼントするつもりで丹心を込めたそうだ。しかし、技術不足と連日の梅雨のために乾かす過程で惜しくも腐らせてしまった。

1944年2月、私は山の中の分駐所を撤収し、キンサイヨーク分遣所で休んだ。ところが、また、同僚5人とPW700名を連れて川辺のヒントクに分駐所を開設すると命じられた。ここは川なので船舶の往来も多く、周辺の景観がとても良いところだ。やはりここで、約1ヶ月勤務したが、業務は従前の分駐所とあまり違うことはなかった。

ここで経験したいくつかを書いてみようと思う。

我々のキャンプは川の西岸の絶壁の上にあったが、東側の川の向かいには広い砂原があった。我々のキャンプとの距離は400～500mほどだ。朝の日の出と夕方の夕日の時にはこの砂原に時々孔雀が現れてその華麗な姿態を扇のようにひらいて遊ぶ。小さい猿が群れをなしてきて川の水を飲んで遊んでから林の中へ消えて行ったりした。

ある日、同僚の尹大重が銃を撃って猿一匹の足にあたったようだった。前に倒れて歩けなくなった。他の猿は銃の音に驚いて矢のように林の中に逃げてしまった。しかし、すぐ後に猿たちはもう一度現れて、負傷した猿を何匹かで抱えて林の中に入って行ったのだ。私は言葉ができない動物もあのように同族愛があり、危険をものともしない愛と慈悲があるのを見て、猿の行為に感心した。

私は時々現れる孔雀を発見すると、数回銃を撃ってみたが、もともと距離が遠いのか、あるいは私の射撃術が十分でないのか一度も当たったことがない。

あるときは渡し船場で多くの人たちが集まって騒いでいる声に降りてみると、

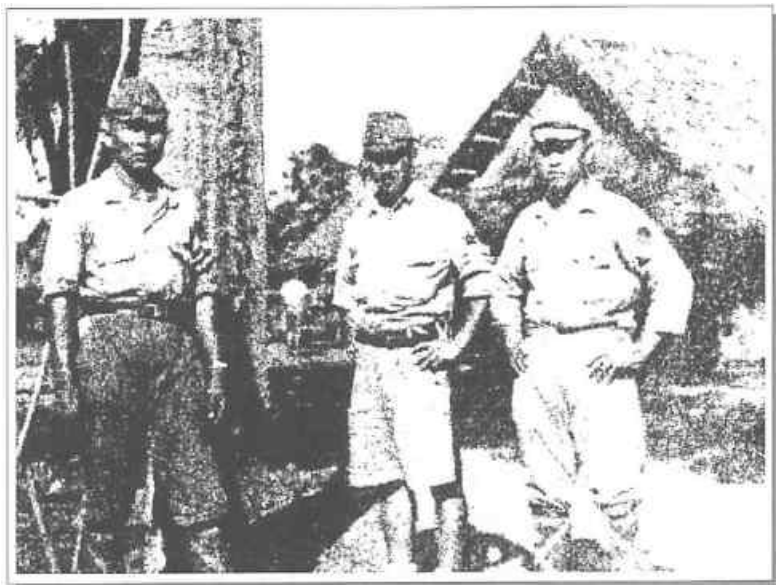
タイ人の漁夫が大きな亀一匹を捕まえて売っているようだった。そこで柳川¹⁰²君が値段の交渉中で漁夫は10バーツ（10円〔ママ〕）をくれという。柳川は5バーツで売れと強請っている。私も加勢して6バーツで奪うように買い、PWを使ってわれらの宿舎まで運んだ。亀はとても大きかった。楕円形の背中の長さが85cm、幅が65cmの巨物。もちろん生きていた。そいつは3日間、人が背中に乗ったり、食べ物を食べさせようとしたが、人がそばにいと頭部を体の中に引っ込めて死んだように腹ばいになっているが、人の気配がないと頭を長く伸ばして、どこかへ逃げようと暴れた。けれども足を丈夫な紐でくくっておいたので思い通りにいかなかった。

我々はこの亀を4日目にPWに屠殺させた。背中の甲羅をはいで、肉質はすべて選び出し、腹部の卵巣から卵（鶏卵の黄身のようなもの）が実に200個以上出てきた。我々は快哉の声をあげ、その卵だけ持って帰って茹で、たらふく食べた。肉は全部PWにやったらとても喜ばれた。PWたちがその肉を釜に入れてよく煮込んで食べるのを見て私も満足した。

この地帯は渡し船場があって先住民や商人などの往来が頻繁な所だ。それで、我々の収容所を徘徊するタイ人たちによく会った。薬品や物々交換が目的の人、または売春婦などであった。それで私は事故を未然に防ぐために収容所の周囲の巡察を怠らないようにし、近づく者を遠くに追いやることもあった。

いつの間にか3月下旬だ。川辺の分駐所を撤収してキンサイヨーク分遣所に戻った。私は特にすることもなく、庶務の杉山を助けて陣中日誌を書きながら、碁を楽しむ内山中尉と碁を打ったりする、閑職の日々を送っていたが、4月初旬に分遣所撤収の命令が下された。鉄道路盤が完工され、これからは鉄道レール連結と駅施設などの作業を進行する。すなわち技術分野と運用分野に移行する過程で多くのPWの手が不必要になったようだ。

102 柳川ギルヨン：1913年7月11日生まれ、全南光山郡。〔タイ捕虜収容所の留守名簿では、柳川吉容〕



タイ捕虜収容所の捕虜監視員たち（資料提出：被害者 金チャンヨン）



当時のタイの現地の姿



タイ捕虜収容所の周辺

ジャングル生活後の収容所生活

1944年4月上旬、我が第4分所は、退屈だった1年6ヶ月のジャングル生活を終えてカンチャナブリとバーンポーンの間地点であるターモアン¹⁰³に移動集結し、新しいキャンプを建設することになった。我々第4分所長石井中佐は大佐に進級して第2分遣所長に移動し、我が第4分所長には本所副官として長くいた鈴木大尉が赴任してきた。

捕虜収容所の全貌を一瞥すると初代所長、佐々誠所長は本国の西部九州〔中部〕防衛司令官¹⁰⁴となり、中村¹⁰⁵大佐が継続在任してきたが、すでに菅沢¹⁰⁶大佐と交代した。したがって収容所には大佐が2人いる。

機構の変遷をみると、本所は最初にバンコク市に設置されたが、すぐカンチャナブリに移動し、現在まで続いている。第1分所はPW護送と兵站業でPW護送が終わると閉鎖されて、その他の任務は本所に吸収され、施行された。そして第2、4、5、3の順に鉄道工事場に配置されたが、第3、5分所は早く業務が終わり、本所と第2、4分所にその人員を増員配置した。だから現在は本所、第2、4分所とナーコンパトン¹⁰⁷ PWだけが残った状態だ。

PWの作業出張も第4特設鉄道隊及び、防疫給水班その他の主部隊に少数の人員だけを派遣して出役させ、大半の人員は独自の施設作業にのみ出役させた。

久しぶりに我が分所員全員が一つの場所に集まり、分所長も交代されたので、我々は機構を整備し、業務分担も適材適所に配置した。副官¹⁰⁸に服部中尉、情報（PW）に星愛喜¹⁰⁹中尉、警備教育に白杵中尉、経理補給に曲山龍平少尉（主計）、医務に村岡（中尉）などが責任将校で、その他は通訳官石黒氏がおり、各部署に下士官1～2名がいた。そして、我が軍属は約240名であった。

103 Tamuang、バーンポーンの交差路から39km地点のキャンプ

104 執筆者は西部防衛司令官として記しているが、佐々誠は1943年6月10日付で中部軍司令官として発令

105 中村鎮雄：1943年6月10日から1944年7月24日までタイ捕虜収容所長。

106 菅沢玄重：福岡捕虜収容所長を務め、1944年7月24日から戦争が終わるまでタイ捕虜収容所長。戦争後、戦犯として処罰。

107 Nakom Paton。

108 人事、庶務責任

109 戦後、オーストラリアの法廷で戦犯として処罰。

PWはあちこちに移管され、損失して今は約7,000名だけが我が分所に収容されている。

その時、私は適所に職を受けることができず、4日に1回の衛兵司令勤務だけを2回していたが、ある日、ワンヤイへの出張命令が出た。ワンヤイにはPW 100名が残って駅と防疫給水班で働いており、その管理を同郷の同窓生である靖山浩¹¹⁰君が担当していた。命令の要旨はPW管理状況と作業現況を見て、靖山にはすぐに撤収になるのでその間よく働くようにと励ますことだった。

私は次の日、朝食を済ませて炊事場に行き、昼食を包んで腰に付け、銃を持ってカンチャナブリ駅にでかけた。9時に乗ったのが薪を積んだ貨物間で、貨物車両5～6両を連結させた汽車だ。当時は開通させて間がなく、客車のようなのはなかった。カンチャナブリ駅から約20分行くと、ターカム¹¹¹の道の橋梁¹¹²に出る。1kmを越えるほどの長い橋で、純木造の木の橋だ。列車がおそろおそろ徐行するが、キイキイときしむ音をたてながらすぐにもその場にへなへたと崩れるようで危険でハラハラする橋だ。この橋が完成するまで、果たしてどれほどの貴重な人命を奪っていったのか…。あれこれ考え、ジャングルの神秘を再発見しながら行っただが、前に見た野鷄や動物たちはあまりいなかった。

午後1時になった。誰もいない薪の間に座っていた私は昼食を食べるために飯盒を出した時、不意に汽車がガタンといったとたん、薪数個がぐずれ落ちて私の足を容赦なく打った。この時、私はちょっとの間気絶してしまった。10分ほど過ぎただろうか。私は気を落ちつけて手で足の上の薪（長さが3尺の丸太、機関車の薪）を押しやって外に落とし、ようやく足を引き抜いた。しかし、どうしても足を動かすことができなかった。

私は足を伸ばしたまま呻きながら、楽しく過ごしたワンポーの情景も、変貌した姿も見ることができず、午後3時が過ぎてようやく目的地ワンヤイ駅に着いた。私は銃を杖にしてようやく汽車から降り、駅舎に入った。日本の軍人たちはみんな自分のすることに忙しく、私には関心がないようだ。一人に

110 靖山浩：(本名) 李相千、1921年1月20日生まれ、慶南山清郡山清面玉洞

111 Tamarkan：カンチャナブリから6km離れた場所に位置。

112 クワイ川の橋

怪我をしたから収容所に連絡してほしいと言った。

その人の返事は「あそこに電話があるので電話で連絡しなさい」。ちょうど電話が架設されていた。しかし、私は電話のかけ方を知らず、そのまま電話機のベルを回して交換手呼んだ。日本人の対応が悪いので「ここで交換などいらない！そのまま収容所を呼びなさい」といった。私が収容所と何回か叫ぶと靖山が電話を受けた。「あ～助かった」。靖山は私のいう事を聞いて「おい、石原、そこでちょっと待て。私が今行くから」と言って、PW一人を連れて来た。私は嬉しくて涙が出そうだった。私の銃と所持品を靖山に預けてPWの背中におぶさって宿舎まで行った。

私はその次の日に鉄道隊を通して業務報告と負傷報告をして、数日の間、横たわって親友の手厚い看護を受けた。鉄道隊と防疫班から薬をもらって飲んだり、塗ったりして、足を引きずりながらも歩けるようになった。そして6日ぶりに帰隊した。

3日間休んでまた出張命令を受けた。バーンポン（バンコク）に行ったら金澤¹¹³が管理している防疫給水班のPW 50名を撤収して来いという命令だった。その任務は無事に終わった。

今度は私にどんなことをさせるのかと待機していたが、補給係に行けという命令だった。補給係というのは皆が勤務したがる職だ。なぜかというと、すべての物品を受け払いして時々主計少尉について貨物倉庫にも行く。カンチャナブリ市に出て野菜、鮮魚、果物、肉類、などを買ってくることもある。だからタイの商人と接触する楽しみがあり、役得のある地位だったからである。しかし、私は嫌だった。

第1は曲山主計少尉が私の気に入らない上官であり、第2に将校、下士官、同僚を問わずに肉、砂糖、酒、その他のものをほしいと裏口や夜中に言って私を煩わせるだろうし、第3に私の刀のような性格からそれを排斥すれば私は人心を失い結局はバカにされるからだ。私は財貨の近くにはあまり行かない清貧な性格なのだ。

それで私はやりたくなくて、歩哨や作業監視をするつもりで病気だと仮病で横たわった。内部班長辻軍曹は病気なら医務室に行って診療を受けろといった。

113 金澤正煥：生年月日不詳。慶北大邱府徳山町。〔タイ捕虜収容所の留守名簿によれば生年月日は1921年12月6日〕

私は軍医の村岡中尉のところに行って手足が痛くて力が全く出ず、食欲が出ないとうその訴えをした。軍医官はとても慈愛に満ちた人であった。

軍医官いわく「石原は細い体格にもかかわらず、2年間、熱病一回で入院も一度もしたことがない。過労による衰弱なので、栄養をやるから食べて何日か休みなさい。そして毎朝、私のところに来てかぼちゃジュースも一杯ずつ飲んでいきなさい。「はい」。私は栄養剤数日分を受け取って内部班に来て2日間休んでいたが、補給係勤務はやめて捕虜情報課の庶務係をしろという命令が下りた。

私は望んでいた職責なのでもう横になっているのはやめ、次の日の朝に主任将校である星愛喜中尉に申告し、その日から勤務を始めた。服部中尉は訓練所のときから私をよく知っている上官なので私の性格もある程度把握しており、私の考えを読み込んで、配慮したようでありがたく思った。

捕虜情報課は主任将校星中尉、補佐役に武田軍曹、最近他の部隊から来た辻軍曹、石黒通訳官（50歳を過ぎた文官）、庶務石原（本人）、PW人員・管理に花村、労務・賃金に脇原厚助¹¹⁴、領置品・死亡に完山能祚¹¹⁵などの面々だった。私の業務は一般庶務および旬報、月報の担当であった。私の仕事は別に難しいことも複雑なこともないので、余裕時間が多くあった。上官たちもみんなよい人でいつもかわいがってもらった。

ここで星中尉という奇人を紹介する。彼は別名星鉄身とも呼んだ。訓練所の時は9所隊長だった。彼は大日本皇武館の名人位¹¹⁶で、剣道5段、柔道5段に、碁が日本棋院4段で併せて24段だという。彼が持ち歩いている軍刀は白鉄で作った長さが2尺でとても軽いおもちゃのようなものだ。星いわく、「私は素手でも真剣を相手にすることができる。保身の武器のようなものは必要ない」ということだ。身長は170cm程度だが、体重は100kgを越えるようだった。また詩の名人で、祝祭日には豆を炒って「鬼は外、福は内」と叫びながら、営内全体を回り、すみずみまで豆をまいた。朝早く起きて綾巻きの上に跪いて座り、ピョンピョン飛ぶ運動をする。性格も鷹揚で細かいことには気を使わないようだった。

114 脇原厚助：脇原厚財（創氏名）の誤記と推定。1918年4月27日生まれ。黄海道長淵郡。

115 完山能祚：1919年4月28日生まれ。慶北固城郡。

116 空手のような武術〔合気道〕

私は彼と数回碁を打ったことがあるが、9子の置き碁でも到底勝つことができなかった。彼は私に何回か教えてやろうとしたが、うまく理解できずに習う機会も時間的になかった。

カンチャナブリの慰安所

1944年5月下旬になると、タームアンの我が第4分所の収容所もかなり整備された。広い営内にはPWの宿舎数十棟が建てられ、周囲には竹柵の塀とPW逃走防止のための深さが2.5m、広さが4mの深くて広い溝も掘ってあった。

それからはすべての施設と機構が整備され、急な激務もないのでみんな時間的余裕を楽しんだ。心身鍛錬のために広場でサッカー、銃剣術、ボクシングなどを自分なりに楽しみ、室内では碁と将棋をする人もいた。私は碁を習うのに没頭した。

また一週間であれば、慰労の外出が許可された。月2回交代制で、外出はただ1か所、カンチャナブリだけだった。そこには将校慰安所が1か所、士兵慰安所が3か所あったので、我々は外出すると慰安所で遊び、食堂へ行って食事をし、市内を回って自分の所持品を買う。それに限定され、その他にはすることがなかった。

私は初め、私の順番が来ても外出しないで室内で碁を打ったり、広場でサッカーをして遊んだ。しかし、7月に友達の誘いに勝てなくて15バーツを体に付けてついていった。午前10時に軍医官の注意事項の訓示を聞いてトラックで営を出て30分後にカンチャナブリ市の真ん中で車から降り、みんな四方に散らばったが、私は親しい友達に引っ張られてついて行った。大通りをちょっと行き、小さい道に入って、「青葉」という小さい看板がかかったさびれた木の2階建ての家に入った。ここが朝鮮人慰安所だ。

慰安婦は皆朝鮮人女性で10人ほどいるようだった。入るとかなり広い待合室があり、番台がある。待合室の壁の周囲には木掛けの椅子が置かれていた。すでに10数名の朝鮮人軍属が座ったり立ったり、行ったり来たりしながら、女性たちとふざけたりしていた。切符売り場には眼鏡をかけた20代の女性が座っていた。私は切符売り場の向かいの椅子に腰を下ろした。煙草を一本

吸った。すぐに皆は2階に上がったり、他のところへ行ったりしたが、私一人だけ残ってひっきりなしにタバコだけを吸っていた。番台の女の人は雑誌を見ていたが、私をちらっと見て苦笑したように笑ったようだった。私は間違いなく捕まったような状態だった。私はなぜこんなに勇気がないのか！不細工な私が呪わしかった。

どうしても勇気が出なくてタバコばかり吸っていた。慰安婦たちは番台に降りてきてお金の計算をし、冗談を言い、上がったり降りたりする。こうしている間に12時が過ぎた。2階の友達の部屋に行くこともできず、友達も降りてこず…。

12時30分になった。さっきから私に視線をくれていた女が2階から降りてきて私の横にぴたりと座った。「誰を待っているのですか?」。私は返事ができなかった。「私と一緒にいって遊びましょう」。そして、立つと私の腕を引っ張った。私は恥ずかしい気持ちを隠せないまま引っ張られるようになっていった。彼女は私を自分の部屋に押し込んで、切符を買うお金を出してと言った。私は10バーツ紙幣を一枚出した。「切符どれだけ買ってきますか?」。一時間一枚、1バーツ50サタンだ。「思い通りに買ってきてください」。彼女は切符2枚を買って、お釣りを7バーツ返してくれた。私はそのお金は必要なときに使いなさいと言って受け取らなかった。彼女は笑いながら、「お金持ちのようですね」と言って、「ちょっと待っていてください」とまた出て行ってしまった。

すでに午後1時が過ぎた。彼女は戻って来なかった。私は田舎者なので騙されたのではないかと、腹が立ってその家を出てしまおうかと思っているうちに、1時30分になってやっと彼女はうどん2皿とくだもの、飲料水などを買って入ってきた。私は彼女と一緒に団らんな家庭の夫婦のように食事をして、果物も食べ、話をした。名前はなんだ、故郷はどこだ、など尋ねたら、彼女は立て板に水のように自分の人生を話したのである。

名前は〇子、本名は李〇〇、故郷は全北K郡K面院坪里で、家が貧乏で兄弟が多く、12歳の時、全南のある港の飲み屋に養女に行き、雑用をしていて16歳になる春に彼女の養母が彼女を人買いに売ってしまった。売られた彼女は満洲に行き、日本軍の慰安婦になり、7年の間、満州、北シナ、中シナ、南シナを経てベトナム、マレーシアまで行ったが、またここまで流れてきた

浮き草だといった。その間に経験した苦勞話を限りなく続けた。

そうしているうちに午後3時が過ぎた。4時までには帰営しなければならぬので、私は立とうとした。彼女はあと30分ぐらい遊んでいってもいいので、その後帰れといった。私がもう少しいて、立つとサイダー一杯をくれながら、この次の外出の日を待っているから、他のところに行かないで、きっと私のところに遊びに来てという。何ということか、私も10年付き合った恋人のように、別れが惜しい。本当かウソか彼女は涙ぐんでいるように見える。彼女が名俳優ではないのに…。

私はその次の外出日を逃さないで行きたかった。それでそれから2週目の外出日にまた行った。しかし、慰安所、青葉はどこかへ移動して無くなっていた。

1944年の「タームアン」キャンプの夏雨季は長雨ではなかった。みんなの希望である月2回の慰勞外出制度も10月に入ってなくなった。なぜかというところすべての戦線で日本軍の戦況の不利がはっきりしてきたからだ。特に隣接のビルマ戦線¹¹⁷の敗北により、その敗退路の最も近道が、これまで我々が参与して建設した泰緬連接鉄道で、唯一の退却コースになっていた。連合軍情報部がこの鉄道の完成と当地域の捕虜の撤収を知らないはずがない。

今や、たびたび連合軍の爆撃機が飛んできて主要橋梁などの要所と撤収部隊などに爆撃をする状況に至った。だから一時、軍事物資補給都市として栄えたカンチャナブリ市街も爆撃を受ける確率が高い都市として危険となり、我々が楽しんで尋ねていた慰安所のようなものはどこか行ってしまったのだ。

連合軍空襲以後の沈滞した雰囲気

日本軍の対空防衛力は極めて微々たるもので、連合軍のB24爆撃機が低空を思うままに飛び回る状況であった。我が収容所が爆弾の洗礼をうけたらどうするか…？いや、彼らがPW収容所を知らないで盲爆するはずがない。しかし、カンチャナブリ郊外に位置する我が収容所本所の近くに焼夷弾を浴びせて火の海を作った事例もあるではないか！我々は少し不安な日々を送り

117 インパールでの戦闘

ながら、なんとかタームアンキャンプ生活での1年がほとんど過ぎた。

その最中の1945年3月1日、我々200名余の中でたった5名の進級発表があった。すなわち陸軍雇員¹¹⁸とされた。大家金藏¹¹⁹(李鍾明、副官室人事)、杉山健太郎(金俊植、副官室庶務)、松園¹²⁰(金〇〇、副官室庶務)、大原¹²¹(金成杓、副官室)、金本¹²²(金喚培、警備教育)など5名だ。だが私は不満だった。私自身がその中に入れなかったからではなく、3年間を皆とともに一生懸命勤務してきたからだ。また、ここは軍隊ではないか。我々は教官ではなく、現役軍人のような資格であるからなのだ。

連合軍の空襲はその度数がだんだん増した。ビルマの国境を越えてくる敗残兵の行列、その骨と皮が引付いた体を見るたびに私は戦争の残酷性に万感の思いが迫った。

1945年6月下旬、我が第4分所は1年余、親しんだタームアンキャンプを撤収し、タイ中部地方にあるサラブリ¹²³というところに移動して収容所を開設した。開設と書いたが、完全な荒地ではなく、前に他の部隊が駐屯した痕跡があるところで、数日間で我々に必要な設営ができた。

ところで、ここの空気がちょっと尋常ではなかった。衛兵司令と衛舎掛を我が部隊ではない他の部隊の軍人下士官1名と兵長1名が来て、我が歩哨掛と歩哨18名を掌握指揮するのである。

私の固有任務が捕虜の情報課の庶務なので、移動の初めに歩哨掛として歩哨18名を引き受けて日本軍下士官の指揮下で衛兵勤務をしろといわれた。気分が悪いことだが、命令なので仕方がなかった。司令は軍曹であった。衛士掛は兵長で、私は歩哨掛なので時間ごとに歩哨6名ずつを引率して、異常有無の報告を受けて交代させるのが任務だ。前に我々で衛兵勤務するときはいくら厳重な衛兵所といっても笑いもあり、話をやりとりし、軽い冗談もあり、活気もあって厭くことはない勤務をしたのだが、今はとても静かで緊張するのだ。日本人司令と衛舎掛もお互いに何か対話したいこともあるはずなのに、

118 伍長や軍曹の待遇。

119 大家金藏：李鍾明、1909年2月28日生まれ、京畿道京城府西大門区

120 松園秀吉：金〇〇、1921年11月24日生まれ、慶北達城郡

121 大原貞根：金成杓、1921年6月20日生まれ、京畿道平沢郡平沢邑蛤井里

122 金本邦彦：金喚培、1910年6月2日生まれ、全南務安郡

123 Sara Buri、バンコク北部の都市

一日中勤務に関する事以外は厳めしい姿勢で一貫しているので前より倍も心身共に疲労した。

我々はあれこれと疲れた一日の勤務を終えて次の当番に引き継いだ。事務室の前まで秩序整然とした部隊行動をとり、整列して日直士官の平松愛太郎曹長（副官室人事担当）に衛兵勤務を異常なく終えたと報告した。この虎下士官は私とはよい間柄ではなく、また何か言いがかりをつけるのではないかと、私なりにミスなくやろうとしっかりした言葉で言った。ところが「石原、お前は部隊の指揮をよくやった。私はお前がそんなに部隊指揮をうまくやるとは知らなかったなあ！」とほめた。

私は収容所内で敵もなく反目する人もなく、お互いに競争する者もないと自負していたが、ただひとり、この人事担当の平松曹長が私を憎んでいる目つきなのだ。なぜなのか。私は彼の指揮下で働いたことがない。

前にタームアンにいた時のことだが、その当時仕事が別になく教育に重点を置く間、歩哨規則、戦陣訓、軍人勅諭など、難しい文句を暗唱させられた。万一暗唱ができないものは外出をさせてくれなかった。それで皆外出がしたいので、寝ても覚めても暗唱に熱中している時だった。

あるとき、平松曹長が日直士官の日だった。普段は朝点呼にあまり出られない私は「平松が内務班に急に入ってくる日は…」という心配のために点呼場に行き、一番後ろに立った。前にはみんな背の高い人なので、日直士官の目につかないだろうと、思っていたのだが、人員報告をうけた平松曹長は「石原！」と大声で呼んだ。私は「はい！」と大きな声で返事をした。「軍人勅諭礼儀項を暗唱してみろ」。皆は気を付けの姿勢を取った。

天皇の勅語、勅諭はすべて名文である。軍人勅諭は其中で暗唱するのが難しい文章だ。私は前から暗唱に自信があるので、とてもうまく、すべての場内の人は皆聞けるようにと大きくはっきりと暗唱した。これがかえってわざわざいした。平松は私を自分の前に呼んで立たせ、暗唱の調子が悪いといった。無声映画の弁士のようなとか、歌を歌う調子のようなとか、不敬だとか、自慢げの態度だとか、しばらく虐められたことがあった。

それで私はいつも平松を遠ざけたいという気持ちで生きてきた。今日のような平松の態度は何を意味するのか。私と親しくしようということか。所内全体の雰囲気も何か前と同じではない。将校たちも言葉数が少なくなり慎重に

みえる。

1945年7月、私は2次進級の名簿に入った。4ヶ月ぶりにまた進級があったが、今回は陸軍雇員でなくタイ捕虜収容所雇員という進級命令だった。西原¹²⁴（医務室庶務）、石原（本人）、花村義雄¹²⁵（俘虜人員）、高本¹²⁶（経理庶務）、脇原¹²⁷（俘虜人員）以上5人だけが2次進級者の名簿だ。雇員は伍長軍曹相当級だから、これから私は衛兵勤務をしなくてもよく、日本軍下士官に先に手を挙げて敬礼しなくてもいい。しかし親友と郷友たちにすまない。早く皆一緒に雇員階級章を付けなければならないのに！私は進級をして、新しい気分で、私に任された事務に心を尽くし、勤務に熱中したが、所内の雰囲気は前のように明るくはなかった。

7月下旬のある日だ。ついに大きな事故が起こった。それは我が分所のトラック運転手の同僚石井¹²⁸がバンコク市から我々の分所に乗せてくる公金25万バーツ（25万円〔ママ〕）を入れたトランクを持って逃げた。石井は我々同僚みんなが恐れる存在だ。彼は30歳過ぎで60kgになるかならないかの小柄だが、現地人のような半分黒い皮膚にがっしりした体格をしていた。彼は体育といえはできないことがなかった。特に鉄棒、ボクシングなどが得意だ。ともかく犯しがたい悪党ボスのような行動をする人だ。しかし、普段は無口で同僚には情け深い面もある人だ。

本所内の空気がとても重くなった。そして2～3日が過ぎて内務班ではひそひそと耳打ちが回る。「作命27号」、それはタイ捕虜収容所長の作戦命令第27号をいうのだが、この軍事一級機密文書がどのようにして我々の耳にまで入ってきたのだろうか？石井がそれを盗み見したのか？その文書も一緒に持っていったのか？そうしてその機密を石井が親友の誰に知らせたのか？とにかくその内容が戦慄を覚える恐るべき内容だという。即ち「これから○○地点に洞窟の掘削作業を敢行せよ」という要旨だそうだ。これが事実ならば…。

我々がこのサラブリ地域に来たのは、前駐地タームアンが安全ではなくて

124 西原熙朝：韓熙、1914年12月14日生まれ、全南潭陽郡

125 花村義雄：義男（創氏名）の誤記と推定。鄭相権、1923年03月20日生まれ、慶南昌寧郡

126 高本哲助：1921年12月10日生まれ、全北沃溝郡沃溝面沃溝里

127 脇原厚助：脇原厚財（創氏名）の誤記と推定。1918年4月27日生まれ。黄海道長淵郡

128 石井重宗：金鉄権、1913年4月8日生まれ、慶南釜山府瀛州町

比較的 safety 地域を選んだのだ、PWをそのまま働かずに遊ばせることはできないので、最後の防護線である砲台や防護壕などの構築作業に動員するだろうと考えた。また噂もそういう内容であった。公金 25 万パーツを失った程度の事故とは違うのだ。

幹部たちは、石井が公金を持って逃げたという事故については一切口を閉ざしている。この事故が起こってから数日後、我々が平素所持していた小銃弾はすべて回収されて、衛兵勤務者にだけ数発ずつ支給した。

8 月初旬のある日、本所長の菅沢大佐が来た。我々を広場に集合させ、懇切な訓示演説をおこなうのだが、その要旨は「私は諸君たちを見るとまず幸福感を感じる。なぜなら、私は南方軍第 1 の強健な体力をもち、活気があり、士気にあふれる諸君を私の部下に持ったからである。諸君と私は故国から遠く数万里の異域に来て、ひたすら皇国臣民として、聖戦完遂を目的にすべての忠誠を尽くしている。一緒によく考えてみよう。諸君は故国に父母兄弟、妻子、あるいは恋人が諸君の凱旋を、手を合わせて祈っているだろう。私もやはり、故郷に愛する妻子がいる。しかし、彼らと愛して生きていくことは今後のことであり、現実には諸君が私の愛する息子だ。私は諸君の尊敬されるべき父であることだ。諸君の不幸が即、私の不幸なのだ。諸君の危機が即ち私の危機なのだ。私はどうして自分の息子の不幸や危機をみて跳んで行って救わないことがあるのか。当然我々は血縁の家族関係であり、私の命に従って着実に服務し、もし困難があつたら分所長を通して私に言ってくれ。我々は情が通じているので、誠意をもってすべての問題の面倒を見る」。こんな訓示を聞いて私は、その切実な言葉に情感が沸く前に、今後の展望に一層暗鬱なものを感じた。

8・15 終戦

1945 年 8 月 16 日朝、戦争は終わった。昨日、天皇が無条件降伏の放送をしたという。朝ごはんを食べて事務室に行くと、誰も出てこなかった。本当のようだ。将校たち、下士官たちは皆、自分の部屋から出てこなかった。午後には上部から何か連絡が来たのか、分所長の鈴木大尉は PW 責任将校（リリー中佐あるいはナイト中佐）を呼んで面談した。「我々はあなた方の連合軍に負

けました。これからはきっと連合軍側から命令があるので、その間にあなたが責任をとってこの収容所を引き受けてください。我々もこれからはあなたの指示を受けます」。このように簡単に、引継ぎが終わったようだ。我々は、捕虜たちの乱暴や復讐の行動があるのを心配したが、彼らはきちんと秩序もあり、静かだった。

8月17日、日本軍は我々に150バーツずつを支給して、倉庫に行って必要なものをわけて持っていけといった。我々はあらかじめ約束した。早くここを抜け出して今後の行動を決めようと。いつも皆から尊敬されている平岡軍医が我々に言った。「未来に朝鮮が独立国家になるだろうから、諸君は我々と一緒に行動することはなく、すぐここを出るのがいいだろう」。

彼も知識人だ。我々の考えと同じだ。倉庫が解放されたので、皆出入りして毛布、服、軍靴などを選んで分け、また食品などを持ってくる人もいた。

次の日(8月18日)はここを出る日だ。皆自分の荷物を取りまとめておいて、その日の夜はこれからの行動に関して研究し討論して、苦悩に満ちた夜を過ごした。18日に朝ごはんをしっかり食べてみんな出発しようとしたが、同僚の木村明成¹²⁹は団体から離れて一人で朝早く出た。しかしタイのヤツに刀で切られて、持って出た包みを奪われたうえ、鼻をつかんで、血だらけの顔で「助けてくれ」と叫びながら入ってきた。鼻を切られ鼻柱がぶらぶらと落ちそうだった。彼は急いで村岡軍医のところまで縫って治療してもらった。

我々は将校たちに別れの挨拶をして出発しようと将校の幕舎を訪ねたが、分所長以下みんな戸をびたっと閉めて出て来ず、呻くような声で気を付けて行けという。ただ村岡軍医だけは泰然とした顔で出て挨拶をした。「さようなら。体に気を付けて」、そうやって我々の出ていく姿をみて座った。

我々は振り返ることもせず、速足で営門を出た。さあ、我々は解放された体だ。しかし、我々の運命は誰が予測できるか。道路に出た我々は、お互い絶対に個人行動はしないことを約束し、郷友同士、または親友同士三々五々組み合って歩き始めたが、200余人の行列は壮観だった。皆30～40kgの荷物をもっていたが、私のものは10kgにも満たない一番小さい荷物だ。私は物を欲しいと思って倉庫に行ったこともない。いつも使っていた毛布3枚のうち2枚と半袖、半ズボン、水筒、洗面具などが10kgになるものか。我々が

129 木村明成：1918年12月28日生まれ、黄海長淵郡

歩く行路は7～8 km 先にあるサラブリの汽車駅までだ。我々は休みながら、お互い離れるなど激励しながら、駅に着いたのは昼食時間が少し過ぎた時だった。駅に行ってみると、今日はバンコク行きは汽車はないという。それで駅の近くにある古い空き倉庫を見つけてそこで一晩を過ごすことに決めた。昼食兼夕食で持ってきた米で各自夕ご飯を作って食べ、一晩を過ごした。

在タイ高麗人会組織

8月19日午前、サラブリ駅から汽車に乗ってバンコク市に入ると、すでに集結している本所と2分所の人たちと連絡がついた。我々は市内の「チャンファンニツ」¹³⁰という寺院で合流することができた。その日の夕方に数名の友達と商店に行き、民間の私服一着と靴を買って着替えた。友達も皆民間の私服を買って着替えた。

その日の夜、私たちは700余名が1箇所に集まって在タイ高麗人会¹³¹を組織した。我々是我が民族が一つになってこそ力が生じ、帰国の道が早められると考えたからだ。そして連合軍とタイ政府に対し、宿と食の問題と帰国輸送船問題などのための交渉窓口の一元化が絶対に必要だったからである。

9月20日、寺院は人が多くて騒がしいので、本部事務室を九層楼というホテルの部屋3間を借り、事務を始めた。私はホテルの部屋で3日間、内務部長の李鍾明を助けて名簿作成、会員証発給、会則草案などの事務の仕事をしていた。すると連合軍の命令だといってタイ国防省が、我が朝鮮人たちを一つの場所に集結させて収容管理するようになったので、アユタヤ¹³²へ行かなくてはならないといった。

話は変わるが、慰安婦の話の一つしよう。ある日私は人事事務担当者として禁男の家で婦女子だけが収容されている別棟2階に名簿の対照確認のために

130 〔原文に「장황닛」と記載、現在の位置は特定しにくい。〕

131 在タイ高麗人会役員の構成は次の通りである。①会長 金海利：慶北大邱出身、米国ハワイから高校まで出た人で英語が堪能（2分所）、②副会長 許明会：黄海道出身（2分所）、③総務 金煥培：全南務安出身（4分所）、④内務部長 李鍾明：ソウル出身（4分所）、⑤外務部長 朴貞根：釜山出身（本部）、⑥財務部長（実名失念）、⑦文化厚生部長 閔丙元：京畿道出身、⑧監察部長 盧氏など。各部に事務要員数人を置く。会の会員は中隊編成。

132 Aynitthaya：バンコクの北側64km 地点にあるタイの古都

行ったことがある。そこには小さくてか弱い体つきに黄色で病状がひどい20歳に見える女がいた。私はとても気になってある女に聞いてみた。

「あの人は何の病気であるように衰弱しているのか?」。その時4～5人の女が私を取り囲み、その中の一人が話をするのだが、お互いに話を付けたしたりもする。「私たちが今年の春ビルマから後退する軍人たちについて大変な苦勞をしながらタイの国境まで歩いてきたが、あの子は産み月だといってとても歩くことができなかったんです。ほおっておくこともできず、一日に大方50里も歩いて、また30里も歩いて軍人たちに頼んでご飯をもらったり、また飢えたり、ようやくに国境近くまで来たんですが、あの子が『私はもういけないよ、お腹が痛くて』といって木の影の下に入って横になるのよ。アイゴ、子どもを産むのかと思って私たちもそこに座ってしまいました。そしてあの子が、夜があける頃まで一晩中呻いて、明け方に分娩をしました。けれどもその子が男の子か女の子かも見ずに胎盤が出るのだけを待っていて、少し後に胎盤が出たんです。我々はその子に聞いたのです。『どうする。歩けるかい?』我々はどうしても行かなければならないのだが、その子の返事は『お姉さんたちは行って。私のためにお姉さんたちが一緒に死んではいけないので。私はやっぱり駄目みたいなので、我ら母子のために木の葉でも取ってかぶせてから行って』。そうって目を閉じてしまったんですよ。私たちはしばらく考えたけど、何の妙案もない。これからも何百里をさらに歩かなければならないのかもしれない。まず、あの子を連れて行く力がない。自分の体一つ動く力もないのだ。それで近くの木の枝を折って覆ったようにして置いて、泣きながら国境を越えて野营地まで来た。そこで軍人たちにご飯をもらって食べたら、とても疲れて、もう歩くこともできず、木陰で何時間か休んでいました。ところがあの子が杖をついて歩くように這うように、私たちを追ってきたではありませんか。あまりにも恨みつらみがある命なので死のうとしてもできなかったようです。」

私はこれ以上話を聞きたくなかった。その当時はビルマ戦線の敗退で敗残兵の残酷でむごたらしい格好が国境線を隙間なく並んでいる状況であった。なお、我々が建設した鉄道は開通したものの、あちこちの橋梁が爆破されて運行ができなく、廃線の状態になっていた時期であった。

解放後、帰国できずにタイで生活

8月26日、我々全員はタイ国防省の指揮・引率のもとに汽車でアユタヤ市に運ばれた。我々はアユタヤ市のはずれにある学校のような数棟の建物と広々とした運動場があるところに收容された。その時、私は服を買い、食事を買って食べ、数日間お金をたくさん使ったので手に残ったお金が数十円しかなかった。むしろこのようになったのはよかったと思った。我々が收容されてから数日後にタイ国内各所に散在していた我が同胞たち、すなわち軍人100名余の他、従軍商人、記者、慰安婦など合わせて200名余が收容された。後に台湾人200名余まで一緒に收容され、総收容人員が約1,300名であった。

我が高麗人会はそのまま存続させ、本部と軍人軍属4個中隊、商人と慰安婦1個中隊に編成して、風紀が乱れないことに力点を置いて秩序ある自治生活をした。

タイ政府からの給食事情は、主食の白米と副食用に1日一人当たり85サタン(85銭)をくれるが、これは飢え死にしない程度のものであった。初期の数ヶ月は皆少しずつ持っているお金で補充しながら食べたが、お金が無くなり、タバコもやめる状況になった。でも我々は要領がよかった。副食用にもらったお金で、豆を買って育て、子豚を買って飼って栄養補充をし、葉タバコを買って切って巻いて吸った。栄養失調で病気になった人もなく、9ヶ月を耐え抜いた。

さて、我々がここへ軟禁收容されたのは連合軍の戦犯者、すなわちPW虐待嫌疑者の捜出拘引¹³³が第1目的ではないかと思った。それで我々の收容初期2～3ヶ月は食品購買に必要な人員以外には一切外出が許されなかった。連合軍捜査官または元捕虜の将校がいつも出入りし、我が軍属出身達を捕まえていった。私も心配した。言及したとおり、私は大尉を脅迫した事件と少佐の頬を殴った事件が心に引っかかっていたためだ。この二つの事件以外に、PWたちを同情したことは多いが、虐待したことはなく、またPWの所持品を欲しがって彼らに接近したことは全くなかった。彼らも人間だからまさか私を悪人としては見ていないだろう。私は自分なりに慰めていた。

ところが、ある日、私は本部人事事務を終わって4中隊に入って、尹大重、

133 捜査し発見した後、引っ張って行く。

関泳三と3兄弟のように一緒に食べて遊んで寝ていたら、本部から関泳三を連れてこいという連絡がきた。関君が本部に行って、ちょっとしてから蒼い顔をして帰ってきて自分の荷物を整理しはじめた。「どうしたんだ?」、「僕、シンガポールへいくことになった。」、「なんで?」、「タームアンで、歩哨に立っているとき、PW脱走事件でそのPW銃殺を目撃した証人として立たなければならないんだって」、「それはそうだけど。うんこしなければ仏様のようなお前が、なんでPW虐待をするか、とにかく面倒になったな。体に気を付けてちゃんと帰ってこいよ。」その後、関君はタイには帰ってこなかった。

そして数日後のことだ。我が軍属全員がチェックを受けた。全員が運動場に出て2列縦隊になって、名簿、人物を順番に点検を受けたが、その時の調査官は皆元PW将校で、チーム長格の上級者は、我が4分所の軍医官であったハービン中佐であった。その日はまだ捕まった人はいなかった。次は僕の番だ。5人の将校の中、中央にいたハービン中佐をみて私は拳手敬礼をした。中佐は私を見ると懐かしそうに言った。「オ～、グッボーイ!」。横にいる将校をみて何かひそひそといった後、通り過ぎろという。「ヒュ～、助かった!」。その日を最後にその後、捕えに来る人は目につかなかった。

すでに、アユタヤでの生活も数ヶ月が過ぎた。我々の望郷の気持ちは一日千秋の思いだが、連合軍の輸送船は何の音沙汰もない。我々は退屈な時間を過ごすために、いろいろなことをした。運動場ではサッカーを、室内では将棋、碁をして、夜になれば仮設舞台を作って素人劇に詩の朗唱、のど自慢など、それぞれ素質と趣味の遊びをしながら時間をつぶした。

帰郷の旅

1946年5月18日、輸送船が来たという通報を受けた。次の日、車でバンコク市まで行き、バンコク港から小舟に乗り、外港まで出てから9,000トン級の大型輸送船に乗り換えた。タイを出たのは5月19日の夜間だった。

5月24日、我々が乗った船サラトガ号¹³⁴は台湾の基隆港に帰着し、台湾青年(ほとんどが軍人出身)200人を下船させ、26日に基隆を出港、5月31日に

134 USS Saratoga, CV-3 (サラトガ): 米海軍空母。太平洋戦争で破損されなかった航空母艦3隻のうち、1隻

恋しかった祖国、釜山港に入港した。「あ、もう着いた。釜山港だ」。みんな甲板の上に出てうれし涙を流しながら、歓呼の声をあげた。

ところが、我々が乗った船は港の中心で停船したまま、接岸下船をさせなかった。我々はそれから5日のあいだ船中から釜山港を眺めていた。我々が帰国したことを釜山に住んでいる家族たちが聞いたようだ。埠頭には連日、人々が出てきて我々を見て手を振っていた。ところが入港6日目に船は船頭を回した。

コロナ防疫関係で釜山に上陸できず、仁川港に回すと聞いた。我々は船室に入って横になってしまった。そして2日後の6月6日に仁川港の外遠くに停泊した。ここでまた仁川市と月尾島を眺めながら、一週間も停泊した状態にいた。船内には飲水も副食も不足しているようで、顔を洗う水もくれない。おかずはとても塩辛いエビの塩辛だけだった。

気をもみながらの7日間が過ぎ、6月12日になって小船艇が来てこれに乗り換えて仁川埠頭に上陸した。

「ああ、解放された我が祖国だ！僕の愛する祖国、大韓民国だ！ここに祖国建設に役立つ役軍の一団が帰ってきたぞ！」

本当に、3年10ヶ月ぶりの再び踏む私の祖国だ。我々は生きて帰ってきた。一番先に我々を迎えてくれたのは帰還同胞援護会という腕章をつけた青年会員たちだ。彼らは我々を2列にさせて白い小麦粉のような粉を全身と所持品一切に吹きつけ、お金1,000円（朝鮮銀行券10円紙幣100枚）を一束ずつくれ、仁川駅に連れて行き、各自故郷に帰れと言った。駅には十数両の貨物車があり、釜山行き、木浦行き、麗水行きなどの表札が掛かっていた。

その時、私は我が山清郡出身の友達9名、黄潤基、李相千、権ギョンス、呉聖淑、チョ・チョンギユ、閔廷植、権チャンビョン、崔ジェジョンと釜山行きの汽車に乗った。6月12日に仁川を出発した列車は13日午後2時ごろにようやく金泉駅に着いた。

金泉で下車した我々はある食堂で食事をしすぐバスで帰ろうとした。ところが、普段、私ととても仲良くしてきた間柄で、この友情に引かれて家に帰らないで私について来た金泉出身の徳山〔洪〕¹³⁵君が、どうか自分の家に一緒に行って数日間休んでから帰れという。彼は自分の家は生活に困ってい

135 徳山勝三：洪一泰、1922年3月26日生まれ。慶北金泉郡金泉邑旭町

ないし、兄は新聞記者を長い間していて、間もなく結婚させるべき妹もいるので、見合いがてら、一緒に行こうと誘った。私は行ってみたい気もしたが、そうするわけにはいかなかった。一緒にきた故郷の友達だけ先に帰して、私一人だけ遅れたら家にいる両親の気持ちはどうだろうか。それで洪君には後日を約束し、我々はお互いにたびたび手紙をやりとりしようと言って送り、居昌に行くバスに乗った。

居昌に帰ってきたら、山清に行く車がなかった。ある旅館に入ったが、まじめな権ギョンス君が、いつの間にか私のいとこのおばさん（三従始母〔ママ〕）の家に行ってきたという。彼とも親戚の関係にある。それでそのおばさんが私を旅館に泊まらせないで、必ず連れてくるように言うから、早く一緒に行こうといった。

「ところで石君、君のご両親は去年の春に亡くなられたそうだよ」。「なに…、お父さんが…」。「晴天の霹靂…」。「君、それが本当なら、私は不徳な者だ、おばさんに会いに行けるか、後日にお目にかかるといってくれ」。そして友達とはもう話もしないで、横たわって一晩中、涙の夜を明かした。

次の日、1946年6月15日、私が故郷を離れてからちょうど4年ぶりに故郷の土を再び踏んだ。



3

日帝強制連行 太平洋戦争参戦体験受難記

—南洋マーシャル諸島ミレ島にて—

李仁申

はじめに / 祖国を離れて… / ミレ島への道 / 受難のはじまり、ミレ島に到着 / 患者送還と医務助手への配置 / 熾烈になった米軍空襲とさらに酷くなった作業 / 米軍の大空襲 / 不利な戦局での日本軍の残酷と米軍の懐柔 / ますます悪化する食糧問題 / ルクノール島への配置と生活 / チルボン島惨事事件発生 / チルボン島事件の動機と事後処理 / ルクノール島脱出の決心と実行 / マジュロ島捕虜収容所そして同胞救出作戦 / ハワイ捕虜収容所の生活 / 夢に描いた祖国の懐で… / 4年ぶりの家族再会 / 解決されない労賃問題 / 1995年6月、マーシャル諸島のミレ島と離島の踏査記

李仁申（イ・インシン） 創氏名：東森仁州

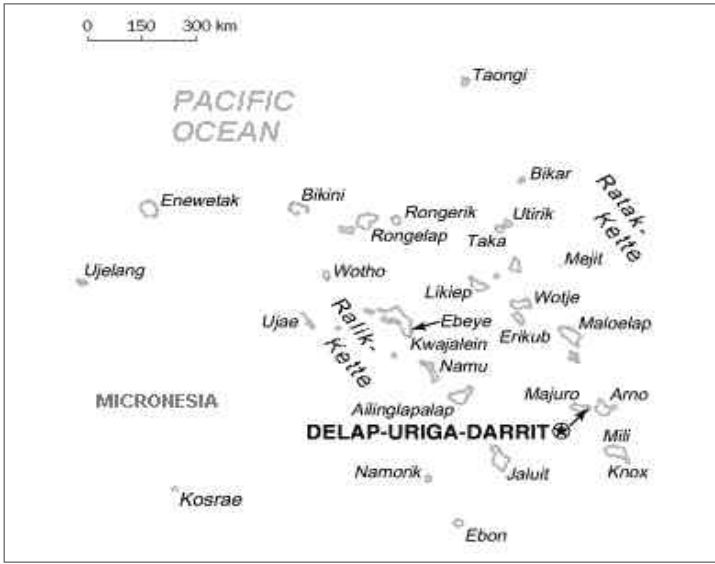
- 1923.1.15. 全羅南道長興郡長興邑生まれ
- 1942.3.23. 芝浦海軍施設補給部所属工員としてミレ島に動員〔第4海軍施設部配属〕
- 1945.6.28. 米軍捕虜となってハワイ捕虜収容所に収容
- 1946.2. 帰郷

はじめに

浅学非才のくせに体験記を書こうとしたが、まとまりがなく表現力の不足で文章がぎこちなくて諦めた。しかし、同じ人間なのに人間以下の奴隷扱いを受け、ひどい労働を強制されたが、善良で一徹な我が民族は、骨身を削るような苦痛に耐えて、殺伐とした戦場で幾度も死線を乗り越えながらひたすら頑張った。それにもかかわらず、末期にはなんの罪もない我が民族の若者たちを無残に虐殺までした。そうした非人道的、天人無道な殺人魔の日本人の蛮行を、永遠に埋もれさせることができなかった。そこで、いささかの誇張もなく、見たとおり聞いたとおりの赤裸々な真実を明らかにしようと、未熟ながらも筆をとった。

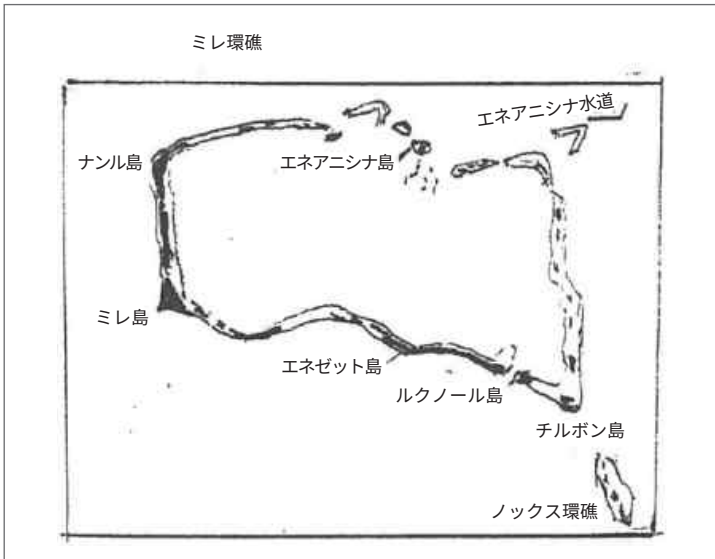
祖国を離れて…

1942年3月21日、長興邑を出発して列車で大田を經由、3月23日釜山港の埠頭に到着した。集まった人員は、1つの道から800人ずつ、3道で2,400人だった。簡単な形式的身体検査をした。1つの班は40人で、長興郡は2つの班で40班、41班だった。班には班長1人、副班長2人ずつを置いて班員を引率させ、5つの班単位で団長を選抜して班の責任を負わせた。各自の所持品は南方の熱帯地域だからといって、ランニングシャツ、パンツなど少なくて簡単なものであった。



マーシャル諸島

* 地図の出処：<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%83%AB%E8%AB%B8%E5%B3%B6> [原文の地図にはミレ環礁の一部が欠落されているため、差し替える。]



マーシャル諸島（李仁申が書いたマーシャル環礁）

* 日本語地名の出処：防衛庁防衛研究所戦史室編、1970、『戦史叢書 中部太平洋方面海軍作戦 (1) 昭和 17 年 6 月以降』朝雲新聞社、別冊附表。
https://www.nids.mod.go.jp/military_history_search/SoshoView?kanno=038

私たちが乗る船は「あるぜんちな丸」¹³⁶で、平時は貿易船〔貨客船〕であり、日本でも最大級の汽船であった。3月24日、各自所持品の準備を完了し、全員乗船して隊列を整え、各道の班別に指定の船室宿所が配置されたが、我が班はいくつもの階を下りて一番下の階が割り当てられた。室内は貨物積載の倉庫だから空気が濁り気分が悪かった。戦時にもかかわらず、太平洋を航海する船舶は非武装船であったが、先頭に木造模型の大砲1台が装備されていた。もっともその当時は太平洋戦争初期でタイ、シンガポール、フィリピンなど日本が破竹の勢いで連戦連勝して占領し、太平洋の各島嶼は何ら損害もなく、無血上陸したのだから無理もなかった。

船が出発してから30分もたっただろうか、私は船酔いが始まり、時間が経つにつれて激しくなり、めまいがし、頭が痛くて耐えられなかった。座っても横になっても同じで、歩き回することは、まったく不可能だった。それでも目を閉じて横になっていれば、少しは耐えられた。食事の時間になり、飯櫃がきてそのふたを開けると、ご飯のにおいで胸がムツとなり、一匙も食べることができず、好きだったお菓子や果物も喉を通らなかった。私に必要なのは飲み水だったが、それすら量が限られ、すぐには補充されないから、歩けなくなった私はさらに苦しんだ。

私は僻地の農村の生まれで、20歳になるまで旅行どころか遠方にも一度も行ったことがなく、世間をまったく知らない未熟でまぬけな田舎者だった。小便がしたくても唐突に誰かに聞くこともできず一人で悩み、乗船するときに甲板で見かけた便所をやっと探して用を足した。そして確かに自分の宿所を探して行ったはずなのに、道を間違えたようだった。まったく見知らぬ他の班に行ってしまった。めまいがし、頭は痛いし、誰に聞く気力すらなかった。しかたなく甲板が上がって再度探そうと気持ちを整えた。手探りでどうにか甲板へ上がったが、めまいがひどくなって正気でないので、もう探すことなど考えられず、起き上がる気力すらなくなって、甲板の上の台秤の上で横になってしまった。朦朧としているあいだにどれほど時間がたったのか。故郷の親友たちは、たぶん便所にでも行ったのだろうと思っていたが、10回も

136 あるぜんちな丸（Argentina Maru）は、最初、世界一周用の豪華旅客船として1939年に建造、1942年に日本海軍に売却、航空母艦海鷹に改造。1945年7月24日、別府湾で機雷に接触して座礁し、7月28日に爆撃を受ける。

往復できる時間になっても帰ってこないで、大変だと四方八方を探し回り、甲板上で私を発見し背負ってきたというから、大の男として本当に恥ずかしくてたまらなかった。もちろん船酔いのせいだったが、まぬけでしっかりしていないせいで、親友たちに迷惑をかけたのだから、申し訳なく面目なかった。後でわかったことだが、宿所のすぐそばに甲板があった。とにかく2,400人のうち、船酔いで私にかなう相手はいなかった。

ミレ島への道

釜山港を出港して4、5日後だったか、島の名前は思い出せないが小さな島で、第1次の800人が下船して上陸した。その数日後、トラック島¹³⁷に第2次で800人が上陸した。船が停泊したので甲板に出て見渡すと、かなり大きな島で高い山もあり、作業場で作業する人の姿も見えた。そして偵察機が巡回し

ながら警戒しており、良い島だと思われた。あとでわかったことだが、トラック島は日本の海軍太平洋艦隊本部の要塞基地で日本の海軍艦隊司令官山本五十六¹³⁸長官が駐屯していたという。1時間ほどで下船作業を終えトラック島を去った。

航海途中のある日、順調に進行していたのに突然揺れがひどくなり、室内の板材などが30分あまりの間ひどく揺れて、どうしたのかと思った。後でわかったことだが、何か怪しいものを見つけて最大速度で逃げたそうで、不幸中の幸いだと思った。確かなことはわからないが、その頃

李仁申の海軍軍属者名簿

137 Chuuk、現在名はチューク。

138 山本五十六：1884年4月4日～1943年4月18日。旧日本海軍の26、27代連合艦隊司令長官。

から太平洋全域に米国の潜水艦が出動したようだった。

釜山港を出港すると同時に、私はまる 14 日間、ご飯は口にせず水だけを飲んで、やっと生きながらえてきた。ひどい船酔いでぐったりと息も絶え絶えになって横たわっていると、誰かが目的地であるミレ島に近づいたといった。一日千秋というが、待っている日々はどれほど長く退屈か、間違いなく死にそうだったが、その言葉を聞くと目がぱっと見開いた。ああ助かったと思うと、ひとりで新たな気力が湧き上がった。勇気を出して一行の後について甲板が上がった。近くに島が見えた。長い間みんな船酔いで苦しんで疲れ、嫌気もさしていた。航海中の危険もあって不安だったから、誰かれなく安堵感で歓呼の声が満ちあふれた。

受難の始まり、ミレ島に到着

1942 年 4 月 6 日午前中、私たちはミレ島¹³⁹ 上陸を終えて野外で昼食を食べ、午後に現場指揮者について全員が作業場回わりをして、夕方に宿舎に戻った。忠清南道の人たちがひと月ほど前に先遣部隊として上陸し、道路や宿舎工事などの準備をしており、7、8 日前に日本人が 80 人余り上陸したという。

ミレ島は諸島の中で最も大きな島で中央に位置し、島の長さは 3km 程度であった。島全体が椰子の木のジャングルで、パンノキ¹⁴⁰ が多く、熱帯樹が鬱蒼とした風情をかもしだしていた。島は地形が平坦で、満潮になると海水が島全体を覆うようだった。

ミレ島はパンノキが多く食物が豊富で、かなり多くの先住民が居住していた。住民たちの生活様式は、住居は丸太を組み立て椰子の葉で覆い、ゴザを敷いて住んだ。その当時、男たちのほとんどは長ズボンをはいていた。履物は必要なく男女とも裸足だった。ご飯はまったく食べず、主食は椰子の木の実から「チャガロ」¹⁴¹ を採取して食べ、たまに海に出て魚を捕まえて食べるから、生計維持するのに何の支障もなかった。パンノキの大きなものはふた抱えを超え、

139 当時は日本語でミレと表記。現在名はミリ。〔ミリ島はミリ環礁で最大の島。〕

140 パンノキ：学名は *Artocarpus altilis* であり属名 *Artocarpus* はギリシャ語のパンと果実の意味。

141 チャガロ、執筆者は椰子酒と呼ぶ。〔李仁申は本文中で「椰子の実に運ばれる栄養素を採取した液体」と説明。〕

果実もたわわにつきつぎと実った。完熟した果実が1個あれば、2食分は十分だった。住民たちの特徴は木登りと泳ぐことにたけており、私たちよりも目がよいのが特徴で、みんな丈夫な体質だった。

私たちは、半月のほとんどを船酔いで苦しみ、疲れた体を回復できない状態なのに、ただの1日も休みもなく4月7日から作業に着手した。工事内容は、飛行場の滑走路及び砲台装置など戦闘準備に関する工事であった。

工事の総責任指揮者は、工事主任で現役の桑下大尉で、現場主任は現役の中川少尉だった。傘下に日本人技師、工員、監督助手がいて、工員の指示の下に、監督助手が作業担当責任者として現場労働者を指導した。作業は1ヶ月に1回の休日があり、1日の日課は日の出と同時に始まる。日没後に宿舎へ帰るが、午前15分間休憩があり、昼休みは1時間、午後15分間の休憩があるだけだった。昼食時に雨が降っても、雨の中でご飯を食べなければならなかったし、作業も続けなければならなかった。それくらいは何でもなかった。言葉では言い表せないほどの重労働に加え、熱帯の灼熱は蒸すようで、全身が汗とほこりまみれになり、目も開けておれず、目まいで倒れそうだった。

そのような苦境にもかかわらず、1日に5、6回、監督者〔原文では工員〕が6、7人ずつ徒党を組んで棍棒を持って現場を巡察する。わざと遠くに隠れて状況をさぐり、作業動作が遅いとか、よそ見をしたり、ちょっとでも座ったりすることが目につくと、班員の前に呼び出され、見せしめに容赦なく代わる代わる棍棒でなぐりつける。死ぬほど殴られたのは一度や二度ではなかった。時には連帯の気合〔体罰〕も数多く受けた。中には過酷な殴打で体が不自由になった人もいた。

言葉ではうわべよく内鮮一体とか一視同仁とかいうが、彼らのふるまいは、朝鮮人を人として扱うのではなく、自分たちの目的を達成するために人間以下に扱った。死のうが生きようが構わないという非人間的な蛮行であり、どんな処罰を受けても足りないものだった。彼らの一挙手一投足がすべて偽善であり、欺瞞であるということが白日のもとにさらされ、よくわかった。

私たちも生き残るために、何とか気を利かせて振舞うべきだったので、それぞれが監視員になり、巡察員が来るかどうかにか神経を尖らせて察した。最初に見た人が「吹いた」との暗号を送れば作業場全体に伝わり、大急ぎで作

業をしてその瞬間をまぬがれた。このように要領を尽くしてやっと耐えていたのに、その程度の作業効率では物足りないと思ったのか、これからは作業量を1日割当責任制で分担し、班別に配当するという。それはいくら死力を尽くしても、一日の量としては到底成し遂げられない超過重な作業量だった。

私たちに割り当てられた仕事は、飛行場を作る場所に必要な土、砂利、大きな石などを、運ぶときに車に載せやすいように、掘って積んで置くことだが、作業量があまりにも多くて意欲がわかなかった。しかし、割り当られた量を終わらなければならない夜になっても戻れない。とにかく死にものぐるいで全力を尽くし、夜遅く検査にパスして宿舎に帰るのが毎日の日課だった。

みんなは、故郷でこれの半分でもやれば金持ちになれるだろうと異口同音に言った。それほど我々が酷使されたことや、苦衷が甚だしかったことが十分に推測できるだろう。

カンカン照りの炎天下での一日中きつい労働で、全身が汗とほこりまみれになり、塩気で白くなってべたつく体で宿舎に戻る。冷たい水で沐浴でもすれば、多少なりとも疲れが回復されるのだが、こんな小さな島でいい湧水があるはずがない。だから水たまりに行って海水なのか何なのかわからないが、生ぬるい水で洗ってもすっきりせず、それでも一晩に3、4回それを繰り返し、やっと寝床に入ることができた。宿舎の中に入ると、人が多いせいか暖房でもつけているように、ムシムシして背中から汗が流れ落ちる。そのうえ蚊のせいで蚊帳を吊すのでなおさらだ。外は少し涼しいが、蚊の大群のせいで少しの間でもじっとしてられない。夜だけでもやすらかに休まなければならないのに、そうはできない身の上だった。私たちが世の中を間違えて生まれたのか、苦勞する運命なのか、とても恨めしかった。

飲料水は宿舎のトタン屋根を利用し、コンクリートのタンクで雨水を受けて貯蔵したのを沸騰させて飲んだ。水は充分ではなかったが解決された。

わたしたちは故郷で、世間知らずで天真爛漫な子ども時代を両親のひざもとで愛情をたっぷりもらい、兄弟姉妹間の庇護の下で苦勞というものを知らずにぜいたくに生きてきた。山紫水明の地で人が良く、人情の厚いねぐらの故郷を離れ、気候風土が異なる遠くの異域、地図にも載っていない大海原の孤島で、前途洋々のわたしたちが、想像もできなかった日本の残忍非道で悪辣暴悪な虐待を受けながら、奴隷のように酷使されながらも一言も言えず、

我慢し耐えなければならなかった。初めて国のない民族、主権を失った民族の悲しさと悲惨さを、身にしみて痛感することになった。

私は体が弱くて、我が班員たちの特別な配慮で食事当番をさせてもらい、現場に出なかったので、他の人よりは楽だった。

上陸1ヶ月後から風土の関係なのか、みんな身体に異変が起こり、少しでも傷つき、けがをすると、傷口が悪化し膿がでて病院暮らしをしなければならなかった。病院に出入しなかった人は全体のうち数人に過ぎなかった。

その当時、病院は特権機関と呼ばれていた。病院系統は院長、看護長、衛生員、それ以下の医務助手だったが、先遣部隊で来た忠清南道の人たち15、6人に、日本人を合わせて医務助手は30人余りだった。医務助手といっても特別な経歴が必要なのではなく、私たちと同等の立場で学歴が少しある人を選抜して採用しただけだが、何か特権でも付与されたかのように傲慢で身勝手なひどい振る舞いをした。

外傷の治療はほとんど朝鮮人助手に任されていたが、治療に行くのが怖くて今日明日と先延ばしにして傷が大きくなっていくと、かえって一層ひどく追及され、言い訳でもすれば患者のくせに理屈が多いと、怖い顔で怒られる。まかり間違えば頬を何発か叩かれるのを覚悟しなければならない。抗議でもしたならば死ぬほど叩かれるだけで、誰ひとり味方してくれる人はいない。そんな現実だったので、正しいか正しくないかに関係なく、おとなしくさえしていれば無事に治療を受けて帰ってこられる。融通の利かない人々は、怒りを抑えきれず対抗し、結局、辱めを受けてもどってくる人も多かった。

日本人たちから屈辱的な蔑視を受けながら酷使されるのも悔しくてたまらないのに、かえって同族同士が遠く離れた異域で、日本人助手よりもっとひどいことをしたのだから、思えば思うほど情けない。もちろん、だからといってすべてが悪いのではなかったが、何人かの悪い行いのために私たちの感情は良くなかったし、敵同士でもないのに嫌悪感すらおぼえることが多かった。だから、誰かは、一緒に帰国することになれば海に突き落としてやると罵ったりもした。

私たちが上陸して6ヶ月になった頃だった。夜間巡察員が伝えるには、これからは敵の空襲が懸念されるため、各自が格別に注意し、特に灯火管制は徹底的に取り締まりを要するという指示を受けた。

私たちが幼い頃に伝え聞いたのは、爆弾は1個で数十人を殺すことができる恐ろしい威力を持っているというから、もし空襲になれば、猫の額ほどの小さな島で避難する所もなく、全滅してしまうという恐怖心に、誰かれなく神経が敏感になった。就寝中に誰かが夢を見て大声をあげたり、あるいは完熟した椰子の実がトタン屋根にガタンと落ちる音に驚いて「空襲だ！」と叫ぶと、各宿舎で眠っている千人余に達する群衆が、つられて同じことを叫び、宿舎の中は叫び声で阿修羅場になって、まるで戦争にでもなったかのような騒ぎだった。あわてて裸足で飛び出して海べの大きな木の下をうろつき、すっかり怖くなって気の抜けた人のようにぼんやりと空を見ている人、うろたえて泣く人、人さまざまだった。しばらく後にデマの空襲だったことがわかると、戻ってくるのだった。

群衆の心理というのは、危険にあった時は共通しているようだ。一つの宿舎に出入り口が8ヶ所もあるのに、先頭の人が出るとほとんどがつられてその扉に押し寄せていくから、誤って倒れると踏まれ、起き上がれずに負傷した人が多かった。大怪我をした人は病院に行くことになるが、不親切な助手たちがいい顔をして受け入れるはずはない。すぐに言われるのは「空襲でもないのに…、阿呆のようなヤツら」だと、辱めをたっぷり受けてもどつてくることになる。その後は各自とくに注意したが、数ヶ月間に何度か繰り返された。

患者送還と医務助手への配置

ミレ島で一番恐ろしい病気はアメーバ赤痢なので、特に日本人はかかると死に、我々班員たちが火葬した。朝鮮人はもともとアメーバ赤痢の免疫性が強いようだった。そこでアメーバ赤痢にかかれば隔離病室に入院させて投薬するが、毎日便検査をして結果が良好になるまで断食をさせる。7、8あるいは10日ほど断食させるから、むしろ飢えで気力を失って衰弱して死亡したり、苦労を重ねて回復が遅れる。

ある日、重患者たちを病気送還するための病院船が入港すると聞いた。病院船は国際法上攻撃されないという話もあった。だから安全だというのだ。

ちょうど、私たちの村の金グンオク、金クォンテ氏が重患者として送還対

象だったが、金クォンテ氏はアメーバ赤痢で入院してようやく生死の境をのり越えたが、あまりに体が衰弱して、しばらくは療養が必要だったため、作業場に出られなくなり帰還することになった。みんなが異口同音に言ったのは、送還される非常に運のいい人だと称え、自分たちも死なずに重患者になって帰国することになれば、どれほどうれしいことかと羨ましがった。

遠く離れた異国でいっしょに苦労した故郷の同志たちだから、惜別の情をかわして見送らなければならない。しかし病院船の入港日も知らないし、入港し乗って行くとしても、〔作業場に〕明け方に出て夜戻って来るという生活だから、見送りどころか行くことさえ見られない状況なので、故郷に帰ったら両親に安否を伝えてほしいという言葉だけを言った。

日が経つにつれ、現場作業もある程度のところまで進捗した。多くの人員が不要となり、先遣部隊で島に来た忠清南道の人々を帰郷させたことがあったが、いつ船が入港し彼らがいつ船に乗って行ったのか、私たちは知らなかった。ある人は、もし島の中で起こることも知らないなら、気がおかしくなったのではないかと思うかもしれない。そうとも言える。しかし、私たちは精神だけはしっかりしていた。そうするしかない。夜明けに作業に出かけ、一日中作業現場で決められた割当をこなさなければならない。だから、死ぬか生きるかの渾身の力で作業を完了し、疲れた体をひきずって夜に宿舎に戻ると、何もする気になれない。座った場所を移すことも嫌で、誰かと話そうとも思わない。そのまま倒れ込んでしまう。だから島で起こったことも、直接関係したことでなければわかる由もない。今が何月なのか、何日なのかわからない。春夏秋冬の四季があれば、春か秋かは推測できるだろうが、すべてに気を使う余裕がないからわからない。まるで阿呆と変わらない生活だった。忠清南道の人たちについても、いつか伝え聞いたもので、帰国する途中に危険な目にあってどこかの島に途中下船したというからわかったのだ。

私は忠清南道の人々が去ってからしばらくして、友人の助手の紹介で病院の医務助手として採用された。病院の人事権は看護長にあるので、感謝のお礼として1本8円のビール8本をやっと購入してプレゼントした。するとありがたいと言って新任の祝いもしてくれて、お互いの挨拶がわりに、看護長の手配で院長以下全員が参加して陽気な雰囲気で大いに会食をした。助手たちは異口同音に、院長と看護長は朝鮮人だからといって少しも差別せずに

やさしくしてくれるし、親切に指導してくれる良い方だと口を揃えてほめた。伊藤えいじ院長、橋本看護長といった。長い間一緒に仕事をしてみると、本当に二人とも人情深く、慈悲深く、礼儀正しく、朝鮮人だからといって少しも蔑視したり、悪くいうのを聞いたことがなかった。その仁徳は、当然多くの人の尊敬と崇拝をうけるだけの立派なものであった。

医務助手になると、第一に日本人たちの蔑視と侮辱を受けなくなり、技師や工員たちの幹部たちも見下さない。それだけでなくぞんざいな言い方もしなかった。ミレ島では病院ほどいいところはなかった。

これまで前任者たちが職位を乱用し、傍若無人の悪行をほしいままにしたことを戒めにして、私は私たちの同志の患者に温かく最善を尽くして親切に看護した。病室係を担当したときは、入院患者の病気の緩急を考慮し、院長に時間を問わず迅速に報告し、診察を受けさせて投薬して少しでも痛みを和らげるために努力をした。入院の軽患者は、病状のカードをうまく作成し、退院させずに病室内外の清掃など軽い業務に就かせて、少しでも多くの休養を取れるようにした。そして、班員たちの中で消化不良症に苦しむ人には、薬剤室担当の日本人助手に消化剤をたくさんあげるように頼み、多くの消化剤を持って行って便宜を図った。もちろん、仲間たちの評判もよかったが、私自身が微力ながら私たちの仲間のために助力し、患者の苦痛を多少なりとも和らげることができた。だから充分やりがいのあることをしたと自負してもよい気がした。

熾烈になった米軍空襲とさらに酷くなった作業

上陸してから10ヶ月くらい経った頃だと思われる。日本の貨物船南海丸¹⁴²が食料を満載して入港停泊し、日本人船夫たちが運搬船を使って荷役作業をしようとした瞬間、米軍戦闘機3機が低空から不意に襲ってきた。爆弾投下と機銃掃射で米一粒も下ろすことができず、一瞬のうちに沈没してしまった。船夫たちも数名が負傷したという。水深が浅かったので、煙突だけが見苦しく突き出していた。これをもって船舶の出入りはなくなった。

142 1943年末頃、第2南海丸の撃沈により、ミリ環礁への食糧などの補給路が遮断された。

その後、かなりたったある日の夕方頃、日本の潜水艦が海上に突然浮上したのを作業中に目撃した。しばらく艦の姿だけが見えずに潜水した。少し経つと、どこで情報を探知したのか、米戦闘機3機が海岸線に現れた。すんでのところで大変なことになるところだったが、かろうじて災いを免れた。初めて機体を発見した時は日本機ではないかと思ったが、マークを見て米軍機であることを確認した。

これまで一度も現れなかったが、必要な時だけ不意に二度現れたのだった。しかし島に対して少しも被害を与えなかった。その日、夜間を利用して米が入ったゴム袋を海に浮かべ、船夫たちが伝馬船に引き揚げた。島全体の人員の食糧の一週間分ほどの量だという。最善策として潜水艦輸送を試みたが、その方法もまた最初で最後になってしまった。

1943年初めと思われるが、昼夜を問わず、そまつなシャベルとツルハシで、血を絞るように死力を尽くして飛行場及び滑走路がある程度完成した頃、日本の戦闘機70機余、双発重爆撃機約40機が島に来て滑走路に着陸した。無敵日本を象徴するように威風堂々と整列している威容を見た日本人たちは、意気揚々と大成功だといいいながら、鬼畜米敵を遠からず撃滅するから日本の勝利は間違いないと感激し、小躍りして歓喜の声をあげた。

わたしたちも、日本人たちに屈辱的な辱めや数々の圧迫を受けてきたが、夢にも忘れられない懐かしい故郷で、寝ても覚めても生きて帰ってくることを祈りながら切なく待っている、愛する親兄弟たちに再会するには、どうしても日本が勝利する必要があるから、悪いとは言えなかった。

戦闘機が島にきて着陸した直後から、毎日どこに爆撃や攻撃をしに行くのかわからないが、5、6機あるいは10数機ずつ離陸していくのに、戻ってくる時は半分に減って、時によっては1機も戻らない日もあった。そういえば、しばらくしてから双発爆撃機は見え、戦闘機10数機だけが残っていた。私たちは米軍基地への爆撃や日本基地への応援で出撃していき、撃墜されたことは明らかだと推測した。確かに日本の戦況は傾いていると思われた。

ある日の早朝だった。航空整備兵たちが整備点検を終えて始動させ、すぐにパイロットたちが搭乗して離陸出動しようとする刹那に、米戦闘機3機が突然滑走路に触れるほどの低空で急襲して、猛烈な機銃掃射でまたたく間に9機が全焼し、残った数機は破壊され、日本機は完全になくなってしまった。

あれほど意気揚々として自慢し、大言壮語していた無敵空軍も、虚しく無くなってしまったのを見て可笑しかった。

我々が上陸してから1年ほどたった夜に、初めて警備隊本部の空襲警報サイレンが鳴った。以前、空襲の空騒ぎでも体が動かずぶるぶる震えたが、本当の空襲サイレンが鳴ってどうなったのか想像できるだろう。みんな肝をつぶし、お互い先を争って宿舎を飛び出し、びっくりしてどうしていいかわからずうろたえた。島の中央ではなく海辺のほうがいいと思って、ほとんどが海辺に集まった。飛行機の音がする空ばかり見ている人、大きな木の下で頭だけを隠し、おしりは空中につき出してぶるぶる震えている人、泣きながら右往左往する人、各自さまざまだった。

聞こえてくる音からみれば、大型機1機程度と推測された。月が明るい夜だったが、あまりにも高いので機体は見えず、そのまま何事も無く通過していった。

それから約1ヶ月後、本格的な夜間空襲が始まった。目標物は飛行場と滑走路であった。飛行場と宿舎にはかなりの距離があった。プロペラ音からして大型の重爆機と推定され、投下爆弾の爆発音から推測すると7、8機だった。とにかく大型爆弾で島全体が揺れ動いた。空襲が終わってもどると、本部から総動員非常令が出された。明け方早くから緊急に全員総出動し、復旧作業に取り組みとこのだ。万一、復旧作業が遅れて味方機が島へやってきた時に着陸できなければ、日本の戦争遂行に莫大な支障をきたすことになる、だから生きるか死ぬかの問題であり、重刑は免れないだろうという。何をさておいても、全力で、短時間で、支障なく任務を遂行しろと激しく叱責された。

日本人は、アメリカのヤツらは夜目が利かないので夜間空襲はしないとっていた。現場に出てみると夜間爆撃なのに滑走路に命中していた。爆弾の威力は恐ろしく、とても大きな穴があいていた。道具といえばスコップとツルハシ、リヤカーしかなく、爆弾の穴一つに120人余りがいかに全力を尽くしても8、9時間以上かかる。それも毎日連続して繰り返された。間違いなく来るという日本機は影も形も現れなかった。

米軍は爆撃で穴を開け、私たちはそれを埋めるのに毎日死にそうだった。そうしているうちに、米軍は、夜間爆撃から昼間爆撃に転換した。それとと

もに重爆撃機も増加し、2、3機の戦闘機まで一緒になって空襲も2、3回に増えた。夜間爆撃だけの時は、復旧作業時に危険はなかったのよかったが、昼間になってからはひたすら作業に夢中になっているときに突然来襲し、隠れる防空壕もない状況だった。戦闘機は低空飛行し、機銃掃射まで加えた。とにかく人が見えてはいけない。滑走路を抜け出し、樹木の下や森の中に身を潜めなければならないが、動作が鈍ければ爆弾や機銃掃射にやられてしまう。

1日に2、3回ずつ空襲があると作業効率はゼロだ。後には時限爆弾まで投下し、作業中不意に森の中で爆発するのでとても危険だった。私たちには日本機は来そうにないように思われたが、強硬に作業を催促された。作業に出て行くことが死にいくのと変わらない。その恐怖におびえ、気弱になり、精神的、肉体的に疲労が重なって死にそうだった。しかも、夜中までに作業を終えなければならないので、さらにつらかった。

日増しに空襲は激しくなった。これからは空襲が飛行場に集中するのではなく、建物や人命被害に全面的に拡大されると予想された。しかし、これまで防空壕一つ構築できなかった。防空壕も緊急の問題だった。

地層が浅いので地面を深く掘ることもできず、少し掘って椰子の木で蓋をして土を1mほどかぶせても、機銃弾をやっと防備できる程度で、小型爆弾でも直撃すれば粉碎されるほどだった。防空壕に避難することもとても不安だった。

そして予想通り、しばらくすると宿舎や建物を目的にして、戦闘機を3、40機に増やし、1日4、5回ずつ殺傷弾や焼夷弾などを投下し、急降下して猛烈な機銃掃射を加えた。建物は焼却し、樹木は余すところなく倒され、島全体がしだいに廃墟になっていった。

そのなか、重爆撃機による大型爆弾の投下には困り果てた。米軍は表面的な攻撃で集中爆撃をするため、こんな小さな島の限られた範囲では避ける所がなく、仕方なく不安な防空壕にあえて頼るしかない。

飛行機の音が聞こえると、みんな恐怖にかられて正気を失い、そわそわと右往左往し、せっぱ詰まれば死のうが生きようが天地神明に運命を託した。不安な空気を吐き出して落ちるその音響はびっくり仰天するほど鳥肌を立たせて、人の気をもませる。その音が死を予告するにほかならないからだ。爆

弾が落ちる音が長く聞こえると、壕から2、30 mの距離だから、やや安心し、シャッと短く聞こえるのはわずか3、4 mほどの近くだから、頭の上に落ちてくるようで気が気でない。

毎日続く空襲に耐えるのは恐ろしく、困惑してうんざりするが、とにかく生きようとするのが人の常だろう。しかし、運が悪く、不幸にも死ぬことになるのなら、むしろ直撃弾にでも当たって苦しむことなく、どうして死んだのかわからずに死ぬのが、むしろましではないかと考えたりもした。そう考えるほど辛い日々だった。

継続する爆撃のためにお互い笑顔を失い、明日の運命がわからない恐怖症と憂鬱感のなかですっと過ごす日々だった。こうした状態が続いたにもかかわらず、多くの犠牲者もなく、7ヶ月の長い歳月が流れた。言うまでもなく島全体で元の形を留めているところはなかった。

米軍の大空襲

1943年1月29日、ついにこれまで類をみない最大の空襲が開始された。一日中猫の額ほどの小さな島に、なんと300機余の戦闘機がどの基地から来るのか、連続的に交代しながら、計画的に島を思う存分攻撃し続けた。全滅させようと雨あられのように爆弾を投下し、急降下して激しく機銃掃射を行い、あらゆる妙技を誇るように自由自在、自分たちのやりたい放題だった。

どれほど切羽詰ったことか、日本軍がフンドシ姿で、防空壕のすきまから38式、99式のような小銃で、頭の上まで降りてきた戦闘機に対抗しようと騒ぎ立てた。まさに笑い話であった。

私たちは一日中防空壕で身動きもできず、いつ死ぬかわからず日が暮れることだけを待ったが、1日の太陽の歩みはとても遅くもどかしくてたまらなかった。夕方になって米軍機は去って静かになった。みんな大きなため息をつき、助かったんだと出てみると、真っ暗でよくわからなかったが、めちゃくちゃになっていて直撃弾にあたった所もあった。食堂は爆弾で粉碎され、猪の肉なのか人肉なのかわからないほど凄惨な状況だった。

私たちが壕の中で思ったのは、間違いなくとてつもなく多くの被害者が出ただろうということだった。しかし、人命は天の定めることだというのが、予

想外に少ない方だった。天の恵みで人命被害が少ないのは、不幸の中で幸いであった。

これまでにない最大の空襲を行って全島を廃墟にしたのは、上陸して占領する目的だということが明らかだ。万が一米軍が上陸作戦を敢行するなら、占領されるのは時間の問題だった。日本の兵力は海軍が2,800余人、陸軍が2,700余人、合計5,000人余りだったが、軍人数の過多が問題ではなかった。相手から身を守るだけの軍装備を持っていないのだ。せいぜい重武器としては、古物のような昔の高角砲2門の設置、対空用25mm、機関銃2丁が重装備の全部だった。そんな現実だから、米軍が新鋭武器で武装して攻撃してくるなら、小銃のたぐいでどうして防御できるだろうか。相手にならず敗北し、全滅することは明らかだった。

翌日11月21日、昨日のように空襲はひどくなかったが、防空壕に避難していた。警備隊本部から各防空壕に伝令が伝えられた。望楼での監視兵の報告によると、敵の大機動艦隊が接近しているということだった。

私たちの予想通りだった。戦闘が始まり、双方が交戦すれば殺戮が展開されて血の海になるだろうから、私たち非戦闘員はどうなるのか。私たちの運命は生死の帰路にあり、身の上は風前の灯になった。空想してみた。その戦禍の中でどうすれば生き残ることができるのか。いくら考えてみても、袋のネズミだから避難するところがない。ともかく終わりになればわかることだが、生きるのは諦めるしかないのは確かだ。若い命がむなしく消えると思うとあまりにも哀れだった。

次の伝令は、敵は大船団で間違いなく上陸しそうだ、というものであった。そうしているうちに、米国艦隊から艦砲射撃が開始された。これまで爆弾が落ちる音にこりこりし、背中がゾクツとしたが、砲弾が飛んでくる音もまた、同じように嫌なものであった。

砲撃が弱まった隙に少し出てみると、どの方向なのか艦体は見え、砲弾が飛んでくる音とともに滑走路に命中し、土の塊や土けむりが高さ20m以上空中にまいあがった。実にすごい威力だった。時々刻々、伝令が来て、司令本部の海軍司令官大佐から非常特別命令が下された。敵が上陸する兆しがあるので、軍人および日本人は全員、戦闘準備に万全を期し、朝鮮人は敵の戦況をみて、全員そろって警備隊後面の戦車壕に集結するというもの

だった。理由は朝鮮人が捕虜になれば情報が漏れて日本が不利になるから、事前に皆殺しにして後方の憂いをなくし、自分たちは最後まで戦い、日本人らしく大和魂で自決するというものであった。

何と突然のたわごと、蛮行であろうか。実にとてつもない言語道断なことだった。私たちは驚愕と怒りを禁じえなかった。情報がもれれば作戦上日本が不利になるというのは、話にならない。理屈に合わない。情報というのなら、作戦上の軍事機密を知らなければならず、多方面に情勢を探知する能力がなければならぬ。

好戦軽死を主軸とする軍閥派たちが、不法侵略で太平洋戦争を引き起こした。その目的遂行のために無学で無知蒙昧な私たちを強制的に、あるいは虚偽や欺瞞で引っ張ってきた。その800人の朝鮮人は90パーセント以上が文盲だった。やっと自分の名前を書ける人は数えるほどで、山間僻地の農村で農作業を手伝ったり、あるいは他人の家に住み込みの奉公生活中に引っ張られてきた、世の中の物情を知らない素人ばかりで、みんな家庭が貧しく何の後ろ盾もない人々だった。

そして20ヶ月以上、毎日夜明けの早いうちに出て夜に帰ってくるから、外部のことはおろか、島の中のことさえ知らず、日付が変わるのも知らない愚かな者たちが、仮に捕虜になったとしても情報提供できる人物になりえるのか。到底、納得できなかつた。絶対に妥当ではなく、無理やりの口実だとしてもとんでもない口実だった。悪辣な彼らの行いは、必要なときには牛馬のようにこき使い、必要がなくなればまるでゴミを処分するように、人命を軽視する無慈悲で無道な非人間的蛮行だ。人間として到底ありえず、容認できないことだった。しかしどうすればいいのか。無力で弱い私たちが、徒手空拳で対抗することもできず、屠殺場に引かれて行く牛のように、若い青春たちが犬死することを考えると、あきれて言葉もなく、怒りと悲憤を抑えることができずに血の涙をどれだけ流したことか。もちろん、戦場で死ぬのは必然的であり、また覚悟のことであるが、非戦闘員としては生きようと努力しても、知らぬ間に銃弾や榴弾、あるいは敵にやむを得ず殺されることはありえるだろう。あるいはそれが運命だとしても、いわゆる私たちの味方に悲惨に虐殺されることは、死後も魂に永遠の恨みが残るのではないだろうか。

米軍艦砲射撃は続き、聞こえてくる砲音から推測すると、日本軍側でも何

発か高角砲で応戦したようだった。米軍は2時間半ほど遠距離からときおり砲撃をして撤収した。崖っぷちの私たちも生きのびたから、不幸中の幸いであり、天の助けにほかならなかった。みんな死を覚悟していたのに生き残ったので、各防空壕から飛び出して生き残ったという感激でお互い抱き合い、熱い涙を流しながら歓喜の声を挙げた。短い時間だったが、気が気でなかった悲哀の心境は言葉では表現できないだろう。

米軍が艦砲射撃を試みて撤収したのは、ミレ島が小さい島であり特に軍事基地として重要ではないうえ、大きな損失を犯して上陸までする必要がないから、通りがかりの間隙を利用して威嚇して一度驚かせてやろうとしたためだと推測された。ともあれ米軍が撤退したことで、危機一髪の死地から我が同胞たちの貴重な命が逃れられたのは本当にありがたかった。その後も以前のようにひどいものではなかったが、空襲は依然として続いた。

太平洋のマーシャル群島内の制空権と制海権は完全に失われ、伝送が完全に断絶されたため、ミレ島は軍事基地として何の役にも立たなくなった。私たちが袋のネズミ状態になり、外部情報はわからなかったが、この状態から推測すると、太平洋戦争はすでに多方面で広範囲に米軍の攻勢に押され、不利になっていると思われた。しかし日本の大本営発表のニュースでときおり伝わってくるのは、某方面、某地域で米大機動部隊の主力航空母艦10数隻、駆逐艦、戦艦、輸送船など9隻を撃沈撃破し、全滅させる大戦果を上げたと発表する。そのとおりなら、すでに太平洋の米機動艦隊はほとんどなくなると見なければならぬだろう。どれほど誇張された虚偽宣伝だったのか。私たちにはとても信じられなかった。

日本軍という言葉はさらにひどくて聞いていられなかった。敵を日本沖までおびきよせ、協同作戦、包囲戦術で総攻撃して一網打尽にすることでまもなく戦況は逆転し、敵の米兵を掃討し、最後の勝利は大日本が収め、大東亜共栄圏はもちろん全世界を制覇するだろうと大言壮語した。でたらめな、とんでもない詭弁だった。

もっとも日本国民も、このようなニュースにすっかり騙されていた。1943年から各方面の戦線で広範囲にわたって米軍の熾烈な攻勢で占領され、逆に全滅させられ、各海戦でも連戦連敗して膨大な損害と打撃を受けていた。しかし、東条総理以下の少壮派軍閥主義者たちが実権を掌握し、真実をそのま

ま発表すると国民の士気が低下し、国家運営に邪魔になるからと、虚偽報道を行った。そうやって自国民に欺瞞の政策を行使したため、戦争初期に連戦連勝した自慢だけを、日々国内では戦勝発表のニュースだけを信じて、祭りの雰囲気のような病にかかっていると思われるほどの騒ぎだったという。まさに敗亡直前まで、日本軍閥たちはそのような無謀なごまかしを続けたという。

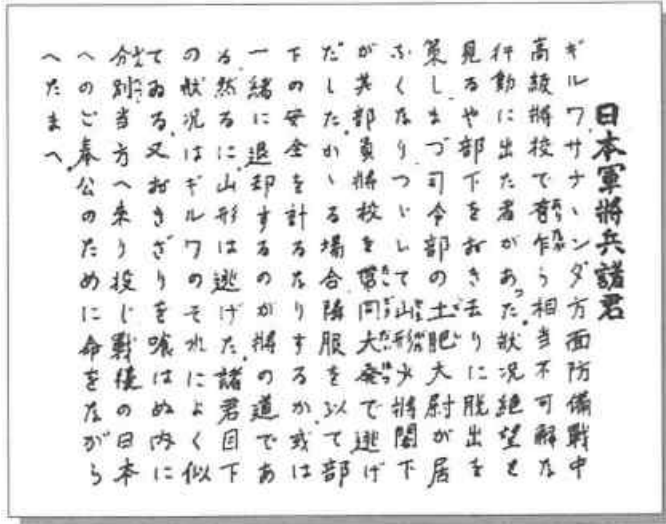
不利な戦局での日本軍の残酷と米軍の懐柔

ミレ島は他の島より大きくて良い島なので、もともと先住民が多く居住していた。カヌーという2、3人乗りの小さな船を利用して、近くの島を行き来した。

日がたつにつれて、日本の戦況が不利になることに気付いた住民たちは、人知れず米軍船と会い、米軍基地に行つて米軍側と協議し、ミレ島住民を救出する打ち合わせをした。その後、数回行き来しながら、実行する機会を自分たちだけで打ち合わせ、米軍と連絡を取り、夜間を利用して、某日某時の指定場所で住民が案内員として米軍船に同乗することを約束したという。一人はすでにミレ島で連絡係としてもどり、首長たちと密かに米軍と策定した某日某時の日程を通報していたところ、日本人たちは以前から住民の動きが怪しいと思い、徹底的に監視したため、不幸にも見つかってしまった。首長以下7、8人をつかまえて、ひどい殴打、逆さ吊り、水拷問など、あらゆる方法で取調べたため、事実を吐くほかなかった。計画は完全に失敗し、結局、関係者15、16人が銃殺された。純真な住民たちが日本の束縛から抜け出そうとしたが、不幸にも失敗し、惜しいことに惨殺されたのだ。その後、先住民は自由を奪われた。

ある日5、6人が搭乗した米国の偵察機1台が、気楽に低空で偵察飛行していて、日本の25mm双発対空機関銃に撃たれて墜落した。

その偵察機に乗っていた米軍が、落下傘で降りてきて救命ゴムボートで逃げたが、日本軍が伝馬船で追跡して島の近くで捕虜にした。私は用事があって、通りすがりに見ると、天幕に監禁され、それぞれ間を置いて座り本を読んでいた。後で聞いたところによれば処刑されたという。その当時の状況は殺すほどではなかったのに、吸血鬼のような残酷性をあらわにしたのだ。



ニューギニア戦線の情勢を告げる米軍のピラ

米軍はミレ島の状況が食糧難で極めて悪化していることを見て、空襲と同時に多くのピラを散布した。その内容は「諸島の現地司令官宛て」で、日本語で「貴国日本は遠からず敗戦する、皆さんは戦犯者でなければ袋のネズミのようにむだな苦勞をしないで、降伏さえすれば皆さんは飢死せず、病死しないように万全の対策を講じるから、降伏する意思があるなら飛行場に白十字を表示せよ」であった。数日間続けて、疑ったり心配したりしないでただちに決めるようにと大量に散布した。日本軍は、死ぬならいさぎよく死ぬ、降伏など話にもならないと一蹴した。

米軍はすこしの反応もないのを見て、今から数日の猶予期間を与えるが、それでも応じなければ仕方なく米軍機の練習地とし、爆撃で人命はもちろん島を完全に無くしてしまうから、よく考えろと脅かしてきた。

周知のように日本人なら、軍国主義者として天皇陛下だけを崇拜し、日本魂という精神が骨身にしみている彼らが、脅迫されたからといって素直に降伏するはずがない。一週間ほど過ぎただろうか。文字どおりの爆撃が熾烈に行われた。海の上を飛行し、海に爆弾を投下すると島に跳ね上がってきて、爆発する。自分たちのやりたいとおり自由自在に多様な技を駆使した。直接攻撃されない遠くからは見ごたえもあり、そして壮観でもあった。

ますます悪化する食糧問題

我々が上陸した時は、やたら多くの食料を持ってきたようだった。10ヶ月の間は不足したことがなく、腹いっぱい食べた。その後は搬入が容易でないことがわかり、しだいに量を減らしていった。少し足りなくはあったが、10ヶ月以上なんとか我慢してよく耐えてきた。

そうしているうちに輸送路が完全に遮断され、搬入が不可能になると粥に代わった。やむを得ない事情なので、みんなが理解し、腰ひもを締めて我慢しなければならなかった。その粥も長く続かなかった。食糧があまり残っていないという。これからは他に方法がないので、各自につる豆の葉を採ってこさせ、米を少し入れた草粥の配給を受けた。草粥では腹を満たすことができなかったのも、日が経つにつれて、みんな飢えに苦しみ、生きていけないとのわめき声が並大抵ではなかった。栄養のない草粥でも続けばいいが、それもできないようだからよけいに心配になった。

日本の船員たちが、以前、貨物船が沈没したときに水に沈んで変質腐敗した米を、潜って引き揚げ、水に浸して濾過し、粥にして食べた。それを見た故郷の友達のチャ助手が、知り合いの日本人船員に頼み込んで少しずつ貰ってきた。これを水に浸して濾過して毒素を取り除いて太陽の下で乾燥させれば、突かなくても自然に粉末になる。それですいとんを作ると、変質した米粉だが、草粥とは比べようがなかった。チャ同志と私にはかなりの期間、大きな助けになった。

そのように私たちは、米が入っているのかいないのかわからないような草粥に命をあずけてきた。だが食糧が完全に底をつくことになった。ミレ島は工事で多くの木を伐採し、爆撃で焦土化され、食べられる木の葉や草、パンノキなどがすっかり無くなり、何もなかった。最後の手段として、各島々に分散配置するより方法がなかった。島の大小や好き嫌いなどを勘案して、2～30人、4～50人、あるいは100余人ずつ配置居住させ、その島に生えている草であれ木の葉であれ、適宜自給自足で延命しろというものだった。そして日本人を適度に配置して朝鮮人を監視させたが、日本人は全員が小銃を携帯した。我が同胞たちは監視対象者になったので、島内や海で魚を捕まえに行ったり、いろいろ活動することに制限を受けた。どの島を問わず、特に厳禁されたのは、椰子の木を伐採してはいけない、椰子の実を採ったり

熟して落ちた実を拾ってもいけないということだった。もし発覚した時は死ぬほど殴られた。

椰子の木は、枯木ではない幹の突き出たところを切ると、30cmほどの部分が柔らかくて甘く、おいしくて飢えた腹を満たすことができる。果実も取って飲めば水がいらず、お腹もふくれる。完熟した果実の核はコブラ¹⁴³というが、油が多く、飢えを免れて味も良い。椰子の木は飢えた人にはいろいろと良い食べ物として大きな助けとなった。しかし取り締まりをせずに放置すれば、木や果実が全部なくなるので、後日のための取り締まりだった。

ミレ島を中心に本島と呼び、小さな多くの島を総称して離島といった。島名はそれぞれ別にある。30余りの大小の島が円形につながって形成されており、東に大きな潮の流れ道があり、船はその流れ道しか出入りできない。それでそこを水道口という。

海水が干潮になれば、この島からあの島へ、また次の島へと浅瀬を歩いて行き来することができた。ただし、3、4カ所だけは近距離でも水深が深く、船を利用する。もともと先住民が居住していた島は3、4カ所の島で、他の島は行き来できたが、食べ物がない島だから住むには不適だった。しかし、否応なく配置され、指定された島に行くよりほかにない。運が良い人だといおうか。少数だが良い島に配置された人々は、パンノキもあり、毒性の少ない草、木の葉もあり、カボチャも植えて食べることができるため、少しは役に立った。ただ生産に比べて人員が過剰で苦勞が多かったという。しかし、ほとんどの人は食べ物のない島だった。パンノキもなく、食べられる草もないので、あれこれと試してみて、一番毒性の弱い草、木の葉を採取して一日ほど水で煮込んだ後、二日間水に浸して濾過して塩味をつけ、すいたお腹を多少なりとも満たす。たまに海に出て魚を捕まえて食べるが、米軍の船が行き来するため、監視がきつく容易ではない。

私たちは死の峠をいくども越えながら生きてきた。このまま死ぬのはあまりにも悔しい。何としてでも生きなければならない。不屈の精神で腰ひもを引き締め、もがきながら、幸い病気で苦しむことなく、かろうじて命を持ちこたえてきた。皆、しぶとく生きた。

143 copra：椰子の実の緑の硬い胚乳や椰子の硬くなった果肉を削って乾燥したものをコブラという。コブラは油脂の原料となる。コブラの粉は牛乳の代用品として使う。

当時、島で栄養補給してくれたのは「チャガロ」だった。椰子の実に運ばれる栄養素を採取した液体だが、チャガロを取ると実はならない。一日に4、5杯飲むと、水も必要なく栄養素も多くとれる。それを草の葉やカボチャと煮込んで食べると、餓死は免れる。

海軍と陸軍はそれぞれ分離して離島に配置されたが、うわさによれば陸軍は半分以上が餓死したという。朝鮮人や海軍は餓死したといううわさは聞かなかったが、陸軍は先のことを考えずに手当たりしだい食べたため、みずから死を招いたのだという。我が同志たちが連絡ついでに本島に行く途中、陸軍が駐在した島を經由したが、どれほど飢えていたのか起き上がることもできず、銃を構えながら食べるものをくれと言ったそうだ。そんな状態だったから、風説はあながち嘘ではなかったのだ。

私はミレ島で長い間、他の助手よりもさらにひどい苦勞をした。万一の空襲に備えるため、病院本部と距離が離れた北側に、コンクリート構造の防空壕を設置し、軍の菓子を分離保管していた菓倉庫があった。最初は二人で宿直を担当し、特に近く of 海軍警備隊の食堂で食事ができるよう交渉してくれたので、私たち二人はご飯の量が十分で、申し分なかった。

そのうち、ひとつの船の班員たちが全員離島に配置され、病院側でも本部に日本人助手の長が少しだけ残り、各離島へ班員とともに派遣配置されたため、私一人が責任担当となった。

同僚たちが去った後、20日間ほどは草粥も心配せずに食べられたが、米がなくなるといい、それも断たれてしまった。突然のことでぼう然としていた。きまじめな私は菓倉庫を守る重責を負っているのだから、自給自足して生きていかなければならない。4、50mの距離に、双発対空機関銃部隊の射手が20数人住んでいた。本島は焦土化され、食べられそうなものは何もなく、あちこち歩き回ってつる豆の葉でも採取しなければならぬ。あまり長時間留守にして倉庫に何か良くないことが起これば責任を免れない。だからあれこれと気遣い苦しんだ。

これからは自分が食べものを探し、解決しなければならぬ。まさにさし迫ったことだ。しっかりしなければならぬと心の中で誓った。まず、すぐに豆の葉で空腹でも満たさなければならぬ。倉庫の扉を閉めてあちこちせわしなく歩きまわると、幸いにも爆弾を免れ、いくら残っている豆の葉が

あった。以前、誰かがむしり取ったところに新芽が出ていたのだ。しばらく歩き回り、一日分になるかならないかのものを採取して帰った。一人で食べる分の採取も困難でとても難儀なことだった。我が国の大豆の葉に似ているが毒性がある。半日ほど煮て、一日以上水に浸して濾過してやっと食べることができる。

初めてのことが多く、とても忙しかった。塩ももらってこなければならず、マッチがないので火種も作らなければならない。薪も多くの量を準備しなければならない。火種は消えないよう維持しなければならない。一日中神経を使う。

豆の葉以外に食べるものは何もない。とにかく死なないように無理やり食べるが、多くは食べられない。夜が明けるとすぐ東奔西走し、豆の葉を採ることからあれこれやっている、いつの間にか夕方になる。一度は蔓の葉が食べられそうなので採って試してみたが、とうてい食べることができなかった。

日が経ち月が過ぎて、1年以上の長い歳月を、何の栄養価もない草の葉だけでどう耐えてきたのだろうか。体の弱い私自身がふしぎによく耐えてきたと思った。日増しに気力はおとろえ、健康は悪化し、気力が尽き果てているのに、これから先、体を維持できるのかとても心配だった。同僚でもひとりいれば、話し相手にもなり、おたがい相談すれば良い方法が見つかるだろう。安心して歩きまわることができるから大きな助けとなりうるが、ひとり倉庫に縛りつけられて大変だった。

ふと頭に浮かんだのが、カボチャを植えるということだった。なぜ、もっと前に思いつかなかったのか。すぐに防空壕の周りに大きな穴を十数カ所掘り、腐った雑草などをたくさん集めて入れた。そこにサツマイモの芽を植えるように、5、6枚の葉のついたカボチャの葉芽を切ってきて植え、日光を覆い、朝夕と汲んだ水を穴にやった。一週間ほどたつと根をはって成長していった。

毎日、朝夕に懸命に水を汲んでやり、心を尽くすと、20日ほどで花が咲き始めた。言うまでもなく花だけを見ても嬉しかった。これくらいならやがて楽しみにしていたカボチャが食べられるから大成功だ。何も羨ましくはなかった。朝ごとに水をやり、カボチャが実を結ぶ雌花が咲いたかどうか、子細に調べると三つの雌花が咲いていた。蜂や蝶がないので人工的に雄花を摘んで交接をしてやれば100%成功する。

数日後にはこぶしほどに育った。ある日、豆の葉を摘んで帰って覗くと、こぶしほどのカボチャが見えず、空のヘタだけがあった。もしかしたら腐って落ちたのではないかと思い、あちこち探してみてもなかった。盗まれたのだった。一体こんなことがありえるのか。私は大きな期待をふくらませて、全力を尽くして一ヶ月以上を育ててきたが、私の命のような食糧が盗まれたので、目の前が真っ暗になった。その近くには、25mm 対空機関銃射手しかいなかった。彼らのしわざは明らかだった。私は悔しくてわきあがる怒りに耐えきれず、隊長を訪ねて行った。周知のとおり、この近所には他に人はいない。しかし、自分もまだ食べてもいないものを斯く斯くしかじかしたと言ったら、何ということをするのか、我が海軍警備隊員はそのような悪い行動は絶対にしないと、盗人猛猛しくかえって大声で怒鳴られた。私が直接目撃したわけでもなく、もし間違ったら大変なことになりそうなので、戻るよりなかった。

無駄な苦勞をただけで、期待も希望も水泡に帰ってしまい、ぼんやり落ち込んでばかりいた。次善の策としてもう一度、最後の方法を試してみるほかなかった。日光にあたらなければどうなるかわからないが、交接するともに地面を掘って隠すしかなかった。順にいくつかを埋めておいた。

半月ほどたったのだろうか。気になって確認してみると、色は変だが腐らずなんとか食べられそうだった。初めて挽いで豆の葉と煮て、たらふく食べた。これならこれからも食べられると思った。数日後に次のものを確かめてみると、どうしたのか？カボチャの蔓はめちゃめちゃで、カボチャの実はあとかたもなく、空のヘタが残っているだけだった。蔓すら引っ張ってそっくり取られていた。

世の中の無知でしからんヤツらが、まともに食べることもできないものをこっそり盗んで行って、他人の生活を台無しにしたのだ。ことわざに3日飢えれば塀を越えないヤツはいないというが、飢えて死にそうなのに、他人のことまで考えられないのだろう。それでもひどい。もう万事休す。悪口をいって怒りが収まるわけでもなく、呪って解決できるものでもない。いろいろ考えてもいい方法はなく、このままではもう耐えられそうになかった。運命としては数奇な運命だった。振り返って考えてみると、弱い体なのに長い日々を草の葉で、今まで忍耐と闘志で無難によく頑張ってきたものと、

自らは誇らしかった。もうすっかり駄目になったので、ためらうことなく最後に院長を訪ね、お願いするより方法がなかった。

すぐに本部に院長を訪ね、これまでの一部始終を詳細に話した。私としては最後まで責任を果たそうと努力したが、日々に衰弱する体では到底耐えられないから、交代して離島へ行かしてほしいと言った。骨と皮だけになった私の格好を見て、まさに言うとおりで、それほどまで苦しんでいたとは全く知らなかった。とても苦労したんだから望みどおりいい島に配置してあげようと言ってくれた。

そのことを聞いて心がぱっと晴れるようだった。諺に善は急げとあるように、私は行くついでに、木登りもできないし、現在の私の状況では、当分の間、親友の同僚に頼らなければならないから、チャ助手がいるルクノール島¹⁴⁴に配置してくれるよう頼むと、即座にそうすると快諾してくれた。願いはかなえられたのだった。

戻ってきて、一刻千秋の思いで知らせが来るのを楽しみにしていたある日、豆の葉を取って帰ってきた夕方頃、偵察機は飛んではいたが静かだったのに、空襲が突然やってきた。20機余りの戦闘機が、薬倉庫のすぐそばにある機関銃を指してやってきたのだ。その対空双発機関銃が米軍機13機を撃墜したにもかかわらず、これまで発見されなかったが、最近発見したのだった。急いで防空壕に入って避難していると、爆弾が落ちて爆発する音や機銃掃射など、とても騒がしかった。

すぐにも頭の上に落ちてくるようで不安であったし、不吉でもあった。離島に行くことになった今、よりによって…気分がとてもよくなかった。しばらくして静かになり、無事に終わったと外に出てみると、暗くてよく見えなかったが、めっちゃめっちゃになっていた。銃部隊は見えず、ガソリン車のレールで覆って偽装していたのが、レールだけ逆になっていて、人は見えなかった。翌日聞くと22人だった射手が一人を残して全滅したと言う。間一髪の瞬間を私はまたひとつ越えた。

知らせを待つが、時間がかかるので焦ってきた。今か今かと待ち焦がれていたとき、看護長から本部に来るよにとの知らせが来た。病院の人事権は看護長の担当だった。配置移動の知らせではなかったのも、私は悪い予感が

144 Lukonor、ミレ環礁内にある小さな島。

した。間違いなく配置が変わったようだった。看護長を訪ねると予想通りだった。

私が望む島に行けなくなった、人事配置が変更されたという。私としては並大抵の困難ではなかった。すぐに院長室に院長を訪ね、看護長の話をしたら「どういうことだ」といって、願いどおりルクノール島に送ってあげるから少しも心配しないでいいと言った。院長はいつも私が任務に忠実であることをよく評価してくれたのだ。すぐに発令するから数日だけ待てという。数日後、本部から朝早くに日本人助手一人が訪ねて来て、自分が同行して案内するから、すぐに荷物をまとめて本部に行こうと言った。二人で急いで本部に行った。

ルクノール島への配置と生活

院長から 1945 年 2 月 17 日付で待望のルクノール島配置の勤務発令を受けた。院長に、配慮してくれたことに感謝して別れを告げた。院長からは特に体気をつけるようにとの切なる願いがあった。

ちょうど干潮時だから、案内助手と出発して終日歩いた。私はなにせ衰弱した体だったので、すぐに疲れて歩くのが困難だったが、日本人の助手は元氣旺盛でよく歩いた。昼間は島と島の間がそれほど遠くなく、明るいので無難に通過してきた。ところが私の疲れがひどくなっていき、泣きっ面に蜂でよりによって距離が長いところを夜に通過することになった。私は初めてなので案内についていっただけだが、日本人助手は人の事情にはおかまいなく、自分の力だけを信じ、早く歩けば十分に通過できると思って渡り始めた。

膝ぐらいの高さの水をかきわけてどれだけ歩いただろうか。日は暗くなり、四方が海だから島がどちらにあるのか、どちらに行くべきなのか、何も見えず方向がわからなかった。海水は次第に上がってくる。早く歩こうとすればするほど、疲れた足は思うとおりに動けない。海底は平坦ではなく、石につまずいて倒れそうになってふらつく。そうすると遅れざるをえない。しだいに水はへその下まで上がってくる。

案内が大変だという。〔満ち潮の時〕いま水に入っているが、行き先はまだまだで、これではどちらも死ぬということだった。早く、早くとせかしながら、

足の長い彼が早歩きをすると、二人の間隙が離れていく。ついてこなければ自分だけが生き残るという風なのだ。あきれて言葉もでない。

真っ暗な夜なので、深いのか浅いのか、どちらに行けばいいのかわからないのでどうしようもない。漠々とした。これまで飢えで死にそうだったが、やっと生きる道を探して行くのに、運悪く途中でとんだ目にあうことになったから、悲観もした。歩きながら、飢えでも免れようと若干の豆の葉と何着かの服を入れた軽い箱すら、煩わしくて棄ててしまいました。もしこの峠を乗り越えられなかったら永遠におしまいだ。精神一到何事か成らざらんというが、死に物狂いになって最後の力まで使い果たし、胸まできた波をかき分けてついて行った。どうやって行ったのか、まかり間違えば溺れて死ぬはずだったが、よくぞ難関を突破し、海への砂浜に到着した。またひとつ、思いもよらず身震いするような、私が一生忘れられない思い出ができたのだ。

日本人助手は島に到着すると、ひやひやしたが幸い死の淵を無事に乗り越えたと言って、これからはそんなことはないと言った。初めての道で無理をしたから疲れただろうと、ここでしばらく休んでいこうと言う。持ってきた草の葉で飢えを満たし、およそ20分間休み、再び歩行を促した。夕方頃、ルクノール島が見とおせる島から櫓をこぐ小さな船でルクノール島に到着した。島に上陸すると、これですべてが解決したような気持ちになり、心が満ちたりた。案内助手は自分の勤務地に行き、私は移動配置発令書を医務班に渡した。

久しぶりに再会した親友の同僚たちは、喜んで迎えてくれたが、痩せ細った私の体を見てびっくりした。とても苦労したのだろうといいながら、手をとりあってお互いに感激の涙を流した。よく来たと言いながら、この島は良い島だからすぐに回復するだろうと言った。仲間たちは顔色も良く、みんな元気だった。その当時、医務班には朝鮮人3人、日本人3人、合わせて6人の助手がいた。私たちは多くの死境を経験し、生死苦楽を一緒にした親友に久しぶりに会ったので、する話も多く、夜が深まるのも忘れて友情の喜びを分かち合った。

夜が明けるまで話をしてもつきなかつたが、私は長旅で疲れていた。体を引きずり強行軍してきたので、旅の疲れや病気もあり、緊張が解けたせいか眠くなり、話は先延ばしにして横になってしまった。

翌日、私と交代でチルボン島¹⁴⁵に転勤配置された仲間は、私と気が合う親しい海南郡のチョ・スンホン〔徐淳弘?〕だった。会ってすぐに別れたので、互いにとても名残惜しかったのだ。会えば別れは必然だが、あまりにもなごり惜しく、涙ながらに別れ、また会うことを固く誓った。本島で院長に、故郷の親友チャ・ドクファン〔曹徳煥?〕を指名したところ、忘れずに心にため、留任してくれた配慮がとでもありがたかったし、不幸中の幸いだった。

ルクノール島は小さな島だったが、ミレ本島に次ぐいい島だった。パンノキもたくさんあり、他の離島に比べるとはるかにすべてが豊かな方だった。だが生産に比べて人員が過剰であり、カボチャも植えているいろいろ努力をしなければならなかった。ルクノール島の居住者は朝鮮人が80人ほど、日本人は20人ほどでほとんどが幹部級であり、先住民が7、80人だった。

私たちの日課は「チャガロ」の採取、食べられる草や木の葉の採取、薪作り、海での魚捕り、などだった。「チャガロ」は、前にいったように、栄養補給の第一歩で、生きていくのになくてはならないものだった。

親友のチャ君は、私の分として4本の木を選定し、自ら直接登り降りしながら6、7日の間、採取方法を詳しく教えてくれた。どんなに木が怖くて登れなくても、他人にだけ頼ることはできない。危険をいとわずチャ君のように一生懸命練習して、数日後にはひとりで登ることができた。できるという自信がついた。すべて親友のおかげだった。

ルクノール島では「チャガロ」を身分の高い人たちに供出するため、大量に採取しなければならなかった。木を選び間違ったら、5、6本の木に登らなければならない。チャガロを取る木は、事前に木自体に足がかりを彫っておかなければならない。そして朝、昼、夕の1日3回ずつかさず、雨が降っても風が吹いても鋭い刃で1cmほどずつ端を切ってやらなければならない。一日一回抜いても駄目になる。並大抵のことではなかった。雨が降る時が一番危険だ。

栄養補給には魚が一番だ。海に行って魚を捕まえなければならなかった。私たち医務班は総動員で釣りに出る。干潮の時の島のうしろのリーフ（岩礁）に行き、木の釣り竿に4、5mの長さの糸をぶら下げ、釣り餌をつけて投げ

145 Chirubon、ミレ環礁内の小さな島の一つで、チュルボン島ともいう。〔海軍軍属個票には海南のチョ・スンホンについては徐淳弘、長興のチャ・ドクファンについては曹徳煥がある。チョはソ、チャはチョの誤記と推定。〕

入れ、竿を握る手の感覚でチャンスを見極めなければならない。釣り時間は3時間程度だ。よく釣る人が4、5匹くらい。へたすれば1、2匹、まったく徒労になることもある。大きいのは20cm前後だ。私も一行について2、3日間通ったが、徒労に終わった。大きな海なのでよく釣れると思ったが、そうではなかった。2、3日徒労ばかりすると、日本の同僚に申し訳なくどうも居心地も悪かった。毎日出かけると要領がわかった。1週間後からは成果があがった。十日ほど後には並ぶ人がいないほど釣った。運の良い日は20匹余り、1日に10匹程度は壮言できるぐらいになった。ある日には57匹の新記録をつくったこともあった。そうすると私一人でも医務班はまかなえた。釣り道士というニックネームまでついた。私は釣り専門として毎日、海に出勤した。

本島では話友達が一人もなく、孤独で寂しく薬倉庫に縛り付けられて餓死しそうだった。だがルクノールに来てからは優しい親友たちと話をかわし、いろいろと同情もされ、学んだことも多く、衰弱した気力も回復した。体も健康になり、すべてに自信をもち、活動するのに何の支障もなかったので、改めて生きがいを感じた。ひとえに院長のおかげであり、本当にありがたかった。

ある日のことだった。本島で仲のよかった薬剤室勤務の日本人助手が夜釣りに行こうといった。夜間の釣りは大きいのが釣れるということだ。夜釣りは個人自由だ。昼間の釣りは自信を持って自慢できたが、夜釣りの経験はない。しかし友達なので経験のため一緒した。行く途中、「大魚はさておき、どちらかが中間サイズの魚でも釣ったら二人で十分に食べられるだろう」と考えた。

はずんだ心で、膝ぐらいまで来る海水をかきわけ、20分ほどは歩いたようだ。干潮になって、やっと20人ほどが立って釣りができる程度のところがあった。先に来た8、9人が釣り糸を投げていた。夜釣りは釣り針も大きく、釣竿も大きい。私たちもエサをつけて15m以上の釣り糸を投げ込んだが、糸をつかんだ手に伝わる魚がつつく感覚が、とても微妙で思わしくなかった。水が上がってくる前に一匹でも釣らなければならないと思っているあいだに、隣にいる仲間がかかったといってゆっくり引きあげ始めた。かなりの大物のようだと言いながら、私を見て引っぱってみろという。引いてみると、小魚ではないようだった。引き上げてみると、50cm近くあった。この程度なら二

人でたらふく食べられるし、人に分け与えることもできた。寒かったので行こうと言って、満足した気分で足どりも軽かった。

島に到着すると、海辺の砂浜で先住民に会った。月が明るい夜だった。たくさん釣れたかと聞いたので、見てみるといった。見せるとびっくりする。毒魚だから食べれば死ぬというのだった。いい気分がずっと萎えてしまった。それでもう一度見てみると、フグのようだった。釣ったときにわかっていたら、捨てて釣りを続けたのに…。ふたりとも魚については門外漢だった。次の機会にいいものを釣ろうと思い捨てようとしたが、カボチャの肥やしにでもしようとして宿舎に持ちかえった。

ちょうど日本人の同僚が出てきて、見せてみるといった。来る途中に原住民から毒魚だから食べてはいけないといわれたので、カボチャの肥やしにでもしようとして持ってきたという、なぜいい魚を捨てるかといって持っていき、内臓を取り除いて灰の中に埋めながら、明日の朝に食べようといった。聞いたところによると、離島のアニアシナ¹⁴⁶で私たちの村の友たちの宣炳基が、日本人3人とふぐを食べたが、日本人3人は無事だったが、宣君はまるごと食べてかわいそうに中毒死したという。

翌日の朝、魚を食べに行こうというので迷っていたが、ついて行った。よく焼いた魚を持ってきて食べながら、心配しないで食べるようにという。まさかあの人たちは、死ぬことを知りながらも食べるだろうか。食べた経験がある人だろうと、自身だけを一緒に食べた。もちろんお腹もすいていたがとてもおいしかった。毒魚は食べた後15分ほどで症状がでて、ろれつが回らなくなり、30分もするとじたばたして意識を失い、1時間以内に永遠に世を去る。私は知らなかったので少し食べたが、不安で15分以上やきもきした。30分以上経過しても何の異常もなく安心した。

ルクノール島の医務班は、朝鮮人、日本人の差別なく家族的な雰囲気ですぐ良く互いに協力し、不自由なく各自の任務を忠実にこなして暮らしていた。そのような時、好事魔多しというが、ある日、本島の本部から思いもよらなかった人員削減移動命令書が伝えられた。私とは本島から親しく、寂しいときはお互い慰めあい、遠慮なしに心から忠告してくれ、今も多くの協力をし

146 ミレ環礁内の一つの島を称するように見えるが、類似の島名は見つからない。Aneenwudej、Enajet、Enewe、Eneaidrikのうちの1つのようなだ。〔エネアシナ島と推定〕

てくれているチャ君が、よりによって抜けてしまったので、片腕がなくなったように心が痛んだ。長く一緒にいることができればよかったのに、上部の指示だからどうすることもできない。あきらめて、お互い体に気をつけ、また元気に再会できるようにと、惜別の念を残して別れなければならなかった。もう一人は日本人助手だったが、夜釣りにも行った親しかった同僚とも離れるようになった。結局、私と親しい人たちだけが、抜けていったのだ。とてもむなしかった。ルクノール島には日本人2人、全羅南道高興郡の趙玉済という仲間、あわせて4人だけだった。

本島から初めて各離島へ配置された当時は、我が朝鮮人にも多少自由があり、海に行ってダイナマイトを爆発させる漁法で魚を捕って食べ、食糧補充に大きく役立った。しかし、毒をもった魚が多く、むやみに食べて多くの人が命を失った。海の魚については初めての体験なので識別できず、極度の飢えの苦しみで、魚を見ると気がおかしくなって食べようとしたのだ。

同僚の金ジェオクの話によれば、アニアシナ島では海辺に臨時漁場を作り、魚をつかまえて食べたが、欲望のままにたくさん食べた人は2、3日苦痛に苦しんでほとんどみな中毒死し、少しだけ食べた人は10日以上、半月間、死の境をさまよった後、回復したという。自分が直接体験したもので、30人は死んだだろうとのことだ。故郷の友人長興班の邊漢權班長によれば、アニアシナ島駐在時、班員2人が中毒死した。事務室は邊班長に、死亡者の親指を切断して埋葬するよう指示し、これからは責任を持って取り締まって、不祥事が起これば責任は免れないだろうから、とくに注意するようにと言ったそうだ。

米軍は、ミレ島で食糧不足からやむを得ず各離島に分散配置したという情報を探知し、救助船という名称で各離島の海岸線の後ろの海側を随時巡回しながら、拡声器をとおして流暢な日本語を流した。皆さんは何も食べ物のない島でどれほど飢えに苦しんでいるだろうか、餓死や変死といった無駄な死に方をせず、騙されるかもという恐れでためらうこともせずに、皆さんは船に乗れば生きることができるから、早く船に乗るようという。米国は民主主義国家として、まず人命と人権を尊重して重要視するから、皆さんの身分を責任をもって保障する。現在、ハワイ収容所の数千人の捕虜の皆さんは、お腹いっぱい食べて快適に元気によく暮らしている。皆さんはなぜ、餓死状態に震えて苦しみながら無駄に死んでいくのか。一日でも早く救助船に救助

司令部に伝えられた。すると連隊長の大佐から特別指示命令が下された。各離島にいる朝鮮人を徹底的に取り締まり警戒を厳重にしろということだった。その後は島の要所、要所に監視所を設置し、一挙手一投足を監視し、活動を制限して自由を奪った。そして、船に乗る気配が見えたり、行動が怪しい者は射殺しろとのことだった。

海に出て魚でもとって食べなければ栄養補給できないのに、監視が徹底しているので、どうすればいいのかわからなくなり、生きる自信も失ってしまった。日が経つにつれて身も心も大きな打撃をうけ、栄養失調で体力は衰えた。不自由という障害物が生きる道を遮っているのだから、このままではどうしようもなく、確実に死んでいくしかない。だとしてもじっとして飢え死にを待てるだろうか。破れかぶれでどんな手段でも使ってみるべきだ。ことわざにも、10人でも泥棒ひとりをつまえるのはむづかしいと言うように、それほどまでに厳しい監視網を抜け、1人、2人と船に乗る人が増えていくので、本部から伝えられたのは、少しでも逃亡を減らすように事前に朝鮮人を処置することが、あとくされをなくす最も良い方法と言ったそうだ。

あまりにも恐ろしく想像もつかない。本島に残っている少数の高官たちは、自分たちが食べていく非常食をどれだけ蓄えているかわからないが、私たちの仲間の中でもっとも泳ぎの得意な5、6人を選び、漁師専門職として特別に選定し、海に自由に出入りさせて終日泳いでタコを捕まえさせる。離島からは「チャガ口」を供給され、たらふく食べているから不自由なく安逸な生活をしているだろう。だが、各離島では食べるものがなく、自由を拘束されて海にも出ることが難しく、飢餓と栄養失調で病気になるまで死んでしまう、この悲惨な実状を知っているだろうか。その関心すらないだろう。彼らは、朝鮮人は飢えて死のうが病気で死のうが関係なく、どうなろうとかまわないと思っただけだ。

1943年11月に米軍が上陸したら、直ちに日本軍に全員殺されたはずだったが、米軍が撤退することで一触即発の死のふちを乗り越え、食糧切れで食べられそうにない草の葉、木の葉などで腰ひもを引き締め、飢饉と苦難の逆境を克服し、ようやく生命を維持してきた。しばらく静まっていたが、また再び突然、〔朝鮮人を〕処置すべきだという不吉な声があちこちから聞こえてきたから、胸をたたいて嘆かざるをえない。非人道的な行為も辞さない殺人

魔のような彼らが、〔米軍の〕船に乗るからという口実で、いつ何をするのかわからないから、風前の灯火のような私たちの運命だった。戦々恐々の恐怖と焦りで心穏やかな日はなく、生きる意欲すらなくなってしまった。

もちろん、当時、私たちは大きな希望や期待を持つことができない立場だったが、ガリガリに痩せても、病気をせず、飢え死にさえしなければ、何とか命だけは維持し、戦争が終われば、故郷に帰ることができるだろうというかすかな希望のような願いがあった。今はそれさえなくなり、絶望感でうつ病患者になり、精神は飛んでいき、肉体だけが動く無味乾燥な日々だった。百聞は一見にしかずというが、その驚くべき現実を実際に体験したことのない人は、その心情は推察すらできないだろう。

私がいたルクノール島では、海辺の臨時監視所員が水平線に米軍船の船体が現れたら、事務所に連絡して警戒の銃を撃つ。同時に朝鮮人を各防空壕に監禁し、両側の門で銃を持って監視する。医務助手のチョさんと私は、先住民6、7人を防空壕に入らせて、手榴弾2個ずつを持って監視をする。きちんと警備しろといい、脱出や逃亡をすれば投擲して殺害してもよいといわれた。医務助手は朝鮮人でもいい役職であり、信任してくれたのだった。船体が完全に消えるとはじめて警戒解除の銃が撃たれ、外に出て活動をするようになる。警戒の銃声がしたのに、防空壕に入らずに歩き回っていると不審者として引っぱっていかれ、銃殺される。

そして時間を問わず船が来る気配があれば、島の外に出ることを許さない。離島の中でも、ルクノール島ほど杓子定規にこだわる島はなかった。重圧は大変だったが、他の島よりも生産性が良かったので、互いに協力し、慈しみ、よく調整し、飢えて倒れる悲惨さだけは免れた。しかし、あまりにも取り締まりが徹底したため、船に乗る人は1人もいなかった。船に乗った人が1人、2人と増えれば増えるほど、島に残った人々に対する監視は厳しく激しくなり、殺される恐れが増える。だからといって船に乗った人を恨み、叱ることはできない。各自が生きるためには生きる道を探さなければならず、やむをえないことだった。

どの島なのか覚えていないが、20人余が居住している小さな島だった。その島で機会に見て魚を捕りに行った人々が、ちょうど米軍船に会って船に乗ったという。しかし島に残った人々にすぐに影響を及ぼした。残りの15、

6人を引きずりだし、1人ずつ順に銃殺したが、最後の端に立っていた人が、自分の前に立っていた人を連れて行こうとした瞬間、引きずり出されて死ぬのも、逃げる途中で銃にあたって死ぬのも、死ぬのは同じだと逃げ出したという。飛んでくる銃弾を避けて逃げ、一目散に走って近くの島に逃げ、ようやく神の助けで九死に一生を得た。隠れていて米軍船に救助されたようだ。

実は実兄が一行と一緒に〔米軍〕船に乗っていた。血を分けた弟を置いて自分だけ船に乗ったので、遠く離れた異域で生死を一緒にしなければならない兄弟なのに、自分が大きな過ちを犯したと後悔し、帰国しても弟に不幸があったら、どんな顔をして親兄弟に会うことができるのか、何といえいいのかと思った。生きたという喜びよりは憂鬱の心情で涙の日々を送っていたが、意外にも弟が九死に一生を得て生きのび、米軍基地のマジュロ島¹⁴⁷の捕虜収容所で再会したため、その瞬間の喜びはたとえようがない。再会の喜びを天に感謝して抱き合い、限りなく流れる涙を抑えられなかったという。

チルボン島惨事事件発生

1945年3月1日だった。夜が明けるにはまだ遠かったのに我々の仲間の一人が、ルクノール島の医務班を訪ねてきた。私はどうして夜も明けないのに訪ねてきたのかと聞くと、彼は大変なことが起きたんだと。自分たちのチルボン島で朝鮮人が日本人を捕まえて殺す事件が起こり、島がひっくりかえる騒動になり、こっそり抜け出し、海を泳いでルクノール島本部事務室に報告しに来たと、何か良いことでもしたように恥じらいもなく言った。

私は聞くと同時に、ついに事件が起こってしまった。直感的に、我が同胞たちはおしまいだと思った。そうでなくても口癖のように、早く始末しなければならぬといっていたのに、理由はどうであれ、殺された者の多い少ないに関係なく、日本人たちを殺害したことを口実にして、これを機会に私たちの同胞を皆殺しにすることは当然という気がしたのだ。不安になる一方、自分ひとり生きるんだという思いからか、手柄をあげようという魂胆からなのか、

147 マジュロ環礁、現在、マーシャル共和国の首都である。〔以下、チルボン島事件を3月1日と記しているが、海軍軍属個票と米軍の救出記録では3月中旬である。〕

島を脱出して泳ぎ、同族を裏切って日本に忠誠を誓い、日本の手先になって報告しに来た。それにより、第一にチルボン島にいる120人ほどの私たちの同胞はなすすべもなく死ぬことになったのに、そのような裏切りを受けいれることができるだろうかと思った。しかし今の現実、それを明らかにする時ではなかった。第二に死が私たちの目前にやってくるからだ。

死ぬ時がくれば死ぬにせよ、命がある間はまず食べなければならない。私は朝早く起きて歩き回りながら「チャガ口」の採取を終えて帰ってきた。そこで日本人助手が銃を手入れしていた。何も知らないふりをして何かあったのかと聞くと、今日は出張に行かなければならなくなり手入れをしているという。

ちょうどその時、ルクノール島に施設部工事主任の桑下大尉が出張してきて滞在中だった。海が干潮になれば、チルボン島まで1時間あまりの距離だという。しばらく後に、潮に合わせて日本人15、6人が完全武装して機関銃を先頭に、大尉は中央で拳銃を携帯して出発した。チルボン島の私たちの仲間たちが全滅させられるのは明らかだった。

私はまもなく迫ってくる不幸を目前にして、これまであらゆる苦勞をしながらも生きてきたのが無駄になったようで、人生があまりにも儚くてむなしく痛ましかった。なんとか生き残る手はないか、一人でじっくり考えてみた。神出鬼没の才能があったとしても、どこへも行けない手のひらのような小さな島では、まったく役に立たないだろう。このような不祥事が起きたのが恨めしかった。私たちの生死は日本海軍の連隊長の意思によって決定されるだけだった。

私は不安な心もちで一般班員を訪ね、チルボン島でこのような事件が発生したので、周知のように私たちも間違いなく無事ではすまないという話だけをした。誰かと議論したとしてもいい案ができるわけではないが、錯雑で沈鬱な心境であっても、話友達でもいて話ができればいい。だが、仲間の趙さんは二人きりの時も、なぜか一言もしゃべらず、少しも落ち込んだり心配したりする気配もなく、対岸の火事を見るように平然と落ち着いているようだった。

私とは見方や考え方が違う。誰かが船に乗ったという噂を耳にすると、こんちくしょうめ、船に乗れば生き残れると思っている愚か者め、といいながら悪口をいう。日本人をあまりにも過信して判断を誤っているのではない

かというのが、私の推測だった。医務助手だといって信任され待遇はよいが、いざとなれば、袋小路で朝鮮人全体に不幸な事態が生じたときには無事ではすまないことは、火を見るより明かだった。一緒にいながらも相手の本心がわからず、むやみに苦しみを訴えるようなことを言って日本人に伝われば、死を早めることになる。非常に親しい人でなければ、苦しみを訴えるような話は絶対にしてはならない。そういう点からみれば、私たちは協同団結心が薄いというしかなかった。私は窮余の策で、どうせ死ぬのなら「チャガ口」の刀で一人でも刺し、復讐をして死ぬのがいさぎよいのではないか、あれこれと煩悶し、終日落ち着かなかった。

太陽が沈む日暮れころに彼らが帰ってきた。我々は状況を聞くこともできず、彼らの動きを察するだけだった。日暮れになったので今日はそのまま終わるかもしれないが、明日になれば何らかの措置があるのではないか。ともかく各離島に分散している我が同胞の百余名の運命は、本島本部の海軍大佐連隊長の指示にかかっている。各離島で事件のニュースを聞くことができない人々は、ほとんどが知らないことだろう。ルクノール島の私たちは、その日の夕方を無事に静かに終えた。

3月2日、夜が明けると、心がそわそわして居ても立ってもいられない。すばやく行動すれば、必ず何か起こりそうであり、ひやひやした。一日中イライラした心境で、なんとか悪いことが起こらず無事に過ぎた。そうだとしても安心はできない。通信網がない。本島から徒歩で連絡を取るのに2日以上かかる。翌日も何ごともなく無事に過ぎた。そのように心配した私たちは、6、7日目を変化なく無事に過ごし、8、9日目でさえ静かに過ごした。これくらい日時が経過すると、なんとか幸いに、わからないうちに乗り越えたようで少し安心した。

これまで彼らの犯した行為から不信を持ち、考えすぎたのかもしれない。良心的な人道主義者たちの留意で一時的に保留したのかもしれない。8、9日間、私たちは働く意欲もなく、食欲も落ち、血がカラカラに乾き、限られた人生の無味乾燥した日々を送った。

生死がどうなるのか。死ぬことになりそうでやきもきし、心身ともに受けた苦しみは言いあらわすことができない。体験しなければ想像もできないだろう。これによって寿命が10年は縮まっただろう。

チルボン島事件の動機と事後処理

いつも差別され、朝鮮人、半島人だといって見下され、あらゆる蔑視と屈辱を受けながら、骨が裂けるほど過酷で強圧的な労役をさせられてきた。だから彼らに対する敵意と嫌悪感が増し、関係は良くなく、切齒腐心の恨みの対象になった。

朴鍾元（パク・ジョンウォン）氏の話によれば、ある日のこと、思いもよらず宿舎に来た日本人がクジラの肉だといって、気前よく置いていった。お互いの関係は良くなかったが、おそらく大きな肉を手に入れたので少し分けてくれたようだった。とてもお腹がすいていたのでよく食べたという。

数日後、朴鍾元氏は仲間数人と魚を捕りに通う小さな無人島に行ったが、目を開けては見られないほど残酷に殺された死体があったそうだ。身の毛がよだつようだったが、おかしいと思って子細に見ると、顔がわかる、知っている私たちの仲間だったという。屠殺場で牛や豚をつぶすように、人肉をえぐっていったらしい。その惨状を目撃した一行は、直感的に前日のことが頭に浮かび、驚愕とともにあきれ果て、歯が震えて言葉を失ったという。どんなに凶悪無道なヤツらであっても、生きている人を殺して食べ、クジラ肉だと平気で騙して仲間の人肉を食べさせるなんて、世の中にこんなことがあり得るだろうか。この衝撃は言葉では言いあらわせない。ヤツらのしわざであることは明らかなのに、証拠がないのでどうしようもない。湧き上がる怒りを抑え、絶対ひとりで海に出ないよう、各自で特別に警戒し注意するよう強調したという。

その数日後、その一行が魚を捕りにその島に行ったが、またそのような死体を見つけたという。この獣のようなヤツらが生きている人間を捕まえ、飢えた腹を満たすために食べ物にするなんて、これはひとえに敵対行為だ。その一方で、恐怖が先立ったという。このまま黙って放置しておいては、今後、どれだけ私たちの仲間が犠牲になるのかわからない。もう我慢しようとしても我慢できないところまできた。宿舎に戻って実情を知らせ、高齢者の団長をはじめ覇気のある金哲男（キム・チョルナム）、朴鍾元ら若い闘士たちが主体となり、私たちの生存権の正義に基づく正当な抗議として、最後まで闘争をするしかないとの結論になった。死を覚悟し、日本人を倒す決起の日を決めた。運良く無事成功すれば、米軍機や米軍船が来たとき、白旗をあげて救助して

もらって船に乗ることにしたという。

チルボン島だけは朝鮮人側で小銃3丁を所持していたが、銃弾が数発しかなく、日本人と直接相対することは不可能で、充分考えた末、夜間を利用して最も悪質な者から一人ずつ森の中に誘い出し凶器で殺すことにした。1945年2月28日の夜間に実行に移したという。

いくら緻密に考えた方法でやるとしても、人を殺害することは容易なことではなく、7人ほど殺したところで島がひっくり返るような騒ぎが起きて、残った日本人はどこかへ逃げてしまい、暗い夜だから探すこともできなかったという。その当時、チルボン島には朝鮮人が120人ほど、先住民が10人ほど、日本人11人が住んでいた。

3月1日、ルクノール島に連絡しに行った人がいるとも知らず、夜が明けたら全員が米軍救助船に乗って行くことを前提に食べて行こうとし、「チャガロ」にカボチャなどを手当たりしだいもいで急いで食べ、ひたすら船が来るのを待った。しかし船は来ず、近くの島で突然機関銃の音が騒々しくなると、びっくり仰天してうろたえ、窮地で自分を見失い、あるいは助けてくれと手をあげて出ていく人もおり、徒手空拳だから抵抗もできず、海辺に逃げたが行くところがあるだろうか、死ぬ外はない。首謀者たちは2、3丁の銃で対抗してみたが、まわり全てが敵で、弾丸もなく相手にならなかったので諦めた。首謀者として所期の目的が失敗に終わり、罪のない班員を犠牲にさせた責任を痛感し、日本のヤツらの手にかかって死ぬよりむしろ民族の精気と気迫で堂々と死のうと、ダイナマイトの代用品の発破で5、6名が抱き合って自爆し、悲壮な最後を遂げたという。

日本人たちは飢えた猛獣のように手当たりしだい殺害し、丹念に銃剣で生死を確認していきながら、掃討作戦をしたという。その阿修羅場でも天の助けで生き残った人は、120余人中、負傷者2人合わせて15人だったと朴鍾元氏は証言した。

首謀者の一人だった朴鍾元氏は、やっと椰子の木の上に登って身を隠したためみつからず、九死に一生をえて、生きて帰郷し、生き証人として一部始終を証言した。先住民の15人も加担したとして殺されたという。ルクノール島からは武装した日本人が引き潮に合わせて来たので時間的に余裕があった。米軍の船がもう少し早かったら全員が無事だったのに、残念ながら運が悪かったのだ。

血を同じくした我が民族が、この世でありえないような殺人魔の蛮行のさなか、憤激のあまり反抗して生死をかけた行動で、日本人7人を処断したが、残念なことに私たち仲間100人余りが虐殺されてしまった。故郷の親兄弟たちは、昼夜を問わず無事に生きて帰ってくるのを祈りながら待っていた。いくら待っても戻ってこない息子や兄弟が、どこで死んだのかさえ知らない。だから、そのいたましさは言葉では言い表わせない。命がある限り決して忘れられないだろう。

オホラ～、悲しくて、悲しくてたまらない。地面を叩いて嘆き、哀悼し慟哭しても、骨身に染み込んだ恨みはとけない。無名の勇士たちが惜しくてかわいそうであるばかりだ。

実に当初、日本のヤツらによる災いからの抗争だったが、不幸にも反対にチルボン島の我々の仲間だけが全滅させられた。

事件後に直接会うことはできなかったが、聞いたところによると、事件当時、とびかう銃弾の真つただなか、銃で撃たれ倒れた人とともに、驚きの余り倒れてひたすら死んだように横たわり、息もまともにせず、このままうまくいけば生き残れるのではないかと思ったそうだ。すると日本のヤツら二人が確認しながら銃床でぐいぐいつついて、こいつ生きていようだからもう一発ぶち込んでやろうかという。ああ、こんどはまちががなく死ぬんだと胸が痛んだが、もう一人がいうには、これくらいなら死んでいるだろう、銃弾の一発でも無駄にせずに行こうといったので、すんでの所で死を免れ生き残ったという。

私とは同郷の親友である長興班の邊漢権班長が、ルクノール島に駐在していた当時、3月1日のチルボン島事件の翌日の朝、事務室の方から銃声が聞こえたという。そうでなくても事件のために生きるか死ぬかわからない、戦々恐々とした不安なところなのに、不吉な思いで忍び足で事務所の方に近づき遠くから見ると、事務所の横に穴を掘って、顔見知りではないが16、7人の私たちの仲間を集合させ、一人ずつ引きずってきて銃殺していたというのだ。野獣のようなヤツらが予想どおり朝鮮人の皆殺し作戦を始めたようで、目の前が真っ暗になり、体が震え、何も考えずにあわてて宿舎に帰り、班員にその状況を話すと、みんな青ざめて言葉を失い、じっと互いの顔を見つめるだけだったという。みんな今まで幾多の逆境にも耐えてやっと生きてきたが、

もう最後だと思うと絶望でいたたまれなくなった。どれくらい時が過ぎたの
だろうか。銃声がやみ静かになった。しばらく後に気になって探してみると、
チルボン島事件で海岸や海に逃げた人たちを、あなたたちには罪がないからお
となしく言うことをきけば見逃してやると嘘をついて誘い、ルクノール島まで
連れてきて射殺したことがわかった。ひとまず安心したという。

私は 1945 年 2 月にルクノール島に配置され、ただちに急を要するのが食
生活であるからとそれに熱中していた。だから一般の班員と接触する機会が
なく、どの班員が住んでいるのかわからず、とても親しい邊漢権氏とも同じ
島にいながらわからなかった。帰国してから、邊氏がその当時に体験したこと
などを詳細に証言し、それによって知ることになった。その当時私たちは、
今日は生きているが明日はわからないという、阿呆のような生きざまだった
のだ。

チルボン島事件の 10 日ほど後だっただろうか。本部から、邊班長に班員
7、8 人を、責任を持って引率し、チルボン島に行って死体を片づけるよう指
示があった。朝鮮人だけを送ることができないから日本人も配置すると言った
そうだ。そして今後、徐々に多くの人員を配置するだろうという。邊氏が
班員 7 人、日本人 11 名と一緒に現場に到着すると、初めて入った細い道に最
も多くの死体があり、その凄まじいありさまは、とても見られたものではな
かったという。死体は腐敗するままにほっておかれ、ブクブクに膨れて無茶
苦茶で、ハエの群れが飛びまわり、悪臭で鼻を出すことができず、手がつけ
られない状態だったから、どうすればいいのかわからなかったという。ほん
とくに大変だったらしい。今すぐに食べ物も用意しなければならず、あれこ
れすることで余裕がないのに 7、8 人の人員で多くの死体に引き続いて関わる
こともできない。だから、〔死体が〕少し多かった場所に押し込んでおまか
に片付けたが、それでも森の中までは手がつけられず、そのまま放置したと
いう。

私たちは、広い太平洋の離れ島で恨みの 3 年数ヶ月の歳月をどのように生
きてきたのかを、振り返って考えてみる。人間の差別、抑圧、殴打、過酷な
強制労働、ことばでは言いつくせない恥辱と蔑視を受けて、数多くの死線を
みんなで乗り越えてきた仲間ではなかったのか。本当にかわいそうな仲間た
ちだ。特にチルボン島の同志たちは不義に対抗する気高い闘志で、私たち皆

に代わってやむをえず闘い、虐殺され、非業の死をとげた。だが、彼らは命をすてて忠義を守った同志たちだ。

同族として適当な場所を選び、地面を掘って埋葬し、帰れない靈魂を安らかに眠らせるのが当然すべきことなのに、その当時、私たちは明日を約束できない失意の中にあった。無駄に一生を過ごす精神病患者のように、すべてのことに気をつかう力すらなく、その日その日が過ぎればよいというその日暮らしの人生だった。だからそれができなかったのが残念だ。

その後、親友の邊氏は、過去を振り返り、本意ではないがあまりにも粗末に扱ったのが気になって申し訳なく恐縮するばかりだといった。そうしたことを体験しなかった人は理解することができず、同じ民族として無情でひどいというだろう。

ルクノール島脱出の決心と実行

チルボン島は処理後、順次、別の島から人員を連れてきて補充した。人員が増えるにつれ船に乗る人も増えた。一時も気が休まらず、気の合う何人かの班員たちと船に乗ることを示しあわせ、機会を狙っていたある日、先に船に乗った松各（ママ）同志が、明日ある島に船をつけるからそちらに来るよう伝言したという。

次の日、邊班長はみんなを見て、このような機会は逃してはいけないから急いで行こうと行って、魚を捕りに行くふりをして危険を顧みず行った。だが指定された島を間違え、反対側に行ってしまう、あてが外れたという。1分1秒が惜しいのに時間をむだにして遅れたので焦り、再び方向を変えて、深いところでは泳ぎ、水のなかでもがいて死にそうになりながらも、ようやく船に出会った。幸い落伍者もなく救助船に乗り目的を達した。

チルボン島の処理後のある日、島に駐在している私とは親戚になる同じ村の人が、本島本部に連絡に行く途中、私を訪ねて来て、日本のヤツらが馬道章（マ・ドジャン）班長を銃殺したという。理由は、多くの班員たちが機会をみて船に乗ったが、馬班長はひどく心が落ち着かず、心細くて、ただ服を着替えて島の中を歩き回ったのが怪しいとされ、朝の朝礼のときに引っぱってきて、みせしめに班員たちの前で銃殺したという。馬氏は故郷の友人で性格は

穏やかで正直で、班員たちに尊敬され評判のいい人だった。ちょっとした間違いで惜しい人が日本のヤツらに不本意に虐殺された。

一方、チルボン島事件の時、無人島に逃げて幸い捕まらず、生き残った人がいた。彼はタコの木¹⁴⁸の下でじっとしており、夜になれば海辺に出て貝などをとって食べ、深夜にはときどきチルボン島に渡り、みんなが寝ているすきに食べ物を盗んで食べ、やっと生きのびたという。班員たちは盗む人はいないのに、しばしば盗まれるから不思議だと思っていたという。

いつだったか。無人島の方に魚を捕りに行ったが、一瞬確かに人がちらっと見えたが、すぐにいなくなった。不思議に思ってその付近をさがしてみたが、見つからなかった。その後も魚を捕りに行く際には調べてみたが、痕跡はないということだった。しかし、たびたび盗まれるので間違いなく無人島に人が住んでいると思った。意外に8月15日に日本が降伏し遠からず帰国することになったが、私たちの仲間一人が無人島に住んでいることを知りながらそのまま帰ることができず、本格的に探索をして結局発見した。彼はタコの木の下に穴を掘り、入るときはタコの木をめくって入り、引っ張るとすっかり覆われてわからないようにして、寝起きしたという。6ヶ月の間、昼は穴の中で日の光も見られず、食べることもまともにできなかったから、並大抵ではなかっただろう。体はすごくやせこけているが、ひげと頭の髪はのびてその姿は人のようではなく、やっと生きながらえている格好が、痛ましく哀れだったという。捕まれば死ぬという恐怖でぶるぶる震えながら、命は助けてほしいと手を握って哀願したという。

もう日本が戦争に敗れて降伏したので、私たちは解放されてすぐに帰国することになったから、安心して一緒に行こうといっても、信じられないのか、ずっとどうか助けてくれと哀願ばかりしたという。だからといってほっておくこともできず、これまで探してきたということもあって、粘り強く説得をして無理に引きずるようにして、一緒に故郷へ帰ってきたという。

私は病院の伊藤えいじ院長が、一生忘れられない恩人だった。私为本島のミレ島から離島に交換派遣してほしいと言ったとき、人事担当の看護長が配置計画を変え、私が望んでいた場所ではなくチルボン島に私を行かそうとした。

148 タコの木、学名 *Pandanus boninensis* の熱帯植物。果実はパイナップルと似たような形で食用に利用でき、最初は緑で熟すと明るいオレンジ色あるいは赤色になる。

それで改めて懇願したところ、私が望むルクノール島に配置してくれたから、生きて故郷に帰れたのだ。私のような人間がチルボン島に配置されたならば、まちがいなく死んだだろう。

私は生きて帰ったが、親しい友人の同僚を失った。ルクノール島から交代でチルボン島に配置された同僚のチョ・スンホンは事件で犠牲になったのか、捕虜生活したとき会えなかった。もっとも事件前に1、2回移動配置があったから、必ずしも犠牲になったと断言はできないが、万一その島で不幸に遭ったなら、生き死には運命だとしても、私のかわりに犠牲になったのだから、罪責感でいつも心が晴れない。

ルクノール島はいい島なので、食生活の大きな助けとなった。私たち医務班は、私が釣り上手であり、毎日釣りに行くのが私の日課であった。私一人でも私たちの仲間を十分に充たすことができ、栄養補給になるので、食べることにとらわれる心配がなかった。しかし、各島でいくら厳重な警戒で徹底的に取り締まっても、船に乗る人が増えるのはどうしようもない現実だった。不吉なことばかりが聞こえてきた。医務助手だからといって、日本人が信任し、待遇をよくしてくれても安心はできない。

私たちは朝鮮人だ。いつも不安でひやひやし、気楽ではない。私の考えは、船に乗ってこそ不幸をまぬがれるということだ。しかし、泳げないので簡単なことではなく、自信がない。条件は良い方で、共に生きていく人間なので同調者さえあれば簡単に成功できるのにと、一人で悩んでばかりいた。いたずらに先のことが心配になり、焦った。

ある日の午後だった。地平線に船が現れたようだった。警戒の銃声が響いた。以前のように、一般の班員は防空壕に監禁され、日本人が守備をして、趙さんと私は先住民を監視していた。実は朝鮮人と先住民とは相通じるところがある。その日に限って風はまったくなく、いつもは波が高い内海も穏やかだった。防空壕にいる時間がどれくらいたったのだろうか…。突然、船からの軽音楽の音が静寂を破り、防空壕のすぐそばで聞いているように聞こえてきた。防空壕の扉からちょっと外海を眺めると、島の正面に船が止まっていた。その音楽が、わびしいからなのか悲しいからなのか、これまで感じられなかった心の変化を起こし、人の心を溶かすのだった。知らず知らずに涙がふきだした。いくら抑えて落ち着かせようとしてもダメで、すぐには抑えられ

なくなった。いくら我慢しようとしても我慢できず、先住民を見るのもバツが悪く、趙さんに行くとも言わずに宿に戻って横になった。それでもずっと涙がとまらず、本当に奇妙なことだった。すると解除の銃声がした。趙さんはむせび泣きながら入ってくると、すぐ船に乗ろうという。日本人の助手はまだ帰っていない。船に乗った人の悪口を言って憎んでいた人だったが、あの音楽が180度心境を変化させたのだ。

私は思いもよらない突然の言葉に、ほんとうにそう思うのかと聞いた。うそだと思うのかといいながら、さらに船に乗るにしても一緒に乗り、生死を共にしようと誓うのだった。久しぶりに同調者を得たので、これほどうれしいことはなかった。二人が力を合わせれば無事に成功できるだろう。それまで一人でじれったく苦しむばかりだったので、新たな勇気が湧いた。これからは死ぬにしても、生きるにしても心をあわせ、本格的に船に乗ることに専念するのだ。先に述べたように条件はよいが、どちらも泳げないのが大きな問題だった。だからといって命に関わる問題なので、ぞんざいにはできない。真心をつくせば天に通ずるというが、精一杯努力すれば良い成果が得られるだろう。

これまでは、米戦闘機が各離島を一日に2、3回、通り過ぎるだけだったが、数日前から殺傷弾を投下し、機銃掃射を猛烈に浴びせた。海に出ると隠れるところがないのでこのうえなく危険だ。日本人の助手たちは空襲が怖くて、釣りをあきらめてしまった。私たちは船に乗る気だから、危険でも出て行かなければならず、むしろ障害物がなくなったのでよかったわけだ。私はひょっとして疑われるかもかもしれないと思って、日本人の助手に、私たちは栄養の補給をするため魚を食べる必要があるから、用心して二人が出て少しでも捕ってくると言うので、私の腕前を知っているので大賛成した。趙さんは釣りの技量はゼロだった。

船に乗るためには、船が都合よく来なければならないのだが、それは容易なことではなかった。以前なら安心して実力を発揮できたのに、空襲に備えて釣り糸を海に投げ、いつ戦闘機が現れるかと目と耳をとがらせ、精神を集中して四方八方を注意していた。すると釣り竿に対する注意がうすれ、釣りがまともにできない。うまくいっても7、8匹しか釣れない。それくらいでも食べるに足る量にはなる。

もし戦闘機が、人がいることを先に探知すれば、十中八九やられてしまう。私たちのように泳ぐことができない人はなおさらだ。戦闘機が現れ、顔だけを出していると、頭上を稲妻のように通り過ぎるのだが、乗っている二人の顔がはっきり見える。胸がどきどきする。なにせ早いので人がいるのが見えないようだ。私たちは船に乗ることが目的だったので、毎日通い続けた。いざ船に乗ろうとすると頻繁に来ていた船がまれになった。来ても私たちと都合が合わない。そりゃそうだ、世の中が私の思いどおりになるはずがない。粘り強く努力しなければならない…。

日が経つにつれ、空襲の回数が増えたので、魚の収穫は減少せざるをえない…、だからといって、1、2匹とか、収穫なしに帰ることはできない。収穫もなく毎日出かけると怪まれると思い、釣りに神経をつかって5、6匹程度は持ち帰らなければならない。宿舎に帰って日本の同僚に、今日は空襲がひどくてとれなかったと言えば、これだけで十分だと言い、危険なのにご苦労だったと賞賛までしてくれる。

私は危うく船に乗る前に死にそうになったことがある。ある日の夕方だった。その日も船が来て、いつものように防空壕で解除の銃を聞き、急いで外海側にある椰子の木に「チャガロ」を採りに行った。よりによってその多くの木の中で運悪く爆撃を受けて砕けた木があった。一番たくさん取れるいい木だったので惜しかった。ふと外海を見ると、いつの間に来たのか、思いもよらない船が正面に止まっていた。その時、事務室で銃を鳴らした。私は宿舎へ帰る途中、偵察にきた工員に出会った。つい先ほど解除の銃が鳴ったので、「チャガロ」を採りに行ったがかくかくしかじかで帰ってくる途中で、警備員たちは船が島にまで来るのも知らず、いったい何をしているのかというと、工員たちは「クソ野郎、勤務怠慢だ」といって警備員のいる方へ行った。私が帰ろうとしているとまたひとりの工員に会った。すぐに、船に乗ろうしたのではないかと問いただされた。私はそうではないとあれこれ言い訳し、ある工員と一緒にいて帰る途中だといってが、頬を5、6発殴られた。殴られて呆気にとられた。

事の正否を問わず無条件に一方的に殴られたから、悔しくてたまらない。でもそんな時に抗議してみてもいいことはない。後になって、船が目の前に来ているのに歩き回って疑われないほうがおかしいと思い、次からは気をつ

けるようにという。宿舎に戻って日本人の同僚に会い、あれこれしたと話したら、急ぎすぎるからやられたのだという。そういえば急ぎすぎると時には病気になり、禍のもとになることもある。とにかく、医務助手という有利な職責によって朝鮮人でありながら極刑は免れたのだ。

二人は船に乗るために、飛行機に追われて倒れ、怪我をしながらも危険をものともせず、15、6日間粘り強く通った。たまに船が来ても私たちと時間が合わず、私たちが釣りに行く所には一度も船が来ることはなかった。ひどい苦労ばかりして疲れる。時には失望も落胆もした。だとしても諦めることはできない。目的を達成するまでは、万難を排して行かなければならない。

そうするなか、その日も戻る途中、いつかは会う日があるだろうと思いながら、ルクノール島から7、8分の距離にある島の浜辺に到着すると、日本人と先住民の二人が魚を獲りに来ていた。先住民がたくさん獲ったのかと言いながら近づいてきて、そっと、少し前に地平線に船が見えたと耳打ちしてくれた。私たちはその言葉を聞いて迷った。船がこちらに来るかもしれないが、満潮のため外海には行けないから、内海へ釣りに行くふりをして待つて見ようかとも思った。日暮れまで時間はあまり残っておらず、かといって日本人に怪しまれればおしまいなので、今日はこのまま帰ろうと思った。帰りながら私は、明日も機会がこないのではないかと心配が先に立った。今日、船が水平線に現れたから、明日は必ず私たちが島を抜け出る前に船が来そうで、気持ちは焦ってそわそわし、なかなか眠りにつけなかった。

翌日、夜に寝そびれても早起きして「チャガロ」をとり、草の葉とともに朝の食事を終え、今日は早目に船が来そうだから早く行こうという、趙さんが横になって、とても疲れているから今日一日休もうという。それもそうだ。船に乗りたい一心で、空襲であちこち追いまわされ、足は傷だらけで心身ともに疲労が重なり、死にそうだった。私は昨日先住民から聞いたことからして、すぐにも船が現れそうな予感に心がはやった。少しの猶予もできないとても貴重な時間にもかかわらず、無関心なのにあきれた。

「どういうことか、今日は必ず船が来るのに、これまで船に乗るために多くの苦労をしたのに、絶好の機会を逃して無駄にさせることができるのか。強い意志と闘志でやり遂げるという信念がなくては、まったくの無駄骨になってしまうだろう。勇気を出そう。」

そうって勤めると、じゃあ漁労券をとってくれという。私は早足に事務所に向かい、事務所でも昨日のことがあっただけに、すなおに漁労券を出してくれるか心配になった。幸い何も言われず受け取って、宿舎に戻って釣り竿と魚籠を手にして同僚たちに行ってきますという、注意して行ってこいという。

早く行こうと早足で20mほど来た時だろうか。飛行機の音は聞こえなかったのに、突然機銃弾が飛んできた。恐怖で転がるように低いところに伏せていてから、釣り竿を探していくところ、いつの間に引き返してきたのか、また機銃掃射を浴びせられた。それでなくても一刻が惜しいのに時間が遅れたので、米軍機が憎らしく体が熱くなった。

二度もひどい目にあってからしばらく行くと、偶然に病院院長と現場主任と一緒に巡視しているのに出会った。私は院長のおかげで生きることができたから、院長に会って本当に嬉しかった。久しぶりですと挨拶をすると、しっかり手を握って元気かと聞く。院長先生のおかげでこのように回復して元気だと言うと、本当によかったと言った。魚釣りに行くかというので、魚を食べなければならぬので毎日釣りに行っていると言うと、心の内も知らず本当に良いことだと褒めてくれた。ほんとうは恩人の院長に久しぶりに会ったので、じっくり話でもできればいいのだが、私たちとしては今話をしている時間も惜しいので、心の中ではあせってたまらない。私たちは先が気になるので、早く行って来てお話ししますと言ったら、頑張ってくいという。

急いで島端の警備所に行くと幸いにも船は来てはいなかった。警備員に漁労券を提示し、氏名と時間を記録した。警備員は、今日は船が来そうだから遠くに行かないようにと言う。私は知らないふりをして、そうとわかっていたら宿舎でじっとして休んでいたのと言いながら、せっかく出てきたのだから、近くで釣ってみると言って、向かいの小さな島で釣りエサをつかまえ、次の島でさらに補充した。釣りのエサを捕まえようと歩き回ると、完熟した椰子の実が二つもあった。拾って食べてはかれると半死の目にあうというコプラだ。私は見張り、友達が皮をむいてコプラをまるまる一個ずつ分けた。

先に行く友人が砂浜に出て、海を見ながら船が来ると叫んだ。私も喜んで本当かと言いながら出てみると、果たして地平線からこちらに向かっていた。今まで待ち望んでいた救助船が、久しぶりに都合よくやってきたのだ。二人と

も自然に歓声をあげた。私たちは泳ぎができないので、ルクノール島からの距離がなるべく近いほど安心して乗ることができる。今私たちがいるところはそこから7、8分の距離だ。とても近い。約200m先に椰子の木が5、6本立っているところまで行かなければならない。私たちは朝鮮人であり、島を出てからいくらも経っていない。いま、警備員が私たちを連れに来ているのか、それとも様子をうかがっているのかわからない。まかり間違えば死を招く。進退が極まる。だとしても引き返すことはできない。船が来ているにもかかわらず、広い海に行こうとすると、少し前の喜びは消え、胸がどきどきして手足の力が抜け、後ろを振り返りながらまともに歩けない。しかし、どうして行ったのかわからないが盆地に着いた。盆地に着いてお互い一緒にならず、互いの反対方向に5、6mの間隔を置き、趙さんは沖合を見て、私は後方の椰子の木を隠れ蓑にして座り、迎えに来ないかと向かいの島だけを凝視していたが、なぜか少しも胸騒ぎは静まらない。おいしいコプラを食べようとしても、噛めず、喉に詰まったのみ込めない。責任ある警備員なら知らないふりをして黙認しないだろう。捜し出すはずだ。もし捕まれば困ったことになる。そう思うと恐怖に震えるばかりだ。船はまだ遠くにある。

恐怖心でいてもたってもいられない趙さんが、ためらいながらこのまま帰ろうという。私はとんでもないと断固として止めた。はじめは生きるために二人で固く誓って約束までしておいて、苦労の末に得た千載一遇のこの機会をあきらめようというのか。生死の境で今日は私たちの運命が決まる重大な日だ。人の命は天の定めだから、生きようと努力しても死ぬのは不可抗力だ。ひとえに天命を信じ、目的達成のためには絶対に軽挙妄動してはならず、冷静になろうと励ましながら、固く心に決めようと言った。もちろん親友の言葉にも一理がある。誰にも生に対する愛着心はあるのだ。ここから300m余り前方の島に行きさえしたならば、いろいろ悩んだり、心配をすることはなかったはずなのに、行くことができなかった。私たちがやっと隠れているところは完全ではない。今からでも戻れば、無事で一層の信頼をしてくれる。

私自身口先では簡単に言うが、やはり焦燥感にかられていた。向かいの島で二人が肩に何かを担いで島の外に出ようとしていた。それを見た瞬間びっくりした。友人はびっくり仰天して上半身を半分起こしながら、帰ろうといって慌てていた。そうしているうちに、その人たちはすぐ島に戻った。彼らは

臨時所の臨時員たちで、私たちを探しにきたことは間違いない。私は友人に向かって、そうしていると見つかりやすく疑いを招きやすいので、じっとして落ち着くよう必死に頼んだ。なぜか向こうの島が不審でみていると、しばらくしてもう一人が出てきた。二度もひやひやして驚いた。なかほどまで来たのをみると、内海に釣りに行く日本人だった。日本人は出入自由なので怖いものはない。その日本人は心も優しく、私たちに釣り針を充分に作ってくれたとても親切でありがたい人だ。

私たちは無意識に親しさから、船が来ているのにどこに行くのかと叫んだ。すると慌てて水をかき分け私たちの所に来た。知らないふりをした方がよかったのに、瞬間的にしまったと感じた。日本人は趙さんとともに並んで座り、沖合を眺めていた。外海側に一緒にいなかっただけでも幸いだった。

日本人でもたまに船に乗った人がいるので、間接的に意思を聞いてみたら、かたくなに拒否した。進んで脱出して捕虜になれば、捕虜交換時に死刑になるという。

いつの間にか船は近づいていた。朝鮮語でしきりに二人でやりとりしたからか怪しく思うようだった。バレてはいけないので、よく身をかくすようにという。私はうまくやっているから少しも心配しないでと言った。そうこうしていると、船は私たちがいるほぼ正面まで来た。まず人がいることを知らせなければならないが、日本人が邪魔で、服を脱いだフンドシ姿だった。いつも信号用に白いタオルを首にかけて通ったが、今日の朝はあわてていたため忘れて持ってこれなかった。体をさらけ出して動くことはできないので、目は日本人の方に向け、椰子の木の間に要領よく手を突き出してフンドシの端を振った。こちらから肉眼でデッキにいる人が見えるほどだったので、あちらは望遠鏡で人が合図していることがわかるはずだ。私の信号に気づいたのだ。正面に旋回をする。飛び出さなければならないが躊躇した。私は二度目の旋回でも出て行けないのでバカな臆病者なのかと自分を責めた。当然出ていかなければならないのにどんな未練があるというのか、まったくわからないことだった。

3回目の旋回をした。何度も旋回したので日本人はすでに疑いはじめた。人ひとりのために船が長く待つわけにはいかない。これでは機会を逃してしまうのではないかととても怖くなった。破れかぶれだ。私が先に立ち上がった。

親友も立ち上がった。日本人は意外だったのか、どうしたのかと言いながら、あわてふためいた。私たちは死なないためには船に乗らなければとって飛び出した。ちょうど干潮だったので岩礁まで行くことができた。目の前に家ほどの大波が打ち寄せる。助けてくれと喉が裂けんばかりに叫んだ。私たちは泳ぐことができないので、ボートを送ってくれと大声で叫んだ。船まではかなりの距離があった。聞こえているのか聞こえていないのかわからなかった。反応がまったくないので、気が焦り、息苦しい。しばらく経ってかすかに聞こえたのは、ボートは故障しているということだった。

なんという青天の霹靂のような凶報だろうか！息が詰まり、目の前が真っ暗になった。私たちは死んだのだ。ほんとうに数奇で不幸な運命だ。いくら生きようと精いっぱい努力しても、どうにもならないのだろうか。同じ死ぬにしてもじっとしていたら早死しなかったのに…。もう終わったのだ。自分たちがしたことなのに嘆いて後悔しても何の役に立つだろうか。帰っても結局は銃殺される。思いどおりにならないのならいさぎよく海で溺れ死のうと。いった。もちろん自ら進んですることは容易なことではないが、こうなった以上はと覚悟した。完全失敗と確認されれば、言うまでもなく海に飛び込む。

船は去らずそのまま止まっていた。いくら声をあげても駄目なので、最後まで見守ることにしたが、戦闘機の三機が来てルクノール島を旋回しながら機銃掃射を浴びせた。いわゆる援護射撃をしたのだった。私たちは船の行方にばかり目をこらした。しかし船は船首を動かし始めた。もう別の場所に行ってしまうんだ！とても悲しかった。ところが行ってしまうと思った船が大きく旋回して、やや近くに止まって、デッキから二人が飛びこんで私たちの方に泳いでくるのではないか？私たちを迎えに来た人だから、救世主にほかならなかった。生きるのを完全にあきらめたのに、助かったと思うと言葉では言い表せないほどうれしかった。

1945年6月28日、この日は後々までも思い出として残り、忘れられない。

助けが泳いで来るのをみると、先住民が救命帯を一つずつ持ってくるのだった。岩礁で救命帯を受け取り、ありがとうとお礼を言って、お腹につけてうつ伏せになったら水に浮いた。先住民が片手で引っぱって泳ぎ、船に到達して綱はしごを登ってデッキに上がった。私たちが上がる時も米軍たちが見下ろしていたし、フンドシ姿の裸が恥ずかしくみじめだった。その船に

乗ったのは私たちが初めてだった。デッキの上に立っていると、先住民が通訳をした。ついてこいといって船室に入った。捕虜になったので監禁でもするのだろうと思ってついていった。階段式ベッドだったが、入って休めという。デッキに出てもいいかと聞いてほしいと言うと、米軍と話し、寝てもいいし出てもいいという。デッキに上がって立っていると、米軍がタバコを一本ずつくれる。2年ぶりに吸うタバコだった。これから私たちは捕虜だ。これからは米軍の指示によって行動しなければならない。とにかく私たちは目的を達成し、願いはかなった。

本島ミレ島から1945年2月17日付でルクノール島に配置勤務し、それから4ヶ月10日余ぶりの同年6月28日、ルクノール島を脱出して米軍船に救助された。しばらくすると、ルクノール島から船が移動し始めた。私は船酔いで甲板の上に目を閉じて座っていた。どの方向に向かっているかわからない。

夕方頃だった。何か小銃二発の音がした。何かと見ると、米軍たちが装備された機関銃に駆けつけて、騒がしく発射準備をしていた。立ち上がって島の方を見ると、一人が泳いできていた。その脱出者に向けて島から撃つたのだ。その人は無事に船にまでたどり着いた。上がる時に見ると日本人だった。

その次の日だった。騒がしいので船室から出てみると、意外にも私たちの班の故郷の親友3人と他の郡の仲間1人が乗船した。近くに住みながら会えないから遠くに住んでいるようだというのが、同じ班であってもそれぞれ分かれて暮らしていたので、お互いが知らずにいた。久しぶりに突然再会したので、とてもうれしかった。私たちは生き延びたとお互い抱き合い、しばらく感激の涙を流した。彼らは本島に残っている高官たちのための魚捕り専門で、どこにでも自由に入出りできる特権を与えられた人々だった。

魚捕り専門グループの代表である李バンヒ〔李芳熙〕氏は、前日に偶然にも米軍船に出会って乗ったが、一人で乗ってみると、生死苦楽を共にしてきた漁労班の仲間を棄て、一人で行くのは道理にあわず、義理も捨てることができなかったという。そこで米軍に、生死を共にした仲間たちがいるのに私一人だけでは行けない、次の機会に同志たちを連れてきて一緒に乗るので降ろしてほしいと要請したという。それはとんでもないことで、また降りれば命を失うのは明らかなのでダメだと言われた。誰にも見られていないから大

丈夫だとしつこく頼むので、感心してしかたなく受け入れ、次の機会を約束して戻った。そしてその日に一行とともに船に乗ったのだった。

すばらしい！自分だけ生きようとしてもがき、他人は死のうが生きようが知らないふりをするのが世の常なのに、乗った船から再び降りて危険をかえりみずに仲間を救出した李氏の義理と義侠心に感動しない人はいないだろう。誰もができることではないからだ。

マジュロ島捕虜収容所そして同胞救出作戦

その日も各離島を巡回したが、これ以上成果はなかった。それだけ警戒が厳しいといえる。乗船した7人だけを乗せて帰ることにして夜間に航海し、6月30日午前9時ごろマジュロ島の米軍基地に到着した。

埠頭に到着してもすぐには下船させず、2時間くらいたって、日本人2世らしい通訳一人を連れて、米軍大尉以下数人の引率で栈橋に降り、トラックに乗ってしばらく走り、飛行場にある航空隊本部で降りた。

最初に、ミレ本島から来た李芳熙さんほか1人が呼び入れ、30分後に趙さんと私が入るよういわれた。入ると米軍の大尉と中尉のふたりがいたが通訳はいなかった。黒髪の大尉は日本語に長け、中尉はゆっくり話したが、充分に通じた。椅子に座るようにといった。テーブルの上には詳しいミレ島の地図が広げられていた。大尉がミレ島の状況について聞いた。ミレ島はすでに爆撃によって荒廃して役に立たず、高官たちが若干いるだけだから話す必要はなく、各離島についての状況を語った。現在、それぞれの島には日本人が少数いるが大部分は朝鮮人で、最近の空襲で被害を受けているのは朝鮮人である。船が毎日続けて行くと日本人の監視が厳しくなり、海で魚を捕りに行くことができなくなり、船に乗る機会がなくなる。人々が海に出る前の早朝に船が行くのも良くないから、機会をみて時間をあわせるよう考えてくれと言うと、そんな事情は知らなかったから今後は是正すると言った。

調査が終わると再びトラックに乗って折り返し、船倉を経由して軍の幕舎で降りた。降りると同時に風呂に行き、頭の毛から全身の毛という毛はすべて剃って、お風呂に入った後、なにか軟膏を与えて全身に塗るようと言う。その後、下着と軍服一着ずつもらって着た。服を着ると我ながらみっともな

いのは免れたようだった。そして医務室に行って簡単な診察を受けた。

ある軍人に従って捕虜収容所に行った。私たちが来るのを見た同志たちは、喜びにあふれて「来た！」と叫び、正門まで出迎えに来た。私たちを連れてきた軍人は、戻れと制止した。私たちが収容所の中に入るとみんな大歓迎をしてくれ、故郷の友人たちが手を取ってよく来たといい、肉の缶詰や乾パンなど食べるものはたくさんあり、自分らは腹一杯で食べられないと言った。このことを聞いただけでもお腹がふくれ、心がほぐれる。お腹がすいているだろうから早く入れという。宿舎に入るやいなや、肉の缶詰に乾パンを入れた煮込みを食べろという。そうでなくても、私たちはあれやこれやで昼食が食べられず、お腹がすいており、私も船酔いで食うや食わずで、お腹がとてもすいていたからおいしく食べた。これまで食べたことのないおいしさだった。これからは安心して生きていけそうだった。

私はマジュロ島に到着し、トラックに乗って来る途中そっと様子をうかがった。航空本部に行った時、飛行場を見て本当に驚いた。うわさに聞くと、米軍が上陸して3ヶ月ほどだとされるが、飛行場などは遜色なくすっかり完成していた。

我々は、手のひらのように小さなミレ島で、1,000人に達する人員が昼夜を問わず血と汗を絞って1年と数ヶ月もかかったが、米軍は先端技術の開発で機械化して作業を進め、戦闘でも新鋭武器に変えて攻撃してくる。富強大国の米国をおもちゃのような在来式武器で対抗するというのは卵で岩を打つようなものだ。いくら団結力が強く、大和魂を集中したとしても対抗できるだろうか。近いうちに欧米に敗北するのは火を見るよりも明らかだった。

私たちは10日ほど居ると、やはり聞いた話のとおりだった。食事は米軍と同じように不足がなく、作業もせずに遊んで食べることがすべてだった。

私たちの一行がマジュロ島に来てから10日後、李芳熙、高ムンボク〔高文福〕氏は故郷の同志たちを一人でも死地から救出するために一行と打ち合わせをし、米軍の救助船の責任者と、このようなことをしたいから協力してくれと要請して快く受け入れられた。実行方法は月のない夜間を利用し、こちら側で決めることにした。場所はミレ本島の近くにある故郷の友達がたくさん住んでいるナンヌ島¹⁴⁹と定めた。ここはミレ本島付近なので地形は

149 [ミレ環礁内の島] ナンル (Nallu) 島を指すようだ。

よくわかっていた。某月某日5人が同乗して指定場所で下船し、泳いで上陸、指定場所に人々を送ることにして決行する日を決めた。

しかし、待っている人を迎えに行くわけでも、事前に予告しておいたわけでもなく、相手側には大きな障害となる日本人と少数の兵士がいるから、生死をかけた冒険だった。万が一の場合に多少なりとも備えるため、3、4日間、基礎的にカービン銃の射撃術などを教えてもらい、懐中電灯など必要なものだけ携帯し、指定日に5人が乗船して指定の場所に到着して泳いで上陸した。

真っ暗やみの中を手さぐりで宿舎を訪ねて、やっと一人だけ見えるように事前に準備した懐中電灯で熟睡している人々を順に起こし、耳元で指定場所に行けば船が待機しているので早く行けと言った。すると先に起きた求礼郡班の高ワンフム〔高旺欽〕医務助手が一人でも多く連れて行こうと欲を出し、潭陽郡班を起こしていくからと従わず、知らせるんだと大声で「船に乗りに行くんだ!」と言った。すると、あちこちにいた日本人と軍人たちが銃を乱射したので、瞬時に大混乱となり、わずか7、8人だけが海をわたって指定場所に無事に到着した。しかし、船は見えなかった。

島からは警戒し威嚇する銃声が響いた。こうしているうちに、探しにでも来られたらまちがいなく殺されるから気が気でない。さらに服がすっかり水に濡れて寒気をもよおし、寒さと恐怖に震えた。しかし、今は戻ることもできず、進退きわまって船が来るのを待つしかなかったという。それぞれ分かれて救出に行った人々も、しかたなく逃げなければならず、泳いで船がいたところに行ってみると、船は見あたらなかったのだ。

「ほんとに大変なことになった」、こんなぶざまなことさえなかったら、無事に多くの人を救出できたのに…、かえって罪のない人だけが殺されることになり、どうしたらいいのだ!」

喉が詰まって声が出なかったそうだ。高文福さんは、ひよっとしたらと思って懐中電灯であちこち信号を送ってみたが、何の反応もなかった。もうすぐ夜が明けそうで、明るくなるまでに来なければならないのに…。震えながら待っている人たちを見て砂浜を掘って隠れようと穴を掘った。

どれくらい時間が経ったのか。暗号の信号を送ってみた。「船がいる」という信号が来た。言葉では言いつくせないほど嬉しかった。位置もわかった。時間は切羽詰まり、身を焦がしているのに、船が現れなかったという。

夜が明けはじめ、死が差し迫っているから、もうどうしようもない。これまで陰しくぞっとするような死の淵を幾度も乗り越えてきたが、本当に死ぬのではないか。船をつれなく思ったという。

空が崩れてもわき出る穴があるということわざは、こういう時のことをさすのかもしれない。日が次第に明るくなり遠くにいる人が見えるほどになった頃、船が二隻も来たという。人が生きようとすれば天が助けるのだろうか。幸いにも日本のヤツらが出動をしなかったので、やきもきして一晩中震えながら待ちに待った末、全員が無事に船に乗って米軍基地に戻ってきたのだった。

皆あれこれと話をしたが、一生涯忘れられない悪夢の夜だったと言った。そして、自分たちを救出するために危険をものともせずやってきたのに、すんでのところでみんな死ぬところだった。幸いにも天の助けで生きのびたから本当によかった。その恩をどうして返せばいいのかわからない。心から感謝したいといった。潭陽班、とんでもないヤツの大声騒動でその島に住んでいる10数人の潭陽班の人は、1人も船に乗れなかった。

実は李芳熙、高文福さんほかの人は、農漁村の貧農家で生まれ、社会の事情も知らず、学校へ行ったこともない、若くして連れてこられた存在感のない田舎者だった。だが大胆で、このうえなく勇敢に、危機に瀕していた同胞たちを、自分たちの命さえかえりみずに助けた義理とけげな同胞愛、その義侠心は普通の人では考えられない。それだけにその模範となることをほめたたえ、私たちは永遠に鏡としなければならないだろう。しかし、これら無名の勇者たちの履歴はわからないので、その崇高な義侠精神を誰も知らない。実に切ないことだと言わざるをえない。

私たちは捕虜であるため、制限された鉄条網の中で不自由な身の上も当然であり、多少の苦痛は甘んじなければならないことは覚悟のうえだ。ちょうど1ヶ月いて、腹いっぱい食べた。我々捕虜に対して、兵士たちや誰かが関与し干渉することもなく快適に暮らした。捕虜としてこの程度であれば、過分な待遇を受けたのであり、想像もできないことだった。

米軍は言った。「現在、我々米軍や連合軍の捕虜たちは、日本の非人道的蛮行で食べるものはいうにおよばず、あらゆる虐待とひどい殴打、過酷な酷使などで飢死し、病死し、数十万 명이 残酷にも貴重な命を失い、ともすれば虐殺までされている。」

ハワイ捕虜収容所の生活

マジュロ島に収容された捕虜たちは、先に来た人から順次にハワイ島に送られ、私たち一行5、60人は1945年7月28日、船便でマジュロ島を出航して8月4日にハワイに到着した。

私はデッキから眺めていて、米国人は主食がパンだから小麦畑が多いだろうと思ったが、上陸してみるとサトウキビ畑だった。パイナップルの畑も少しあった。私たち一行が行ったところは、ある深い山谷にある臨時のテント収容所だった。その付近には軍の兵舎や住宅も見られなかった。山の斜面にはサボテンがたくさんあり、とても大きな花がいっぱい咲き、見事だった。

収容所に行くとき随時身体検査を受け、何の注射なのか数日かけて打たれた。私たちの本籍、住所などを詳しく記録していき、写真も上半身の前後、左右を詳細に撮った。毎日遊んでいるのでエネルギーは消費されないが、決まった食事は、手のひらほどの食パン2枚、卵1個、牛乳1杯だけだったので、あまりにも少なく、みんなお腹がすいて死にそうだと大声をだした。たとえ、飢え死にまではしないと思うが、耐えるのはつらかった。

時々、玄楯¹⁵⁰牧師が来て、慰労を兼ねて民主主義について講義をした。紅顔、白髪の60歳の老体ではあるが、しっかりした声による真理追求の講演は、社会生活に有益な話だった。彼の話では3・1運動をしてハワイに亡命したという。私たちは玄牧師に、私たちへの配給の食事が少なく、お腹がすいてたまらないから食事について交渉してほしいと頼んだがうまくいかなかったようだ。私たちの推測では、ここは臨時の収容所でいつか移動しそうだから、がまんしようとお互いに励ました。

いつだったか、憲兵の食堂で皿洗いなど掃除する人を、捕虜の中から何人か選んで連れて行った。その責任者が全南の光州班チョン・ギルソン〔鄭吉星〕さんだった。とてもお腹がすいているから、遊んでお腹がすくよりは食堂に行けば力はあるだろうが、お腹いっぱい食べられるので、行きたいという人が多かった。私は鄭氏に頼んで身体検査を受けて通過した。6人がトラックで、

150 玄楯（ヒョン・スン、1880.2.28.～1968.7.11.）：3・1運動当時独立宣言書を持って上海に逃避、最初に独立宣言書を英語に翻訳して海外に知らせた。ハワイ捕虜収容所を頻繁に訪問したという。

BASIC PERSONNEL RECORD

(Alien Enemy or Prisoner of War)

41-F-9023-MI
(Classification symbol)
 YE, INN SIM
(Name of prisoner)
 Male
(Sex)

F. P. C. _____
 Reference# _____

Height 5 - 0 - 4 in. (Inches or Personal Effects Value Form 1072222)
 Weight 123 lb.
 Eyes Brown
 Skin Yellow
 Hair Black
 Age 22

1. None
 2. _____
 3. _____
 4. _____
 5. _____
 6. _____

Disturbing marks or characteristics:
 Scar lower right leg.

1. _____
 2. _____
 3. _____
 4. _____
 5. _____
 6. _____

8 August 1945, FWP Station, APO 955
(Date and place where processed (Army centers, Navy centers, or other units))

The above is correct:
 李仁申
(Signature of prisoner)

Right Hand				
1. Thumb	2. Index Finger	3. Middle Finger	4. Ring Finger	5. Little Finger
Left Hand				
6. Thumb	7. Index Finger	8. Middle Finger	9. Ring Finger	10. Little Finger

W. G. P. M. G. Form No. 2
 17 June 1944

Note amputation in proper space

0610

李仁申の俘虜名票（捕虜名簿）1—個人写真及び指紋記録

1. Non-Combatant Navy
(Grade and area of service)

2. Tammack Unit
(Location unit or vessel)

3. Home
 15 Feb 1943
(Date of birth)
 Korea
(Place and province of birth)
 Korea, Che Lal Hondo, Che Hung Gon,
 Che Hye-ye, Che Ye, Sa-e Banohi

4. Y. Kyung Hee Father
(Name, position, or nearest relative)

5. AS 5
(Category of alien)

6. None
(Number of dependents and relationship)

7. None
(Address of alien)

8. None
(Address of relatives)

9. None
(Address of relatives)

10. 20 Jun 1945
(Date of capture or arrest)

11. U.S. N. I.
(Place of capture or arrest)

12. US Navy
(Place of capture or arrest)

13. Farmer
(Trade or usual making (occupations of preceding agent))

14. 6. 30
(Date)

15. Japanese, Korean
(Citizenship of subject)

16. Good
(Physical condition at time of capture or arrest)

17. Single
(Married or single)

18. Buddhist
(Religious preference)

Additional Data: _____

Signature	Date	Signature	Date	Person effect not transferred
	AUG 1946		4 1945	NONE
	24 DEC 1946			NONE

KOREA DEPATRIATED

I HAVE BEEN FULLY ADVISED OF MY RIGHTS UNDER THE GENOVA CONVENTION AND DO HEREBY DECLARE OF MY OWN VOLITION THAT I DO NOT DESIRE TO HAVE EITHER MY GOVERNMENT OR MY FAMILY NOTIFIED OF MY CAPTURE

Signature: 李仁申

0611

李仁申の俘虜名票（捕虜名簿）2—個人身上記録

しばらくして到着した食堂は大きくて、憲兵 300 人余りが交代で来て食事をするという。

宿舎に案内されて入ると、大型ベッド 2 台が置かれた清潔で高級な部屋だった。私たちの任務は食事の後、食器を拭き、沸騰した水で消毒し、食堂内を掃除することなどだったが、清掃が終われば内密に検査をする。もしいいかげんならばやり直さなければならない。2 交替で 24 時間出勤して働き、24 時間休憩する。初めてのことから辛かった。食事はすきなだけ食べることができた。いくら食べても何もいわれない。作業は辛いがお腹はふくれるから、それだけの価値はある。

5 日目だった。私たち山谷の一行は移動しなければならないと迎えが来た。収容所に行き一行とトラックに乗って山を抜け、平地をどれだけ走ったのだろうか。本格的な捕虜収容所の正門前で下車した。

収容所には二重の鉄条網が張りめぐらされ、収容所内はとても広かった。3 階建ての宿舎が数棟あり、大きな食堂もあった。サッカー場、バレーボール場、卓球場など各種運動設備が備えられていた。捕虜収容所というにはあまりにもぜいたくだった。食事は米が配当され、捕虜自らが炊事班となり、ご飯にしょうがお粥をつくろうが自由で、何の不足もなく十分だった。寝床は 1 人用ベッドに毛布 2 枚ずつで、電灯は各自の必要に応じていつ、どれだけつけても何も言われなかった。

人権を重視する民主国家としての国威宣揚のためなのか、捕虜に対してこんなに寛大な厚遇をしてくれるとは、私たちには想像すらできなかった。

日本が引き起こした太平洋戦争の戦禍のなかで、死にそうな逆境を越え、幾多の苦労の末、神の助けで捕虜になった人は、その当時 13 道で 2,670 人だったそうだ。

ハワイには朝鮮、ドイツ、イタリア、日本の 4 カ国の捕虜がいた。朝鮮人は太平洋の各島で初期に捕虜になり、1 年以上いる人がかなり多かったという。

日本は近く敗北するだろう。朝鮮は日本の植民地から解放されて独立国となり、その後は故国に戻り、微力ながら国民の働き手として活躍できるだろう。だから、いたずらに無駄に過ごすのではなく、何か組織をつくって団結し、将来を見据えての設計をすすめた。捕虜のなかの知識ある人を招いて意見を

聞き、雑誌で知識を広げ、社会に活躍できる人物を養成しようと、大学在学中に学徒兵となった人たちが中心になって案を作った。それで韓鷲党という名の党をつくった。

私達はまだ自由が束縛された捕虜の身分である。党の名称はつけたが、体系的に序列のある組織ではないので、指導者級の若干名が随時集まって話し合い、妥協や選択によってお互いに団結して、規律のある生活を大衆に啓蒙する。これまでは悪い日本に隷属してきたが、我が国民の精神は道徳性と誇りと気概の中に生きていることを、米軍にしっかり見せようと考えた。とてもいい着眼だった。

理想や趣旨は良くて夢は大きい。だがご飯をもらって食べれば幸いという一文無しの捕虜が、どうやって党の雑誌や啓蒙宣伝文を発刊できるのか。実にもどかしかった。しかし、指導級の役員たちは努力して、勝手な行動や恥ずかしい行いをつつしみ、私たちの趣旨を念頭に置いて最善を尽くそうと、謄写版を利用して啓蒙文などをたまに回覧した。我が民族は無知蒙昧ではないとの趣旨を理解して呼応し、心を合わせて努力して、大きな成果をあげた。未開の遅れた民族とばかり思っていた米軍は感動し、褒め、信頼もしてくれ、大好評だったという。

それをよいことに、無理な要求を米軍側にした。だめでもともとだと思い、やってみようと思った。捕虜も同じ軍服を着た。捕虜と区別できるのは帽子、上下服にペイントで表示されたPOW¹⁵¹という文字だ。私たちは国籍や民族が違い、無理やり引っぱられてきた非戦闘員であり、使役させられただけあり、直接戦闘に介入したのではない。だから捕虜の区別をやめてほしいと要求したのだ。米軍は不当だと拒絶した。作業に出るのをやめ、受け入れられるまで断食籠城をすると宣言し、籠城を始めた。米軍たちは2、3日間、好意的に説得した。何の成果もないので4日目は大型武器を正門に配置し、すぐにでも発射するかのよう脅かした。すると気の短い人が怒って上着を脱ぎすて、あとさきを考えずに飛び出して撃つなら撃てと、ベッドのコーナーの角材で米軍を殴って負傷させたというのだ。その人はすぐ拘束され、米は撤収した。この機会に、我が民族の意気と気概がどんなものであるかを見せなければならぬと頑強にこだわった。しかし米軍は、やるならやれ、お前らは勝手に

151 戦争捕虜の英文表記 Prisoner of War の略

飢えて死んでも関係ないといって、給食を中断し飲料水まで断った。

要求にも可能、不可能がある。捕虜のくせにあえて不可能なことを要求したから、聞くはずがない。6、7日間断食すると、空腹と渴きが激しくなり、あちこちから不満が噴出した。

わざわざここまでする必要がないという方に傾き、再び話し合い、米軍側の意思に沿って元に戻ることにし、給食をもらって労役に出たという。結局は屈服してしまった。事は成らなかったが、我が民族の意志と強靱な気迫がどんなものであるかは、はっきり見せつけた。

私たちの一行が8月4日に到着して、山谷の収容所にいると、日本が8月15日付に降伏し、朝鮮は独立国になるという。それは我々が考えた時期よりも早かった。

私たちの一行は山谷に一ヶ月ほどいて、本格的な収容所に遅まきながら行った。私は再び故国の地を踏むことができないと諦め、故国にいる両親、兄弟たちも私が死んだと思い二度と会えないと嘆いていると思っていたが、解放となった。一日でも早く帰国して生きていることを見せ、安心させなければならぬという一念だけで、その他のことは関心がなかったから、知らないことがあまりにも多かった。

本収容所に来て2、3日後、私たち一行も作業に出ることになった。10分前にトラックが来て正門前に待機していた。私たちが一緒に行く人員は140～150人、作業場は収容所から50～60里の距離と推定された。

指定された広場で降り、3列縦隊に並び、作業担当の憲兵が自ら必要な人員を30人、20人、10人、5人、6人と前列から連れて行く。

作業分野は軍の幕舎や上官の宿舎、共同トイレの掃除だが、そこでは掃除さえ終われば、休憩時間が多く、一日中休む。休んでいるからといって干渉する人もいない。酒保¹⁵²の休憩所に行くと、兵士たちがお酒やお菓子などを持ってきて、お酒だけ飲んで、お菓子は封もきらずに置いていく人が多い。こういうものは車に載せて、ゴミ捨て場で廃棄処分したり、食べたり、宿舎に持ち帰って分け合ったりする。

軍服倉庫での作業は、兵士たちが着替えた服を処理することだった。まだ着られるものも捨てられる。古着のポケットをさぐると、たまに十銭くらいの

152 軍隊内の売店の旧称

価値のコインが1、2枚でてくる。そして服棚に陳列されているのは新品も多い。自分の服が汚れたら着替え、ペイントでPOWと書けば洗濯する必要がない。自分の服は文字が書いてあるので、要領よく車に載せて行き、棄てる。

分野別にさまざまな職種が数多くある。日課を終えて帰ってくると、お互い自分がしたことを自慢する。2、3日通ってみると、憲兵の作業担当分野は定められていた。いくらしんどいといっても大した作業ではない。

2、3日後からは、広場に整列していて作業担当が連れて行こうとする際、土を掘って木を植えて杭を打って垣根を作る担当が現れると、前に立った人が後ろに行き、4、5列が全くいなくなってしまう。憲兵は理解できないから叱りつける。良い作業担当が来ると、お互いに先を争って行こうとするので大騒ぎとなる。憲兵たちは非常に不快な表情だ。こんなことでいいのか。立場を変えて考えてみよう。米軍でなかったら、すでに何発も殴られ、軍靴で何度も蹴られたはずだ。米軍からみれば、いかに幼稚で劣っているのかとさげすむだろう。たまらなく恥ずかしくて情けないことだった。米軍は捕虜がいくら間違っただけをしても殴打や暴行はしない。

いつか6人で酒倉庫に行ってビール、タバコ、ガム、お菓子類などの箱を売り場まで運ぶ作業をした。夕方頃に倉庫の片隅を見ると、ビールの空き缶がたくさん積まれていた。捕虜に対し酒だけは絶対に禁止されていた。それにもかかわらず何人かが飲んだのだ。仕事が終わると戻ってくるが、タバコ、ガムなどをポケットに貪欲に詰め込んできて、大きな仕事をしたように自慢をする。これは人知らず盗んだものなので窃盗に該当する。案の定、その後は一人も連れて行かなかった。私はじっくり考えてみた。私たちは故国であまりにも貧しい生活をしていたので、欲が出て知らず知らずにこうになってしまったのではないかと…。しかし、よくないことは慎まなければならない、これからは将来の独立国家の国民として国家の威信と民族の自尊心だけは忘れてはいけないと、老婆心なのか杞憂なのか、心配になった。

捕虜の作業時間は8時間、土曜日は12時までで日曜日は休みだ。作業といっても健康のために運動する程度だったし、出席名簿を作成して作業する時のみ記入した。少額でも労賃を支払ってくれるという。お金は現地で受け取るのではなく、帰国してから伝票と交換してくれるという。多かれ少なかれ、捕虜にお金までくれる国は米国のほか世界のどこにもないだろうと思われた。

タバコはタバコの袋と紙を配給してくれる。普通の紙巻きタバコを吸うと、規則違反になるのかどうかはわからないが、作業を終えて戻ってくると、収容所の正門の前でいちいち調べて押収する。押収しても毎日欠かさず持ち歩いて吸う人がいるので、日ごとに調査が厳しくなる。帽子を脱がしパンツの股の部分を巻き上げてみるが、そうして調べてもどこに隠したのか吸う人がいた。私たちに配給されるタバコは下級品だから、味はよくないことは事実だ。紙で巻くのも面倒で気分も違う。しかし、それでももらえるだけ幸いだ。紙巻きタバコを購入する方法は、作業を担当する憲兵に頼むが、一箱5銭なので50銭を出して頼むと間違いなく買ってくれる。

腕のいい人がステンレスのスプーンを加工し、太極マークを彫刻した指輪を作って米兵にやれば、記念品だといって4、50銭で買ってくれる。あるいは、米兵たちが服を着替えた時の古着のポケットからでてきたお金などで購入する。煙草を分け合った人情のようであればどんなにいいだろうか？

ある日誰かが、タバコ一箱を購入して隠してきたのに押収された。とても腹が立ったのか、いやひねくれていたのか、とにかく意地悪な人だったようだ。腹いせをしてみると後日、人糞を新聞紙で包んでタバコのように隠した。それを憲兵が押収した。開けてみるとバレるしかない。そのまま見逃すはずがない。捕虜が米軍を侮辱したとして、拘束、拘禁され14日間ほどの拘留処分を受けたという。

もちろん最初に、担当の憲兵たちが私たちの要求を拒絶したならば、そんな不祥事やひどいことは起きなっただろうが、買ってくれたのが大きな弊害となった。私は自らを反省した。知識のあるなしにかかわらず、常に反省し、自分の本分を察し守って、脱線行為や道理に反したことさえしなければ、すべてがうまくいく。なのに、よけいな意地で腹いせしてかえってひどい目にあったのだ。

いつだったか、現場で憲兵が特別に話したいことがあるという。これから戦線で敵に捕らえられていた米軍捕虜が帰国するにあたり、ハワイを経由する。米軍捕虜たちは言葉では言い表せないほどひどい虐待を受けてきたから、腹いせに不埒なことをするかもしれない。だから注意しろと言うのだった。

私はその当時20代前半だった。捕虜生活の間でも英語を学んでみようかと、日本語で書かれた簡単に数ページにもならない問答集を手に入れ、一人で

広げてみたが、基礎知識がまったくないのと頭が悪いせいで、理解するのが難しかった。そんな時に大学在学中に学徒兵として連れて行かれた全南順天出身の朴順東（パク・スンドン）さんが、短時間でも若者の教育が必要であることに目をつけ、捕虜担当の上役と交渉して英語を教えるということを知った。ほとんどが20代初めだったが、都合上全員に教えることはできないので、20歳未満の200人を集め、作業につかえず、別途に収容所を定めて朴順東さんを教授として英語を学ばせるという話を聞いた。私は年齢超過のため残念ながら良い機会を逃したので、残念でしかたがなかった。

しかし、ちらっと聞いたのだが、その人たちのために炊事班16、7人を別に選抜するという。急に興味がわいた。ことわざに門前の小僧習わぬ経を読むと言うが、せめて肩越しに聞けば一字でも学ぶことができるという欲心で、食堂の責任者を調べてみると、前に山谷の収容所の食堂で一緒だった友人の鄭吉星（チョン・ギルソン）さんだった。彼を訪ね、私も行きたいと頼むとOKした。

私たち一行がトラックに乗り、案内についていくと、収容所はこじんまりしてきれいだった。そこの人々は数日前に来て、食事を自分たちで作り食べていた。私たちの中で腕のある料理経験者たちが丁寧に作り、食事の時間になると配ったが、30人余りが黙って食べないまま、ゴミ箱に投げ棄てるのだった。私たちはおかずが口に合わないのだろうと思い、あわてて何か問題があるのかと聞いたが、何もいわずに出て行ってしまふ。間違った点があれば当然指摘しなければならないのに、表情を硬くして出ていってしまうので気分は良くなかった。わかったのは、外部の人の干渉なしに自分たちだけで作って食べたいということだった。彼らは私たちに向かって帰れというのだ。私たちとはせいぜい1、2歳の違いで年齢差が大きいわけでもなく、同年代といってもいいくらいだった。惜しい時間を無駄にせずに学問に専念し、一字でも多く学べるようにと私たちが苦勞しているのに、将来が有望な彼らの考え方と見解が到底理解できず、納得できなかった。

教授と指導者たちがよく考えて決定したことだが、お互いああだ、こうだと言ひあい、教授たちの説得でわからせて存続することに決定した。将来を嘱望される若者たちが長い目で見ることができず、目先だけで判断するのは有益に学べないではないかと情けなかった。私たちも無理をしてやって来たのに疎外されたのが気に食わず、不快で気分がよくなかった。

夢に描いた祖国の懷で…

あれこれとせわしくしている時、帰国することになったとの通知が来た。それぞれ所持品をまとめ、トラックに乗って本収容所に行った。寝ても覚めても待ち望んだ帰国がついにできると思うと、みんな活気づいて生き生きした。それぞれ所持品の準備を終えて待機した。

1945年12月21日、捕虜収容所を出発し、ハワイのホノルル港に到着し、米軍の船に乗った。その日のうちに出航したが、航海途中、海上で米国と東洋には時差があるといって時計の時間を調整しなければならなかった。

戦争が終わり、船は不安なく順調に快速で運行した。12月25日のクリスマスの日だった。その日は波風が特に激しかった。米軍の船員たちは祝い酒を何杯か飲んだ。酔っ払った兵士の一人が船の後尾の手すり、何をしていたのかわからないが、走っている船が荒波で傾いたひょうしに海に落ちたという。船首を回して事故が起きた地点に戻り、周囲を30分間、望遠鏡などで探索してみたが発見できず、しかたなく諦めて航海した。

船内ではおかしな噂がとびかった。現在、朝鮮にはたちの悪い感染症が蔓延しているから、直行せずに日本に行って上陸させるというものだった。その後は日本の船で帰国することになるが、意地悪な日本のヤツらはおとなしく帰国させてくれず、敗戦の恨みで航海中に爆破させる恐れがあるというのだ。デマであっても聞いていい気分のものでなく不安になった。

1946年1月2日、日本の浦賀に到着した。水深が浅いようだった。途中の海上に停泊し、伝馬船に運ばれて埠頭に上陸した。ハワイでもらった軍服や下着、コート、タオルなど軍用リュックサックいっぱい重い荷物を背負い、かなり遠い距離を徒歩で軍の収容所らしい所へ案内された。窓は所々壊れていて、すべてが心寒く見えた。1月2日のお正月なのに、祭りの雰囲気はまったくなく、冷え冷えとしていた。たまに出会った人たちも憂いに満ちた人のように活気がなく、愚かに見えた。敗戦国の惨めさをはっきり見せつけられた。彼らが冷静に自分の過ちを自覚して反省し、自らがもたらした不幸だから当然甘んじて受けなければならないだろう。

私たちはまだ捕虜の身分から抜け出ていなかったもので、堂々とした自由人ではなかった。米軍の指示のもとで動いている。今後の私たちの去就について、どのような指示が下されるのか誰もわからない。故国の地を目の前にして、

もどかしいばかりだ。

2月4日、乗ってきた米軍船で帰国することになったので、再び埠頭に集まるように言われた。不安なところだったのでうれしかった。朝食後に全員埠頭に集った。その日は風が強く吹き、波がひどかった。一陣が伝馬船に乗って本船に上がろうとしたとき、風浪で伝馬船が揺れ、その際に一人が頭に怪我をし、負傷した。捕虜引率の責任者が決断した。今日は波が高くて危険だから明日に延期すると。

そのおかげで陸軍の軍属で行った人たちと話ができた。そのなかで自分たちの待遇は良かったという話を聞いた。お酒やタバコでいろいろ厚遇を受けたと自慢するのだ。だが、我々海軍の軍属で行った人は、食事以外には何ももらっていない。何というヤツらだ、こんなことでいいのか。もともと海軍が上だから待遇も上のはずだ。ところが私たちは何ももらっていない。今日はもらえるものはもらわなければならないと思い、宿舎に戻って荷物を降ろし、数人が事務所に抗議に行った。陸軍の軍属で行った人はとても手厚く待遇されているのに、上位である我々海軍の軍属はむしろ待遇が悪い。これでは話にならない、早く配給せよと言った。すると哀願するように、陸軍は在庫があったが海軍は倉庫が空っぽだったから、ほんとうに申し訳ないという。ふざけたことを言うなど一喝し、私たちが太平洋の戦場に強制的に連れて行かれ、屈辱と虐待を受けて多くの若い人たちがわけもなく虐殺されたことを考えれば、あなたたちを殺しても怒りは収まらない。私たちはあくまで道義的、人道的立場から我慢しているのであって、無理な要求はしてない。終戦となった現在、陸軍や海軍を区別できる立場ではないではないか。くだらない言い訳は必要ない。もしできないならみんながこの事務所をつぶしてしまうぞと言うと、明日まで猶予してくれれば手厚くもてなすと言う。私たちは明日帰るから時間がない。今日の夜11時までには約束しろと言うと最善をつくすと言った。夜11時半頃に酒やタバコ、夏の軍服上下一着、軍靴などが配達された。物品を調達するのが遅れて申し訳ないと言った。

2月5日の朝食後に出発し、その日は全員無事に乗船して西海岸に航海し、2月〇〔ママ〕日午前9時ごろ仁川港に到着した。

夢にも懐かしかった祖国の山河。4年だったが30年、40年より長く、あきあきする歳月。仁川埠頭に上陸して祖国の懐に入った時の感覚と喜びの感情は、言葉では言い表せない。文字でも形容できない。

仁川埠頭に集合して整列し、米兵たちの引率で宿舎に行く途中だった。予告なく帰国したため出迎えに来た人はいないようだったが、どこで噂を聞いたのか、やってきた人が少数いた。ひょっとして自分の子どもたちが生きて帰って来るかもしれないという期待感に、隊列の横に近づいてきてのぞき込む老人を見て、憲兵が棒を振り回して阻止していた。私たち一行も家族でも来ていないか思って、列から少しでも離れると、容赦なく棒で殴る。私は憲兵たちの気障な行動を見て驚いた。私は6ヶ月間捕虜生活をして、いくら捕虜たちが失敗してうまくいかなくても、憲兵たちが棒を所持しているだけで殴るのを一度も見たことがなかった。両親や兄弟たちは毎日祈りながら死地から生きて帰ってくるのを、首を長くして待つ。その心情は洋の東西を問わず同じだ。韓国に来てまだ4、5ヶ月にしかならない彼らがどこで習ったのか、たとえ米国のおかげで解放され軍政下にあるとしても、善良な我が民族にだれかれなく乱暴をふるうことは、独立国家の国民を無視する不当な行為にほかならず、とても不快だった。

一般の人は近づくこともできないまま、指定された宿舎に直行した。日本人が住んでいて追い出された家屋なのかもしれないが、まともな窓のないみすばらしい宿舎だった。酷寒なのに窓までないから、熱帯地方から来た我々は服装からして備えがなく何も敷いていない床で、何の対策もなかった。夜になると寒さが激しくなり、みんな眠れずに震えながら夜を明かした。

その翌日正午頃、それぞれ所持品を持って前の広場に集合するように言われた。広場に行ってみると、16、7人の憲兵たちがずらっと並んで待っていた。一人ずつ所持品を持って自分のところに来いといって、いちいち引っぱり出して調査する。米国製品はすべて残らず押収するのだった。やっと残ったのは日本でもらった質の良くない軍服一着と軍靴だけだった。調査が終わると着ることもできないごみのような古着を、どこから拾ってきたか一着ずつ束ね、広場の中央に山のように積みあげて一つずつ持っていけという。それも手あたりしだい急いで持って行かなければならない。ためらったり、もたもたしていると棒がとんでくる。千辛万苦のすえに日本で貰ってきたが、それすらなかったとしたら大変なことになるところだった。そもそもハワイで持ち出しを許さなかったなら、無駄な苦労はしなかったのに。押収したものを本国に持っていくはずもなく、廃棄処分するようだが、理由はわからないが薄情だ

と思った。二日間ほどの調査を終えた後、捕虜の身分から完全に解放され、初めて自由人となって自由に活動できることになった。

4年ぶりの家族再会

私たちは解放になったので、植民地の束縛から抜け出し、将来独立するだろうとの思いだけで帰国した。そのため国内情勢は何も知らず、現在の状況や秩序がどれくらい整っているのかもまったくわからなかった。めんくらって途方に暮れるばかりだ。もちろん、まだ草創期なのでそうだったのかもしれない。すべてがごちゃごちゃで入り乱れ、交通もひどく混乱して秩序がない。一刻も早く故郷に帰らなければならない。百里や二百里の距離なら歩いて行こうと思うが、千里を超える最南端の故郷だ。こんな状態でいつ到着できるのか。気ばかりがアせる。厳しい寒さなのに下着もなく薄いズボンだけだ。しかし早く行かなければならないことだけに気をとられ、寒さも忘れてしまう。

私たちは京仁線の列車に乗り永登浦駅で降りた。駅は人波でいっぱいだった。湖南線とか京釜線とかはどちらでもいい。大田まででも行ってみよう。待っていてもいつ行けるのかわからない。列車も規則的に運行するようではなかった。あちこち客車を歩き回りながら聞いてみると、どの客車も立錐の余地がなく超満員で、私の体一つ押し込む隙間もないという。しかたなく客車の屋根に登った人がいた。私もついて登った。そうこうして多くの人が屋根を埋めるようになった。誰も危険だという人はいない。どれくらい時間が流れたのか。列車はゆっくり動いていた。運行も高速ではなかった。

二日間、寒さでまともに眠れなかったせいか、生命の危険がある屋根の上で眠気が襲ってきた。へたをすると転がり落ちそうだった。いくら気を引きしめても、容赦ない眠気には勝てない。苦難の末に九死に一生を得て生き残り、親子、兄弟の再会を目前にして、まかり間違えばすべてが無駄になってしまうので、大変ではないか！早く行こうと欲張って乗ったのが間違いだったかもしれない。両側から互いに腕を抱きかかえ、注意しながら大田まで無事に到着した。大田で全羅線に乗り換えてからは満員ではあるが客車に入ることができた。もう立とうが座ろうが安心だ。

2月〇日、全南の宝城駅に到着した。その翌日、バスで長興郡の一行と慣れ親しんだ故郷の長興邑に到着した。私たち一行は日本の軍服を着ていたので、誰が見ても日本の敗残兵のような姿だった。誰も知らないから出迎える人もいなかった。それぞれ元気でまた会おうと別れの挨拶をして別れた。

私は十里の道を歩いて家に帰った。4年ぶりだった。死んだと思って涙で悲しみながら憂愁の日々を送っていたところに、突然息子が生きて姿を現わした。両親は夢ではないかと熱い涙で迎えてくれた。それに感激し、世間知らずの私はどんな言葉をかけるべきなのかわからず、ただ涙を流すばかりであった。興奮がおさまった後、両親と兄弟に挨拶をして、愚かな不孝者が大変心配をかけて申し訳なかったと、おおまかに一部始終を話した。私たちの家族は和やかな雰囲気ですし、久しぶりに夜食を準備し、夜が深まるのも忘れて話をした。詳しい事情は数日あっても言い足りないが、幾多の死の淵を乗り越え、両親とお兄さんたちのおかげで生きて帰ってきたと言った。

お兄さんが言うには、私が行った後からお母さんは1年365日、春夏秋冬、厳しい酷寒でも一日も欠かさず、冷水で沐浴し、早朝に汲んだ井戸水を前に祈った。随時寺に通って、私が無事生きて帰ってくるようにと3年間、自分の体も顧みずに祈願した。無理がたたって病気になり、あやうく死にそうだった。非常に苦勞の末に回復されたと言う。しかしお母さんのおかげで、異郷で数多くの逆境から生きのびて帰ってきた。両親もこれ以上のことはなく、私たちの家庭も不幸なこともなく無事だったので、これ以上うれしいことはないという。どんな親であれ、子を愛さない人はいないだろう。お母様は仁徳で住民から尊敬される方であり、子に対する愛情がとりわけ深い方だった。

私は7人兄妹の末っ子で、お母さんが老産のうえ病氣中の出産だった。お母さんの乳は飲めず、他人の乳もよく飲まなかったという。豊かではない生活のなかでどれほど胸を痛められ、気苦勞されたらうか。5歳になっても立てなかったから、ひとり立ちできないと思ったそうだ。運よく奇跡的に生き残ったという。だからとても可哀そうだったようだ。

私は5、6歳ころの記憶はなかった。こうして育った末っ子を、お母さんはいつも心苦しく不憫に思い、弱々しい老いた体でも至誠天に通ずと思い、心血注いでまごころをつくされた。そのおかげで無事に生きて帰ってきたのだ。海のように大きいお母さんの恵みを、まだふつつかな私でも改めて悟った。

不孝者は父母が死んでから後悔するというが、まだ生きておられるあいだに、安心させてあげなければと心に決めた。

1942年4月6日、マーシャル群島のミレ島に我が全羅南道出身の800人が上陸し、生死苦楽を共にし、不幸にも130余名が暴虐な日本の殺人魔に無残に殺され、横死をとげた。その死体がきちんと地面に埋められず、そのまま放置されており、靈魂も永遠に戻れず、恨みを抱いて天をさまよっている。それを思うととても哀れでかわいそうだ。皆無事に帰って来ることができたら、どれほど良かったか。歳月が流れば、忘れていき、目撃証言も一つ二つと消えると永遠に忘れ去られるから、いたたまれない。誰が歴史に残すのか。無力で存在感のない私たちとしては、限りなく悲しく暗澹となるばかりだ。

日本が降伏するまでミレ島の各離島で救助船に乗れずに、帰国した人の話によれば、極悪な海軍大佐の連隊長は口癖のように、船に乗るという頭の痛い問題をなくすには処断するほかないと強調したという。しかし陸軍大佐の連隊長が、自己の責任の所管ではないが、人間的立場からも日本のために滅私奉公した人々をそうすることはできない、取り締まりだけ徹底して強化すればよい、それは不当な処置だと積極的に思いとどまらせてくれた。そのおかげで無事帰国できたという。うんざりするその当時を振り返りながら、お腹が空いて苦労したのはさておき、毎日不安に震えてやきもきした悪夢のような長い日々を忘れられない。

故郷へ帰ってから聞いた話では、私たちが故国を離れる前にはそれほどひどくなかったが、農民が汗を流して耕作して収穫した農作物は、ほとんど全部を軍糧として略奪された。しばらくするとそれでも足りず、日本の手先の親日派のやつらがのさばって家々をまわり、竹槍まで持って、甚だしくは非常用に僅かな量を隠しておいたものまで探だし、怒鳴りつけながらすべてを盗んでいった。そして、真鍮の食器や祭器など金属製のものもすべて持っていき、松油まで採取させ、戦争遂行に必要なものは余すところなく略奪していった。自ら農耕をしながらも〔食べ物のために〕歩き回り、草根木皮でも飢えた腹は満たせず、皮膚がむくんで病死し、餓死者まで続出してこのうえなく悲惨であったという。

太平洋戦争当時、我が国は物的、人的に完全に抹殺されたのだ。このような結末は、国家のない国民の悲しみであり、主権のない民族のつらい痛みだった。

解決されない労賃問題

私たちの給料は110円から120円だった。現地で毎月20円ずつ支給し、家族に送金するといつて月50円ずつを差し引き、残りは日本の横須賀郵便局に預金したが、1年満期後に帰国する際、元利金を支給するということがあった。

私たちが現地支給によりミレ島で受け取ったのは10ヶ月程度だと記憶しており、家族送金もやはりその程度だと思われる。上のお兄さんが受取人だった。生きて帰ってきただけでも幸いなのに、兄弟の間で金銭問題をいちいち持ちだすこともないと思ったので、確かなことは聞かなかった。帰郷して調べると一銭も受け取っていないという人もいた。

このお金は、肉体的につらい奴隷のような扱いを受けながら、血の涙をながした苦役の代価である。日本は私たち個々人に支払う義務があり、私たちは当然受ける権利があると思う。日本政府当局には私たちの名簿があり、預置金内訳書類などがあるだろう。韓国政府に移送しなければならないにもかかわらず、提示してくれない。私たちが現地に滞在した期間は3年5ヶ月から4年数ヶ月であった。

私たちの同志は、生きるのを諦めるなかで、生きて帰ってきた。だから生きながらえたという満足感に酔っていた。ほとんどが貧しい家庭だから、まず生計を維持するのに忙しく、生活に追われていた。だからお金を貰わなければならないと考えるだけだった。無知な私たちには何の証拠書類もなく、対策のしようがなかった。

私たちは日本の敗北で解放となったが、外勢による解放だったため、米軍政下で民族主権がなかった。両強大国によって朝鮮半島には国境ではないが、国境のような38度線ができ、南と北が民主、共産という理念のもとに単一民族でありながら敵のように憎んで敵対視し、双方が対峙している状況だ。南北の合意による統一は不可能で、やむをえず南半分だけが共和制の大韓民国を樹立した。我が民族の宿願であった独立は、紆余曲折の末に樹立はされたが、創出期でまだ機構がしっかりしておらず、対日関係の清算問題は無関心のまま流れてしまったのだ。

私たちは悔しさを訴えたことさえなかったから、曖昧なままだった。しかし、月日が経って安定し、秩序が正常になれば、徐々に解決策が用意される

だろうと期待していた。だが思いもよらない共産軍の侵略で、6.25 という同族が相争う悲劇が勃発し、政治首都から後退して行政は麻痺され、沈滞した。そのため、うやむやになって遅れざるをえなかった。

1995年6月、マーシャル諸島のミレ島と離島の踏査記

半世紀である50年前の過去を振り返ると、波瀾万丈で、紆余曲折が多かった。悪夢であり、地獄のようだった。考えただけでも鳥肌が立つような死の淵で、私たちの若い同胞たちがどれほど血の涙を流して泣いたのだろうか。日帝の戦争遂行という名のもとで、非常に過酷な労働に肉体的に従事し、ついには純真で善良な我が民族が、残虐無道な日本人の銃剣により、何も言えないままむなしく殺された。その太平洋の孤島、ミレ島の離島だったチルボン島事件の島をちょうど50年ぶりに調査することになった。

日本の関西テレビ局の良心的な徳永俊彦記者が、遺族会会長と打ち合わせ、戦後50年を期してチルボン島虐殺事件のドキュメンタリー¹⁵³を制作するために現場で真相を取材することになった。

遺族会側では会長と、事件当時の首謀者であった朴鍾元氏、事件後責任者として班員をつれて死体処理を担当した邊漢権班長が証人として参加。遺族代表として高チュンソク¹⁵⁴さんら4人が選ばれ、テレビ局側では徳永氏他2人とその当時ミレ島基地に駐留していた海軍1人、陸軍1人が参加することだった。

遺族の高チュンソク〔高允錫〕さんは、1942年に亡父高在龍（コ・ジェリョン）氏が日帝下の第4海軍施設部に私たちのように強制的に連れて行かれた時は、16、7歳の幼い年だった。父と別れたのがとても悲しく、父が忘れられず、光州から列車に乗って大田までついて行ったが、見つかって追い出されたという。幼い頃からとても親思いだった。

高さんは父が行ってから、母の世話をし、一家の扶養責任者になって4年の歳月の間、困難な中でも一日も父を忘れたことがなく、寝ても覚めても無事に

153 〔このドキュメンタリーは「飢餓戦線の果てに 南の島の60年目の証言」として放映。〕

154 〔韓国語原文は高チュンソクであるが、日本での訴訟資料から高允錫（コ・ユンソク）とする。〕

帰ることを心から願い待ち焦がれていた。しかし父は自爆して永遠に戻れなくなった。高さんは解放後まで期待して待っていたが、帰ってきた生存者たちから突然、死亡したという話を聞いて、衝撃で気絶しそうになったという。

人生は無常でむなし。恨（ハン）にみちた高さんは、自宅の裏山の良い場所を選んで墓をつくり、霊を祀った。生前にできなかった息子の道理をつくり、亡くなった3月1日に心を込めて祭祀したという。

心は有縁千里で遠いとは思わないから、父の最期の場所を訪ねて大声で父を呼べば、心の中にやどった恨も多少は薄らぐだろう。しかし遠い太平洋の果ての地図にもない小さな島で、自爆の場所もわからない。一人で訪ねて行くことはできないし、うわさをもとに探そうとしたができかねていた。

高さんは、父を殺した元凶は日本人であり、敵は日本だと嘆き、その怒りを抑えられなかった。日本について過去を知る人はみんな同じであろう。高さんは事件後50年ぶりに日本の関西テレビ局と我が遺族会が合同で現地調査をすることを知った。寝ても覚めても宿願だったこの絶好の機会を逃すことができず、一緒に行って亡くなった場所を見て、せめて土でも一握り持ち帰ればと思って同伴を願った。そして遺族代表として同行することになった。

今回の現地調査は、個人の事でも遺族会だけの事でもない。実に国際的問題であり、歴史的問題である。時すでに遅しの感はあるが、私たちの力ではどうしようもないことである。この機会に現地調査をし、日本人と一緒に証拠を見つけ、真実を明らかにし、国内外に日本の残虐性を暴露して公にすべき重大な事案である。このような重大な事案に対し、政界筋に協力を要請してもまったく返答がなかったという。もちろん政界や政治家たちの中に良心的な愛国者がまったくいないわけではない。個人や少数者が意思を提議しても、政権欲だけにとらわれている人々に押されてうやむやになり、ことを成し遂げられないのが現実だ。ほんとに残念だ。

遠い異域の寂しい孤島で、日本人たちが空腹を満たそうと、我が同砲を平然と無人島で殺害して食物にしたことは、人間としてしてはならない度を越した非人間的行為である。とてもそのまま見過ごすことはできない、限界に達したのだ。民族の精気として断然として抗拒、抗争したが、失敗して惨殺され義理堅く死んでしまった。その当時はどうしようもできない状況であり、死体も土に埋めることもできず、そのまま放置したが、魂は安らかでなく、

呪いながら黄泉をさまよっているだろう。政府レベルで遺骨を探して收拾しなければならず、慰霊塔も建て、慰霊祭をして霊たちを慰めて追慕するのが当然であろう。これは国家的問題であり、歴史的問題である。私たちの子孫たちがつらかった過去の受難を忘れないために、何らかの形を残すのが当然と思うが、思うようにいかないのが残念だ。日本は戦後、各地の戦地で遺骨を収集し、巨大な慰霊塔を建て、盛大な慰霊祭まで行っているという。

我々生存者たちが、常に望み願っていた千載一遇の機会を控え、重責を担った邊漢権さんが突然中風で倒れ、入院しなければならなくなった。中風なら簡単になおる病気ではない。そのうえ年寄りだ。重要な時期に絶対に必要な証人が、病魔におかされ苦しんでいるから大変なことになった。事件当時、主導者だった朴鍾元は、この動機と原因はよく知っているが、追われて隠れていたのも、後始末のいきさつは詳しく知らない。だから痕跡を探し出せそうにない。そのうえ病のため動くのも困難だから不都合が多い。

ついに決まった日程が差し迫った。邊さんの病気の状態をよく見て、とくに支障がなければ旅行中に服用する薬を十分に準備し、高さんと私が全面的に看護の責任を持って最善を尽くし、途中で異常があるときはすぐに対応することで、邊さんおよびその家族に頼んでみた。幸いにも回復の兆しがあり、病院でもあまりにも無理をしなければ遠出しても構わないと言うので、邊さんも一緒に行くことになった。

1995年6月12日、崔会長と朴鍾元さんは日本の関西テレビ局の一行と同伴することにして日本に渡り、我々一行は14日にグアム島で日本から出発した一行と合流することにした。

6月13日午後9時、金浦空港からコンチネンタル航空の便で高さん、邊さん、私の3人が出発し、14日午前1時にグアム島の空港に到着した。私たち一行3人はその日の午前7時ごろ、日本から来た崔会長と朴鍾元さん、関西テレビ局の3人のほか、ミレ島に駐屯していた海軍の金丸利実、陸軍の末村良雄さんの2人と合流した。

日本人とは初対面の挨拶を交わした。二人は過去にミレ島に軍人として駐留したと自己紹介をした。ミレ島では軍人たちは施設部に対して干渉をしなかったが、日本人に対する嫌悪感、悪感情がどつとよみがえった。過去に我々朝鮮人に対して日本人はひどい差別、過酷な労働を強制し、棒で叩いて

多くの人を不自由な体にし、甚だしくは虐殺までした。そんな非人間的で残酷な行いはとうてい許すことができないと追及すると、言葉では言いあらわせないが、自分たちは過去の過ちを日本人として心から謝罪し、過去の軍国主義の過ちを切実に反省しているという。

合流した私たちの一行は、14日午前8時30分、グアム島の空港からコンチネンタル航空の便で出発し、トラック島、ポンペイ島¹⁵⁵、コスラエ島¹⁵⁶、クエゼリン島¹⁵⁷を經由して同日午後4時30分にマジュロ島空港に到着した。

マジュロ島はマーシャル諸島共和国の首都だという。私たちは50年前、ミレ島の各離島から脱出して米軍船に救助され、マジュロ島で1ヶ月間捕虜として暮らしてハワイに移動した。マジュロ島は山もなく平坦な小さな島だったが、2、3階建ての建物が並び、ホテルも多く首都のおもむきを備えていた。

ホテルで1泊し、15日に小型飛行機でマジュロ空港を出発して約30分後、ミレ島上空から旋回する際に見下ろすと、各離島で構成された輪郭が絵のくっきり見えた。しばらく後に、昔の滑走路に着陸した。

滑走路に降りると、50年の歳月が過ぎたのに、まるで昨日のこのように当時の悪夢がよみがえった。

この飛行場や滑走路を作るために、私たち800人の同胞が、日本人のどなり声の号令とひどい強制により、棒で打たれ身を切るような痛みで血の涙をどれだけ流したことが。しかしその程度なら平気だった。米軍の爆撃が始まると、私たちはシャベルとツルハシで破壊された滑走路を埋めて、作業中に2次、3次の来襲がくると、爆撃の中で戦々恐々として恐怖症になってもがき、死を覚悟して昼夜の別なく働いた記憶を、どう言い表すことができようか！言葉に詰まってしまった。

ミレ島は私たちが短い人生まで諦め、故国の地を二度と踏めないだろうという思いで過ごした所、そこを私のような者が再び訪れるなど夢にも思わなかった。ほんとうに感慨無量だった。

多くの先住民たちが来てあたたかく歓迎をしてくれた。邊さんと二人で年

155 Pohnpei Island. 普通 Ponape (ポナペ) として知られている。

156 Kosrae Island. ミクロネシア連邦の島。

157 Kwajalein Island on Kwajalein Atoll. クエゼリンはマーシャル諸島内の最大の環礁。1944年1月30日からの米軍侵攻により日本軍は2月5日に全滅。

配の島民に向かって、私たちは50年前に飛行場作業をしたと言うと、自分もコンクリート作業をしたという。歳を聞くと77歳だという。私が病院で医務助手として働いたという、自分も先住民のために病院で勤務したと親しく握手をもとめ、久しぶりに会ったとうれしそうに迎えてくれた。韓国語は一言も知らないが、歳を取った人は日本語が通じた。

飛行場のはずれの隅だけに椰子の木が緑豊かに成長し、滑走路は少し亀裂した隙間に雑草が茂っているが、元のままで大きな変化はなかった。小型飛行機の離着陸は、飛行場の中央の直線で行われた。

ミレ島は爆撃で島全体が焦土化し、繁った木は一本もなかった。今はふた抱え以上もあるパンノキや椰子の木が鬱蒼とし、蔓豆の葉が全島を覆い、その昔私たちが上陸した当時そのままの自然を象徴するような風情があった。

滑走路から小型トラックで住民たちの宿舎に行き、関西テレビ局が用意した簡単な昼食を終えてしばらく休憩を取った。ミレ島から各離島を調査しようとするれば、船便を利用しなければならない。ミレ島には2、3人乗りの小さな船しかなかった。関西テレビ局がマジユロ島で中型船をチャーターして待機させた。

午後にルクノール島に行くことにして、私たち一行5人と日本人6人、先住民10人余りが小型船から中型船に乗り替え、各離島の内海の海岸に沿って行く途中、日本人の陸軍だった一人が、ミレ島には終戦後に慰霊祭などで12回来たという島名を一つ一つ教えてくれた。ルクノール島の海岸に着くと夕方になった。

関西テレビ局の徳永氏が、まず事件があったチルボン島に行くのがいいと言ったが、潮がかなわないので、行くことができずに船室で1泊をした。どの島も宿泊施設がないうえ、蚊がでて困るので、船室で宿泊することになった。

16日、ルクノール島を出発しチルボン島の海岸に到着したが、潮時が中途半端で明日上陸することにして船で1泊した。

17日早起きして小さなボートで邊さんの外、数人が一陣としてチルボン島に上陸した。私は初めて来る島だったが、この島で50年前に暴悪無道な日本の殺人魔に対して立ち上がり大事件を起こしたとして、無残にも120人にもおよぶ我が同志たちと先住民が殺された所だと思つと悲哀を禁じえなかった。

パンノキもたくさんあり、現地生産だけでも4、50人の生計を維持できそうだが、交通が不便なのか、わずか3世帯だけが居住していた。

私たち一行全員が上陸するまでに時間の余裕があったので、邊さんと私は島の最初の入り口で一番多く虐殺され、班長たちが自爆したという所をまず確認しようとした。それを見に行こうとしたが、椰子の木の落ち葉がぎっしり積もり、背丈を越える雑草が茂っており、一步も入ることができなかった。棒でからまった雑草をかき分け、パンノキがいくつかあったという地点を目標にようやくたどり着き、あちこちを掘り返してみたが、落ち葉と雑草で覆われて地面が見えず、50年という長い年月によって自爆した場所もここなのか、あそこなのか、見つけるのが難しかった。

一行と一緒に後で、再びじっくりと記憶をたどって探索することにして、一行がいるところへ行った。すでに一行は島の中央の表側の海岸で、先住民とともに目印のある所を発掘していた。しばらく掘ると遺骨が出た。崔会長は上着を脱いで掘り出した遺骨を拾い集めながら涙を流していた。それだけでなくやるせない気持ちがいっぱいで、私たちも自然と涙がでた。地盤が薄いので海水が染み込み、水の中を探って発見した。小さな骨はなく大きな骨と頭蓋骨があったが、ひどく損傷していた。

発掘が終わるとその場に安置し、敬虔な心で愛国歌とアリランを歌い、魂を哀悼して慰めた。そこから百歩ほどの所に目印されたもう一つの場所を発掘し、今度は高さんの服で受け取って安置し、先ほどのように儀式を終えた。関西テレビ局はひたすら、すべてを熱心に撮影した。住民たちの話では、他の場所のはっきりしないので子細に探さないといけないが、地面が見えないので探すのは容易ではないという。

邊さんは事件の時に殺された人ではないようだという。その当時は言うまでもなく、それ以後もきちんと地面を掘って埋葬までしたことはないとのことだ。しかし、2番目に発掘した遺骨は、骨の節が大きいことから見て、事件後に配置されて殺された長興班の馬道章班長に間違いなさそうだという。

発掘した2基を住民たちの宿舎の近くに安置して昼食を食べた後、初めに私たち二人が探査したところへ行った。一行があちこちそれらしい所を掘りかえしても、遺骨はみつからなかったが、ある椰子の木の根もとを探って脚骨のかけらを発見した。この骨は事件時に犠牲になったのは明らかだった。

高さんは生涯忘れられない父が、異域の孤島で自爆したという場所を確認し、できれば土を少し持ってかえるつもりだった。だから邊さんと一緒に思いつくまま注意深く探してみたが、50年ものあいだ風雨にさらされ、木々も成長して変わったから、正確な位置はわからなかった。

高さんは恨みにみちた怒りがこみ上げ、父を大声で呼びながら「不孝者のチュンソク〔允錫〕が来ました！」と、嗚咽し泣き叫ぶ。私たちは昔の同志だったから言うまでもないが、聞く人を哀れで、もの悲しく切なくさせる。いつも父が亡くなった島を訪ねるのが心からの願いだったから、亡くなった所に来て父を呼んでみただけで、万分の一でも子どもの道理をつくしたことになる、少しは慰めになったという。

邊さんは、チルボン島事件後さらに恐怖にかられ、前後の見境もなく精神的にまいっていたから適当に処理した。だからきっと遺骨を発見できると思っていたのに不思議だと言う。住民にそう言うと、いつか日本の学生たちが来て持っていき、どう処理したのかわからないといった。確かなことはわからないが、それなら後の問題をなくすために証拠を隠滅したのではないかと思われた。

とにかく私たちには重要な任務であり、大きな期待をかけていただけに失望も大きかった。あれこれしたが実績も得られず、時間だけを浪費して、夕方になり潮時に合わせて船に戻らなければならなかった。邊さんは、防空壕は扉を崩して覆っただけなので、防空壕さえ見つければ必ずあるはずだと言う。明日は成果があることを期待して全員船に戻って1泊した。

6月18日、引きつづき上陸し、邊さんと朴鍾元さんが防空壕があったという付近のあやしいところを掘ってみたが、徒労だった。すべて地面が覆われて見えないので、見分けるのが難しかった。それでも日程が決まっているので時間の余裕がない。十分な時間と多くの人員で幅広く記憶をたどり、じっくりと一つ一つ探せば見つけることができるだろうが、せわしない日程ではそれもかなわず、残念ながら期待しただけの成果はなく終わった。

関西テレビ局は、昨日もあちこちかけずりながらしつこく撮影し、今日も日本人が襲撃してきた最初の所に行き、島の周りを広範囲に撮影した。海辺を一周して死体があったというところは残らず撮影し、朴鍾元さんが椰子の木に登り身を隠した付近も撮影した。しかし、実証できるだけの証拠は見つ

からなかったので、まったくの無駄骨だったようで気の毒だった。

住民たちの話によれば、前に金ウォヌン国会議員が現地を訪れ、遺骨を発掘し、裏側の海辺に奉安したという。私たちも発掘した遺骨を同じ場所に奉安することにした。

高さんが出国前にあらかじめ十分に用意してきた祭祀用の供物と住民に頼んで購入した豚肉をまごころ込めて並べ、その当時 40 代の最高齢で役職が団長であった父のために、高さんが遺族を代表して祭主となった。葬儀の服を着て敬虔な心で厳肅に、亡くなった恨み多き霊たちがやってきてたくさん食べるようにと慰霊祭を催した。テレビは私たちの行事の場面を撮影し、日本人一行も敬虔に参拝をした。私たちは愛国歌とアリランを合唱して儀式を終え、前日奉安した傍に臨時に奉安した。

日程に限りがあってきちんと探索できず、未練を残しながら午後遅く全員が乗船し、チルボン島を出発してルクノール島に上陸した。邊さんもルクノール島に相当期間居住しており、私も 4 ヶ月余り滞在した。島は小さいが、ミレ本島に次ぐいい島だ。私は本島では体が痩せ細って体力を失った状態だったが、この島に来て完全に回復したので感慨深い島だった。上陸してみると昔の趣がなつかしく、さらに感慨をあらたにした。

ルクノール島の目的は 1945 年 3 月 1 日、チルボン島事件当時、海岸や海に避難していた仲間を誘いだし、3 月 2 日の早朝に事務所の隣に穴を掘り、15、6 人を銃殺するのを邊さんが目撃した事実を確認するためだった。邊さんと私は、チルボン島で得られなかった成果をルクノール島で挽回できる、ここだけは簡単に見つけられるだろうと期待した。いざ調査してみると思い違いだった。昔の建物は跡形もなくなっではっきりしない。見慣れているところで事務室を出入りしていたのに、その付近というのは大体推測できるが、見分けられないので、正確な位置を把握することは容易ではなかった。よく知っているという住民を連れてきて見せても私たちと同じだった。

邊さんと私は、追いつめられた人のように心だけがあせり、あちこち目探りばかりしていたら、もう日暮れになっていた。待つ時間はゆっくりと感じるが、決められた時間は早くすぎるものだ。事務所近くは落葉もなく雑草もたいしたことはなかった。その当時、あるところに穴を掘り射殺して埋葬したので、時間の余裕があればじっくり調べて発掘して明らかにできるのに、

限られた時間の関係で二度と得られない、いい機会を逃してしまった。時はあまりにも無情であり、うらめしいばかりであった。私たち一行は大きな期待をもって来ただけに、虚脱感と失望は大きく、このうえなく残念であった。

実況を目撃した人を探すのも容易ではないのに、70歳を越える証人たちの明日を誰が約束できるのだろうか。たとえ今後機会があったとしても、誰が見つけることができるというのか。永遠にベールに包まれて隠れてしまうだろうし、月日がたてば自然に忘れさられる。

ルクノール島の住民たちの居住地は、昔に比べるとかなり改良されてよくなり、人口は100人余りだという。食生活はパンノキの実など、島で生産されたもので維持できるという。周囲の環境も清潔で整頓されていた。ちょうどその日が日曜日で、男女老少18人余りが教会で礼拝をしていた。

日没時にルクノール島を出発してミレの本島に上陸、夕食を食べて住民の公共庁舎を借りて一泊した。

6月19日、私は早起きして昔を思い出しながら島の中央の住宅を回ってみた。なにせ小さな島で、発展の余地もないので大きな変化はなかったが、私たちが上陸した当時に比べるとかなり改造され変わっていた。学校の教室や教会などは結構大きく建てられており、住宅付近はすっきりと清潔に整えられて気持ちがよかった。空襲当時の爆撃の穴は、島のあちこちに円形のまま残り、雑草と椰子の木が繁っていたが、その当時の戦慄をあらわにしてくれた。私が働いていた病院の跡を訪ねてみると、椰子の木がぎっしり生え、雑草が生い茂り、昔の記憶ははっきりしない。十年もすれば山河も変わるといえるが、50年たっても島は変わらず、私の記憶力だけが大きく変わったという気がした。

先住民はもともと柔順で優しい人々だ。人口は300人余りだという。生活状況は、パンノキの実が主食であり、喉が乾けば時々椰子の実をとって水を飲めばいいという。生活必需品は、椰子の実のコブラを採取し、石鹼の原料などとして輸出し、購入するという。ミレ島はマーシャル共和国の領域で、毎週2回首都から定期的に小型飛行機が往来するという。

事件の首謀者であり、目撃者証人である朴鍾元さんは病気で半身不随になり、横で支えなければ一歩も動けない体であった。死体処理の責任者だった邊漢権証人は、中風で入院した後に退院し、通院治療中でやっと回復段階にある

不自由な体であった。ふたりとも病者であった。二度とない絶好の機会を見逃すことができない方々、不自由な老体を引きずり無理な苦しみに耐えながら、希望を持って長期間の現地調査をした。しかし限られた日程、不十分な条件によって期待どおりにならず、無念にもミレ島に最後の別れを告げることになった。そのため私たち一行は、寂しさと虚脱感でいっぱいであった。

私たち一行は、小型トラックで飛行場に来て待機した。午後2時ごろの飛行機で、住民たちの歓送を受けて別れの挨拶をした後、ミレ島を離れ、マジュロ島、グアム島を経て翌日、金浦空港に到着した。



4

倭奴たちの手にかかって死ぬより、 国のために闘って死のう

安承甲

はじめに / 戦場の青年たち / 同志、金周錫 / 高麗独立青年党の結成 / 挙行計画 /
アンバラワ義拳と3人の義士 / 第2計画の失敗 / 第3の計画 / 党員逮捕後 / 後記

安承甲（アン・スンガブ）創氏名：安田桂薫

- 1923.1.27. 忠北清州郡賢都面竹田里生まれ
- 1942.6. 面書記勤務中、陸軍軍属捕虜監視員に徴用、釜山、西面の野口部隊で訓練
- 1942.8. インドネシアのバンドンのオランダ人抑留所捕虜監視員
- 1945.8.15. 日本敗戦後、戦犯裁判にかけられる
- 1947.2. 帰郷

本文は諾山奨学会が1998年7月に発刊した『諾山安承甲先生』（良書閣）の一部を抜粋したものです。

はじめに

私がこの文を書くことになったきっかけは、高麗独立青年党の抗日闘争によりジャワで殉国した三人の義士の魂を慰めるためであり、大衆雑誌「実話」1957年度2月号別冊（148～155頁）に辛某氏が高麗独立青年党について虚偽の内容、「南方ジャワを震撼させた抗日闘争—秘密結社組織高麗独立青年党はこうして戦った」を記したことへの怒りによる。英雄になろうとするための虚偽の報道により、今後、愛国が汚されないことを願ってペンを取った。

私は愛国や孝行は、誰かにほめられるためにするのではなく、人間が持つ純粋な情と湧き上がる血が、義のために自然と放出されるものだと思ひ固く信じる。

わたしたちは遠い他国の歴史まで見ることなく、私たちの半万年の歴史だけでもこの高貴な奥深い道理をいくらかでも悟ることができる。つまり、私たちの歴史だけでも多くのことを学び、頭をたれて感化され、衝撃を受けるのだ。

当時の植民地環境は、半万年の歴史をいとなんできた我が国民の胸に火をつけ、沸きたつ血と高鳴る胸を持つ若者たちは、自殺でもしてしまいたい苦しみ、じっとしてはおられなかった。そんな鬱憤を大義で表現した人は愛国志士となり、愚かなことで表現した人はやくざになった。

イエスが十字架に張りつけられた時、安重根義士が絞首台の露と消えた時、論介が晋州の南江に身を投げたとき、かれらはどんな対価を望んだろうか。安重根義士が伊藤博文の胸に向かって銃を撃ったのが私的感情や英雄心のためだったら、世界から忠義の手本として崇拜されなかつたらう。

このように彼らは大義のために命を塵芥のように捨てても、誇ったり自慢したりせず、対価を望んでいない。なのに、今日の人々は細々としたことまで他人に知らせ、賞賛を聞き、代価を願っている。義とは大きなものにだけ価値があり、小さいものはないという今日の思考様式こそ、千年万年の長きにわたって糾弾されねばならない。

高麗独立青年党¹⁵⁸の活動を、自分がしたことのように偽装し、雑誌社や新聞社に寄稿して無かった事実をあったかのように、小さなことを大きなことのように、他人がしたことを自分がしたことのように装った偽の愛国者に対しては、慨嘆せざるをえない。

我々は「ジャワでの闘争実録」がインドネシア政府を通じて明らかにされ、歴史を輝かせる日が来るのを待っていたが、似て非なる愛国者たちの虚偽のでっちあげ報道に火のような怒りが湧き上がったのだ。だから真相を明らかにする。

これは私たちが英雄心や愛国者として行動するためのものではない。歴史的事実をそのまま明らかにして、社会の批判を受け、意志を告げられないまま南方の異域、ジャワ島の椰子の木の下で先に逝った3人の同志の魂を、百分の一でも慰めるためだ。以下の内容には当時の社会情勢と私が見聞きしたものも含まれている。

生き残った私たちは、義により殉職した孫亮燮（ソン・ヤンソプ）、盧秉漢（ノ・ビョンハン）、閔泳学（ミン・ヨンハク）¹⁵⁹の3人の同志の英霊に対して大きな罪がある。ここで真相を明らかにし、三英霊に許しを乞う。

158 インドネシアで朝鮮人軍属が組織。高麗独立青年党は1944年12月に血盟党員10人を中心に組織された秘密結社。中国重慶にあった臨時政府に連絡。インドネシアの抗日華僑組織と連携し、適当な時期に武装蜂起して日帝と戦う準備をした。1945年1月、党員の一部にマレーシア方面への移動命令がだされ、連合軍捕虜とすみれ号に乗船。捕虜と連携してすみれ号の奪取を計画したが、乗船前に計画が発覚。組織の存在が日本軍憲兵隊に知られ、血盟党員は逮捕、ジャカルタの陸軍刑務所に収監。「治安維持法」違反で懲役7年から10年まで実刑を宣告されたが、服役してもなく日本が降伏、釈放。戦犯裁判にかけられたこともあった。

159 孫亮燮と盧秉漢の創氏名がわからないので日本軍の履歴などを見つけれない。閔泳学（岡田泳学）は〔アンバラワで〕1945年1月6日に自殺の記録がある。〔孫亮燮は永松亮燮、アンバラワ事件主導後、自殺。盧秉漢は岡村秉漢、アンバラワで1945年1月6日に自殺〕。

戦場の青年たち

日本軍はシンガポールを陥落させ、ジャワを占領したが、いわゆる「大東亜共栄圏」を構成するのに欠かせない人手が不足した。そのため韓民族を利用しようとした。

日本は満洲をはじめ、中国全体を揺るがし、仏領インドシナを経てマレー半島やタイ、スマトラ、ジャワ、ボルネオなど広範囲な地域で戦争をしていた。そこで不足した兵力を満たすために志願兵、学徒兵、軍属などの制度で人々を募集した。その中で最も面倒なのは捕虜の問題だった。釈放すると再起して攻撃するだろうし、収容して監視をしようとしても人が足りないし、殺すと国際世論に批判される。そのため監視要員として陸軍軍属を募集した。

1942年6月10日頃、全国での徴用選考で合格となった陸軍要員3,000人は、釜山の西面に設置された仮設兵舎、野口部隊で6月15日から2ヶ月間徹底した軍人教育を受けた。「気をつけ、敬礼」から始めて日本の皇国臣民教育まで受け、8月19日午後5時、輸送船団に分乗し、ジグザグ航法で9月14日にジャワ島バタビア（ジャカルタの昔の名前）の沿岸ダンジュンプリオク港¹⁶⁰に着いた。日本軍がジャワを占領してから5ヶ月後のことだ。

私が軍属に志願したのは、2年服務で初給48円の大金という餌もあったが、高等警察の刑事から抜け出すことが主な目的だった。私たちの故郷では子どもたちに反日思想を吹き込むため、少年団、青年団が組織され、夜学を開いて啓蒙した。しかし、高等警察の刑事が執拗につきまとったので、これを避けるため、陰城郡の金旺面で畑作技手¹⁶¹の発令を受けた。そこでもやはり地下活動をした。

当時は一般行政だけではなく、全職員に各村を担当させ、生活全般を指導、監視させた。私は、住民に独立の精神を植えつける良い機会だと考え、喜びを禁じえなかった。私は上部の命令を徹底的に周知させるという口実で、担当した内容里、社倉里で村民たちを訪ねた。彼らに、希望を持ち人生のやりがいを見つけるようにといい、融合し団結すれば達成できないことはない、暗示した。当時の面長であるチョン・インソプ氏は、私が命令を徹底的に履

¹⁶⁰ Tanjung priok、ジャカルタの北方

¹⁶¹ 技手は当時、行政機関の技術員である。畑作技手は畑作物を育てる業務に従事。技手の下の判任官と同等の地位。



子どもの日の記念写真（夜学）

行しようと思っていると、「私は周辺の僻地の集落をまず啓蒙しようとした。郡や道から出張でくると、新道の周辺だけを見るので喧しいから、明日からは面所在地である無極里を担当してくれ」ということだった。

私は内谷里、社倉里の住民たちに自立の精神（独立精神）を養うことをくりかえし頼み、無極市場 600 号を担当し、カード制を通して人口動態、職業動態、生活状況などを徹底的に調べた。他人には、徹頭徹尾の親日愛国者のように振る舞って、集団活動に力を注いだ。しかし、要視察人物だと高等警察の刑事が常に尾行していた無極里 2 区に居住する張基蚩氏と秘密裏に通じていたため、それに気づいた駐在所は、再び私の背後をあばこうとし始めた。

「なぜ私たちは他人の支配下で生きなければならないのか？ 私たちも私たちの力で生きる道はないか」と力説して集団活動に気がついていたある日、駐在所の張仁賛巡查が私を呼んで、志願兵として出て行くのがいいと言った。それは私が住民に独立精神を吹き込んでいる不純分子だったため、軍隊に追い出そうとする計画だったのだ。私はすでに跡をつけられていることを知っていた。

しかし、両親に相談してから決めると言った後、ちょうど南方行の軍属の募集をしていたので志願した。これは高等警察の刑事から抜け出して自由を求め、広い世界で自分自身を広げたいという考えからだった。そして、日本のヤツらのために兵士として無駄に戦って死ぬよりも、非戦闘要員として行く方が私にとって民族の得になると思ったからだ。

同志、金周錫

釜山西面の教育隊に集結してみると、その中にはお金を稼ごうと志願した人、家庭環境を悲観して志願した人、上級学校に進学できず志願した人、私のような不純分子で追われていく所がなくなって志願した人などが混在していた。

内務班「い」の1小隊2分隊には林憲根、金賢宰、金周錫と3分隊には李億觀など¹⁶²私と意志を同じくする同志がいて、思想的温床のようだった。

私の隣の席の金周錫同志は、思想が不純だという罪目でソウルの仏教専門学校を中退させられた後、怒りを我慢できず、軍属を志願した。しかし軍属生活は、「靴が小さくて履けません」というと日本の上等兵はかっとなって、「何？バカヤロウ、軍隊で足に靴を合わせようとするヤツがどこにいるか？靴に足を合わせるもので、足に靴を合わせるのではない」と言われることから始まった。これは軍属の訓練ではなく軍の訓練だった。彼は苦情を我慢できず、故郷の友人に手紙で、「軍属なら民間人の待遇で、人間として接してくれると思っていたが、軍人が受けるような高強度の訓練と、民族精神の抹殺教育だけだから疲れてしまった」。このように書いたが、内務班長の江上軍曹と小林伍長にばれて、小隊長の鈴木中尉に叱られた後、班の上等兵に思いっきり叩かれ、再び軍属生活の不平を吐露できなくなった。このように個性を抹殺する生活の中で、誰が先頭に立って反抗できるのだろうか。

私は灯りを消した後、内務班が静かになり、親友たちが眠った後に金周錫と二人だけでひそひそ話した記憶が、鮮明に残っている。

162 林憲根、金周錫、李億觀は創氏名が記載されていないため、日本軍の履歴などを見つけるのは難しいが、神石賢宰（金賢宰）の場合、1917年10月20日生まれで、ジャワ捕虜収容所に勤務し、1945年9月に現地で解雇された記録がある。〔創氏名は林憲根が林正雄（ソウル出身）、李億觀は公山豊三（坡州出身・ソウル在住）〔内海愛子・村井吉敬『赤道下の朝鮮人叛乱』（勁草書房1980年）では、李億觀を李活と記載、李活は別名。〕

安承甲の臨時軍人軍属届

安承甲の留守名簿

「ツバメにどうして鳳凰の大きな意思がわかるか」と言いながら、お互いに未来をもっとよく、そして日本の滅亡を見通していると言い張ったりした。金周錫はジャワに上陸した後も自分の思想を隠さずに表し、ひどい憎しみを受けてタイの捕虜収容所の転属とされた。

私は怒りに耐えられない金周錫に、「急がずに丹念に為すべきことをすぐに表に出してしまうからこのようになったのだ。海陸万里の遠い道を平安に行くことを願っている。そこに行っては私がいつも隣にいるように思い、私の漸進的精神¹⁶³にならい、よく考えて物事を処理すればいい」。

このように話して送り出した。しかし、タイへ移ってから1年で、英国人捕虜3人と共謀し、軍用列車で国境線を突破してインドに亡命し、身を隠す計画を立てた。彼は捕虜使役の監視に行った隙をみて、タイとインドの国境地帯の広大な砂漠の中で、捕虜に騙されたのではないかと錯覚し、さまよっているさなか、日本憲兵の追撃を受けて銃撃戦の末に戦死してしまった¹⁶⁴。この悲しい知らせを8・15解放後に聞いた。「ああ、意志を同じくしていた愛国

163 [原文では漫漫的。漸進的と訳す]

164 [金周錫は逮捕されて処刑された]。

者一人が去ってしまった」と、嘆かざるをえなかった。

高麗独立青年党の結成

日帝が亡ぶことを祈り願って闘争する人が、一人や二人だったはずはない。釜山の西面で芽生えた思想的同志らは結局、ジャワに行っても機会があるたびに反日、反日で固くまとまり始めた。私が接した人物は、ある故郷の友人である林憲根、朴昶遠をはじめ、呉殷錫、白文基らで、彼らに組織を依頼し、私はバンドン¹⁶⁵地区党の組織に着手した。

高麗独立青年党を結成することになった動機は、第一に民族的怒りを解き、何としても独立の機会をつかもうとする思いと、第二に2年ぶりに除隊、帰国させてくれるはずが、期限が経過した後も何の弁明もなく無限にこき使い、皇国臣民精神を注入し、人間の基本的自由さえ剥奪したからだ。

積極的な闘争として、命令不服従と夜に鉄柵を越えて外出すること、上官の命令をバカにするなどの方法を用いた。そんなことから反日思想が芽生えていることを探知した日本人上官たちは收拾策を講じた。

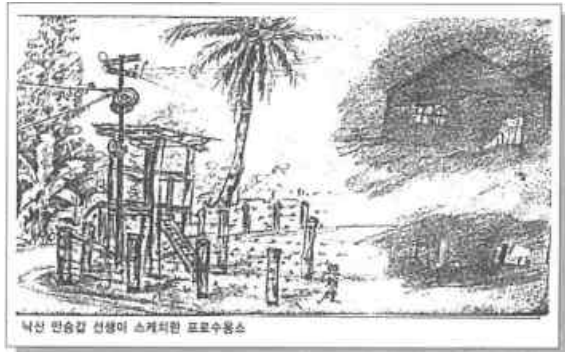
例えば、ボゴール¹⁶⁶農場を監視する朝鮮人たちの鉄柵を越える無断外出が頻繁になると、鉄柵に電流を流し、事務所で自動的に鐘が鳴るようにした。しかし、朝鮮人たちは針金のきれはしで電線を放電させ、一晩中ベルが鳴るようにして、分遣所長の極度な怒りを引き起こした。このような粘り強い闘争で、夜ごとに非常招集のない日はなかった。儀仗完備の緊急招集で整列させた後、「お前たちはほんとに犬畜生にも劣り、どうしようもない。犬も「来い」といえば来て、「そっちへ行け」といえば行くのに、お前らはどんな人間なので、一度言ったことがわからないのか？お前たちは犬に付き従うほうがいい。間違っ生まれたんじゃないのか」と言いながら、聞くに堪えない悪口を言われ、無視されぞんざいに扱われた。直立して聞かなければならない

165 Bandung、ジャワ島ジャワパラット州の州都。

166 Bogor、ジャワ島ジャワパラット州にある都市。1745年にオランダ人がつくり、オランダの植民地時代にはバイデンブルフと呼ばれていた。植民地時代には総督の別荘がつくれ、避暑地として利用された。現在も大統領の別宮であるボゴール宮殿があり、19世紀初から熱帯植物の収集で知られているボゴール植物園が有名である。



安承甲が直接描いた捕虜収容所



安承甲が直接描いた捕虜収容所



安承甲が直接描いた타란川
作戰地



安承甲が直接描いた彈藥庫

朝鮮人たちの痛憤は、いかばかりであったか。

非常召集される日の夜は、敵を想定し、3つの分隊に分けて防衛訓練をする。その時に農場で育てるバナナとパパイヤの木を折って壊すことで、隊長から怒鳴られて高じた怒りをいやした。

翌朝の朝会に組長が点呼を受けに来たが、班長が気乗りしない声で、「気をつけ、右に並んで、敬礼」というと、みんな訓練を一度も受けなかった人々のように、くねくねと勝手に整列して敬礼した。「番号！」と人員把握点呼の号令が下されたが、同志たちはクスクス笑いながら、「キャンキャン」、「ワンワン」、「クンクン」、「ウォンウォン」など、自分勝手に犬の真似をした。組長は点呼を受けられなかった。組長があっけにとられてどうしたのかと聞くと、一人が答えた。「私たちが犬にも劣るというので、犬にでもなってみようと犬の声で答えたのです」。

一方、バンドンでは室井警部が、些細な感情で同志の朴サンジュンを西洋人抑留婦女子の面前で殴って民族的侮辱を与えた。すると朴昶遠、林憲根をはじめ全員が室井警部を集团的に殴打した（室井警部殴打事件は、当時抑留所の通訳ボマン・オダニ女史が立証できる）。指揮系統はこのような思想的対立と集団行動を阻む道がなく、頭をいため、再教育の必要性を感じた。それでアンバラワ¹⁶⁷のスマウォノ¹⁶⁸に教育所を作って不純分子の再教育を始めた。

スマウォノ教育隊に編入された同志は、バンドンでは室井警部殴打の先立った林憲根、呉殷錫、朴昶遠、白文基など、バタビア、ボゴール、スマラン¹⁶⁹、ジョクジャカルタ¹⁷⁰などでは、李億観、金賢宰、李相汶、曹志鴻、孫亮燮などだった。いわゆる不純分子たちをすべて入隊させ、精神改造訓練を始めたのだ。訓練の過酷さと厳格さは、言葉では表現できないものであった。たとえばちり一つ、たたんだ服のしわ一つまで干渉して、人を機械のように扱った。しかし、訓練が厳しいほど反日思想は大きくなり、同志はさらに固く団結した。

金賢宰同志は幸い炊事場の別室にいたため、消灯就寝後の意気が通じた同

167 Ambarawa、日本軍のアンバラワ捕虜収容所があった。

168 Semarang 付近のスマウォノ抑留所

169 Semarang、インドネシアの中部ジャワ州の州都であり、最大の貿易港がある。

170 Djokjakarta、ジャワ島ジョグジャカルタ特別州の州都。

志が一人、二人と金賢宰同志の部屋に集まった。そして買っておいだした鶏卵やアヒルの卵を茹で、ウイスキーやブランデーを飲みながら、怒りを押さえるすべがなくてため息ばかりついた。ただこれによって以心伝心で心が通じるようになり、絆がより強くなった。

「それならむしろ積極的な闘争に出よう、それには意志が合う私たちだけで血盟を結ぶのはどうか?」。この提案に炊事場に集まった全員が賛成した。党名は高麗独立青年党としようか決め、もし不幸にも発覚したときは当事者一人だけが責任を負い、他の党員名は漏らさないようにした。そしてそれぞれの指を切って酒杯で血を受け、血杯を飲んで誓った。1944年12月29日だった。

スモウォノ教育は、1944年9月30日から12月31日まで約3ヶ月間実施された。血盟後、総領にソウル出身の李億観同志を選出し、責任秘書〔総書〕は金賢宰、総務に林憲根、秘密基本党員〔血盟党員〕は孫亮燮、曹圭鴻、吳殷錫、朴昶遠、李相汶、白文基、文学善など、バンドン責任党員に安承甲、チマヒ¹⁷¹ 責任党員を林ウォングン〔韓国語原文、林憲根と推定〕、アンバラウ責任党員を孫亮燮とした。スマラン、ボゴール、スラカルタ¹⁷² など各地でも邊鳳赫、朴勝彥、琴仁錫などを追って正党員として個別入党させたが、名前をすべて覚えていないのが残念だ。

私たちは闘争方法と同志糾合、秘密保全などに関する問題で緊張した日々を送らなくてはならず、機会さえあれば討議に討議を重ねた。私は漸進派なので急進派をなだめながら深思熟考して事に当たろうと正党員に呼びかけ続けた。党員も軽拳盲動を最大の禁物と規定し、一挙手一投足に慎重を期した。

うんざりするような人間改造と思想転換を目的としたスモウォノ教育隊が解散したとき、接触者の林憲根はバタビアに直行し、朴昶遠同志がバンドン行きで一晩寝て行く時に、目的を決行する日が近づいたことを知らせた。

第16軍司令部では、朝鮮人の扱いに頭を痛め、作戦方法も変更した。思想転向は不可能だと判断したのか、同志たちの集団行動を粉碎するため、ジャワ島各地の日本軍部隊に分散配置して二重監視を行った。

171 Cimahi、オランダ人の抑留所があり、ジャカルタの東南側180kmに位置。

172 Surakarta、中部ジャワ州にある都市。

挙行計画

私たちは、捕虜9万人をうまく利用すれば私たちの側になるという希望と確信を持っていた。ジャワ駐留日本軍人と軍属はいずれも2万人に過ぎないので、同志一千人が軍司令部全部と弾薬庫、武器庫、放送局などを占領した後、9万人捕虜を武装させて日本人をすべて殺し、ジャワを私たちの手中に入れようという計画を実現しようとした。だから外出や出張時には、そうした場所の地勢、警備状況などを詳細に調べて時を待っていた。しかし、辛在観¹⁷³のミスで憲兵に探知され、林憲根、朴昶遠、呉殷錫、文学善、白文基など党の中堅5～6人がマレーシアの捕虜収容所に転属され、シンガポールに行くことになった。

林憲根同志は、捕虜の指揮格であるイギリス人大佐とオランダ大佐に秘密裏に会って、シンガポールに移送される捕虜のうち、船長役の人と機関士と無線士を搭乗させてほしいと頼んだ。発覚すれば命が危ないから秘密を守ってほしいという頼みも忘れなかった。移送される700人の捕虜の中に、船を運転できる人を入れて乗船準備を急いだ。ジャワで挙行しようとした地下工作は漏れてしまったからだ。ジャワの挙行は残りの同志たちに任せ、2番目の計画は航海中に船を奪取し、捕虜と共にオーストラリアに逃亡することだった。

アンバラワ義挙と3人の義士

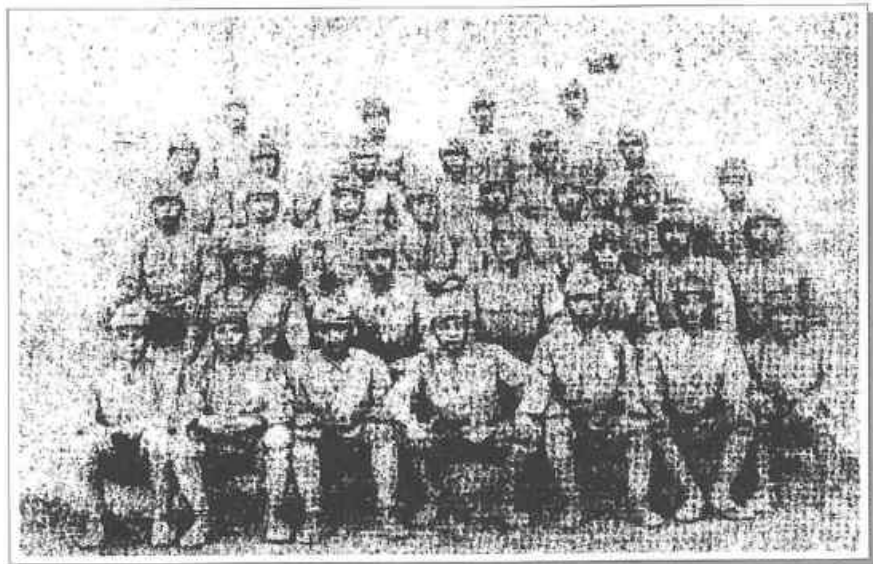
しかし、どうしたことか。1945年1月3日、アンバラワ分遣所で党员確保と反乱準備の総責任者として地下工作を行った孫亮燮同志が、マレーシアの捕虜収容所に転属命令を受けた。孫同志は考えてみると、党员のほとんどが転属命令を受けたため、情報が既にヤツらにすべて漏れたと判断するしかなかった。だからこれをどうしたらいいのか。男子として生まれ一度は死ぬのは同じだが、浅ましく長生きしてヤツらの手にかかって死ぬより、国のために闘って死ぬ方が正しいようだ。これをもう一度考えてみて、抱き込んだ盧

173 重光義政：1910年9月23日生まれ、忠清北道堤川出身

秉漢、閔泳学の2人の同志と一晩中方法を考えてみた。しかし、明確な案が浮かばず、充血した目で夜を明かした。

1月3日午前、仲間たちのシンガポールへの長旅の無事を祈り、話を交わす送別の宴が催された。仲間たちだけでなく、日本人の班長と上官たちも参席して酔うまでに飲み、午後2時頃に別れた。2次会まで飲んで3人の仲間は涙ぐみながら、自分のベッドに父母と同志たちに遺言状を書き置いたが、後に日本人将校が思想的に不穏だとして燃やしてしまった。

「どうせ大きな志がやり遂げられず、追い出されて水死するのだったら、むしろヤツらを殺してしまうほうがよい」と考えた。アンバラワ分遣所の衛兵所に保管されていた非常用弾丸数千発と機関銃を兵補の衛兵¹⁷⁴から奪い、セダン車に乗せて盧秉漢同志は車を運転し、閔泳学同志は車の上で後方を見張った。孫亮燮同志は射撃大会で、百発百中の実力で表彰されたことがあったため、前方を見張って走った。彼らは捕虜収容所の事務所をはじめ、将校官舎、刑務所、郵便局を問わず、日本人がいる場所はみんな探し回って銃撃し、またたくまにアンバラワ市街を戦場にした。



捕虜監視員の時代

174 監視人員不足でインドネシアの兵補を募集して衛兵勤務をさせていた。

突然の反乱に人びとはびくびくし、日本人たちはわけがわからず隠れる所を探した。日本人たちは3人の同志が、マレーシアの捕虜収容所への転属命令を受けたことが悔しくて反抗したとみて鎮圧しようとしたが、日本人さえ見ればやみくもに撃つものを見て、反日抗挙だと悟り、戒厳令を宣言した。そして憲兵隊、捕虜収容所警備員、インドネシアの一般警察、インドネシア幹部候補生など合計約800人余りが、アンバラワ市を二重三重に包囲し、生け捕る攻撃をした。同志たちの活動範囲は徐々に狭くなった。

3人の同志が、1945年1月4日から6日までの3日間繰り広げた戦いで、日本人軍人と軍属、邦人ら12名を射殺し、流弾により先住民数人も負傷した。

彼らの悲壮な最後は、李相汶同志が著した「ジャワの追憶第1集」の「アンバラワ義挙の真相」と、李月出同志が記録した「アンバラワ義挙観戦記」で詳しく知ることができる。

アンバラワの義挙が起こらなかったならば、私たちはジャワ全島の反乱を成功させ、祖国の名誉を輝かせることができたのにとても残念だった。3人の同志の義挙によって党員がバラバラになったり、捕まったりして、反乱を実行する機会を失ってしまったからだ。

しかし、日本人たちに、私たちの民族を蔑視・冷遇して永遠に皇国臣民化としようとした計画が、無駄なことだったというのを悟らせる一助となり、インドネシア民族の独立運動を刺激した。在ジャワ第16軍司令部が朝鮮人の分散配属、再監視制度へと戦略を変更させた事件だという点でも、非常に価値のある死だった。

彼らの迂闊な行動で、事を台無しにしたことは残念ではあるが、独立のために戦った功績は未永く輝くだろう。

第2 計画の失敗

アンバラワで義挙が起きると司令部は予定を早め、転属命令を受けた同志とシンガポール移送の捕虜を乗せた船を出航させた。もちろん、上官たちは事前にそのような事実を知らせなかった。

アンバラワ義挙を知らないまま、捕虜輸送とマレーシア捕虜収容所への転属命令を受けた林憲根、朴昶遠、呉殷錫、文学善、白文基同志らは、

オーストラリアに逃げる良い機会がきたと喜んだ。しかし、いざ輸送船に搭乗してみると、日本人歩兵一個分隊と一緒に搭乗した。分隊長兼輸送司令官である小林〔笠原中尉〕が、下した命令は次の通りである。

1. 捕虜監視は分隊員が務める。
2. 捕虜収容所勤務者は全員武装解除し、上甲板に上がって対空監視に就く。怒り心頭だった。

同志の中には武装解除前に、彼らをすべて片付けた後、予定通り捕虜の中の船長、機関士を利用して連合軍に無線連絡し、連合軍潜水艦の誘導を受け、オーストラリアにすぐ行こうとする急激派同志、もう少し航海して時期を見て、日本人が追ってくる時間的余裕をなくした後に挙行すべきという同志、現在は軍の占領範囲内にあるため、1つの分隊を殲滅したからといって脱出はできず、脱出してもわずか数時間以内に追撃されるという慎重派がいた。

慎重派は「今、挙行すれば命にかかわる。理由はすでに第2計画が明らかにばれているので、ヤツらは万全の準備を整えているだろう。これは神が私たちを試す試練であり、時を待とう」と言った。

なすすべがなく、自暴自棄に陥るしかなかったが、朴憲根同志が提案した。「シンガポールは中国大陸とつながり、重慶にある我が国の臨時政府と連絡することもできるので、到着してから活路を見いだそう」。

こうしてシンガポールまで、煮えたぎる胸を抱いたまま、義拳の松明をかかげることができないまま、着いてしまった。

輸送船がマレーシアの捕虜収容所に転属する同志を乗せて、ダンジュンプリオク港を出発した後、ジャワでは高麗独立青年党の総領李億観同志をはじめとする血盟党員が、アンバラワ義拳の3週間後の1月28日に、バタビア（ジャカルタの旧名）憲兵隊に逮捕され、同日スラカルタ¹⁷⁵ 憲兵隊に曹圭鴻同志と李相汶同志が逮捕された。彼らの同志はひどい拷問を受けながらも、他の同志の名前を出さず自分たちだけで罪をかぶった。彼らは2月1日0時15分発ジャカルタ（バタビア）行の急行列車便で憲兵隊本部に引き渡された。そこには総領李億観同志がすでに収監されていた。彼らの仲間にはひどい拷問を受けた。そんな中でも言葉を合わせるため、メモで互いに連絡をとって、基本党員の幾人かの犠牲だけですんだ。逮捕されていない党員は

175 Surakarta、ソロ川流域の豊かな平野にあり、ソロとも呼ばれる。

戦々恐々として眠れず、天をあおいで嘆息し、歯ぎしりしてさらなる闘争を誓いながら活動を続けた。

第3の計画

高麗独立青年党の最初の計画である全ジャワ反乱の計画は、アンバラワの義拳で水泡に帰し、船を奪って捕虜と一緒に逃げようとした第2計画も失敗した後、総領をはじめとする中枢人物は逮捕されたが、シンガポールに上陸した林憲根をはじめとする同志らは、第3計画として重慶臨時政府と連絡しようとした。そのため捕虜輸送が終わった後の2ヶ月間、兵站旅館に泊まり、中国語が堪能な林憲根同志が中国人華僑を探して重慶との連絡方法を探そうとしばしば外出していた。

だが不思議なことがあった。兵站司令部では他の同志や日本人兵卒の外出許可や公用外出証はほとんど出さないのに対し、林憲根同志にだけは公用、私用を選ばず、外出証をすべて出した。おかげで林同志は、仲間のこまごまとしたお使いを引き受け、必ず連絡路をみつけようと、華僑の商店にしきりに出入りするようになった。

そんなある日、林同志がふと後ろを振り返ると、昨日も一昨日も見たような人が後をつけているのがわかった。気を引きしめてあらためて見てみると尾行されていた。林同志はその時から注意深くなり、活発な活動ができなかった。

彼らはその渦中でアンバラワの義拳の知らせを聞き、痛快でたまらなかったが、その事件によって党の内幕が暴露されないか心配していた。

1945年3月1日明け方、起床を知らせるラッパの時間までまだかなりある夜明けにドアを叩く音が聞こえた。「誰？」という、数人がドアを開けて入ってきて電灯をつけ、シンガポール駐在憲兵司令部の憲兵身分証を見せた。「聞きたいことがあるので、申し訳ないが憲兵隊まで来てもらわなければなりません」。彼らは丁寧と言った。

同志らは「アンバラワの義拳に関する調査のようだ。それなら、私たちは全く知らないから安心だ」とそれなりに安心して、服を着替えた。憲兵隊に出頭すると、無条件に2ヶ月監禁した後、ジャワ憲兵隊の逮捕要請で逮捕したのだから、ジャワへ行けと言った。「逮捕の理由は何なのか?」。「私たちは

知らない。ジャワ憲兵隊の依頼に従っただけだ」。

同志たちは第3計画の糸口もつかめないまま、シンガポール憲兵に監視護送される船上で、アンバラワ事件は知らないので関係ないことにしようと口裏をあわせた。1945年5月19日、裁判管轄上ジャワ（バタビア）憲兵隊に引き継がれ、軍法会議の取調べを受けた。しかし予想外にもアンバラワ事件に関するものではなく、秘密結社組織である高麗独立青年党に関するものだった。

同志たちは、そんな秘密がもれることは夢にも思わなかった。同志らは慌てて無条件に否認したが、取調官はすでに高麗独立青年党について詳細に知っていた。それで、認めざるをえなくなり、結局自分自身の罪だけ話した。

党員のほとんどはジャワの高等軍法会議で鬼倉典正¹⁷⁶ 検察官法務少尉が、日本憲兵の治安維持法第1条を適用して求刑した形式的な裁判であり、次のような判決を受けて、グロドック刑務所¹⁷⁷ に収監された。

李億観（総領）	15年 求刑	10年 宣告
金賢宰（総書）	10年 求刑	8年6ヶ月 宣告
林憲根（総務）	10年 求刑	8年 宣告
呉殷錫（基本党員）	8年 求刑	7年 宣告
曹圭鴻（基本党員）	8年 求刑	7年 宣告
朴昶遠（基本党員）	8年 求刑	7年 宣告
李相汶（基本党員）	8年 求刑	7年 宣告
白文基（基本党員）	8年 求刑	7年 宣告
文学善（基本党員）	8年 求刑	7年 宣告

これは当事者としては悔しい判決だ。しかし、彼らの過酷な量刑は、彼らが日本に対して及ぼした害が大きかったために受けたものだ。しかし、当事者としては再審を請求するすべがなく、弁護士も雇えない亡国の恨みの中で嘆息するばかりで、人権が抹殺された収監生活を送った。

朝食が終わればひざまずいて座り、正面だけをみて反省しろと言った。体を少しでも動かせば看守にひどく殴られた。額にハエでもとまると、「看守様！」「なんだ！」「額にハエがとまっているのを捕まえてもいいですか？」

176 1957年現在、日本の東京で弁護士開業

177 Glodok、グロドック刑務所は朝鮮人軍属らがBC級戦犯として死刑にされた所でもある。

「いいよ」といった承諾を受けなければならなかった。承諾を得ずにハエを追おうと動くとはひどく殴られた。こういう人間以下の扱いに血が沸き立つ民族がどうして独立運動をしないでいられようか。

逮捕された同志たちに感謝したのは、自分の罪だけを自白し、他の黨員については何も言わず、スマラン、バンドン、チマヒ、ボゴール、アンバラなどにいる黨員たちが捕まらないようにしたことだ。

黨員逮捕後

正黨員の大半が刑務所に収監された後、私はバンドンで闘争方法を変更した。私はチハピット抑留所¹⁷⁸内の拘留者2万人余りに反抗意識を吹き込んだ。13歳以下の9歳以上の子どもたちに、「きみたちは大きくなって自立する土台を磨くために、労働を学ばなければならない」と言って果樹園を開墾させ、不足した果実と野菜を栽培させ、さらにパンひと切れずつを与えた。これによって捕虜たちの実力養成に努めた。しかし、第16軍司令部がバンドンに移転してきたため、転覆策を講じるのに昼夜苦心した。

当時、バンドン捕虜収容所第1分遣所で働いていた金万寿、チョ・ナムヒョン同志は反抗して、捕虜の外部連絡と実力養成に努めた。これはオランダのカナベック伯爵によって証明された。現在、金万寿同志がジャワに再度、渡ることになった動機もここにある。

日本人の上官らは、私が行った抑留者の統率、秩序維持、食糧の自給生産などに満足し、青い布きれに星一つつけた精励章という徽章を授与すると言った。私は通知を受けたが、抑留者の点呼を取るという理由をつけ、出席しなかった。そのため集合して待っていた河南中佐をはじめ職員すべてが腹を立てた。翌日、私は曾根曹長にひどく叱られた。

私は他人に直接刃向かわない性格なので、叱られるままだった。しかし、いくら叱ったとしても、私とその精励章なるものをつけて歩くことができようか？

このような生活を送っていたが、天は非情ではなく、1945年8月15日、日本は無条件降伏をした。ついに我が民族にも太陽が輝くことになったのだ。

178 バンドンのチハピット (Chihapit) 抑留所

以前から私は日本が敗北するだろうと確信していた。日本海軍の山本五十六長官の戦死後の相次ぐ敗戦と家から送られてくる手紙で、国内の枯渴状況が深刻なことがわかったからだ。

それよりさらに確信をもたらしたのは、アメリカの放送だった。7月のある日、ラジオのダイヤルを回していると、アメリカの放送が昔の日本の音楽を流した後、「日本人の皆さん、次に申し上げる10の都市に住んでいるか、親戚がいる方は、すぐ避難し、他の人にも避難するように知らせてください。軍需工場を爆撃する予定ですが、爆弾には目がないので皆さんの家に落ちることもあるからです。ですから避難して命を守ってください。私たちは皆さんを苦しめようとするのではなく、軍需工場だけを破壊することが目的です。次の10都市の住民は、かならず避難しなければなりません。名古屋、大阪、京都、横浜、広島、…」この放送を初めて聞いた時は心理作戦だろうと思ったが、同じ放送が1週間以上続けられるなか、8月6日広島に原子弾が投下され、日本はついに手をあげてしまった。



許泳の留守名簿

私たちは8月15日、天皇の特別放送があった後、獄中で5ヶ月から8ヶ月間苦勞していた同志を速やかに釈放するよう求めたが、〔日本人の管理者たちは〕手続きがあるから待てという。なお、収監された同志たちに日本が敗れたということをしらせなかったし、ジャワ軍政監部の宣伝班の許泳¹⁷⁹に日本と韓国は歴史的、地理的に固く結ばれていると力説させ、親しく過ごすことが両国国民に役立つと、〔釈放する前に〕数日かけて懐柔した。

しかし、馬杉参謀は「おまえたちは愚かなことをしてはならない。お前らが、ちっぽけな党や結社を作っ

179 日夏英太郎：1908年9月21日生まれ、咸興府黄金町出身。



許泳の臨時軍人軍属届

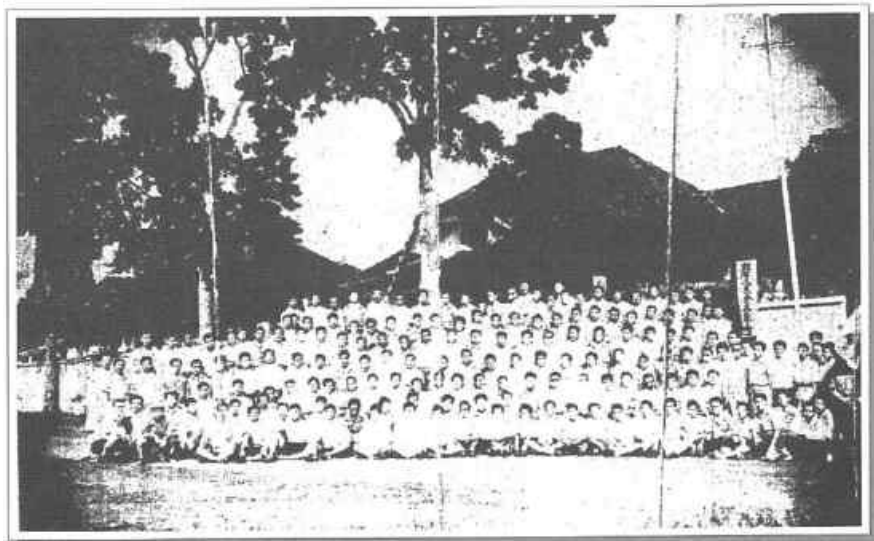
て騒いでみてもうまくいかない。なぜなら私が見たところ、お前たちは3人が集まれば3党を作る民族である。だから結局、分裂し、我が大和民族が面倒をみなかつたらすでに滅びて無くなっていただろう。今からでもいいから、罪を悔い改めて共存共栄するのがいいのではないかと
 言った¹⁸⁰。傲慢にも脅迫し蔑視した。そのため、怒りに火がついたが、私たちにはそうした欠点もあるのでさらに腹が立った。

第16軍の拘留所で服役中であった同志たちは、連合軍の命令で1945年9月4日に救出された。在ジャワ朝鮮人民会バタビア本部で看護したが、彼らは栄養失調で顔が黄色くなって腫れていた。

党員たちは闘争の対象であった日本が敗北したため、党を再建する必要性を感じなかった。なかには党の体裁で帰国しようとする人もいたが、国内にはすでに370余の党があるというから、私たちまで党を作れば数だけ増やすからやめようという主張が大勢だった。

我々は、修身齐家治国平天下、すなわち自分の行いを正し家庭を整えることにより国が安らかに治まるとの理念で、実質生活を通じて祖国に寄与しようとする個人の資格で分散帰国した。だから今まで高麗独立青年党の功勳や内容は一言も公表しなかったのだ。だが革命政府が義士や烈士を発掘し、国家正義を正す際に、ジャワのアンバラワで義挙して殉死した3人の同志の業績を明らかにしないのは罪を犯すことだ。万分の一でも闘争記録を発表することが、3人の英霊を慰めることができる道と考えペンをとった。

180 [この馬杉参謀の発言は2年の勤務期間を過ぎても帰国できない際の訓話とみられる。内海愛子・村井吉敬『赤道下の朝鮮人叛乱』125頁]



1945年12月16日ジャワのバンドンで、朝鮮人民会組織記念

孫亮燮、盧秉漢、閔泳学¹⁸¹3人の同志がアンバラワで義挙した記録と立証書類、ジャワでの活動立証書類は、私がすべて保管している。したがって、関係機関の要求にいつでも提示することができる。

高麗独立青年党の政綱、政策などは成文化しなかったが、1. 反日、2. 抗日独立、3. 決死独立であった。私たちは、『ジャワの思い出 第1集』に収録された党歌と決死独立のスローガンだけで行動の統一と体系を維持し、2年以上、決死の闘争をしたのだ。

詳細な内容は、在ジャワ朝鮮人民会バンドン支部から発刊された「活報」の中に掲載されているが、帰国時にキャンプで奪われた。だが、バンドンの華僑に3、4巻が保管されているため、いつか探し出すことができると思う。

最後に、3人の同志の英霊に真相を知らせることが遅くなったことを謝罪し、今は独立した故国の懐で安らかに眠ることを願う。

181 三義士の遺骨は、バタビアの日本人墓地に葬られている。

後記

後で知ったことだが、忠北堤川出身の辛在靚という人が、高麗独立青年党を密告した。彼は毎日、私たちに関する情報を憲兵隊に知らせ、党幹部の大部分を逮捕させた。しかし、私たちは日本が敗北して独立したことで、その事実を不問に付してしまった。さらに『実話』誌で辛某は高麗独立青年党の活動を金某と自身の業績とした。我々は同盟通信〔特派員〕の申暲喆を通じてシンガポール〔反日華僑組織〕に連絡を依頼したことがある。それゆえ〔偽の記事には〕慨嘆せざるをえない。

1957年2月
忘れられないために



5

解題

1. 植民地動員の強制性 / 2. 陸軍軍属の捕虜監視員 / 3. 手記を記録した捕虜監視員 /
4. 朝鮮人の海軍軍属 / 5. 手記を記録した朝鮮人海軍軍属

イタリアの映画監督ヴィットリオ・デ・シーカ (Vittorio De Sica) は、1971年に『悲しみの青春』(Giardino dei Finzi-Continis) でベルリン国際映画祭の金熊賞を受賞した。ムッソリーニのファシズムがイタリアのユダヤ人の生活を圧迫していく過程を描いたこの作品は、評論家たちから社会変革のなかでの個人に対する悲痛な鎮魂曲という評価を受けた。執権初期のイタリア、ムッソリーニのファシズム政権は、当時のドイツとは異なる方法でユダヤ人を迫害した。彼らは人種主義的観点ではなく官僚主義による常識レベルでの迫害を加えた。映画でもユダヤ人に対する迫害は、露骨なリンチや暴力などでは描写されていない。テニスクラブの会員資格を失うことから始まり、公共図書館の利用が不可能になり、公立学校に通うことができなくなるように進展していく。つまり、外形的暴力を通じて迫害を受けるのではなく、書類を使い権利を少しずつ奪っていく形で表される。結局、これらすべては臨界を超え、彼らは収容所に連れて行かれる。

人間には社会変革に直面した際には過去の習慣に依存する傾向がある。だから、漸進的な状況変化には積極的には反応しないものである。社会制度を通じて少しずつ締め付ける圧制には次第に適応し、最終的には変化の犠牲者に転落する場合がほとんどだ。当時、事態をきちんと理解できなかったため、イタリアでユダヤ人迫害が強化される時、なにげなくファシストの政策を受け入れ、破滅に至った。

ジャン・クウィーマン (Jan Kooiman) は、支配はある形のイメージ、つまりどんな形であれ状況に対する知覚の形成なしに行うことはできないと指摘する。彼は支配構造を形成するにはすべての形態の外的、内的刺激が一翼を担い、そこには想像力、知識、事実関係、判断、前提、要望、目標、仮定、理論、確信、隠喩までも含めることができるとみる。社会・政治的支配階層もやはり他のすべての人と同様に偏見に満ちた人々である。それゆえ支配階層が挑戦を受ける時は、彼らの生活哲学が挑戦されることになり、感情が介入せざるをえなくなる¹⁸²。

この点は被支配階層の場合も同様である。個人が支配を受け入れることが純粋に暴力によるなら、その支配体系は長く持続できない。マックス・ウェーバー (Max Weber) が指摘したように、カリスマ的権威で支配力を確

182 ジャン・クウィーマン『ガバナンスとしての統治』、ロンドン、SAGE、2003年、27-44頁

保したとしても、その支配体系が持続するにはどのような形態であれ、支配イデオロギーの内在化が必要である。支配、被支配とは、相互間の多様な情報を通して形成された知覚により認識され、構成された社会全体のシステムの中でダイナミック的に作用するものである。

私たちが、植民地の被支配民の奴隷根性という心性に拘ってしまえば、社会、政治、制度的変化を個人の心理構造に還元させてしまう心理学的還元主義から抜け出せない。植民地支配に対する分析で留意すべきことは、この問題に人間の個人の心性という問題だけでなく、同時に社会、政治制度全般のダイナミックな関係も考慮しなければならないということである。ある社会を共時的、通時的に結合させ、その社会が持つ特殊性と植民地支配という普遍性を立体的に見なければ、植民地支配の分析はいかなる形式であれ、限界を持つことになる。

日本帝国主義は朝鮮総督府により数多くの朝鮮人を強制動員し、戦場や労働条件が劣悪な炭鉱などで酷使して死に至らしめた。これについて、物理的な暴力を使い、本人の意思に反して引っ張っていった場合に限って強制動員とみる見解がある。このような見解は、出口が塞がれている植民支配の社会が持つそれ自体の暴力性と強制性を理解しえず、植民体制の法的合法性に盲目的に執着することによる。日帝下の捕虜監視員をはじめ、相当数の軍属が割当募集の形態で動員されたが、彼らが日帝下の強制動員被害者であることを規定するためには、植民地動員の強制性の理論的説明が必要である。

1. 植民地動員の強制性

日帝強占下の強制動員被害とは、満洲事変後から太平洋戦争に至る時期に日帝によって強制動員され、軍人、軍属、労務者、軍慰安婦などの生活を強要された者の生命、身体、財産などへの被害をいう¹⁸³。これに関して「強制動員は、身体的な拘束や暴力ではなく、皇民化教育による精神的拘束、誨諭と説得、本人の任意決定、脅迫、法的強制などによる人力動員を意味する」¹⁸⁴という定義もある。ここで使われている強制動員、強要あるいは身体上の被害

183 日帝強占下強制動員被害真相糾明等に関する特別法第2条第1項

184 韓日民族問題学会『強制連行 強制労働研究の手引』先人、2005年、16頁

などの表現が、分析上の問題を起こす。

植民地期に日帝が朝鮮人に行った暴圧の中で大きな部分を占めるのが、朝鮮人を自分たちの戦争遂行のために強制的に動員したことだ。これは実際にナチスドイツが数多くのヨーロッパ人を強制動員したことに似ている。それにもかかわらず、朝鮮が日本の植民地だったという理由で、犯罪の反人類性が薄められてきたのが事実だ。その延長線に、日帝による強制動員を中日戦争（1937年）以後、国家総動員法の制定とともに始まったと見るものがある。それでは帝国主義による植民統治の本質的犯罪性を見逃すことになる。今日では、帝国主義による植民地統治自体が当該民族に対する大量虐殺であり、反人類的犯罪行為だとみるのが一般的である。

つまり、1931年の満洲事変以後、太平洋戦争が終わるまでの時期になされた朝鮮人に対する人力動員だけを強制動員としてみることは、植民地支配の本質的特性を見落とすものである。日帝による強制動員を単に物理的意味の強制性に焦点を当てて規定する観点は、それ自身が日帝植民地主義史観ないし、西欧文化帝国主義から抜け出せないものである。したがって、日帝の強制動員は「身体的な拘束や暴力の他に、皇民化教育による精神的拘束、誨諭と説得、本人の任意決定、脅迫、法的強制などによる人力動員」だけでなく、日本帝国主義による植民地支配体系のもとで、直接・間接的、制度的、心理的強制を暗黙に強要してなされたすべての形態の人的、物的動員を含めなければならないのである。

植民地支配下にある大部分の被支配層が最も苦しむのは、「植民地支配層との奴隸的な関係、経済的収奪および殺人的、圧制的な統治構造」と考える動向がある。しかし、帝国主義が植民地の被支配民を最も致命的に縛りつけ常に記憶させるのは人種主義的観点に基づいた文化帝国主義の論理である。これはマックス・ウェーバー（Max Weber）のカリスマの日常化の過程と似たものであり、被支配民に自らを劣等民族として感じさせることで、植民地支配層との支配・従属の関係を内面的に受け入れさせる動向である¹⁸⁵。

185 マックス・ウェーバーによると、すべての社会において、軍事力、経済的強制、包摂、政治的連合を使つての権力闘争が起こり、新しい信念、価値、行為性向及び認識体系とともに変化が起きて危機になる時、カリスマを持つ指導者が登場する。このような例外的な洞察力や能力の保有者に追従する者たちにより発生したカリスマ的権力は、官僚組織の発達と同じく、日常的な意思決定体系を確立することで日常化され、伝統あるいは法的体系で合理化されるという。ジョナサン・H・ターナー、レナード・ビーグリー『社会学理論の出現』ザ・ドーシー・プレス、イリノイ州ホームウッド、1981年、233-259頁。

文化帝国主義は、基本的に人々が自らの思考や行動を規定する認識体系自体を変化させるように誘導する。これによって植民地支配体系を合理化させ、人種主義を支配民族と被支配民族間の本質的な差異の基礎とさせ、イデオロギー的に内面化させるのである。

日本による朝鮮の植民地支配より時期的に早いインドに対するイギリスの植民地支配において、軍隊と警察を通じた直接的な暴力は、極めて例外的な状況で起こった。むしろそれより、イギリスは没落して行ったインドの封建階級を利用して地主にして数百人に及ぶ地方の隷属領主たちを支えた。彼らはインドの封建主義を強化するとともに、抑圧的な暴力ではなく柔らかな統制によって植民地の被支配階級の知覚を変えていった。

朝鮮を植民化した日本もまた、植民地住民に対して経済的同化、社会的同化、教育的同化、文化的同化を強要したが、日本と同じ政治的権利を付与するという政治的同化は拒否した。日本の核心的な戦略イデオロギーは、日本と朝鮮の根っこは同じだとする日鮮同祖論、日本民族の優生学的優越性を強調して朝鮮人の他律性と停滞性を強調するという朝鮮停滞論であった。日本はこれをもとに同化主義政策をくりひろげ、朝鮮語使用の統制と日本語使用の強要、日本人と朝鮮人の間の婚姻奨励、はなはだしくは創氏改名を実施することによって、植民地支配体制を確固たるものにしようと試みた。しかし、人種的、文化的優越性に基づくイデオロギーの構成自体に無理があった。

日帝は、皇国臣民イデオロギーを学校、大衆組織、言論などの多くの機関を動員して、日帝の支配・統制の体制に直接的に統合するなど、あらゆる種類の統制システムで朝鮮人を制度的にしばりつけた。あらゆる種類の独立を推進する勢力を徹底的に弾圧し、治安維持法といわゆる「思想警察」を通じて、左派系列のすべての政治団体の集会を根本的に封じた。言論に対する検閲制度は厳しくおこなわれ、特に左翼勢力を遮断するために左翼民族主義者への事前検拳など、無慈悲な弾圧が継続的に加えられた。一方、左翼民族主義者から右派を隔離するため、妥協的な態度を示す右派の勢力を積極的に買収した。

日帝支配下の全期間にわたり最後まで作動した日帝のテロの体系は、個人的あるいは集団的な抵抗の芽を、当初から窒息させたといえる。特に太平洋戦争期間中、朝鮮人を縛りつけた強制動員の労働と食糧の不足のなかで、

このような制度上の統制は、抵抗意志を失った人々を疲労と諦めに追い込んだ。帝国主義は痕跡を継続して残す文化経験である。それゆえ外面的に現れる植民地主義の残滓より内面的な意識での植民地主義の残滓がより大きな問題となる。

最近、日本による朝鮮の植民地統治を、第二次世界大戦中に日本の同盟国だったナチスドイツと比較分析しようとする試みがある。ドイツ人は戦争が終わる時までアウシュビッツ収容所行の列車を定時に出発させるため、あらゆる努力を傾けた国民として記録されている。今日の感覚では理解しにくいドイツ国民の戦争遂行努力を説明する日常史理論¹⁸⁶では、次のような方法で、ドイツ人が戦線と「故郷」で与えられた義務を果たそうとした理由を明らかにしている。

一つの観点は、ゲッペルス・ナチス宣伝相が動員した巧妙な大衆宣伝の技術を原因とみる。宣伝によってほとんどのドイツ人が当時の実状を悟らなかつただけでなく、ナチス体制自体を正当な権力として受け入れたというのだ。他の観点としては、ナチスの親衛隊をはじめとする監視体制の完璧さをあげている。当時、ドイツ国民全体が徹底した統制の下に置かれており、ナチスに対するいかなる形態の抵抗も余すところなく粉碎され、集団収容により解決されたためだという。

希望も期待もなくただ苦しみと飢餓だけがある社会では何も起こらない。また、命を維持するために貧しい人々が衣食住に必死であれば、空虚を感じる時間的余裕もない。生存のために必死で闘う状況は、人間を活発な存在にするよりも、むしろ停滞状態に追いやる傾向がある¹⁸⁷。

日本の植民地体制下、特に太平洋戦争期の朝鮮人強制動員に対する分析は、第2次大戦当時、ドイツが強制動員したドイツ軍占領地域の住民（フランス人あるいはスラブ人系統労働者）の役割や状況との比較分析からも示唆を見

186 ナチスの支配下でドイツ国民は断固とした抵抗や蜂起は別として受動的な拒否さえあまり示さなかった。ドイツ人がナチス支配下で体制に順応する過程を理解しようとする試みは1970年代に始まっている。日常史の理論家たちは、どうしてナチスが権力を握ることができたのか、なぜナチス体制が維持されたのかという問いから出発し、ナチス党側からの理解ではなく、どのように一般大衆がナチズムに反応したのかを調べようとした。彼らは少数の戦犯の責任を議論するよりも当時の平凡な市民個人の労働と余暇の日常が正常に維持されたことに注目した。平凡な人々が政治的統制と抑圧、監視とテロを行ったナチズムにどのような反応したかを通して、ナチズムのような全体主義体制下での市民行動を説明しようとした。

187 オルテガ Y ガセット、皇甫永祚訳、『大衆の反逆』、歴史批評社、2005年

いだせるだろう。ドイツ軍占領地域の異民族労働者として彼らがこうむったのは、凄惨な「奴隷労働」だった。日帝による植民地体制下での朝鮮人労働者動員とナチスドイツの占領地域の労働者動員は、戦闘兵力増員による熟練労働力の不足と戦时空襲状況で労働力を確保しなければならないという戦時生産体制において、日帝とナチス体制がとった対策であった。需要と供給の構造が歪む状況下、日帝とナチスドイツは、体系的な労働力動員のために強制連行、募集、割当、斡旋、徴用などすべての手段を使用せざるをえなかった。したがって、日帝下の朝鮮人強制動員は、ゲッベルスの宣伝のような皇民化教育、および極私的な領域を除くすべての社会文化環境を統制したナチスドイツのような日帝の警察制度によるものである。それらが抵抗の芽を窒息させ、日帝の動員体制に順応させたとみる分析が必要である。

2. 陸軍軍属の捕虜監視員

日帝は1941年12月8日、真珠湾攻撃とマレー半島上陸で太平洋戦争を開始した。それ以後、マニラ（1942年1月）、シンガポール（1942年2月）、ジャワ（3月）、フィリピン（5月）の順に占領した。日本軍占領地域の拡大は、英国、オランダ、オーストラリア、米国などの連合軍兵士たちの捕虜問題につながった。

当時、日本軍の捕虜となった連合軍兵士は26万1000人余りと推定される。それにより捕虜管理の必要性を感じた日本軍部は、1941年12月に陸軍省に俘虜情報局を設置し、翌年5月に捕虜監視員を募集し始めた。軍属の身分の捕虜監視員は台湾人と朝鮮人で充当された。

日本人ではない朝鮮人と台湾人が連合軍捕虜の監視員として動員された背景としては、まず日本自体の兵力不足が指摘される。次に、日帝が、捕虜管理が深刻な戦後処理問題となる蓋然性を予想できず、捕虜を労働力活用の次元で扱ったという見解がある。ところで、戦後に問題となる可能性を予見していたから、捕虜監視員として植民地人を動員して敵軍に直接対面させて戦争責任を転嫁させたという見解もある。

捕虜監視員の募集過程は比較的詳細に明らかになっているが、朝鮮半島では1942年5月に募集公告が新聞に掲載された。表面的に募集形態をとったが、

実質的には朝鮮総督府が各邑面に人数を割り当て、面書記と巡查らを前面に立てて動員したという記録もある¹⁸⁸。彼らは簡単な筆記試験を経て選抜され、2ヶ月の訓練期間があった。動員された3,223人の青年たちは軍属身分であるが、野口部隊（釜山西面所在）に収容され、2ヶ月間射撃と銃剣術などの軍事訓練を受けた。しかし、捕虜監視員に行かなければならない者に、日本は捕虜の扱いに関する国際法など、何の教育もしなかった。彼らが教育を受けたのは、軍事訓練と捕虜になってはならないという「戦陣訓」だけだった。これは捕虜監視員出身の趙文相（チョ・ムンサン）の陳述でも確認できる。彼は、日本が釜山で朝鮮人軍属に教育したのは「体形が大きな捕虜に対抗するには暴力しかない」ということだったと言い、捕虜の取り扱いに関する国際法的知識に対する教育がなかったと抗弁した。その後、彼らはインドネシアやミャンマー〔マレーシア〕、タイなど各地の捕虜収容所に配置され、戦争が終わるまで勤務することになる。

徴兵制が決定された時であったため、軍隊に引っぱられたくない者、炭鉱に引っぱられるよりは良いと思って応募した人など、理由はいろいろであった。捕虜監視員の募集に応じた者の中には、道路工事で旗を振る程度のことだと思っていた人もいた。また、配給を中止するという脅しを加えて志願させるという強制もあった。

日本軍部のこのような植民地支配の戦略は、当時の社会の雰囲気にも現れている。捕虜監視員に志願した石相玠は手記「南方紀行」で自らが捕虜監視員に志願した当時の社会の雰囲気を次のように伝えている。

日帝がそれほどまでに虐待し、侮辱していた私たちの民族も、今は内鮮一体だ、皇国臣民化だと騒ぎたて、使い道があることになったのだ。朝鮮総督南次郎は内鮮一体を高唱しながら志願兵さがしと、いわゆる報国隊という労務者をつかまえるのに血眼だ。我が故郷からも炭鉱だ、製鉄所だ、軍需施設工事だなど、毎日のように報国隊に引っ張っていった。志願兵制度は数年前の支那事変の初めからだ。全羅北道出身の李仁錫上等兵を先立てて、「李仁石上等兵は中支那戦線で赫赫たる戦功を立て、軍人としては最高の荣誉である

188 捕虜監視員としてタイ捕虜収容所で捕虜たちと共に、タイとミャンマーをつなぐ泰緬鉄道建設作業を行った、故石相玠の手記によると、多くの朝鮮青年たちが徴兵を避けるため捕虜監視員を志願したと記録している。一方、捕虜監視員の口述調査の結果によると、一部地域では半強制的割当もあったという記録もある。

武功金鷲勲章をもらった」など、募兵宣伝に熱をあげ、ほとんど強制的な方法で適齢期の青年たちをつかまえていくのだった。」

当時の毎日新聞の記事は「皇民の感激を、誇りをもって出でよ、捕虜監視員、府内居住者は府社会課で受付」という見出しで、さらなる名誉のひとつとして、半島の青年男子を軍属として採用し、南方共栄圏建設に協力する「崇高な道」を開くとの表現で、捕虜監視員志願を督励している。石相琬の手記によると、山清郡でも25人の選抜が割当されたという。郡庁前の掲示板には、6月3日10時に山清公立尋常小学校で選抜試験があるから、志願者は願書をもって出頭、試験を受けるようにという旨が記されている。

このような手記の内容からわかるように、当時、日帝は捕虜監視員を充員するため、各郡に数を割り当て、各郡内務課長の指揮のもとに捕虜監視員を補充した。郡の職員は中央で割り当てた必要人員が志願しない場合、配給中止のような強圧的手段も使ったのである。

捕虜監視員出身で、BC級戦犯で処罰された李学来の証言でも、このような事実は容易に確認できる。李氏は「村で二人を出せ」という「上部の圧力」もあって、捕虜監視員募集に応じたと証言する。彼は戦後死刑を宣告されたが、結局懲役20年刑に減刑され、1951年8月にシンガポールから日本の巢鴨刑務所に移送された。先に石相琬の手記で指摘したように、当時はすでに多くの青壮年が炭鉱や製鉄所にひっぱられる状況だったので、捕虜監視員募集公告で提示された50円の給料は非常に誘惑的なものだった。難しい時局で、小学校や高等小学校の過程で、皇民化教育を通じてすでに皇国臣民イデオロギーが注入された当時の朝鮮のブチ・インテリたちに、「全アジアを席卷する勢いで、遠くベトナム、インドシナ半島を経てマレー半島を破竹の勢いで進撃し、シンガポールを陥落させてイギリス軍5万の大軍を無血占領、彼らを捕虜とした」日帝の支配権力の要求は絶対的な意味を持ったのだろう。

捕虜監視員の教育水準に関して統計的数値を提示できる資料はないが、募集要綱に現れた資格条件と捕虜監視員の手記、生存者に対する口述聴取の結果を総合して推論すれば、すべて小学校は履修したものとみられる。当時、高学歴層が高等普通学校卒業や専門学校在学の水準と見ると、捕虜監視員は最高レベルのエリートではなくても、かなりの教育を受けた高学歴層に属していると見ることができる。こうした彼らの学歴水準は、解放後の職業にも

影響する。捕虜監視員の手記や生存者に対する口述聴取から、彼らの解放後の職業は公務員などの事務職にかなり偏っていることがわかる。

本籍に対する頻度分析（留守名簿 3,588 人の中）

本籍の頻度分析			
本籍	数	パーセント	累積パーセント
京城府	108	3.01	3.01
京畿道	136	3.79	6.80
江原道	136	3.79	10.59
忠清北道	309	8.61	19.20
忠清南道	426	11.87	31.07
全羅北道	580	16.16	47.23
全羅南道（済州 38）	730	20.35	67.58
慶尚北道	412	11.48	79.06
慶尚南道	385	10.73	89.79
黄海道	187	5.21	95.00
平安北道	45	1.25	96.25
平安南道	43	1.20	97.45
咸鏡北道	26	0.72	98.17
咸鏡南道	46	1.28	99.45
その他	19	0.53	99.98
合計	3,569	99.45	

当初、釜山の西面で教育を受けた朝鮮人捕虜監視員の志願者は 3,223 人で、このうち 3,016 人がタイ、マレーシア、ジャワなどの捕虜収容所に配属された。しかし、留守名簿上では重複する場合を含めて合計 3,588 件が検索される。これによると、忠清道、全羅道、慶尚道が 70% を超え、実際の人口分布 46% より多くなっている。他の地域は人数が少なく、実際の人口分布よりも少なくなっている。このような現象は二つの意味を持っていると見られる。

第一に、当時、京城府と京畿道は地方に比べて他の職業に就職する可能性が相対的に大きく、したがって生活環境が劣悪な遠い南洋の地に行かずに生きることができたとみられる。第二に、当時の京城府と京畿道では、日本がまだ強圧的手段を露骨に使用して徴兵と徴用を強要していなかったためだといえる。

捕虜監視員が当時小学校の卒業以上の学力を持っていたため、日帝の皇民化教育にさらされざるをえず、日帝末期の強化された圧制に虐げられ、洗脳された人々に、積極的な抵抗を期待するのは無理な注文でしかない。

3. 手記を記録した捕虜監視員

この手記集に載せられた捕虜監視員の強制動員被害者は2人である。2人はいずれも日帝によって捕虜監視員として強制動員されたが、帰還して手記を執筆し、いまは2人とも故人となった。石相玠、安承甲の2人の略歴は次の通りである。

石相玠は、1920年慶南山清出身で、1942年6月15日から8月14日まで釜山西面で訓練を受けた後、1942年8月タイ捕虜収容所に配属された。タイでは、泰緬鉄道工事に動員された連合軍捕虜監視員として働いた。日本敗戦後、戦犯裁判などにまきこまれ、しばらくタイに残ったが、1946年6月15日無事に故郷に帰った。

安承甲は、1923年忠北清州出身で、面書記として勤務する中、日本軍に志願することを強要されたが、軍属の捕虜監視員に志願した。1942年6月15日から8月14日まで釜山西面で訓練を受けた後、インドネシアのバンドンに配属された。そして当時日本軍に捕まったオランダの捕虜たちの婦女子と子どもたちの抑留所の監視員として勤務することになる。植民地人として日本が引き起こした戦争に動員されたにもかかわらず、日本が敗戦した後、連合軍に戦犯容疑者として調査され、しばらく帰国できなかった。1947年2月8日、釜山に帰った。

4. 朝鮮人の海軍軍属

多くの朝鮮人が日帝の強制動員に逆らえず、日本軍隊の軍属として連れて行かれたのは、日帝が戦争末期、朝鮮でも徴兵制を実施することを宣布し、適齢期のすべての若者を動員する計画が知られたからだ。実際の戦闘地域には様々な形態の朝鮮人軍属が存在した。時には軍属と単純労務者を区別しにくいほど同じ労働を行った。朝鮮人軍属が日本軍部隊内でどのような役割を果たし、その性格は何であったかについて、まだ明らかにされるべき部分が多く残っている。

軍属は今日の軍隊の軍務員である。すなわち、軍隊構成員であり、一般的に職業人として陸海軍に服務する軍人以外の者を総称する。しかし、今日の軍務員が厳格な資格条件と軍法が適用される明らかな軍組織の一員であるのに対し、日帝時代にいわゆる軍属と呼ばれた集団は、比較的範囲が広く、規範の適用は緩かったとみられる。

南方に送られた朝鮮人軍属に対する本格的な動員¹⁸⁹は、1942年1月から始まったが、主に海軍設営隊や捕虜監視員として採用され、東南アジア、太平洋南西部の諸島（南洋諸島）の軍基地及び戦線に配置された。軍属動員方式は初期には募集形態をとったりもしたが、1942年1月から募集から官斡旋に変わった。

日本統治者たちが反乱の可能性があると考えていたにもかかわらず、多数の朝鮮人を軍属として軍隊組織の中に引き入れるしかなかった理由は、まず、太平洋戦争の拡大とアジア各地での抵抗による戦局の悪化により、内地の日本人の青壮年労働力を兵力として送り出すしかなく、労働力不足が深刻になった日本からこれ以上の労働力を確保することは難しかったからだ。

第2に、戦場や占領地での施設建設などの労働は、もともと近代軍隊では工兵隊によって行なわれるが、日本軍、特に日本海軍は工兵の志願が貧弱だった。したがって、軍属として戦闘員の訓練を経ず、武器も所持していない彼らが、工兵隊の役割を果たした。さらに、日帝は朝鮮人を強制動員によって手軽に確保できただけでなく、「南洋群島」占領地の現地人に比べ良質な労働力だったという点も、動員の理由として指摘される。

¹⁸⁹ 1944年9月末までに88,241人の朝鮮人軍要員が動員され、そのうち国民徴用令による者が31,783人だったとされる。これらの中には、1941年から海軍の要求に基づき、南方の土木作業に送られた海軍愛国作業団員32,248人が含まれている。

現代の海軍は航空戦力の支援がなければ致命的な損傷を受けるため、飛行場の建設や維持などを担当する施設組織は軍政系統に所属され、作戦上の要求に直ちに対応できなければならない。日本海軍は、このような施設の設置管理を担当した工兵組織が不十分だったため、各地に海軍設営隊を創設し、至急の飛行場の建設などに動員した。海軍設営隊は航空基地と防備施設の設置を目的とし、主に朝鮮人と台湾人を主力で編成した海軍の特設設営隊と特設施設部を指す。日本海軍は開戦初期にトラック（現在名チューク）、ラバウル、シンガポール、スラバヤ、マニラ、海南島などに施設部を特設し、管轄地域内の築城、一般施設の設置及び各設営隊への補給を担当させた。また、横須賀、呉、佐世保、舞鶴などの軍港の施設部と芝浦補給部を元請として、各地に設営隊を派遣した。

このように、日本海軍は大々的に朝鮮人と台湾人を動員して設営隊を組織するしかなかった。その理由は、日本が土木建築分野の施設をほとんど人手に頼っていたからだ。設計や測量などにおいて日本は世界水準近くにあったが、施工現場では常に原始的な水準の道具が使われていた。

土木建築を人手に依存しているため、自然に多数の軍属が現場に必要となり、それは補給品の大量需給を必要とした。日本はもともと補給能力が貧弱で、食料をはじめとする補給の相当部分を現地調達に依存していた。潜水艦と航空機による連合軍の補給船撃沈と封鎖作戦が本格化すると、食糧などを十分に供給できなくなった。多くの朝鮮人設営隊員が戦闘で死亡したが、海軍軍属者名簿に頻繁に登場する戦病死は、ほとんどが栄養失調によって死亡したものであり、遠く離れた地に連れて行かれ、無念に飢えて死んだ朝鮮人が多かったことを物語るものだ。

海軍設営隊の幹部は技術士官が占め、工員は軍属であった。戦争が拡大するなかで軍人による編成に移行したが、戦闘部隊と同じ形態の転換はできなかった。にもかかわらず、連合軍が前進し、戦力が弱まった日本軍は海軍設営隊も戦闘に投入した。実際、日本側の記録によると、工員はうまく指導すれば陸海軍人に肩を並べる程度にその戦力を育てることができるので、陣地の設営などの本来業務のほか、常時、陸戦訓練を実施することを指示している¹⁹⁰。しかし銃器が足りなかったため、火炎瓶や槍のような手作り武器を使用

190 石井顕勇、「硫黄島方面電報綴」3月3日付機密第010936番電 <http://www.iwojima.jp/index.html>

したり、土木作業用爆薬、ツルハシ、シャベルを手に持って戦うしかなかった。

「日本の戦後責任をハッキリさせる会」が作成した資料によると、1942年3月から1945年の終戦まで朝鮮人軍属としてマキン、クゼリン、クサイ、サイパン、トラックなどで戦死した人が1万6000人余りに達している。

武市銀治郎は著書『硫黄島』に、この硫黄島戦闘で日本人が100%戦死に近くほぼ全員が玉砕したのに対し、朝鮮人の戦死率は半分程度だったと記録している¹⁹¹。強制動員された朝鮮人の海軍説営隊員が、他人の戦場で死を選ぶよりも、米軍の降伏説得に同調したことは容易に推測できる。

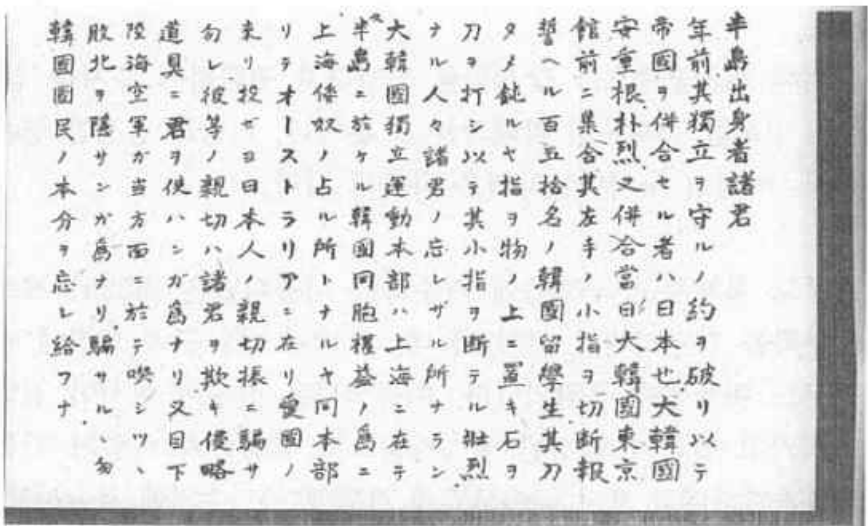
2005年12月第17次委員会で被害決定が完了した呉根烈は、本調査官との口述調査で次のように述べている。

呉根烈は全羅南道光山郡極楽面徳興里で生まれ、そこに住んでいたが、面出身者の指示で動員された。4つの面で40人が柳村里事務室で集まって電車に乗り、光州、雲南洞のイルグアン旅館で1泊した後、光州駅で服一着をもらい、松汀里駅、大邱、釜山を経て日本に向かった。日本では横浜で降りて寄宿舎に泊まり、21日間訓練を受けたが、訓練中に日本天皇の皇居を見物させた。再び横須賀で8隻の船に分かれて出発したが、米国潜水艦と爆撃のために行っては戻り、行っては戻るという状態で、トラック島には行けず、サイパンで降りた。テニアン島で飛行機滑走路工事を行ったが、艦砲射撃と爆撃のために昼夜洞窟に逃げ回り、米軍が上陸したときは洞窟の戸を閉めて静かにしていたが、米軍が出てこいと叫んだので、どうにでもなれと思って戸をあけ、手を上げて出て行った。手上げて出ていくと、米軍が、まだいるのかと言うから、いると言うと、みんな出てこいと言って、みんな手を挙げて出てきた。呉根烈はハワイ捕虜収容所を経て、自分が解放前に居住していた本籍地、光州市徳興里に帰還し、引き続きそこに居住している。

一方、米国は1943年以降、制空権を掌握し、心理作戦の一つとして朝鮮人を目標としたビラを大規模に日本軍占領地域にばらまき、朝鮮人の投降を促した¹⁹²。次のビラは、国史編纂委員会がNARAで集めたものであり、米軍が使用した数十枚の対日心理戦用のビラの一つである。米軍がばらまいたビラは以下のものである。

191 武市銀治郎、『硫黄島』、大村書店、2001年

192 米軍は多様な宣伝ビラを製作し、大規模に航空機から投下した。



MEM OF KOREA!

J 26K

Resisting her solemn promises to guard Korean independence, Japan annexed Korea in August, 1910.

All Koreans remember the great Korean patriots, Anjukon, Bokureisu, and others, and will remember that when annexation was decreed, the 150 Korean students who assembled at the Korean Legation in Tokyo. Here they swore vengeance, and as a token of their oath, they all cut off the little finger from their left hand. When the knives became blunt, some had to place their little fingers on a block and hammer the knife through with a stone!

Ever since then the Independence Movement has been kept alive. From its Headquarters in Shanghai, the champions of Korean liberty have fought against the Japanese abuses against Koreans, both in Japan and in Korea. After the occupation of Shanghai by the Japanese Army, the Headquarters of the Movement went to Australia.

These Koreans who love their Fatherland will come over to us, despising Japanese false glory. Whenever the Japanese appear to treat you fairly it is merely because they wish to seduce you into aiding their ignoble cause, and to take your attention away from the defects they are suffering at the hands of the Allied allies.

「半島出身者諸君¹⁹³」

193 [写真の宣伝ビラの概要。写真の日本語ビラの原文を現代文に直した。]

1910年、朝鮮の独立を守るという約束に反して日本は大韓帝国を併合した。大韓帝国は、安重根、朴烈、また、東京会館前に集まった韓国留学生150名が左手の小指を切断し、切れなければ指を物の上に置き小刀に石を打って小指を断った、その壮烈な人々、諸君を忘れない。大韓独立運動本部は上海で韓国同胞の権益を求め、上海を倭奴が占領した後、本部はオーストラリア（ママ）にある、愛国のために来たりて投じよ。日本人の親切に騙されるな、彼らの親切は諸君を欺き、侵略の道具に君を使うためであり、またいま陸海軍が当方面に置いて喫している敗北を隠そうとするものだ。騙されてはならない、韓国国民の本分を忘れるな。

5. 手記を記録した朝鮮人海軍軍属

日帝によって海軍軍属に強制動員されて帰還し手記を執筆、この手記集に収録した強制動員被害者は2人だ。今でも健康な生存者の李共石、李仁申の2人の略歴は次のとおりである。

現在、濟州島北濟州郡旧左邑に居住する李共石は、1922年濟州島北濟州郡旧左邑金寧里で生まれたが、1942年6月、軍属募集に志願してマーシャル群島ウォツジェ島に動員された。李共石は手記に、戦争がアジア全域に拡大していき、日本に限られた人的資源では耐えられず、徴兵制が避けられないとみて軍属募集に志願したと書いている。千辛万苦のはてに生還して濟州警察署に勤務、戦闘警察として朝鮮戦争に参戦、旧左面の産業係長などを経た後、30年余り柑橘系農場を経営した後、引退して故郷に隠居している。

全羅南道長興出身の李仁申は、1942年4月7日から3年7ヶ月間、マーシャル諸島で服務した。当時、全南で800人が動員されて滑走路や砲台装置など軍事基地造成事業に奴隷のように扱われ、血の汗にじむ労役にあたったと証言している。李仁申は米軍の侵攻を備えた軍事基地の造成作業に従事したが、ミリ環礁内のチルボン島で発生した朝鮮人による反乱及び虐殺事件に接した。当時チルボン島では、日本軍が朝鮮人2人を殺害して人肉食をした事件によって朝鮮人の反乱事件が発生、これにより朝鮮人が日本人を殺した。そのため、日本側鎮圧軍により無辜の朝鮮同胞120人余りのうち15人を除いた全員が惨殺されたという。その後、李仁申は生命の危険を感じて島を脱出、米軍捕虜となってハワイ捕虜収容所に収容され、1946年1月に本籍地に帰還した。

私たちが4人の手記を通して、日帝の時期の強制動員のすべてを語ることはできない。しかし、単に数を示してそれを統計的に分析し、マクロ社会構造や文化を解明しようとする試みが陥る実証主義の罠を、回避しなければならない。当時を生きたほとんどの朝鮮人が経験した事実が、どのような人々に、どのように記憶され記録されたのかを通して、私たちはその時代の一面を読む取ることができるだろう。個々人の経験は、抵抗と収奪という二分化された植民地の議論の中で詳細には示されなかったが、彼らの手記を読むことは、植民地の時期がどのような仕組みであったのかを明らかにする糸口になるだろう。

彼らの私的記録が、歴史の中で占める位置を探すとともに、イデオロギーや歴史理論では解明できない個人の経験、個人の記憶と記録が持つ政治的意味を明らかにし、歴史的ギャップを埋めていくことを期待したい。大切な記録を残し、委員会に寄贈してくださった4人の皆さんに、もう一度感謝の気持ちを伝えたい。

調査2課 李世一、カン・ヒヨン

南方紀行

強制動員軍属手記集